

バイオブレイク・艦これ
れに来ました

ホタル火

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはバイオハザード7（プロジェクトクロスゾーン2帰り）、

バイオハザードリベレーションズ（プロジェクトクロスゾーン2帰り）

サイコブレイク2エンディング後、

艦隊これくしょんの2次創作です

目次

プロローグ	1
出会いと襲撃	8
衝撃の再開	31
朝食と魔改造	50
建築とアイテムボックスとワークベンチ	67
エリクシールの使い方	89
模擬戦が激戦、	104
出撃前	122
まさかの展開、	140
それぞれの記憶1	164
それぞれの記憶2	189

それぞれの記憶3	222
それぞれの記憶4	250
ジュリアン・サイクス1	296
海底の女王	305
V S ジャック・ノーマン	323
模擬戦が激戦再び	338
出発、	354
●復活のP	365
用語1	382
到着からの・・・	393
執務室にて、	408
アイテムボックスと変な奴	419
頑張るリリー1	429

艦娘たちの事情、	446	●少女達を拾うP	619
●サバイバルするP	466	セバスチャンと出撃、逃走編	631
コートの巨人	483	セバスチャンと出撃、反撃編	646
V S タイラント	503	V S ヒュージプラント、アクスマン、	
V S タイラントの裏では、	520	656	
信頼への道	536	セバスチャンと出撃の裏では、	669
●探索するP	549	●説明するP	683
金剛型高速艦	558	頑張るリリー2	700
来客者、暁、雷、	567	苦悩	706
セバスチャンと出撃、準備編、	576	狩猟用狙撃銃を持つ親父、	716
セバスチャンと出撃、出撃編	586	STEMの3人、	725
セバスチャンと出撃、戦闘編	595	潜入、舞鶴1	734
セバスチャンと出撃、探索編	606	潜入、舞鶴2	743

潜入、舞鶴 3

これからの事

潜入、舞鶴の裏で。

シモンズの居所

向かうは教会、現れるは美女1

784 778 771 760 752

プロローグ

???
side l

やっと思つけた、

彼が言っていた女性を、

それとこの老人はこの女性の叔父のようだな、

俺は彼女に通信機を渡した、

彼女は通信機を耳に当てると驚いたような顔をした、

これでこの仕事も終わりだな、

俺はテントを出ようとしたらふと机の上に置いてあつた物を目にした、

誰だこんな物を持ち込んだやつは、

俺はそれを手に取った、

1枚の写真、

多くの女性が写っている、

どこかのアニメか？

写真の裏を見る、

艦隊これくしょん

「艦隊これくしょん?」

俺はそう口にする他突然めまいに襲われた俺は机に手を置いて体を支えたが意味がなかった、

俺はその場に倒れた、

???
side 2

世界は広いと言うのはこの事を言うのね、

異世界とか7年後の世界とかゲーム世界とか、

報告書を書くことができないわね、

もし書いたとしても妄言とか精神異常者と思われる、

でもいい体験をしたと私は思っている、

先日彼らの結婚式に言った時にはみんなに再開したわね、

あの戦いが終わってから直ぐに帰ることになったからみんな沢山買って行ったわね、結婚式よりそっちがメインじゃないかしら？

私はクスリと笑う、

でも報告書が進まないわね、

彼は奴の情報が入ったと行って席を外したから、

私は立ち上がりオフィスの窓に歩いて行った、

ずっと座っていたから関節コキコキと音がなる、

もう夜なのね、

一度仮眠を取ろうかしら、

私は自分のデスクに戻って報告書を引き出しに仕舞おうと引き出しを開けたら、

あら？

一枚の写真が他の書類の一番上にあつた、

誰よ、

私のデスクにこれを入れたのは？

私はその写真を手に取った、

見たこともない女性たちが写っていた、

私は写真の裏を見た、

「艦隊これくしょん?」

私がそう口にすると突然目眩がした、
しまった!

敵の攻撃!?

私はホルスターに入れていたハンドガンを手に取りろうとしたが、
私は床に倒れた、

???
side 3

「パパー、

お家は遠いの?」

「そうだな、

すまないが今日はここで泊まろう、」

俺は娘を連れてカプセルホテルに来ていた、

やっと救った娘の手は昔の記憶より大きくなっている、

車にくくりつけている荷物を取られないようにしっかりと固定して貴重品と銃は俺
が持った、

娘の前で銃は見せたくないがこれを盗まれて娘に被害がある方が恐ろしい、そんなことがあつたら娘を託してくれた妻に申し訳ない、

それどころか娘を救うために俺を助けて命を散らして行つた者達に申し訳なくなる、

「パー、

どうしたの？」

「なんでもないよ、

さあ行こうか、

明日は家に着くからな、」

俺は娘の手を握つてホテルに入る、

ホテルの中はまあカプセルホテルだなと言える、

だが娘は珍しそうに当たりを見渡す、

ずつとあの中に閉じ込められていたからな、

これからは色々な事を見て目を輝かせるだろう、

俺はフロントに行つて受付と鍵を受け取り娘を連れて指定された部屋に行く、

部屋に入つたら娘はカプセルベットにいきなりダイブする、

その光景に俺は微笑んでしまう、

俺は荷物を降ろしていると、

「パパー、

これなんて書いてあるの？」

娘が一枚の写真を俺に渡して来た、

俺はそれを受け取る、

そこには女性たちが写った写真だ、

前の宿泊客が置いて行つたのだろう、

俺は裏返して見ると文字が書いてある、

日本の漢字が使われているな、

「これは日本の漢字だな、

艦隊これくしょんと書いてあるんだ、」

「艦隊これくしょん？」

娘は首を傾げながらそう言うのと突然目眩が俺を襲う、

「ば……ば……」

娘もフラついている、

俺は娘を抱きしめて腰から銃を抜く、

まさか、

また、
俺と娘は意識を失った、

出会いと襲撃

俺は目を覚ますと真つ先に目に映ったのは青い空だった、
いつのまにか外に出たんだ？

俺はあの写真を見て倒れたはずだ、
それならテント中のはず、

俺は体を起こす、

視界に映ったのは海、

「……は島か？」

俺が倒れた時にあいつらがここに運んだのか？

だが服はそのまま、

更にマスクも装着している、

武器はそのまま、

意味がわからない、

俺を殺すのなら倒れた時に殺せばいい、

それをこんな島に武器ごと置いて行って何を考えているんだ、

俺は立ち上がり武器を確認した、

サバイバルナイフはある、

サムライエッジ（バイオ7）は装弾一杯ある、

トールハンマー（バイオ7）も同じく、

AW50（バイオ6）も同じく、

なぜか

グレネードは2個、

だが銃の予備弾がない、

主にナイフで戦うことになるだろう、

もつとも、

こんな爽やかな空の下で戦うことはないと思うが、

そう思っているとは背後から気配がした、

砂浜の砂を誰かが踏む音が聞こえる、

「動かないで、」

この声はまさか、

俺は手を挙げてゆっくりと振り向いた、

「動かないで！」

俺はその声の言う事を聞かずにゆっくりと振り向く、

思わず目を見開いた、

別行動中の俺の仲間、

「あなたは誰？」

「ここはどこなの？」

だがあまりに若い、

俺とはあまり変わらないはず、

だが前例はある、

あの時のレオン（PXZ2）だ、

「ジルか？」

俺は声をかける、

ジル「なんで私の名前を？」

そうか、

もし俺の仮説が正しければ声も変わっていいかもしれない、

俺はマスクをゆっくりと外した、

「クリスだ、

クリス・レッドフィールド、」

ジルは驚いた顔をする、

ジル「クリス!?!でもあなたそんな老けてないはず?」

クリス「わかるかわからないがああ時のレオンを思い出せ、」

ジル「まさか、あなたは未来のクリス?」

クリス「そうだ、そうとしか考えられない、」

ジル「そうね、あの事件の後なら考えられるわ、」

クリス「ジル、お前はいつの時代から来たんだ?」

ジル「有栖零児(PXZ2)の結婚式を呼ばれた後よ、」

クリス「10年ぐらい前か、」

ジル「それならそんなに年をとったのは納得ね、」

クリス、今は何してるの?」

クリス「話せば長くなる、今は腰を落ち着かせる場所が欲しい、」

ジル「そうね、お互い別の世界に来た感じね、」

俺らがそう言うと、

「おーいー!」

突然男の声が聞こえた、

俺とジルはその声の方向を見ると1人の男性と1人の少女がいた、

その2人がこつちに来る、

「やつと人がいた、

あんたら、

ここがどこか教えてくれ、」

ジル「その前に名前を覚えてくれない？」

「俺はセバスチャン・カステアノス、この子は娘のリリーだ、」

ジル「私はジル・バレンタイン、こつちはクリス・レッドフィールド、生憎と私達も

ここがどこだかわからないの、」

セバスチャン「どう言うことだ？お前らはここの住人じゃないのか？」

クリス「残念ながら、俺たちもいつのまにかここにいた、」

セバスチャン「まさかだが写真を見てか？」

ジル「写真？まさかあの艦隊これくしょんと書かれた写真？」

クリス「ジル、お前も見たのか？」

ジル「ええ、艦隊これくしょんと言ったら突然目眩がして、」

セバスチャン「俺らもだ、日本の漢字と平仮名で書かれた艦隊これくしょんと言つた

ら目眩がした、」

クリス「どうやら俺たちは別の世界に来たのか？」

セバスチャン「そうらしいな、おたくらは冷静だがこういった状況になれているのか？」

ジル「慣れていると言うか初めは戸惑ったわね、悪魔だの天使だのドラキュラだの、拳げ句の果てに世界を滅ぼそうとした組織と戦ったりアンドロイドと共に戦ったり（P X Z 1、2）」

クリス「それに俺はジルの来た世界の10年後くらいから来た、」

セバスチャン「そんな摩訶不思議な世界があるのか？」

リリー「天使は羽が生えてたり頭に輪っかがあったの？」

ジル「残念ながら羽も天使の輪っかもなかったわ、そのかわり小さい分身をしたり竜巻を出したり傷を直したり体を大きくしてそのお尻で敵を押しつぶしていたわ、」

セバスチャン「それ本当に天使か？」

ワルキューレ（P X Z）、

すまん、

フオローができない、

クリス「セバスチャンもこういったことに慣れているようだな、」

セバスチャン「俺も似たようなことがあったからな、簡単に言うるとサイコ野郎の精神世界に入って化け物と戦いながら脱出したりこの子を助けに行ったりした、」

クリス「精神世界？」

セバスチャン「STEMといった機械にそいつの脳とリンクして世界を構築するんだが詳しい事はよくわからなかった、」

ジル「そんな技術は知らないわね、どうやらセバスチャンとリリーちゃんは私達とは別の世界から来たのね、」

クリス「そうだな、セバスチャン、俺たちと一緒に行動しないか？下手に動く危険だ、それに一人でその子を守るのは辛はずだ、」

セバスチャン「そうしよう、お互い今の状況はわからない、ここもどこかわからない、」

ジル「お互い背中を預けることになるわね、セバスチャンの職業は？」

セバスチャン「前は警察にいたがさっきの事件で警察を辞めた、今はフリーだ、そういう二人は何をやっているんだ？」

クリス「俺たちはBSAAと呼ばれる組織に所属している、俺たちの世界ではウイルスによってゾンビなどが蔓延したりする、俺たちはその根元の見つけて排除する仕事をしている、」

ジル（随分と端折ったわね、）

セバスチャン「ゾンビってあの死んだ奴が生き返って人を食う奴か？」

クリス「その認識で問題ない、」

セバスチャン「それが地球のどこかにいるのか？」

クリス「見せた方が早いな、ジル、リリーの話し相手をしておいてくれないか？子供には刺激が強すぎる、」

ジル「わかったわ、リリーちゃん、今度は拳で車を壊す格闘家の話をするわね、」

リリー「すごく強そう！」

ジルはリリーを連れて少し離れた、

セバスチャン「すまない、気を使わせた、」

クリス「気にするな、それじゃあ見せるぞ、」

俺はデバイス进行操作した、

セバスチャン「そっちの世界は科学技術が進んでいるな、」

クリス「そうだな、その分ヤバイものも出来ている、」

俺はデバイス进行操作しながらそう言う、

そして目的の動画があつた、

クリス「これだ、」

見せたのはウイルス感染した被害者、

セバスチャン「これは・・・」

クリス「これがゾンビだ、他には寄生虫やカビもいる、」

セバスチャン「まるでSTEMの被験者のようだな、そっちはたちが悪く頭を撃つてもすぐに死ななかつた、」

俺はデバイスをしまう、

クリス「ジル、終わったぞ、」

俺はジルとリリーを見ると、

リリー「しよーりゅーけーん！」

何を教えているんだ？

ジル「うまいわね、その調子よ、」

ジル、お前の手に持っているのはケン・マスターズ通信空手（PXZ2）完全版か？
いつの間を買ったんだ？

セバスチャン「何してるんだ？」

ジル「リリーちゃん昔一緒に戦った仲間の事話したらやってみたいと言われて、それで教えてるの、」

リリー「はどーけーん！」

バシユツ

クリス「・・・」

ジル「……」

セバスチャン「……」

おい、この子の波動拳を出したぞ、

リリー「やったー！」

リリーは大喜びだ、

セバスチャン「頭がいたい、」

ジル「まさか本当にできるなんて、恐るべき、通信空手、」

クリス「いいのか？それで？」

リリー「はどーけん！はどーけん！」

バシユツ、バシユツ、

将来、春麗（PXZ1、2）のようになりそうだ、

クリス「……とりあえず移動しよう、」

セバスチャン「そうだな、」

ジル「ええ、リリーちゃん、ここから動くから付いてきて、」

リリー「うん！」

俺たちが移動する、

だが、

ドカーン

俺たちがいたところが突然大きな爆発音を出した、

リリー「きゃーー!!!」

セバスチャン「リリー！無事か!？」

ジル「今のは砲撃!?!どこから!?!」

皆が辺りを見渡す、

俺も周りを見る、

そして海に視線を移すと、

クリス「なんだと、」

思わず口に出した、

人が海の上を浮いていた、

ダンテやバージル（PXZ2）なら水の上を走れることはできるだろう、

だがあいつは走っていない、

滑っている、

クリス「ジル！」

俺はジルに声をかけた、

ジルも海を見る、

ジル「っ！嘘でしょ？」

セバスチャン「なんなんだあいつは？」

俺はAW50を構えてスコープを覗いた、

アルビノ肌なのか？

真っ白だ、

そして少女、

その横には・・・なんだあれは？

砲台？

そう思っていると砲台が火を噴いた、

クリス「全員散開！砲撃が来たぞ！」

俺の言葉に皆が散らばる、

ドカーン

俺たちのいたところに着弾した、

セバスチャン「あれもゾンビの仲間か!？」

ジル「そんなわけないでしょ!？」

クリス「少女が砲撃している、」

俺は再び海を見ると、

クリス「嘘だろ？」

水の中から何かが出てきた、
魚？

だが大きいぞ、

それに黒い、

それが何体も、

クリス「ジル！セバスチャン！銃を構えろ！何か近づいてくるぞ！」

ジル「見て分かるわ！」PSG1を取り出す、

セバスチャン「リリー！下がってくれ！」スナイパーライフルを取り出す、

リリーはセバスチャンの後ろに回った、

クリス「撃つぞ！」

俺はAW50を撃った、

謎の黒い魚に命中して吹き飛んだ、

更にジルの狙撃、

セバスチャンの狙撃で一体ずつ仕留めていく、

残弾を確認する、

減ってない？

まさか異世界に行った時のように撃ちまくりか？（P X Z 2）
そいつはありがたい、

だが奴の数が多い、

俺はサムライエツジに持ち替えて撃つ、

奴が近くに来ると水面に顔を出した、

口が異様に大きい、

その口が開いて中には砲台があった、

まじかよ！

俺はその口の砲台を撃った、

幸いにも発射することはなかった、

クリス「こいつらの口の中に砲台があったぞ！撃たれる前に撃つんだ！」

セバスチャン「まじかよ！そんな危険な奴かよ！」ウォーデン・クロスボウに持ち変える、

ジル「クリス！あの人型を撃って！あいつがこいつらの司令塔よ！」ハイローラーに持ち替える

そうか！

俺は再びAW50を構えて少女を見た、

そいつは驚いている顔をしている、

少女を殺す趣味はないが仕方がない、

俺はAW50の引き金を引いた、

手入れはしているが反動は凄まじい！

あいつはよくこんな武器を撃てたな、

少女を見ると少女の体に大きな穴が空いている、

そして後ろに倒れた、

やったか!?

スコープから目を離すと黒い魚は驚いている、

セバスチャン「こいつを喰らえ！」ショックボルトを放つ、

セバスチャンの放った物が海に入ると放電し始めた、

黒い魚が痺れている、

セバスチャン「クリス！ジル！いまだ！」リボルバーに持ち替える、

全員が一斉に発射する、

黒い魚が次々と死んでいく、

そして全員死んだところで発砲をやめた、

クリス「こいつらはなんだ？」

ジル「B・O・Wではなさそうね、」ジェネシスを取り出して調べる、
リリー「パパ、終わったの？」

セバスチャン「どうだろうな？」

それぞれ口を出すと、

ジル「クリス、ジェネシスで調べた結果だけど壊れているのかしら？ 駆逐イ級と出た
わ、」

クリス「クチクイキュウ？」

セバスチャン「なんだそれは？」

ジル「私に言われても困るわ、」

結局わからないままで、

俺はもう一度海を見る、

おいおい、

またかよ、

俺はAW50のスコープで覗く、

また少女だ、

だがさつきと違って肌が白くない、

だが海を滑っている、

それに腰に砲台を身につけている、
奴らの仲間か？

クリス「ジル、セバスチャン、銃を構えている、」

ジル「またなの？」PSG1を構える、

クリス「まただ、」

セバスチャン「勘弁してくれ、」スナイパーライフルを構える、
俺もAW50を構える、

攻撃は来ない、

それどころか両手を挙げている、

だったら腰の砲台を下ろしてこい、

そいつはこっちに近づいて来る、

「こちらには敵意はありません！」

そいつはメガホンを取り出してそう叫んだ、

ジル「クリス、あちらはそう言っているけど？」

クリス「構えを解くな、油断して撃って来るかもしれない、」

エイダ・ウォン（バイオ2、4、6）の前例がある、

そいつが俺たちの前まで来た、

「大丈夫でしたか!?こちらで砲撃音が聞こえましたので様子を見に来たのですが、」
ジル「見ての通りよ、私たちで片付けた、」

「あの、イ級とレ級をですか?」

セバスチャン「この魚もどきとずっと向こうにいる人は倒したが、」

クリス「その前にお前は誰だ、少なくともこうして話ができるんだ、自己紹介ぐらいしろ、」

「すみません、私は大和型戦艦の大和です、」

クリス「戦艦?」

戦艦、

あのイージスとかミズーリとかか?

ジルはジェネシスで調べ出した、

大和「あの、どうされました?」

セバスチャン「日本の戦艦がこんな綺麗な女性な訳ないだろ、」

ジル「ジェネシスの結果が出たわ、艦娘大和と書かれてる、」

大和「先程からそうおっしゃっていますが、」

クリス「すまないが俺たちも混乱している、」

セバスチャン「第1艦娘ってなんだ?」

大和「艦娘を知らないのですか？」

クリス「すまないが知らんな、」

大和「今の世の中で艦娘を知らないとなるともしかしてですが皆様は別の世界から来た方ですか？」

クリス「そうだが、」

大和「そうでしたか、それでしたら鎮守府に来ていただいてもよろしいでしょうか？
ここよりは安全かと思えます、」

セバスチャン「鎮守府？」

大和「元師様、私達の司令官がいる場所です、」

ジル「クリス、どうする？」

クリス「・・・案内してくれ、俺たちには情報が欲しい、」

大和「わかりました、ですがその前に1つだけ、このイ級とレ級は本当にあなた方が？」

クリス「なんの確認かわからないがそうだ、」

大和「ありがとうございます、今から迎えの船をお呼びします、」

大和と呼ばれる女は海の方を見て、

大和「元師様、大和です、はい、・・・イ級とレ級ですが倒されていました、・・・お

そらくですが霧の艦隊と同じく別の世界から来たものです。．．はい、それで船を用意していただきたく、．．．ありがとうございます、」

通信機なしで通信している、

大和は通信を終えて、

大和「今お迎えが来ます、しばらくお待ちください、」

セバスチャン「なあ、俺からも聞いていいか？」

大和「何でしょうか？」

セバスチャン「俺たちは英語を話しているが大和はなぜそんなに英語がスラスラ言えるんだ？」

大和「元師様がアメリカ人だからです、元師様は初めは英語しか言えませんでした、努力して日本語を覚えたのです、私達はそんな元師様を見習いまして英語を覚えまして、」

アメリカ人、

リリー「お姉ちゃん、私も質問していい？」

リリーがセバスチャンの後ろに隠れながら聞いてくる、

大和「はい、なんででしょうか？」

大和がしゃがみこんでリリーと同じ目線になりながら笑顔で聞き返した、

リリー「お姉ちゃんみたいにおつきくなるのどうしたらいいのかわかるかしら、」

大和は結構背が高い、

大和はうーんと唸りながら考えて、

大和「いっぱい食べてたくさん寝て、ご両親の言うことを聞いて一杯遊んでいたらきつと大きくなりますよ、」

リリー「わかった！いっぱい食べていっぱい遊んでいっぱい寝る！パパの言うことも聞く！」

リリーはセバスチャンの足に抱きつく、

微笑ましいな、

セバスチャン「すまないな大和、」

大和「構いません、子供は可愛いので、」

そこまで言うとうちからエンジン音が聞こえた、

俺はそつちを見ると、

「大和さーん！迎えに来ましたー！」

クルーザーがこつちに来る、

大和「お迎えが来ました、」

ジル「でも声が幼いわね、」

クリス「子供が操縦しているのか？」

大和「皆様から見たら幼いかもしれませんが、」

幼い？

そう言っているとクルーザーが着いた、

降りて来たのは少女、

大和「お迎えありがとうございます明石さん、」

明石「いえいえ、元師様の頼みですので、皆様が異世界から来た方ですね、工作艦の

明石です、今から鎮守府に案内しますので乗ってください、」

明石と呼ばれる少女に言われて俺たちはクルーザーに乗る、

クリス「・・・」

ジル「・・・」

セバスチャン「・・・」

リリー「可愛い！」

俺は夢を見ているのか？

クルーザーの操縦席に二頭身ほどの少女がいた、

リリーはその小人に近づいて頭を撫でたり突ついたりしている、

小人は嬉しそうにキヤーキヤー言っている

大和「あの子達は妖精さんです、」

セバスチャン「はい？」

明石「妖精さんです、」

リリー「妖精さん？」

大和「この子達がいないと私達はいません、」

明石「でもすごいですね！4人も妖精さんを見ることができるとはですね!?!見える人は

10万人に1人なのに、」

絶対にアレのせいだ(PXZ1、2)

大和「妖精さん、鎮守府に向かってください、」

大和の言葉に妖精さんは敬礼してクルーザーを発振させた、

もうなんでもありだな、

衝撃の再開

クルーザーが向かう先に見えたのは白い屋敷、

大和「あそこが鎮守府です、」

ジル「鎮守府、大きいわね、」

明石「それはそうよ、艦娘がいっぱいいるからね、鎮守府も大きくなきゃ、」
どれだけいるんだよ、その艦娘というには？

リリーは楽しそうに海を見ている、

発着場に到着してクルーザーが止まる、

明石「妖精さんありがとう、」

リリー「妖精さんありがとう！」

妖精さんはリリーに頭を撫でられて照れている、

明石「ここは私のテリトリーの工房よ、すぐ横に海があるから試し撃ちにびつたりなの、」

試し撃ちって大和の腰の砲台のことか？

大和「明石さん、まずは元師様にお会いしないと行けません、」

明石「そうだったね、大和さん、お願いします。」

明石はそう言つて工房の奥に行った、

大和「皆さま、こちらです、」

大和が歩き出す、

俺たちはそれに着いて行つた、

中は広く地図がないから迷うかもしれない、

時折小さい女の子が大和を見て頭を下げている、

大和は何者だ？

大和はある部屋の前で立ち止まつた、

大和が扉にノックする、

大和「元師様、大和帰還しました、」

「入つていいよ、」

随分声が若いな、

それにどこかで聞き覚えがある声だ、

大和「失礼します、」

大和が扉を開けた、

中は本棚と地球儀、

それと机が置いてある、

「お帰り大和、怪我はしてないかな？」

大和「傷一つありません、ご心配ありがとうございます、」

大和が頭を下げる、

「さて、後ろの方が異世界から来た人達だね、」

俺は彼の顔を見て驚いた、

ジル「保護をしていたいただきありがとうございます、」

あの時死んだはず、

「いいんだ、それに同郷のものだから無碍にはできないからね、」

結構歳をとっているが間違いない、

セバスチャン「元師と呼ばれているからもっと歳くつた奴が来ると思ってた、」

彼だ、

「よく言われます、それに若造となめられることもあります、」

クリス「1ついいか？」

「なんででしょう？」

クリス「クレア・レッドフィールドという人に聞き覚えはないか？」

そう聞くと元師は目を見開いた、

ジル「なんで妹の名前が出てくるの？」

「妹、」

セバスチャン「妹がいたのか？」

クリス「隠していたわけじゃないがここにいないからな、」

「あなたはクレアのお兄さんですか？」

クリス「そうだ、クリス・レッドフィールド、ロックフォート刑務所（コードベロニカ、ダークサイドクロニクル）に囚われていたクレアを助けに行ったものだ、」

俺がそう言うと元師は涙を流した、

「クレアは無事に助けることができましたか？」

クリス「ああ、あなたのおかげです、クレアはあなたの事をナイトと言っていました、俺は何もしていません、あの時俺はクレアを襲いました、」

クリス「アレクシア（コードベロニカ、ダークサイドクロニクル）のせいだ、クレアは気にしていない、ステイブ・バーンサイド（コードベロニカ、ダークサイドクロニクル）」

ステイブ「ありがとうクリスさん、」

ジル「ステイブ、あのペロニカウィルスの犠牲者の、」

クリス「そうだ、あれから19年、歳をとるわけだ、」

ステイブ「はい、今では第2の人生を歩んでいます、」

大和「元師様、お知り合いですか？」

ステイブ「大和には話したことがあるだろう、俺が別の世界から来たこと、クリスさんの世界から来たんだよ、」

クリス「だが死んだはずだ、こつちに来たら生き返るのか？」

ステイブ「わかりませんが、俺ともう1人死んだ人がいますがその人も生きています、」

クリス「もう1人いたのか？」

ステイブ「今は席を外しているよ、」

セバスチャン「話が盛り上がっているところ悪いが自己紹介をしないか？俺はセバスチャン・カステアノス、この子はリリーだ、」

ジル「ジル・バレンタインよ、よろしく、」

ステイブ「よろしく、」

ジル「私達は死後の世界に来たのかしら？」

ステイブ「わからない、でもあなた方は生きています、何が原因でこつちに来たかわかりませんが皆様を歓迎します、」

クリス「ありがとう、早速ですまないが教えてほしい、この世界のこと、」

ステイープ「この世界の年号は1940年、場所は日本です、太平洋戦争が行われていた時代です、」

セバスチャン「おいおい過去に遡ったのか？」

ステイープ「そのような感じですが歴史はここから違います、戦争中にある勢力が現れました、あなた方が戦った生物、深海棲艦と呼ばれる生物です、」

ジル「深海棲艦？あのイ級と呼ばれた生物が？」

ステイープ「はい、深海棲艦は通常の武器、銃は効きませんでした、そのため世界中の軍が壊滅して海が深海棲艦に支配されました、」

セバスチャン「武器は普通に効いたのだが、」

ステイープ「それに関してはわかりません、ですがそこに現れたのは艦娘でした、」
クリス「艦娘、」

ステイープ「ここにいる大和のような女の子です、彼女達は唯一深海棲艦に対抗できる子です、元々この子達は沈んだ戦艦でしたがその魂が沈んでなおも戦う意思があったためこのように具現化したと言われています、実際は俺たちもわかりません、」

セバスチャン「全員大和のような女の子か？」

ステイープ「全員が女の子です、それも戦艦の大きさで変わるのでしょうか？背丈やそのほかも元が大きいほど大きいみたいです、」

クリス「大和、廊下ですれ違ったあの子も艦娘か？」

大和「はい、駆逐艦暁型の電です、」

ジル「あんな小さい子供も、」

ステイブ「艦娘のお陰で海も少しずつ取り戻し始めています、俺の役目はあの子達の司令官として指示を出したり共に戦うことです、」

クリス「共に戦う？だが銃は効かないと、」

ステイブは立ち上がって押入れを開けた、

中から巨大な斧を持ち出した、

ステイブは片手で持ち上げている

見た目に反して軽いのか？

ステイブ「クリスさん、失礼ですがこちらを持ち上げていただいてもいいでしょうか？」

ステイブは机に斧を置いた、

俺はその斧を手にして持ち上げようとしたが、

クリス「な?!重すぎる！」

腕力には自信があったがこれは両手でも持てない、

ステイブ「クリスさんは覚えていますか？あの時に俺がペロニカウイルスによって

化け物に変わった時のこと、あの時の怪力が死んだ後もそのまま引き継ぎました、」
クリス「そうなのか？」

ステイブ「はい、その力で俺は皆と一緒に深海棲艦に挑みました、結果は成功、先程出会った明石に俺専用の艦装、と言っても水上を滑るためのものだけどそれを使って戦っています、」

大和「今はやめてほしいと何度も言っているのですが聞いてくれないのです、」

大和がため息交じりでそう呟いた、

ステイブ「大和には申し訳ないが君達は俺の大切な仲間であり家族であるんだ、皆が最前線で戦っているのに俺だけここに座っているなんてできない、」

セバスタン「提督ってのは戦わないのか？」

ステイブ「そうだな、ここで作戦を練って出撃命令を出して後は帰ってくるのを祈るだけだ、」

ジル「女の子だけを戦わせて自分は高みの見物みたいな感じね、」

ステイブ「それが嫌だから難しい海域は俺も一緒に出ることがある、」

ジル「偉いわね、」

大和「ですが元師様に何かありますとこの鎮守府の艦娘達が悲鳴をあげてしまいません、」

クリス「信頼されているんだな、」

ステイブ「そうかな？」

大和「私達艦娘は元師様を推したいしております、」

ステイブ「ありがとう大和、」

クリス「話が逸れたな、すまないがステイブ、今の俺たちは無職だから何か職を紹介してくれないか？」

ジル「そうね、いつ戻れるかわからないからまずは家が欲しいわね、ポロ屋でもいいからないかしら？」

セバスチャン「ジル、ちゃっかり何家を要求しているんだ？」

ジル「拠点よ、風来坊のように移動するよりそこにどまった方がいいわ、」

大和「元師様、その前に、皆さま全員妖精さんが見えています、」

ステイブ「それはいいことを聞いた、」

セバスチャン「どういうことだ？」

ステイブ「妖精さんが見えるのはごく僅かの人達です、その僅かの人が経歴問わずに提督になるのです、」

クリス「それは犯罪者もか？」

ステイブ「はい、ですが俺のもう一つの仕事はその犯罪者が不正、あるいはひどい

ことをした際にクビにしたり牢獄に送るといった仕事をしています。」

大和「先日そのようなことをした提督を1人解雇しました、その艦娘達は酷く傷つきました。」

ステイブ「そこですがあなた方にはその鎮守府の提督をしていただきたい、クリス「突然だな、」

ステイブ「あなた方が適任だと思ったからです、」

ジル「クリス、いいんじゃないかしら？無職よりはいいはずよ、」

セバスチャン「リリーを養わないといけないからな、俺は賛成だ、」

クリス「いいだろう、だが仕事が変わらないぞ、」

ステイブ「俺ともう1人が教えます、それにすぐにその鎮守府にあなた方が向かうときつと砲撃が来ると思います、」

ジル「そんなに？」

ステイブ「大和、すまないがリリーちゃんとジルさんを連れて間宮達のところに連れて行ってくれないか？」

大和「わかりました、リリーさん、ジルさんこちらです、」

ジル「女性に聞かれないくない内容によかね、セバスチャン、リリーちゃんは私に任せ
て、」

セバスチャン「頼んだぞ、リリー、パパはこのお兄さんと大切なお話があるからあそこのお姉さん達の言うことを聞くんだぞ、」

リリー「うん、」

ジルとリリーは大和後に着いて行った、

ステイブ「行きましたね、突然ですがクリスさんとセバスチャンさんは大和を女性としてどう思いますか？」

セバスチャン「唐突だな、第一印象は綺麗で理想の女性だな、」

クリス「セバスチャンと同じだ、あれを大和撫子と言うのだな、」

楠舞神夜（P X Z）を思い出した、

だがあれは露出が多すぎる、

ステイブ「ありがとうございます、艦娘は大体の男性の女性の理想像です、そのこの鎮守府の提督は男でした、」

セバスチャン「なんとなくわかった、」

ステイブ「想像できたと思いますがセクハラが多かったです、そして抵抗すると暴力を振るい無理やり従わせていました、」

クリス「そんな奴がいたのか？」

ステイブ「提督になる前は普通の男性でしたが艦娘達を見てそのような行為を行っ

たようです、」

セバスチャン「それで解任したのか？」

ステイブ「そうです、それに今の世間の艦娘の立ち位置は微妙です、」

クリス「微妙？」

ステイブ「艦娘には人権がないと騒がれています、艦装を持ち深海棲艦を倒すための兵器と言われています、」

クリス「だが話したり笑ったりしているぞ、」

ステイブ「艦娘はどうやって産まれているかわかりますか？」

セバスチャン「人と同じ母親から産まれるんじゃないか？」

ステイブ「残念ながら違います、あの子達は工房にあるドックに資材を入れて時間が経てば産まれます、大和もそうやって産まれました、あの姿のまま、」

クリス「まるで作り出しているかのようだ、」

ステイブ「その通りです、そのためたまにあの子達を人ではなく兵器として見る者がいます、」

セバスチャン「だからそんな騒ぎがあるのか？」

クリス「だが艦娘のおかげで皆が守られているんだろ？」

ステイブ「あの子達は作られているため他の人からは変えが効くと思われています」

す、確かに建築すれば増えますがあの子達にも心があり感情もあります、そして子供も作ることができます、」

セバスチャン「まさか性行も出来るのか？」

ステイブ「はい、現にこの鎮守府に居ます、その人は結婚して提督を辞任して子供と一緒に生活をしています、」

クリス「結婚までしているのか？」

ステイブ「ケツコンカツコカリと言いますがその人は最後まで行きました、俺も大和とケツコンカツコマジをしています、」

ステイブはそう言つて左手を見せてきた、

薬指に指輪がはまっている、

セバスチャン「だから大和はあんなに心配していたのか？」

ステイブ「はい、何度も人権を与えるように動いています、なかなかうまく行きませんが、」

クリス「諦めるな、絶対に、クレアも諦めなかった、」

ステイブ「そうですね、ありがとうございます、」

セバスチャン「今日はここまでにしらないか？一気に話されても頭が追いつかない、」

ステイブ「そうですね、では間宮の所に行きますか、もう一人のこつちにきた彼を

紹介したいからです、」

ステイブは立ち上がった、

クリス「頼む、」

ステイブは扉を開けて歩き出す、俺たちはその後を着いて行った、

甘味処間宮

クリス「・・・」

ステイブ「・・・」

セバスチャン「・・・」

俺たちは声を失った、

なぜなら、

ジル「次は竜巻旋風脚を練習するわよ、」

「「「「「「はい！お姉様！！」「「「「「「」

リリー「お願いします！」

何やってんだ？

大和はオロオロしている、

カウンターの向こうに艦娘と男も笑顔が引きつっている、

ジルの手にあるものは・・・ケン・マスターズ通信空手完全版、

ジル「いいことを片脚を軸にしてそのまま回し蹴りを行うのよ、そうすることで宙を浮くことができるの、これは宙に浮いている敵に有効的よ、」

「艦載機も落とせます！」

「これで次の出撃に勝てます！」

ジル「みんな一回やってみて、」

「「「「「「「はい！竜巻旋風脚！」「「「「「「」

リリー「たつきせんぷーきやくー！」

しかも一回で習得してる、

リリーも含めた12人の子供達が回転蹴りをしながら宙に浮いた、

もうみんなが口を開けて固まってしまった、

ジル「できたわね、次は・・・」

クリス「ジル、何をしているんだ？」

ジル「クリス、終わったのね、この子達に技を教えたのよ、」

大和「えつとこちらですデザートを食べていましたら駆逐艦の子達がこちらにきまし

て、ジルさんやリリーさんとお話ししたり遊んだりしていました。がリリーさんが手から青い塊を出したらみんながリリーさんを質問責めにしまして、そこでジルさんが教えてあげると言い出されました。そして駆逐艦の子達が全員青い塊を手から出しまして、したらジルさんが次々と何かを教えています、」

クリス「事情はわかった、だが波動拳をできたんだな、」

ジル「教えてた私も驚いたわ、」

ノリノリだっただろ、

ステイブ「向こうの世界は少女が何か手から出すのか？」

セバスチャン「俺に聞くな！」

「元師、この人達は？」

男が話しかけてきた、

ステイブ「ロドリゴ、別世界からきた人達だよ、」

ロドリゴ「彼らが、」

やはり見覚えがある、

あの時砂虫（コードベロニカ）に食われた、

クリス「もしかしてあんたもロックフオートにいたのか？」

ロドリゴ「元師に聞いたのか？」

クリス「いや、一度、あんたが死ぬ直前にあっているはずだ、俺にライターを託した、これは天使がくれたと言つて、」

ロドリゴが目を見開く、

ロドリゴ「あの時の男か!？」

クリス「ああ、」

「あなた、お知り合い?」

ロドリゴ「間宮、昔話した天使の知り合いだ、」

「そうなんですか? はじめまして、甘味処間宮の店主の間宮です、」

クリス「クリス・レッドフィールドだ、その天使の兄だ、」

ジル「ジル・バレンタインよ、」

セバスチャン「セバスチャン・カステアノスだ、あの子はリリー、」

ロドリゴ「ロドリゴだ、ここで働いている、クリス、妹は元気か?」

クリス「ああ、だがやはり俺の血が流れているからか色々と面倒ごとに巻き込まれている、」

ロドリゴ「あの子らしい、」

そんな会話をしていると、

「お父さん、お母さん、仕入れに行ってきたよ、」

間宮「ありがとう円香、」

円香「お客さん？それに元師様！」

ロドリゴ「円香、挨拶しなさい、」

円香「円香です！甘味処間宮を今後ともご贖いを！」

セバスチャン「ちやつかりしてるな、」

ジル「家族思いなのよ、」

間宮「円香、仕入れてきたものは貯蓄庫に入れてきて、」

ロドリゴ「俺も手伝おう、」

円香「お父さんありがとう！」

ロドリゴと円香は奥に行った、

クリス「幸せそうだな、」

ステイーブ「あの島の事を考えるとここは平和なんだろう、それにロドリゴは向こうの世界でも家族に先立たれていたのでからね、こつちに来て数年経った時に間宮とケツコンして10年前に子供を産んだんだよ、」

クリス「ステイーブが必死に人権の運動をしている意味がわかった、」

ステイーブ「こういうことです、間宮、皆さんに食事をお願いします、」

間宮「わかりました、食後は甘いデザートもご用意します、駆逐艦の皆様も一緒にい

かがですか？」

「「「「「「わーい！」」」」」」」」

賑やかだな、

俺はテーブルに座って料理が来るのを待った、

和食だが気を利かせてナイフとフォークを持って来てくれた、

一口、

うまい、

俺たちは間宮の料理を黙々と食べた、

余談だが、

通信空手を習った駆逐艦達が次の出撃で体術を使ったことで高い戦果を生み出したとの事、

謎の青い塊で深海棲艦を大破させたとか回し蹴りで宙に浮き艦載機を蹴り落としたとか、

朝食と魔改造

夜、

俺は無理言って今晩はジル達と同じ部屋にしてもらった、

ジルが退室した後のことを伝えるために、

ジル「作られるってまるでB・O・Wのような感じね、」

クリス「だが違う、感情がある、」

ジル「わかってているわ、それに技を教えている時のあの笑顔が作っているなんて思いたくないわ、」

セバスチャン「それに子供を作ることができないみたいだ、今度行く鎮守府はクズ男があの子達に公然わいせつ罪をしたから解任したって言ってたな、それと暴力行為だ、」

クリス（リリーにはわからないようにあえて難しい言葉を選んだな、）

ジル「私はその辺りのケアを行うことになりそうね、」

クリス「男では出来ないことだ、頼んだ、」

セバスチャン「クリス、それを伝えるだけじゃないだろ、何か聞きたいことがあるだろ？」

クリス「そうだ、昼間あの深海棲艦と戦った時に銃を使っただろ、残弾が減ってなかった、」

ジル「気がついていたらわ、あの時のようね、」

セバスチャン「そうだったのか？だが確かにそうだ、リロードを忘れていた、」

クリス「おそらくだがこの世界にきた時にそうなつたと思われる、」

セバスチャン「ありがたいがリロードをやらない違和感を感じる、」

セバスチャンは荷物を確認する、

クリス「そこは慣れてくれ、」

セバスチャン「弾丸は減っていないがボルトが補充されていない、」

セバスチャンが目に見えて落ち込んでる、

クリス「まだあるんだがジル、お前はここにくる前は銃を持っていたか？」

ジル「ハンドガンしか持っていないなかったわ、ここに来た時には既に持ってたわ、」

セバスチャン「俺もだ、STEMの中では使っていたがそれ以外ではハンドガンしか

使っていない、ここに来た時に初めはSTEMの中かと疑った、」

クリス「まるでここで戦いがあると言っているようなものだな、現に深海棲艦と戦っ

たからな、」

セバスチャン「確かな、出来ればもう持ちたくなかったが、」

クリス「だがそのおかげでリリーは守れただろ、」

セバスチャン「そうだな、この話は終わりにしよう、」

ジル「それで明日はどうするの？」

クリス「ステイプに建造のやり方を教えてもらおう、他はこの鎮守府の案内だ、」
ジル「わかったわ、今日はもう寝ましょう、リリーちゃんが船を漕いでいるわ、」
ジルがリリーを見てクスリと笑う、

リリーは座りながら寝ていた、

クリス「そうだな、セバスチャン、電気を消すぞ、」

セバスチャン「わかった、リリー、今日はもう寝よう、」

セバスチャンはリリーをベットに横にして布団をかけた、

俺は電気を消して布団に潜った、

まともにベットで寝るにはいつぶりか、

今日は色々なことがあった、

俺は眠った、

朝、

俺は起きた、

ジルは俺のすぐあとに起きたがセバスチャンはまだ寝ていた、
時間はまだ5時だった、

ジル「久しぶりにぐっすり眠ったわ、」

クリス「そうだな、俺もそう思ってた、ここのところB・O・Wのお陰で各地に引つ
張りだこだった、」

ジル「何年たってもモテモテね、」

クリス「よしてくれ、」

ジル「聞いていい？」

クリス「なんだ？」

ジル「なんでアンチマテリアルライフルを持っているの？」
クリス「こいつは4年前に俺の仲間が使っていた、それを俺に託して死んだ、」

回想

クリス「ピアーズ！緊急用の脱出ポットだ！」

ピアーズを壁によしかけさせる、

クリス「待つてろ！」

クリスは機械を操作する、

ピアーズは動ける左手でBSAAのロゴを剥がす、

そして背中に背負っているAW50もおろす、

クリス「よし、ピアーズ！これで動くぞ！待つてろ、地上に出たら治療してやる！」

ピアーズをに肩を貸して立ち上がらせる、

脱出ポットまで歩く、

ピアーズが突然クリスから離れて左手でクリスを脱出ポットに押しやる、

クリスの手にはAW50と・・・

ピアーズはボタンを押す、

クリス「ピアーズ！何をしている!?!」

クリスが外に出ようとするもポットが閉まる、

ピアーズは操作盤を動かす、

クリス「ピアーズ！何をしている！ここを開けろ！命令だ！今すぐ開けろ！」

ランプが赤く点灯して発射準備が整う、

奴は再び海の底に、

基地の爆発とともに消えていった、

海上に出たクリス、

その手にはAW50と、

クリス「・・・」

B S A Aのエンブレムだった、

回想終了、

ジル「そうなの、」

クリス「あいつにもしもう一度会えたら礼を言いたいと思っっている、」

ジル「ここなら会えるかもしれないわ、」

クリス「探すとしてもどこにいるかわからない、もしたまたま会えたら礼を言う、」

ジル「意外と会えるかもしれないわ、」

クリス「希望は持つっておけと言うことか？」

ジル「そうよ、もう一つ、クリスは今何してるの？」

クリス「驚くなよ、」

俺は書類を見せる、

俺の今いるところ、

青と白のアンブレラ、

新アンブレラ、

元アンブレラの社員や科学者が過去の罪を償うために作られた組織、

ジルが訝しげな目で俺を見てきた、

ジル「クリス、この内容信じているの？」

クリス「信じているわけない、もし何かやったら潰す、」

ジル「クリスならやりそうね、」

クリス「ジル、セバスチャンとリリーを起こすのはしのびない、間宮の所に行つて時

間を潰すか、」

ジル「そうね、念のために書置きを置いていきましよう、」

ジルは書置きを書いた、

そして部屋を出た、

甘味処間宮、

クリス「今思うと甘味処なのに料理が出てきたな、」

ジル「クリス、突っ込んだら負けよ、」

間宮「声がすると思いましたがクリスさんとジルさんでしたか、」

クリス「すまない、早く目が覚めたからセバスチャンとリリーを起こさないためにこつちに来たんだ、」

ジル「仕込みの邪魔はしないわ、」

間宮「大丈夫ですよ、それに大体の仕込みは主人や娘も手伝ってくれていますので、」

「間宮さん、私もいますよ、」

間宮「伊良子さんもありますがどうございました、」

伊良子「親子で経営していると思われるのですが私も忘れないでください、えっと、クリスさんとジルさんですね、元師様から聞いております、補給艦の伊良子です、甘味処間宮で働いています、よろしくお願いします、」ペコーリ

クリス「改めてクリス・レッドフィールドだ、よろしく伊良子、」

ジル「ジル・バレンタインよ、よろしく伊良子、」

間宮「今お茶をお持ちしますのでお待ちください、伊良子さん、行きましょう、」

伊良子「はい、失礼しました、」奥に戻って行く2人、

ジル「こうして見ると本当に人と変わらないわね、」

クリス「そうだな、」

少ししてお茶を持ってくる間宮、

俺らはお茶を飲みながら時間を潰した、

6時

「いっちばんのりーー!」

1人の少女が入ってきた、

しかし俺らを見て、

「あれ?3番乗り?」

クリス「すまない、早く目を覚ましたからここで時間を潰していた、」

「でも早いよ!何時に起きたの!」

ジル「5時に起きたわね、」

「はやーい!私も負けないように早く起きなきゃ!」

ジル「今日はたまたまよ、明日は6時か7時に起きるわ、それにちゃんと寝ないと肌
に悪いわ、」

「わかった!ぐっすり寝て早く起きる!私島風型1番艦の島風!速さなら誰にも負けな
いよー!」

クリス「俺はクリス、よろしくな島風、」

ジル「私はジルよ、よろしく島風ちゃん、」

島風「はい！」

島風は近くの席に座る、

島風「間宮さーん！今日のご飯は何ですか!？」

間宮「朝は鮭の焼き魚とお味噌汁ですよ、」

島風「それでお願ひします！」

6時半、

「おっ？島風はともかく俺らより早起きな奴がいる、」

甘味処間宮の入り口から声がした、

「天龍ちゃん、あの方々は昨日駆逐艦のみんなにあの青い塊を出す技を教えた方々ですよー」

俺は濡れ衣だ、

天龍「あの重巡り級を一撃で大破に持ち込んだあの技か!？俺もその時出撃していたがあれは驚いたぞ！それにヲ級の艦載機を蹴りで落としてやがった！俺たちも敵艦も唾然としてたぞ！」

ジル「役に立てて光栄だわ、」

ジルはお茶をすすりながら返事をした、

天龍「俺は天龍型1番艦の天龍だ！」

「私は天龍型2番艦の龍田です、天龍ちゃんとは姉妹艦です、」

クリス「知っていると思うがクリスだ、」

ジル「ジルよ、よろしく、」

天龍「なあなあクリス！俺にも何か技を教えてくださいよ!？」

クリス「天龍、その腰の刀は？それで戦えばいいだろ？」

天龍「実はこの刀は飾りなんだ、実際に砲撃戦で刀なんて使えない、」

ジル「その刀を見せてくれない？」

天龍「いいぜ、」腰の刀を渡す、

ジルはどこからともなく札を出した、

クリス「何だそれは？」

ジル「神夜にもらったのよ、楠舞家特製霊力解放札って言った、」

楠舞神夜、

いつものまにかジルに渡した？

ジルは札を刀に貼ると、

輝き出した!?

すると刀が数十倍もの大きさになった!

天龍「おおー！ー！！！！」

龍田「あらー凄いわね、」

ジル「この刀には霊力が籠っていたらしいわね、」

らしいって当てずっぽうで貼ったのか?

それより霊的なものとか信じているのか?

あの時手から気とか炎とか出すなど言わなかったか?

ジル「この剣は斬艦刀(PXZ)と呼びなさい、」

天龍「斬艦刀・・・」

ゼンガー(PXZ)

お前の刀の名前を勝手に使われているぞ、

ジル「そう悪を絶つ剣よ、」

天龍「うおおおおお!! 龍田! 今すぐ出撃してくる! 今なら全てに深海棲艦に勝てる

気がする!」

そう言って天龍は走って行った、

天龍「俺の名はてんりゆううううう! 悪を絶つ剣なりいいいい!!!」

そこまで真似しなくてもいい、

龍田「あらあら、天龍ちゃん張り切っちゃって、ジルさん、もしよければ私の薙刀も
お願いできないかしら？」薙刀を渡す

ジル「やってみるわ、」

不安だ、

ジルは薙刀を見て札ではなく何かを出した、

小瓶に入った液体？

クリス「それは何だ？」

ジル「リエラ（PXZ）をジェネシスで調べた際になぜか結果と一緒に出てきたの、」
リエラに許可を取ったよな？

ジルはその何かを薙刀にかける、

すると一本の槍に変わった、

ジル「思った通り、ヴァルキュリアの槍よ、」

何作っているんだ!?

龍田「うあるきゆりいあ？」

ジル「ヴァルキュリアの槍、本当は盾とセットだけど槍しか無かったからこれで我慢
して、」

龍田「いえいえ、こんなに立派にさせていただいてありがとうございます、私も天龍ちゃんを追って出撃してきます、」

龍田はそう言って出て行った、

お前ら飯を食いにきたんじゃないのか？

7時、

セバスチャンとリリーが起きてきた、

セバスチャン「すまない、久しぶりにベットで寝たら熟睡していた、」

クリス「気にするな、俺らもすぐに寝るほどベットでが久しぶりだった、」

セバスチャン「食事はもう取ったのか？」

ジル「まだよ、ちよつと色々あったの、」

ジルが原因だろ、

伊良子「クリスさん、ジルさん、もうそろそろ何かご注文されますか？」

クリス「焼き魚の定食で頼む、箸は使えないからフォークとスプーンを持ってきてくれないか、」

ジル「私も同じ物を、あとフォークとスプーンも、」

セバスチャン「俺は肉料理で、リリーはどうする？」

リリー「パパと同じでいいよ、」

セバスチャン「わかった、肉料理を2つ頼む、」

伊良子「わかりました、しばらくお待ちください、」

伊良子は戻って行った、

セバスチャン「今日は建造を見に行くんだったな、」

クリス「そうだ、ほかにはこの鎮守府の中を見て回る、」

ジル「クリスが提督になるのよね、」

クリス「ジル、お前もそうだが、」

セバスチャン「話の流れ的に俺も提督になるのか？」

クリス「そうだろ、」

ジル「そうね、別に複数いても構わないはずよ、」

クリス「それに誰がいない時でも指示を出せるようにしないとイケない、」

セバスチャン「わかった、やるよ、」

伊良子「お待ちせしました、焼き魚定食ととり天定食です、」

ジル「食事が来たわね、食べましょう、」

クリス「そうだな、いただこう、」

リリー「いただきまーす！」

4人は食事を開始した、

余談だが天龍が深海棲艦を真つ二つにしたり龍田が檣から光の光線を出したりして
圧勝したらしい、

建築とアイテムボックスとワークベンチ

7時半、

ステイープが来た、

ステイープ「おはようございます、皆さま、」

クリス「おはようステイープ、」

ステイープ「朝食は済みましたか？」

ジル「ええ、美味しかったわ、」

ステイープ「それは良かったです、」

クリス「ステイープはもう食べたのか？」

ステイープ「まだです、俺も今来たばかりです、間宮、焼き魚定食を頼む、」

間宮「はい、わかりました、」

ステイープ「今日は建造を見ていただいたあと鎮守府内を見て回りたいと思います、」

クリス「異論はない、ステイープの好きなように回ってくれ、」

ステイープ「わかりました、」

ステイープはそう返事をしたあと間宮の持つてきた朝食を食べた、

セバスチャン「ステイープは箸を使うのが上手いな、」

ステイープ「こちらに来て19年、毎日練習しました、そう言えば天龍と龍田が突然出撃したいと言って来ましたが何か知りませんか？」

ジル「いいえ、心当たりないわ、」

ジルは心当たりあるだろ、

ステイープ「そうですか、」

ステイープは何か諦めたような顔をした、

8時、

俺たちはステイープの案内で工房に向かっている、

ステイープはいくつかの包みを持って歩いている、

セバスチャン「それは何だ？」

ステイープ「明石と妖精さんの差し入れです、明石は一度工房に入ると数日出てこない時もあります、はじめの頃は5日間出てこなくて餓死寸前でした、今では俺が毎朝毎晩持つて行っています、妖精さんも少食ですが食事をしますので持つて行っています、」
クリス「そういった気遣いが信頼に繋がるんだな、覚えておこう、」

信頼は大切だ、

そうこうしているうちに工房の前に着いた、

ステイブ「明石、入るぞ、」ガラッ

明石「元師様、せめて返事を聞いてから開けてください、」

ステイブ「すまない、これは差し入れだ、」

明石「あはは、いつもありがとうございます、」

ステイブ「妖精さんも、ご飯だよ、」

わーいわーい

妖精さんがワラワラと集まってくる、

何人いるんだ？

リリー「可愛い！」

たしかに可愛いがこんだけいると少し怖いぞ、

ステイブ「明石、クリスさん達に建造を見せてやりたい、」

明石「わかりました、でもご飯を食べてからね、」

ジル「慌てなくていいわ、でもこの中を見せてもらってもいいかしら？」

明石「大丈夫ですがあまり物に触れないで頂ければ構いません、」

ジル「わかったわ、」

クリス「なんかわからんものがあるな、」

ジル「そうね、でもこういったカプセル状の入れ物を見ると嫌な思い出を思い出すわね、」

クリス「たしかに、」

洋館事件のタイラントが入っていたカプセル（バイオ）

セバスチャン「俺もだ、リリーがこの中に閉じ込められていた、何年もの間、」

クリス「だが助けられただろ？」

セバスチャン「ああ、沢山の犠牲を出してな、」

クリス「嫌なことを思い出させてしまったな、」

セバスチャン「気にするな、それにこうしてリリーが笑っている、あいつらもそれを望んでいた、」

セバスチャンは妖精さんのところにいるリリーを見てそう言った、

クリス「いい仲間だったんだな、」

セバスチャン「そんな仲じゃない、その日にあつてその日に死んでいった、それでも俺に道を作ってくれた、」

クリス「それを仲間と言うだろ、」

セバスチャン「そうかもな、」

そう話していると、

ジル「クリス！こっちに来て！」

ジルが俺を呼ぶ声が聞こえた、

俺はジルの元に向かうと見慣れたボックスがあった、

クリス「アイテムボックス、」

ジル「なんでこんなものが、」

ステイブ「どうかしましたか？」

ステイブがこっちに来た、

ジルの声に反応したんだろう、

ジル「ステイブ、このボックスはいつから？」

ステイブ「俺も初めて見ました、明石に聞いてみます、」

ステイブは明石の元に向かった、

そして明石とともに戻ってきた、

ステイブ「明石、あれに見覚えはあるかな？」

明石「なんですかあれ!?いつのまにかこんなものが!？」

ステイブ「明石も知らないとなると夜のうちに現れたようだね、クリスさん達が来

たことにより現れたようだ、」

クリス「俺もそう思う、ステイープ、開けてもいいか？」

ステイープ「危険は無いのか？」

クリス「俺らの知っているアイテムボックスなら大丈夫だ、」

クリスはアイテムボックスを開けた、

ジル「クリス、大丈夫そう？」

クリス「大丈夫だ、中の物を出すぞ、」

俺は中の物を出していく、

グロッグ17にコルトパイソン、デザートイーグルにイサカM37、M3、ハイドラ、護身用拳銃（バイオ1リメイク）、ドラグノフ、H&K PSG-1（バイオ5）、村正（リベレーシヨンス）、RPG-7、4連装ロケットランチャー、マインスロアー、救急スプレー、手榴弾に閃光手榴弾、焼夷手榴弾、感知式地雷、B・O・Wデコイ（リベレーシヨンス）、パルスグレネード（リベレーシヨンス）、電撃グレネード（リベレーシヨンス）、VZ61（バイオ5）、AK-74（バイオ5）、ジェイルブレイカー（バイオ5）にグレネードランチャー、エレファントキラー（バイオ6）、S&W M500（バイオ5）、ペイルライダー（リベレーシヨンス）、ボウガン、リモコン爆弾（バイオ6）、弓にバックパック付きガトリング（バイオ5）、サブバイバルナイフ数本、スタンロッド、ハーブ各種（緑、赤、青、黄）、グレネードランチャーの弾各種（炸裂、硫酸、冷凍、焼夷、

閃光、電撃)、なぜかランカーバスとブラックバス(バイオ4)、卵(白、茶、金、腐)、まで入っている、

明石「どうやったたらそんな箱の中にそんなだけの物が入るの!？」

クリス「どうやったらって、普通に入れたり出したりしているからわからんな、」

ジル「そうね、あの時は生きることしか頭になかったからそれほど気にも止めなかつたわね、」

クリス「それにこのアイテムボックスに入れると別のところのアイテムボックスからも取り出せてかなり重宝していた、」

明石「別のところ・・・」

クリス「なんでも入るから助かったな、あの時は6つ(バイオ1)までしか持てなかつたから、」

ジル「私は8つ(バイオ1、3)ね、」

クリス「ジルはあの時どこに入れていたんだ？」

ジル「女にしか無い物もあるのよ、」

結局謎のままか、

ステイプ「中はどうなっているんだ？」

リリー「きつと中に妖精さんが沢山いて箱から箱へ行ったり来たりしてるんだよ！」

いつのまにか近づいていたりリリーが妖精さんを抱えながらそんなことを言った、メルヘンな話だ、

「ジル「そうね、その可能性もあるわね、」

クリス「間に受けているわけじゃ無いだろうな？」

ジル「あのことがあると妖精もいたんじゃ無いかと思うわ、

想像

箱が開いたよー！

コンバットナイフだー！

除草剤だー！

箱が閉まるよー！

次の箱に走れー！

ワーワーキヤーキヤー！

トウチャーク！

次はインクリボンが来たよー！

除草剤を探してるよー！

除草剤を運べー！

除草剤持つて行つたよー！

箱が閉まるよー！

次だー！

想像終了、

思わず想像してしまった、

クリス「ボックスの中は平和だな、」

リリー「妖精さんが箱に入りたいて、」

クリス「絶対に入れるな、」

さっきの想像が現実になる、

明石「この銃の数はどこかで戦争していたんですか？」

ジル「戦争じゃないわ、生物兵器を倒すために使つてたやつよ、」

明石「生物兵器？」

クリス「見せてやる、俺たちが戦つた相手を、」

俺はデバイスを操作してB・O・Wの資料を見せる、

見せた途端明石は口を押さえた、

そういえば食事中だったな、

明石「気持ち悪い、クリスさん達はそんな化け物相手に戦っていたんですね、」

クリス「まだこれはマシさ、仲間がB・O・Wに変わった時は後悔したさ、」

ステイブ「それは・・・実際に経験しているからなんともいえないね、」

クリス「だが、どれだけ後悔しようと仲間は帰ってこない、だから俺は戦う、」

俺はデバイスをしまいアイテムボックスに出した物を片付ける、

ステイブ「すまないね明石、食事に戻ってもいいよ、」

明石「元師様、あれを見た後食事に戻るのは無理です、このまま建造の準備をしておきますのでしばらくお待ちください、」

明石は口を押さえながら歩いて行った、

クリス「悪いことしたな、」

ステイブ「しょうがありません、」

ジル「そういえばセバスチャンは？」

声が聞こえないと思っただけならいなかったか、

どこに行った？

俺らは探し始めた、

そして、

アイテムボックスの近くにいた、

作業台で何かしている、

クリス「セバスチャン、何している？」

セバスチャン「クリスか、これを見つけたから確認をしている、」

クリス「作業台をか？」

セバスチャン「ワークベンチだ、STEMでは弾薬をここで作っていた、なんでここに
あるかわからんが、」

どうやらセバスチャンの世界からも来たようだな、

ステイブ「こちらにいましたか・・・なぜこのような場所に作業台が？」

セバスチャン「ワークベンチだ、」

意味は同じなんだが、

こだわりか？

ステイブ「失礼、なぜワークベンチがここに？」

たしかに、ここは廃材置き場、悪くいえばゴミ捨て場、

セバスチャン「これさえあればボルトを作ることができる、あとは切れたヒューズや

鉄パイプがあればいいのだが、」

セバスチャンが廃材の中に入っけていき、

鉄パイプを数本持ってきた、

セバスチャンは鉄パイプをさぎよ・・・ワークベンチに持って行って何かしている、
少しして、

セバスチャン「できたぞ、」

鉛のような物が完成した、

セバスチャン「ハーブーンボルトだ、」

こんな簡単にできるのか？

ステイブ「こちらはセバスチャンさんの世界のものですか？」

セバスチャン「そうだな、そう捉えてもらっても構わない、ステイブ、すまないが
鉄パイプや発煙材、釘や使わなくなった液体窒素があつたら捨てずにこの周りに置いて
おいてくれないか？これのように制作する、それと火薬を少し回してもらいたい、ある
ボルトを作るのに必要だ、無理には言わない、」

ステイブは考えて、

ステイブ「わかりました、皆に、特に明石には伝えておきます、火薬は少量ですが
回すように手配を行います、」

セバスチャン「恩にきる、」

明石「元師様、こちらにいらつしやいましたか、建造にじゅん・・・なんですかこれは!？」

明石が迎えに来てワークベンチを見て驚いている、

明石「なんでここに作業台があるんですか!？」

セバスチャン「ワークベンチだ、」

だからなんだそのこだわりは？

明石「ワ、ワークベンチ?なんでそのようなものが?」

ステイブ「セバスチャンの世界の物らしい、」

明石「これがですか?」

明石はワークベンチをまじまじと見る、

セバスチャン「そうだ、例えば鉄パイプで・・・」

セバスチャンはまた鉄パイプでハーブーンボルトを作り出した、

セバスチャン「こうやってボルトを作るんだ、」

明石「どうやってこんな短時間で作ったんですか!？」

セバスチャン「どうやってって普通に作ったんだが、」

明石「・・・疲れました、元師様、すいませんが建造の準備はできましたので後はよ

ろしくお願いします。」

明石は頭を押さえながらよろよろと椅子に座り机に突っ伏した、

どうやら精神的に疲れたようだ、

ステイプ「皆さん、行きましようか、」

ステイプはそう言うがジルがいない、

明石「ジルさんは先に向かつております、」

突っ伏している明石がそう言う、

俺らは建造する場所に向かった、

8時半、

よくわからない装置の前してきた、

ステイプ「ここが建造場です、」

クリス「これをうまく使える自信がないのだが、」

ステイプ「大丈夫です、まずここに4つの材料があります、中身は燃料、弾薬、鋼

材、ボーキサイトです、」

ステイプは4つのバケツを持ち上げながら説明する

ステイプ「それぞれ個数がありましてこれらは100ずつあります、個数が多いほ

ど珍しい艦隊が出来上がります、ですがどの子ができるかは運次第ですね、」

ジル「まるでガラガラかガチャポンね、お金を入れるほど珍しいものが出てくるみたい、」

ガラガラはともかくガチャポンは100円か1000円だろ？

ステイブ「それに近いですね、続けますね、この材料をこちらに入れます、」

リリー「あの、私がやってもいいですか？」

セバスチャンの横にいたリリーがそんなことを言い出した、

ステイブ「いいですよ、でもこれらは重いからセバスチャンさんと一緒に入れてね、」

リリー「うん！」

セバスチャン「リリー、行こうか、」

セバスチャンとリリーは前に出た、

リリーはセバスチャンの手伝いで投入口みたいなところに材料を入れた、

ステイブ「そしてこのレバーを下げてください、」

セバスチャンに抱きかかえられたリリーは投入口横のレバーを下げた、

そしたらカプセルみたいなどころの上の方に数字が出てきた、

ステイブ「この数字は艦娘が出来上がる時間です、」

時間は25分、

ステイープ「もし早く会いたいのでしたら高速建築材と言うものがあります、それを入れるとすぐに艦娘が出来上がります、リリーさん、一度試してみますか？」

ステイープは高速建築材をリリーに渡した、

リリーは投入口にそれを入れた、

ステイープ「レバーを下げてください、」

ステイープに言われてリリーはセバスチャンに抱きかかえられてレバーを下げる、

するとカプセル内が光り輝いた、

ステイープ「なんですかこれは!？」

ステイープも知らないことのようにだ、

俺らは銃を引き抜く、

明石「何事ですか!?!これは一体何ですか!?!」

ステイープの声に突っ伏していた明石が来た、リリーはセバスチャンの後ろに隠れた、

そして輝きが収まる、

時間は0分、

ジル「クリス、カバーはするわ、」

どうやら俺が開けるようだ、

セバスチャンはリリーを守らないといけない、

ステイーブは明石をかばっているが明石が前に出ようとしている、

俺はゆっくりと近づいてカプセルの取っ手に手をかける、

俺はジルに目線を合わせる、

ジルは頷く、

俺は勢いよくカプセルを開けた、

「キャア・びつくりした!」

中には少女がいた、

艦娘らしいが大和のような日本の艦娘ではない、

外国のような、

だが敵意はないようだ、

「あれ? 何で私銃を向けられているのですか?」

クリス「すまない、少し色々あってな、」

俺は銃を下げた、

プリンツ「ふ、服を着たゴリラさんが喋った!?!」

おい、

失礼な子だな、

筋肉が少し多いだけだ、

明石「どうしてプリンツさんができるんですか!?!私が目にした量は駆逐艦が出来るくらいのはずですよ!それにプリンツさんは建築では出来ないはずですよ!」

明石が取り乱し始めた、

プリンツ「えっ?えっ?とここでアトミラールさんはどなたですか?」

クリス「アトミラール?」

ステイブ「ドイツ語で提督って意味だよ、」

クリス「この場合はステイブが提督になるのか?」

ステイブ「どうだろう、材料を入れたのはリリーさんとセバスチャンさんですから提督はセバスチャンさんかリリーさんですね、」

セバスチャン「俺かリリーか、だったらリリーでいいか、遊び相手にもなってもらいもし危険があったらリリーを連れて逃げてもらおうようにしよう、それにリリーがやりたえいと言つてできた艦娘だ、その方がこの子も納得するだろう、」

ステイブ「そうですね、プリンツ、この子があなたのアトミラールですよ、」

ステイブはリリーを見てプリンツに伝えた、

プリンツ「えっと、この子がですか?」

セバスチャン「この子が材料を入れて君ができたんだ、それにこの子の遊び相手と護衛を頼みたい、いいか？」

プリンツ「えっ？あつはい、改めましてドイツ重巡艦アドミラル・ヒツパー艦のプリンツ・オイゲンです！よろしくお願いしますアトミラルさん！」

リリー「私はアトミラルって名前じゃないよ！私の名前はリリー・カステアノス！リリーって呼んで！」

プリンツ「えっ、あつ、えーと、リ、リリーさん！」

リリー「うん！よろしくお願いします！プリンツちゃん！」

プリンツ「こちらこそよろしくお願いします！」

うん、平和なやりとりだ、

そう思っているとジルが俺に耳打ちしてきた、

ジル「クリス、念のためにリリーちゃんをジェネシスで調べてみたら気が流れていたわ、それも一般人より多く流れていた、波動拳もそれでできたのよ、もしかしたらそれが原因であんなことになったのかもしれないわ、」

クリス「そうか、だが本人に黙っていよう、」

知らない方が平和だ、

プリンツ「ところでみなさんはリリーさんのお友達かご家族ですか？」

セバスチャン「自己紹介がまだだったな、俺はセバスチャン・カステアノス、リリーの父親だ、」

プリンツ「リリーさんのお父さんでしたか！ご挨拶遅れました！プリンツ・オイゲンです！」

セバスチャン「そう硬くなるな、これから長い付き合いだし気楽にやろう、」

ジル「次は私ね、私はジル・バレンタイン、よろしく、」

クリス「俺はクリス・レッドフィールドだ、ゴリラじゃない、」

プリンツ「先ほどは失礼しました！」

プリンツが頭を下げた、

まあ本人も悪気がなかったと思うし、

クリス「頭をあげてくれ、だが今後気をつけてくれ、」

プリンツ「ありがとうございます！クリスさん！」

ステイブ「俺はステイブ・バーンサイド、ここで元師をしている、」

元師の言葉にプリンツはすごく驚いた顔をした、

プリンツ「げげげ元師様！お見苦しいところをお見せしてすいませんでした！」

まさかのジャパニーズドゲザ、

ドイツでもドゲザはあるんだな、

ステイブ「やめてくれ、君にそんなことをさせるために元師を名乗ってないよ、」
プリンツ「うう、本当にすいません、」

謝ってばかりだな、

リリー「ステイブさん！プリンツちゃんを虐めたらダメ！」

プリンツ「リ、リリーさん!?!私のことはいいんです！」

まさかのリリーがプリンツを助けに向かった、

ステイブ「はははっ、申し訳ないね、虐めたわけじゃないよ、」

リリー「本当に？」

ステイブ「本当さ、信じられない？」

リリー「ううん、信じる！パパのお友達だもん！」

セバスチャン「すまないなステイブ、」

ステイブ「いえいえ、それにお友達ですから、」

ステイブの言葉にセバスチャンはハハハと笑う、

プリンツ「えつと、元師様とお友達ってことは皆様はかなりすごい人ですか？」

クリス「そういう訳ではない、色々事情があるだけだ、」

プリンツ「？」

プリンツは首を傾げた、

ステイプ「色々とラブルがあつたが建造はこんな感じだ、明石、今日はすまないね、」
明石「もう頭がいたい、今日一日お休みします、」
ステイプ「そうしてくれ、」

明石はフラフラと工房の奥の部屋に向かつていった、

エリクシールの使い方

9時、

ステイブ「今から他の場所に移動します、」

クリス「わかった、」

セバスチャン「次はどこに行くんだ？」

ステイブ「次は扉を見せるだけで中は入りません、」

セバスチャン「どういうことだ？」

たしかに、

なぜ中に入らない、

ステイブ「次は入渠、すなわちお風呂のことです、」

セバスチャン「ああ、そういうことか、」

ジル「たしかには入れないわね、私は入っていないのかしら？」

ステイブ「大丈夫だと思います、では移動しましょう、」

俺たちは移動した、

ちなみにリリーはプリンツにしがみついているプリンツも喜んでいるか困っている

のかわからない顔をしている、

9時10分、

ステイブ「ここが入渠場です、」

クリス「男湯まであるのか？」

ステイブ「はい、誰も入っていないときに中の掃除をしたことがあります、女湯は男湯の数倍の広さがあります、」

クリス「掃除もしていたのか？」

ステイブ「ここに来た時です、あの時は時間を間違えて入渠中に入ってしまったごく怒られました、」

はははと笑うステイブ、

笑い事じゃないがな、

ジル「ヴァジュロン（P X Z）ならやりかねないわね、」
ありえる、

ついでに大神（P X Z）も何か訳のわからないこと言っただろうな、

真宮寺（P X Z）に止められるだろうが、

ジル「入ってみていいかしら？」

ステイブ「いいですよ、」

ジル「リリーちゃん、プリンツちゃん、行くわよ、」

リリー「わかりました！」

プリンツ「わ、私もですか!？」

入って行く3人、

プリンツ、

巻き込まれているな、

セバスチャン「男湯を見てもいいか？」

ステイブ「大丈夫です、」

セバスチャンは返事を聞いて男湯に入って行く、

ステイブ「クリスさんは見なくても？」

クリス「大丈夫だ、入るときになったらセバスチャンに聞く、」

ステイブ「そうですか、」

それに今晩から世話になりそうだ、

天龍「元師様！」

この声は天龍か、

俺とステイブは後ろを振り返る、

そこにはボロボロになっている天龍と何事もなく笑顔の龍田がいた、手には斬艦刀とヴァルキュリアの槍が握られている、

ステイブ「戦果はどうですか？」

天龍「最高だぜ！この剣なら例え鬼級や姫級が来ても勝てる自信があるぜ！」

龍田「たしかにそうねでも油断して中破したのは誰かしら？」

天龍「うっ！あ、あれはちよつと周りが見えていなかったただけだ！」

龍田「あまり心配させないでくださいね、
笑顔が怖い、

天龍「は、はい！」

天龍が少し震えている、

それにしても目のやり場が困る、

早く着替えてくれ、

龍田「クリスさん、ジルさんはどちらにいらっしやいますか？この槍のお礼を言いたいのですが、」

天龍「そうだ！ジル・・・さん、あーもう！さんずけがむず痒い！ジルの姉御って呼ぶぜ！姉御は今どこだ！」

クリス「女湯にいるぞ！」

プリンツ「ジルさん！ダメですよ！そんな変な液体を入れたら！」

ジル「大丈夫よ、これはエリクシールといって全ての怪我をすぐに治すものの、これを入れれば傷も破損も治るのよ、大丈夫、人体には影響ないことは確認済みよ、」

プリンツ「だからって艦娘に効くかわからないじゃないですか!？」

ジル「大丈夫よ、アンドロイドにも効果があったから、リリーちゃん、プリンツちゃんを押さえておいて、」

リリー「ラジャー！プリンツちゃん！ここで待つてて！」

プリンツ「リリーさん!?!は、離してください！あれを止めないと！あー！ドボドボ入れないください！」

ジル「大丈夫よ、ほんの10滴よ、」

ステイーブ「・・・」

クリス「・・・」

何やってんだ、

エリクシールってシルフィー（PXZ2）の店で買ったあれか？

持ってきたのか？

それにアンドロイドってKOS—MOSとフィオルン（PXZ2）のことか？

プリンツ、

リリーに抱きつかれて動けないのか？

それ以前にエリクシールって飲むやつだろ？

体につけても効果あるのか？

そうこうしているとジルが出てきた、

後ろには疲れ切ってリリーに抱きつかれているプリンツがいた、

ジル「あら、天龍と龍田、戻ってきたの？」

天龍「姉御！姉御のお陰で勝てました！ありがとうございます！」

龍田「私も、こんなステキな槍をいただきましたありがとうございます、」

ジル「いいのよ、役に立てれば、天龍、なんでそんなにボロボロなの？」

龍田「天龍ちゃん、ちよつと油断しちゃって、」

ジル「怪我はないの？」

天龍「一撃貰っただけだ、念のために入渠しようとしたんだが、」

ジル「ならちようどいいわ、入って、」

ジル、実験でもするのか？

天龍「おう！入ってくるぜ、」

龍田「私も少しだけ入らせていただきます、」

二人はそう言つて入つていった、
ステイブ「大丈夫でしょうか？」

クリス「分かん、」

そうしか言えん、

セバスチャン「クリス、男湯はまるで日本の銭湯のように広いぞ、あれで狭いとなる
と女湯はどれほどの広いんだ、」

クリス「そうなのか？」

それは楽しみだ、

天龍「すげー！破損したところがすぐに治つたぞ！」

龍田「そうね、普通なら一時間はかかるのにすぐに治つたわね、それに疲れも一気に
取れますね、」

天龍「ジルの姉御が何か入れてたけどそれはいいぜ！またすぐに攻撃できそうだ！」
まさか効くと思わなかつた、

セバスチャン「ジル、何を入れたんだ？」

ジル「エリクシールと言う回復アイテムよ、飲めば一瞬に傷が治るけど、肌塗つて
も治るものなのね、」

やっぱり実験か、

ジル「脱衣場にもう数本置いておこうかしら、ダースで買ったからまだまだあるのよ、ね、」

「買いすぎだ！

クリス「なぜそんなに買ったんだ？」

ジル「裏路地にたまたまシルフィーの店があったのよ、久しぶりに入るとエリクシールの赤字覚悟の割引があつて、本人に聞いたら大量に仕入れたのはいいけどユーリやエステル達しか使わないから、更に原価がすごく高いからさっきの二人もなかなか買えないから最後の手段で赤字覚悟の割引をしたつて言つてた、」

シルフィー、

よくそんな決断したな、

ジル「そんなわけで泣きつかれたから買ったの、でも使い道もないうえ大量にあるから困つてたの、」

「だつたら買うなよ、

ステイブ「ま、まあ本人らも大丈夫ですので、次行きますか、」

いいのか？

9時40分、

外、

ステイブ「この道なりを向かいますと街に出ます、そこで食料を買ったりして、横に回りますと畑があり最低限の自給自足をしています、毎月戦果によつて軍から貰える軍資金がありますがそれでも足りないことが多々あります、俺の立場は渡す側ですがその渡す側が贅沢してはいけませんので、」

クリス「たしかに、上が贅沢してぬるま湯に浸かっているのは全体的に式が下がるかな、」

ステイブ「そうです、実はもう見せるところが無いのです、あとは艦娘達の部屋と来客用の部屋、娯楽室でして、立ち入り禁止区域は特に無いのです、ついでに言いますと今度クリスさん達が行く鎮守府も構造はことほぼ一緒です、」

セバスチャン「なるほど、それで案内をしたわけか、」

ステイブ「はい、明日は仕事のやり方を教えます、」

ジル「クリス、任せたわ、」

クリス「俺がか？」

ジル「あなたの方が適任よ、判断を間違えない、冷静、いざとなつたら自分も出撃する、そんなリーダーがいいわ、」

ステイブ「あとで明石に皆さん用の艦装を作るように依頼します、」

セバスチャン「リリーの分もか？」

ステイブ「念のために作らせていただきます、1番の目的は逃走経路の拡大です、リリーさんは戦いに参加はしませんがもし最悪の事態に備えてです、海にも逃げれた方がいいはずです、プリンツに背負ってもらおう手もありますが背負うと海を渡る速度も低下します、そのため艦装の方がいいのです、」

セバスチャン「そうだな、ありがとう、」

確かにそうだけど、

陸にも何かいるのか？

クリス「陸に何かいるのか？」

ステイブ「今のところはいませんが、たまに深海棲艦が陸に上がることもあります、それは稀です、」

それなら安全か、

ステイブ「今日はこれで解散にしましょう、俺は今から天龍らの報告を聞いてきます、」

クリス「すまないな、」

ステイブ「いえいえ、では、」

ステイブは鎮守府に戻っていった、
クリス「さて、これからどうする？」

ジル「周りは道のほか森なのね、私は周りを見て回るわ、逃走経路とかを把握しておきたいから、」

セバスチャン「俺はリリーとプリンツと一緒にもう少し中を見て回ろうと思う、」

クリス「俺はジルと一緒にあたりを見て回るとしよう、」

それぞれやる事が決まったので解散した、

10時、

森の入り口に来た、

ジル「この森は砲撃とかを遮るけど味方とはぐれると合流が難しいわね、」
クリス「そうだな、はぐれないようにしないといけない、入ってみるか、」

ジル「そうね、」

俺らは森に入った、

中は人の手が入っていないためか雑草が伸び放題になっている、

虫は俺らの周りを飛び回る、

鳥の鳴き声が森の中に響く、

ジル「少し手入れをしようかしら？」

クリス「やめておけ、時間がかかる、それより木々に目印をつけておいた方がいい、草はすぐに生えてくる、木に杭でも打ち込んでおこう、」

ジル「わかったわ、」

今は杭が無いからまた今度だな、

とりあえず進むだけ進んでみるか、

かなり進んだ所で道に出た、

ステイブの言つてた街に続く道だな、

ジル「これなら道なりを進んだ方が早いわね、」

クリス「そうだな、もしものための道にするか、」

俺らは道なりに沿って鎮守府に戻った、

10時20分、

戻つて来た俺らは畑を見に行った、

野菜を収穫しているロドリゴを見つけた、

ロドリゴ「クリスとジルか、」

クリス「ああ外回りを見させてもらっている、」

ジル「あと逃走経路の確認もして来たわ、」

ロドリゴ「そうか、逃走経路については俺も半年に一回は確認に回っている、複数あるから骨が折れる、」

クリス「畑はロドリゴが世話をしているのか？」

ロドリゴ「ああ、ステイブもしているが間宮たちに止められている、」

まあわからなくは無、このトップが土いじりなんて、

クリス「すまないな、仕事中に、」

ロドリゴ「気にするな、」

俺らは畑を後にした、

10時半、

島風「ジルさん！クリスさん！」

島風か、

何を慌てている？

ジル「島風ちゃんどうしたの？」

島風「私にも何か速い技を教えてください！」

俺は耳を疑った、

なんだって？

島風「私も雷ちゃんや五月雨ちゃんのように技を教えてください！」

昨日の子達が教えたのか、

ジル「わかったわ、クリス、ナイフを貸して、」

クリス「何を教える気だ？」

ジル「大丈夫よ、変なことを教えない、」

大丈夫か？

俺はナイフをジルに渡した、

ジルは自分のナイフも取り出して、

ジル「今から教えるのは三爪炎痕（PXZ）よ、」

おい！

物凄くへんな事だろ！

島風「さんそうえんこん？」

ジル「昔共に戦った仲間の技よ、島風ちゃんのように早く走れてすれ違いざまに3回

敵を切り裂いて燃やすの、」

島風「すごそう！一回やってみる！」

ジル「いいわよ、でもまずはあそこの壁にやってみて、」

ジルが指差す場所は門の横の石柱、
傷つけたらだめだろ、

島風は走り出して

島風「三爪炎痕！」

石柱にすれ違いざまに斬りつけた、

しかもちゃんと3回斬りつけて傷口が赤い、

熱を帯びているようだ、

まさか一回で習得するとは、

島風「ジルさん！できました！」

ジル「よくできました、これでその技は島風ちゃんのものよ、」

カイト（PXZ）、

止める事が出来なかった、

島風「今から出撃して来ます！」

ジル「気をつけて行ってらっしゃい、」

島風「はい！」

島風は走って行った、

俺のナイフは？

模擬戦が激戦、

俺は工房に戻ってアイテムボックスからサバイバルナイフを出して再び装備する、

その日は鎮守府の中を再び見て回り行かなかった医務室と娯楽室を見た、

医務室の薬品棚に大量のエリクシールが並んでいたのを俺は少しの間忘れられないだろう、

翌日はステイブから提督の仕事を聞いた、

仕事は出撃命令を出すほか書類を確認したり印を押すこと、

鎮守府の艦娘のコンディションの確認、

それの関しては歩き回って艦娘の話を聞いて悩みを聞いたりすればいいと、

これはジルと一緒にするか、

あとは資材のチェック、

明石に手伝ってもらおうか、

それとステイブが俺ら用の艦装を明石に頼んだと言ってたな、

脚部だけだから明日には出来ると言ってたな、

明日は艦装の試着だな、

ステイプの執務室を後にするとリリーとプリンツが廊下を走っている、更にその後ろに駆逐艦の子達がリリーを追いかけている、

こうしてみると戦うようには見えないな、

普通の子供だ、

走っているリリー達を見ると俺も体を動かしたくなかったな、

演習場の隅っこを借りて体術の練習をするか、

俺は演習場に向かった、

演習場

さてと、

演習場といっても艦娘達の演習の場だから海だな、

栈橋の隅でやるか、

相手はマジニ（バイオ5）を想定としよう、

俺は目を瞑る、

武器はナイフのみ、

目の前にはマジニが一体、

マジニが俺に向かってくる、

俺をナイフを構える、

マジニの掴みかかり、

俺は無防備な顔にナイフで斬りつける、

マジニが顔を押さえる俺は奴の顔にストレートを打ち込む、

マジニが後方によるめく、

俺は近づいてアッパーをお見舞いする、

マジニが更に後方によるめく、

トドメだ、

「うおおおー！」

フィニッシュブローをマジニの顔に打ち込み、

だが、

俺の拳を誰かに止められた、

「訓練はいいのだが目を瞑るにはいただけない、私のように近づいてくるものもいるからな、」

俺は目を開けた、

大きな女がいた、

女が俺の手を離す、

クリス「すまない、今度から気をつけよう、」

「わかればいい、お前は格闘をするのか？」

クリス「ああ、銃弾の節約や銃が効かない敵に対して使っている、」

「今時銃を使う奴はいない、お前が元師の言つてた異世界から来た奴か？」

クリス「そうだ、クリス・レッドフィールドだ、」

「私は長門型戦艦の長門だ、」

クリス「長門か、長門は訓練でもするのか、だったら俺の事は気にするな、」

長門「難しいことを言う、あの時拳を受け止めたが生身の人間とは思えない力だ、かなりの死地をくぐり抜けて来ただろ、」

クリス「そうだな、長門より大きい爪の長い化け物と殺し合ったり鮫の化け物相手に逃げ回ったり更には俺より遙か超人的な能力を手にした元上司と火山で戦ったり、最近では化け物に変化した惨殺的な殺しを楽しむ奴と激戦を繰り広げてきた、」

長門「冗談話で済むような内容だがお前の拳がそれを物語っている、クリス、私と模擬戦をしないか？相手がいた方がいい経験をするだろう、それに深海棲艦と戦うだろ？私で練習するがいい、」

クリス「申し出はありがたいが長門は海で戦うだろ、俺の艦装は明日でないと完成しない、」

長門「そんなこともあろうかと元師の艦装を借りて来た、無論許可は得た、後はクリスの脚に入るかどうかだ、」

クリス「それと模擬弾だ、流石に実弾を使うわけにはいかない、ここに来る前に深海棲艦を銃で殺したからな、」

長門「心配無用だ、こんなこともあろうかと明石に無理言つて模擬弾のマガジンを3つ作つてもらつた、」

クリス「あまり明石をこき使うな、倒れるぞ、」

ただでさえ昨日の工房での出来事が精神的にきているんだ、

長門「大丈夫だった、むしろ私とクリスの戦いに興味があるみたいだ、明石的にも得はあるみたいだ、」

まさかの実験好きか、

長門は俺に模擬弾のマガジンを渡して来る、

そしてステイブの艦装も渡して来た、

長門「どちらかが気絶、もしくは降参したらそこで模擬戦は終了だ、先に言っておくが私も模擬弾を使うが当たると痛いぞ、」

クリス「それはお互い様だろ、同じ海を走り撃ち合い殴り合いをする、このマガジンはどれくらい弾は入っている?」

長門「13発だ、それが3つ、私の砲撃は10発、弾が切れ次第格闘に移ろうではないか、」

クリス「そうだな、」

俺はステイプの艦装を脚に付けてみた、

少し小さいが問題はないみたいだ、

長門「大丈夫そうだな、」

長門は先に海に向かった、

浮いてるな、

俺も海に足を運ばせる、

水面に足を乗せるとまるで浮き輪の上に立っているかのように浮いている、

だがバランスは悪いな、

長門「艦装をつけた状態で転んでも沈まない、だから思いつきり避けるがいい、」

そいつは朗報だ、

俺は試しに前に前転をした、

地面とほぼ変わりなくできる、

長門「好きな場所に向かってくれ、あまり遠すぎると試合は無しだ、」

俺は大体サムライエッジが届く範囲に移動した、

長門はそこから動かない、

おそらく直ぐに撃ってくるだろう、

だが間合いに入れば格闘勝負になる、

長門「合図はそうだな、」

長門が何かを取り出した、

長門「これは照明弾だ、これを上に向けて放つ、先に言っておくが目くらましが目的ではない、ちょうどクリスと私の間に撃つようにしよう、照明弾が光、海に落ちたら開始だ、」

クリス「いいだろう、始めてくれ、」

長門は照明弾を主砲に装填して上に向けて放つ、

でかい音と共に青い空が輝く、

眩しい、

だが長門も眩しいはず、

光が弱まりゆっくりと落ちていく、

俺と長門を挟むように、

照明弾が海に落ちたと同時に、

クリス「っ！」

俺はその場を離れた、

その瞬間俺の居た場所から大きな水飛沫が飛んだ、

長門は元から俺の方に主砲を向けていた、

俺が構えて撃つより早く撃てる、

俺はサムライエツジを構えて撃つ、

くそっ！

水面がさっきの砲撃で水面が揺れる！

3発撃ったが全て外した、

長門が更に撃ってくる、

俺は再び避けるが水面が大きく揺れてバランスを崩す、

長門は俺に再び照準を定める、

だがすぐに撃ってこない、

そうか、

砲台は連続で撃てない、

そこまで本物とそっくりだな、

だがチャンスだ、

弾速も拳銃より遅い、

俺は転がるように前に進む長門が再び撃ってくる、

俺はその長門に向けて5発撃つ、

長門には当たらなかったが長門の弾に当たった、

誘爆を起こした、

俺はその隙に長門に近づくと、

長門は俺の接近していることをわかり拳を構える、

俺は長門の腹部にストレートを放つが長門に止められる、

腕を捻られるが俺はサムライエッジを長門の腹部に向けた、

長門はもう片方の手で俺の腕を掴み発砲を免れる、

だがもう片方の腕の力が抜けた、

俺は長門に頭突きをした、

長門は頭突きをくらい怯む、

長門の手を払いのけてアツパーを繰り出す、

長門はそれを避けて俺の顔にストレートを放つ、

俺は避けるが蹴りがきた、

それを避けることが出来ず腕で蹴りを防ぐもかなりの力だ、

俺は衝撃で横に跳ぶ、

長門は更に俺に向かってくる、

俺は長門の足元に2発撃つ、

1発が長門脚に命中した、

長門がこつちにくることをやめて距離を取る、

次は俺の番だ、

俺は3発撃つ、

当たらなくてもいい、

長門は横に転がり避ける、

俺はマガジンを換えながら長門には滑りよる、

長門は俺の接近に気づき立ち上がり主砲を撃つ、

だが脚が痛むのだろう、

立ち上がった時に少しふらつく、

そのため照準も少しずれている、

俺は長門に蹴りを行う、

長門は腕でそれを防ぐ、

更に俺はストレートを長門に向けて放つ、

それも防ぐ長門、

俺は最後にフィニッシュブローを行う、

「うおおおお！」

俺が殴りかかろうとすると長門は身をかがめてそれを避けて俺に向かってタツクルをする、

カウンター！

俺はタツクルをもろにくらい後方に吹き飛ばす、
すぐに立ち上がり長門に向けて3発発砲する、

長門はすぐに横に転がり避ける、

長門は主砲を撃ってきた、

俺はその場から離れる、

水飛沫が舞い水面が揺れる、

俺は更に3発撃つ、

長門には当たらない、

長門がこつちにくる、

俺は長門の脚に向けて3発撃つも当たらない、

長門は俺に殴りかかる、

俺はそれを避けて後ろに回る、

そして蹴りを放つ、

長門は怯む、

更にエルボーハンマーを長門の頭に行う、

長門は腕でそれを受け止める、

最後だ、

俺はリバーズナックルを長門に仕掛ける、

両手の裏拳が長門を襲う、

長門はそれを防ぐが流石に片腕がポロポロのようだ、

だらんとしたを向いている、

だが2度目はない、

フィニッシュブローは模擬戦前に見せてしまい見事にカウンターをもらった、

だからリバーズナックルをした、

だが長門はすごい、

2度目は絶対にカウンターをしてくる、

俺は長門に4発撃った、

長門はもう片方の腕でポロポロの腕をかばいながら避ける、

そして主砲を撃ってきた、

俺は避ける、俺はマガジンを換える、

長門は俺に照準を向けた、

俺は長門に向かって走る、

長門が主砲を撃ってくる、

俺は前に飛び込むように避ける、

そして長門に向かって1発撃つ、

長門の肩に当たる、

更に発砲しようとしたが長門が主砲を撃ってきた、

俺は横に動いて避ける、

俺は更に5発長門に向かって撃つ、

長門のボロボロの腕に2発当たる、

長門が撃ってきた、

俺はそれを避けるが少し遅く避けたため衝撃が俺を襲い吹き飛ばされる、

俺は倒れながら6発長門に向かって撃つ、

長門はボロボロの腕をもう片方の腕で持ちボロボロの腕で数発防いだ、

この戦いで役に立たないとわかったんだらう、

動かせない手で防いだ、

頭が回るやつだ、

俺は立ち上がる、

長門との距離は少し遠い、

だが近づかないといけない、

俺は長門に向かった、

長門も俺に向かってくる、

そして俺と長門のストレートが互いの顔に当たる、

俺は少しふらついて後方に下がる、

長門も後方に下がる、

長門が再び殴りかかってくる、

俺はそれをしゃがみこみで避けて長門の顎にアツパーを食らわす、

長門はもろにくらいよろめく、

更に続けてストレートをお見舞いしようとしたが長門に受け止められて蹴りを腹部にくらう、

俺は腹部を押さえてよろめく、

長門が蹴りを再び行う、

再びくらう俺、

更に殴りかかる長門、

俺はそれを受け止めて長門の顔に右フックをお見舞いする、

更に左フック、

長門は避けられない、

更にヘビィブローを叩き込み、

終わりだ、

右手でボディブローして長門を怯ませて再び右手でアッパー、

長門の顔が上を向く、

その顔に左手のストレートが食い込む、

これがフィニッシュコンボだ、

長門はそれをくらい後方に倒れこむ、

長門が起き出そうとしたため俺はサムライエッジを構える、

長門も倒れながら主砲を向ける、

互いに1発ずつ弾は残っている、

ほぼゼロ距離、

クリス「引き分けだな、」

長門「いや、私の負けだ、」

クリス「残念ながら引き分けた、長門の主砲がずっと俺に向けていた、格闘戦の時も、自爆覚悟で放てば俺は負けていたんだ、」

長門「だがそれは自爆だ、それで引き分けたと互いに遺恨が残る、」

クリス「だから撃たなかった、」

長門「そうだ、」

真面目なやつだな、

クリス「わかった、今回は俺の勝ちだ、」

長門「そうだ、だが次は負けんぞ、」

クリス「次までにお互い強くなっていればまた戦うだろう、」

長門「クリス、怪我はないか？」

クリス「これくらいなら問題ない、長門も腕は大丈夫か？」

長門「入渠すれば問題ない、」

便利だな、

入渠って、

長門「クリス、後でクリスの世界の敵の話聞かせてくれないか、知識を持っていれば何かと役に立つからな、」

クリス「そうだな、もしかしたらこの世界にB・O・Wが来ているかもしれない、わ

かった、長門が入渠した後、間宮の所で合流しよう、」

長門「わかった、」

俺と長門は鎮守府内に戻った、

ステイブの艦装については明石の所に持って行った、

明石からどうだったと聞かれたためギリギリのところまで勝ったと伝えた、

更に質問責めにされそうになったため俺はすぐにそこから出て行った、

殴られたところは痛むため医務室で手当てをした、

甘味処間宮でコーヒを啜っていると長門がやってきた、

長門「入渠した瞬間に腕が治ったんだが何か知らないか？」

エリクシールの効果だな、

クリス「俺の仲間が風呂に何か入れたらしくそのせいで傷の治りが早くなっているんだ、」

長門「そうなのか、クリスの世界はそんな凄いものまで作られているのか、」

正確にはこことは違う別の世界だが、

長門は間宮にコーヒを頼み俺にB・O・Wのことを聞いてきた、

俺はデバイスを操作してこれまで戦ってきた奴を見せた、

奴らの特性、

弱点、

厄介なところを教えた、

長門はまじめに聞いていた、

間宮がコーヒーを渡しにきた際小さい悲鳴をあげて、

間宮「ここでそのようなモノを見ないでください！」

と言われた、

出撃前

長門との模擬戦をした翌日、

俺たちはステイブのところに来た、

リリーはプリンツと一緒に部屋で遊んでいる、

ステイブ「皆さんの艦装ができました、それとクリスさん、長門から聞いております、海の上に立った感想は？」

クリス「かなり不安定だな、なにかの拍子で大きな波が来たらバランスを崩すだろう、ステイブのように接近戦をするならともかく俺たちは銃で応戦する、波のせいで狙いがブレる、余程のことがない限り接近戦はしない、昨日は模擬弾で装弾数に限りはあったが実際の相手は多数で無数の弾が来る、多数相手に接近戦は自殺行為だ、ステイブは規格外だがな、」

ステイブ「それは褒め言葉として受け取ります、」

ジル「クリス、昨日そんなことしてたの？」

クリス「体を動かしたかったからな、長門は強かった、一度見た技をもう一度使うものなら手痛いカウンターをもらおう、それと常に冷静だったな、使えない腕で模擬弾を放

いだ、常人ならその腕を庇い回避に専念するが長門はその腕で防いで俺のところに来た、もう一度戦つたら今度は僅差ではなく確実に負ける、」

ジル「あなたがそこまで言うのなら間違い無いわね、それとも歳をとったのかしら？」
クリス「それを言うなジル、それにもう一つ負ける要素を俺が入れた、昨日長門に格闘技を教えてしまった、それを全て覚えた、一部教えていないが見ただけで大方覚える、長門は格闘技の才能に恵まれている、」

セバスチャン「自分で自分の首を絞めたわけだ、」

クリス「そういうことだ、だが後悔はない、これで長門の生存率をあげれるなら教えて甲斐があったわけだ、」

ステイブ「そういうことなら教えてあげてください、俺も轟沈してしまうところを見るのは嫌ですから、」

セバスチャン「轟沈ってなんだ？」

ステイブ「人間で言うなら戦死ですね、艦娘は建造されるとはいえ共に過ごした記憶や思いは作られません、轟沈すれば二度と戻つて来ません、入渠しようとは何しよう、新しく建造してその子が来ても全く別の子です、」

ジル「それならなおさら技を教えないといけないわね、」

クリス「それと必ず生き残ることだ、たとえ敵前逃亡でも生きていれば必ず再戦でき

る、死ねば何もできなくなる。」

セバスチャン「死んだら皆が悲しむ、そのためなら俺だつて出撃してやる、」
生きていれば再会だつて出来る、

あの時のジル（バイオ5）のように、

ステイブ「そう言つてくださる皆さんでしたらあの鎮守府をお任せできます、それでは明石の所に行きましよう、もちろんリリーさんも来ていただきます、」

セバスチャン「危険は無いんだな、」

ステイブ「大丈夫です、俺の艦装も19年使っていますがまだ使えます、それに明石のメンテナンスも行なっていますので安全です、」

セバスチャン「それならいい、」

子供を持つ父親は大変だな、

ステイブ「それにもし何かあったのなら先にあの子達になにかが起きています、」
艦娘たちか、

ステイブより長く使っているからな、

ステイブ「大和は俺がこつちに来る前から前の元師に仕えていた、元師曰く20年は一緒にいたと、元師が退役して俺が元師の肩書きを受け継いだ、」

ジル「長生きなのね艦娘は、それに肌が綺麗ね、」

ステイブ「歳はとらないと言われていきます、そのためよく歳の離れた夫婦と言われるますが実施は俺より年上の女性なんです、」

微笑ましい奇妙な夫婦という事が、

だが俺もそれを聞くまでそう思っていた、

ステイブ「さて、行きましようか、明石が首を長くして待っています、」

セバスチャン「リリーとプリントを連れて来る、先に工房に行つてくれ、」

俺たちは執務室を後にした、

工房、

明石「皆さま、やっと来ましたね、こちらが皆様の艦装です、まずは履いてみてくだ

さい、」

テーブルの上に置いてあった4つの脚につける艦装、

明石「右から順にクリスさん、ジルさん、セバスチャンさん、リリーさんの艦装です、」

俺は自分の艦装を手に取り履いてみた、

フィットしたな、

だが隙間が空いているよりフィットしている方が動きやすい、

それに明石は俺らの脚を計っていない、

俺らの履いていた靴と歩き方、

靴の動きでわかったのか、

大した観察眼だ、

ステイブの言った通りこれなら何かがあることはないな、

ジルも俺と似たような反応だな、

セバスチャン「遅れてすまない、」

セバスチャンがリリーとプリンツを連れてきた、

明石がセバスチャンとリリーに艦装を渡している、

そして履いた、

向こうもちょうどいいようだ、

ステイブ「一度海に出て見てくれませんか？」

ステイブがそう言い海を見た、

俺が先に行かないといけないな、

少なからず俺がこの4人の中で一度は艦装を履いたからな、

俺は海に降りた、

相変わらず浮き輪の上に乗っているような感覚だな、

ジル「浮いたわ、」

セバスチャン「浮いたな、」

リリー「海の上を浮いたー！」

俺もあんな感じだったな、

ジルが動いた、

恐る恐る海に降りていき、

海に脚をつけた、

ジル「浮いたわ、でもバランスが取りにくいわね、」

クリス「慣れるしかない、俺もそうだった、」

次はセバスチャンがゆっくりと降りる、

セバスチャン「これは・・・妙な感じだな、船の上のような感じではなくなんていうか、浮き輪を脚の裏にくくり付けて浮いているような感じだな、」

その感じで間違いないな、

最後にリリーが降りる、

セバスチャンとプリンツがリリーに手を貸している、

そして海に足がついて、

リリー「私海の上に立ってる！」

すごく嬉しそうだ、

子供だからな、

空を飛びたいとか一瞬でどこにでもいきたいとかそんな子供ならではの夢があるんだろうか、

ステイブ「どうやら不調はないようですね、」

明石「私が作っただからですから当たり前です！」

クリス「明石、これも転んでも沈むようなことはないんだな？」

ステイブの艦装のみの機能だったら変に跳んだり転がったりできない、

明石「大丈夫です、転がっても沈みません、」

それを聞いて安心した、

ステイブ「少し慣れましたら一度この子達と出撃していただきたいのですがいいですか？」

クリス「出撃か、どこまで行くんだ？」

ステイブ「近くもなく遠くもなく、そのような場所です、」

クリス「だったら装備を整えさせてくれないか、今のままで行くと俺らは足手纏いになつてしまう、」

ステイブ「わかりました、こちらも数人出撃の準備をするように伝えて来ます、」

ステイブがそう言つて工房から出て行った、

俺とジルはアイテムボックスに向かい、

セバスチャンはワークベンチに向かった、

リリーはプリンツの艦装興味を示している、

ジル「さて、弾数は無限にあるけど流石に全て持っていけないわ、」

クリス「海の上で戦うんだ、まずはパルスグレネードと電撃グレネードを持って行く、」

ジル「わかったわ、」

クリス「それとこちらと相手は砲撃戦に入る、射程の短い武器は不利だ、だからってスナイパーライフルだともし砲撃が来たら気づくのに遅れる、アサルトライフルを持って行く、」

ジル「たしかに、でも先制を取りたいわね、クリスはアンチマテリアルで先制をとってくれる、」

クリス「わかった、ジルはハイローラーを持っているな、」

ジル「ええ、連射はできないけど威力はあるわ、」

クリス「これならいけそうだな、」

ジル「それなら戻りましょう、」

俺らはアイテムボックスをしめた、

俺らが戻るとセバスチャンが先に戻っていた、

クリス「セバスチャンは早いな、」

セバスチャン「ボルトの個数を少し増やしただけだからな、明石に感謝だ、火薬や切れたヒューズ、発煙剤といくらか置いてあった、お陰で作ることが出来たからな、」

ホクホク顔のセバスチャン、

そのガラクタで出来たやつで生き残って来たやつだからな、

ジル「あとはステイブを待つだけね、」

ステイブは出撃する艦娘を選びに行ったんだ、

慎重になるんだろう、

しばらくしてステイブは戻ってきた、

後ろには4人の艦娘、

長門と大和はわかった、

あの小さい子供はこの前ジルに竜巻旋風脚を教えてもらっていた子の中にいたな、

もう一人の子もだ、

ステイブ「出撃には戦艦の大和と長門、それと駆逐艦からは雷と暁にでもらう、リリーさんのプリンツも出るからそこまで過剰な戦力はいらなと思うんだ、」

大和「よろしくお願いします、」

長門「私たちの戦いを見ておいてくれ、」

雷「ジルお姉様！雷がお守りします！」

暁「私も、レディのお姉様をお守りします！」

ジル、

なぜお姉様扱いされているんだ？

ただ技を教えただけだろ？

ジル「ありがとう、でもあなた達に何かあつたら嫌だから自分の命を優先にしてね、」

「お姉様！ありがとうございます！」

今の会話のどこにそんなキラキラするところがあつた？

ジルを羨望の眼差しで見ているぞ、

ステイブ「本当はもう一人ついて行って欲しいんだがあまり行くとここを守る人が

いなくてな、」

クリス「しようがない、ここが拠点だからな、」

ステイブ「すいません、では出撃してください、」

ステイブがそう言ったときに海から何かが顔を出した、

「元師様！イムヤ、ハチ、イク、ニム、ゴーヤ、しおん、遠征から帰ってきました！」

ステイープ「ご苦労だったな、クリスさん、彼女達は潜水艦娘、文字通り海を潜れる潜水艦の艦娘です、」

イムヤ「はじめまして、イムヤです！正式名称は伊168です！元師様、艦娘じゃないのに海の上を歩いていることは元師様と同じ戦う人ですか？」

ステイープ「そうだね、彼らも俺と同じ前線に出て戦う提督候補だ、」

「それはすごいでち！元師様と同じくらいかっこいいでち！私はゴーヤでち！正式名称は伊58でち！」

ジル「覚えやすい名前ね、」

そうだな、

難しい名前を言われても覚えられないからな、

「はじめまして、私はハチ、伊8ですのでハチです、」

なるほど、

正式名称の後にある数字で語呂合わせしているのか、

「私はイク！伊19だからイク！」

「私はニム！伊号26のニムだよ！ねえねえねえ！みんなのお名前教えて教えて！」

クリス「俺はクリスだ、」

ジル「ジルよ、」

セバスチャン「セバスチャンだ、」

リリー「リリーです！」

クリス「すまないがもうそろそろ水面に上がってきてくれないか、海面に生首が浮いているような錯覚をしてしまいそうだ、」

いきなり顔だけ出てきたから銃を抜きかけた、

イムヤ「そうですね、みんな、上がって先に入渠してきて、私は元師様に報告をしてから行くから、」

ステイーブ「イムヤも先に入っておいで、俺はクリスさん達が出撃して帰ってくるまでここにいろつもりだから、」

イムヤ「わかりました、」

イムヤがそう言つて海面に上昇す・・・っ！

俺は目を丸くした、

恐らくジルとセバスチャンもだ、

リリー「お胸がおつきー！」

リリーが別のところに目をつけた、

そこじゃないんだが、

ステイーブ「ゆっくりと入ってくるんだ、」

「「「「はーいー」」」」

ステイブは何事もなく彼女達を見送った、

ステイブ「どうされました？」

クリス「ステイブ、お前にそんな趣味があったのか？」

ステイブ「はっ？なんのことでしょっか？」

とぼけているのか？

ジル「誠実そうな人だけど、残念だわ、」

セバスチャン「全くだ、」

ステイブはまだわからない様子、

かなりオロオロしている、

ステイブ「あの、皆様が言っていることがわからないのですが、」

クリス「あの子達のあの格好、ステイブ、お前がそうしろと言ったのか？」

俺は単刀直入にそう言った、

ステイブ「あの子達・・・もしかしてイムヤ達のことですか？」

何故だ、

大和と長門が腹を抱えて笑いをこらえている、

そこでステイブはやっとわかったようだ、

ステイープ「誤解です！あの子達のあの格好は・・・」

ジル「ステイープの趣味ね、別にそういう趣味があつても問題ないと思うわ、けれどあの格好のまま遠征というやつに繰り出すのはいただけないわね、」

セバスチャン「まさかりリーにまで手を出そうというんじゃないだろうな？」
そう、

小牟（P X Z）が着ていた服の中にあつた、

スクール水着、

小牟になんで着替えて戦うんだと聞いたときに、

「気分とやる気が上がるのじゃ！」

と言われた、

看護師の服装や日本の巫女の服装ならまだわかるがバスタオル一枚や男物のワイシャツ一枚とかやりすぎだと思ふ、

話を戻そう、

ステイープはスクール水着の趣味疑惑が今現在上がっている、

ステイープ「本当に誤解です！あれはあの子達の正式な服装です！ほかの子達に頼んでふつうの服も買ってあります！あの子達は潜水艦娘です、海に潜るためにあのような格好をしているんです！」

本当かどうか分からんな、

俺は大和と長門に視線を向けた、

二人は笑っている、

大和「元師様の言う通りですよクリスさん、あの子達は建築された時からあの格好です、それに私達のように服を着ると水を吸って動きが鈍くなるらしいです、それと鎮守府内も水着の格好で歩くので元師様が服を買うように言ったのです、」

どうやら本当のようだ、

長門「それにもし元師がそんな趣味をしても大和以外しないだろ、意中の相手以外の水着なんぞ見ても意味がないだろ、」

それも言えてるな、

ステイブ「な、長門！余計なことは言わなくていい！」

大和「そ、そうですね！私はそのようなこと言われたことありません！」

あー、

見ている俺らは呆れるくらい真っ赤だな、

クリス「そうか、ステイブの趣味じゃないことわかった、疑ってすまない、」

ジル「私も申し訳なかったわ、」

セバスチャン「すまない、お前も結婚していたな、俺も妻以外の女には興味ないから、

その気持ちは分かる、」

ステイブ「わ、わかつていただければいいんです、そうだ、出撃は少し待っていた方がいいですか、イムヤも今回の出撃に参加してもらおうと思います、潜水艦娘の特徴も知ることができていいかと思えます、」

何慌てているんだ、

疑いは晴れただろうに、

ステイブは慌てて工房から出て行った、

ジル「小牟がいなくてよかったわね、あの子が書いている薄い本の題材にされていたかもしれないわ、」

薄い本？

漫画でも書いているのか？

まあ小牟はなんでもするからな、

プロレスにコスプレにゲームに、

有栖零児とは正反対の性格だがそれはそれでいいパートナーだったんだな、

ジル「クリス、今有栖と小牟のこと考えたでしょ、」

俺のパートナーには考えていることお見通しか、

クリス「そうだ、あの二人は良きパートナーだったんだなと思ってた、」

ジル「私らは良きパートナーじゃないの？」

クリス「今の俺はジルと別行動をされていてな、たまに会うくらいだ、」

ジル「私の身に何かあったのね、」

察しがいいな、

それは伝えていいのか？

未来のことを伝えることは何かと問題があるはず、

ジル「無理に聞かないは、必要になったら聞かせて欲しいの、未来は気になるけどそれは私たちが創り出すものよ、私たちは今までそうやって生き残ってきた、今までも、これからもよ、」

未来は創り出すものか、

そうだな、

仮にこれから起きることを伝えても未来は俺の知っている通りになるわけではない、セバスチャン「俺は未来を作った結果があの子だな、」

セバスチャンがリリーを見る、

プリンツの手を引いて海を滑っている、

セバスチャンはあの笑顔を救ったわけか、

そう思っているとステイプが戻ってきた、

ステイブ「イムヤを連れてきた、」

イムヤ「遠征の後にすぐに出撃なんてちよつとこき使い過ぎです元師様、」

ステイブ「すまない、帰ってきたら特大間宮パフェスペシャルを食べれるチケットを渡すよ、それと数日潜水艦娘達は出撃も遠征もしないからその間自由に過ごしておいで欲しい、」

イムヤ「それでしたらいいですよ、もうひと踏ん張り頑張ります！」

間宮のデザートは偉大だな、

食事がうまいと士気も上がるのか、

ステイブ「では改めて、長門を旗艦で大和、雷、暁、イムヤ、プリンツさん、そしてクリスさん、ジルさん、セバスチャンさん、リリーさんは出撃してください、」

艦娘達「了解！」

クリス「行ってくる、」

ステイブ「お気をつけて、あなた方なら大丈夫だと思いますが油断はしないでください、」

クリス「必ず帰ってくる、全員で、」

俺たちは出撃した、

まさかの展開、

海上、

出撃してどれくらい経ったかしら、

見渡す限りの海、

島の影が少し見えるだけ、

敵の影は見当たらない、

クリス「敵影は見当たらないが何か索敵できる物があるのか？」

長門「空母艦娘なら偵察機を飛ばしてあたりを偵察してもらえませんが今回は空母艦娘がない、私達の目視とセンサーで確認するしかない、」

空母艦娘、

まだあつたことないわね、

暁「私達の鎮守府には赤城さんと翔鶴さんがいますが遠征で遠くにいます、」

それならしようがないわね、

それにしても艦娘は何人いるのかしら？

ジル「雷ちゃん、この世界に艦娘は何人いるのかしら？」

雷「実は正確にはわからないんです、プリンツさんのように海外艦もいますので、それなら相当な人数がいるわね、

ジル「そうなの、変なこと聞いてごめんなさいね？」

私は雷ちゃんの頭を撫でる、

雷「いえ！お姉様のお役に立てるならなんでもします！」

どうしてこんなに懐かれたのかしら？

ただ波動拳や昇龍拳など教えただけなのに、

セバスチャン「リリー、気持ち悪くないか？」

リリー「大丈夫だよ、それにプリンツちゃんも一緒だから大丈夫！」

セバスチャン「プリンツ、もし危ないと思ったらリリーを抱えて逃げてくれ、」

プリンツ「わかりました！」

後ろの3人は大丈夫そうね、

戦闘になったら私たちが援護して戦闘領域から離さないよ、

大和「皆さん、センサーに反応ありました、ただ、敵影が多いです、」

大和がそう言いだして止まる、

長門「距離はどれくらいだ？」

大和「まだ遠いですがこちらに近づいていますので早かれ遅かれ戦闘になります、」

イムヤ「敵艦の種類は分かりますか？」

大和「ヲ級はいます、艦載機の音が聞こえます、あとは駆逐艦が多数、イからホ級の混合部隊かと、それとレ級とネ級が多数、異常です、今すぐ引き返して鎮守府の全ての艦隊を出撃して迎えうたないと勝てません、」

雷ちゃん「と暁ちゃんが顔を青ざめている

イムヤちゃんも顔から血の気が引いている、

クリス「俺たちはヲ級とかレ級とかわからないがそれほど危険な相手なんだな、」

長門「ああ、普段は私達が遠くに出撃してその海域の深海棲艦達を束ねるいわばボスみたいな奴だ、それが数隻、しかも混合することは普通ならありえない、」

ジル「普通じゃないことが起きているのね、」

暁「そうです！しかもこちらに向かつてきているということは元師様の鎮守府を襲うつもりかと、」

雷「それは一大事です！今すぐ元師様に連絡を入れないと！」

大和「連絡はいたしますが他の艦娘が来るまでに時間がかかります、向こうは待つてくれません、」

長門「私達が足止めしながら後退、合流部隊と合流して一気に叩く、足止めだな、」

大和「はい、すいませんが協力をお願いします、」

長門「私はい、他のみんながいいかは分からんが、」

イムヤ「本当は帰りたいたいけどまた出撃することになるからここに残って魚雷を撃ち尽くすわ、」

暁「私も！お姉様をお守りすると決めたもん！」

雷「わ、私も残る！」

セバスチャン「プリンツ、お前はリリーを連れて戻ってくれ、」

プリンツ「ですが戦力が少なくなると危ないのでは、」

クリス「俺たちが残る、そのために武器も選んできたんだ、」

セバスチャン「それにリリーは海を走る練習のために連れてきたんだ、戦いになったら戻ってもらう予定だった、」

ジル「プリンツちゃん、もしリリーちゃんに何かあつたらセバスチャンが落ち込むし自分を責めてしまうかもしれない、それにこの子を一人で帰すのは危ないわ、」

プリンツ「わかりました、皆さん、絶対に帰ってきてください！」

リリー「パパ、絶対に帰ってきてね！」

セバスチャン「ああ、絶対に帰って来るからな、」

セバスチャンはリリーちゃんを抱きしめる、

プリンツ「リリーさん、行きましよう、」

リリーちゃんはセバスチャンから離れてプリンツの手を握り鎮守府に戻っていった、セバスチャン「待たせた、」

長門「大丈夫だ、私たちはここで迎え討つ、敵影が視認でき次第砲撃を始める、」
ジル「わかったわ、クリス、先制は任せたわ、私はあのイ級を撃つわ、」ハイローラーを取り出す、

セバスチャン「俺もスナイパーライフルを持って来ている、狙撃に参加するぞ、」スナイパーライフルを取り出す、

クリス「作戦通りだな、わかった、」AW50を構える、

大和「イムヤ、潜水型がいるかもしれない、視認できるようになったら一度潜ってもらいます、いいですか、」

イムヤ「わかりました、」

大和「暁と雷は敵を視認でき次第魚雷で迎撃を、そのまま後退していただく、」
「了解!」

私はハイローラーを構えながら私は再び装備を確認した、

パルスグレネード、

電撃グレネード、

ハイローラー、

もう少し持つて来るべきだわね、
弾やグレネードは無限だけど、

威力はあるけど連射力がないハイローラー、
顔を狙っていかないと突破されかねない、

グレネードを投げるにもかなり近くに来ないとその範囲内に入らない、

正直相手の砲撃の射程に入られたら一方的に攻撃をされるわ、
せめてグレネードランチャーを持って来ればよかった、

大和「もう少しで見えてくるはずです、」

クリスとセバスチャンがスコープを覗く、

そして、

見えた、

人型が多数、

時折海に顔を見せる者も確認できた、

イムヤ「潜水力級も確認しました！」

海の中にもいるのね、

でも確認できただけで射程には入っていない、

遠すぎる、

クリスとセバスチャンが撃ち出した、

確認できる限りでは2人倒れたことを確認できた、

それを皮切りに向こうも撃ってきた、

ジル「クリス！セバスチャン！回避！」

私の声に2人は左右に分かれて砲撃を避ける、

海が揺れて波がでける、

クリスが言つてたことはこの事なのね、

揺れて狙いが定まらない、

大和と長門が砲撃を始めている、

雷ちゃん和暁ちゃんは回避に専念している、

確か魚雷と機銃だから近くに来ないといけないはず、

私は砲撃を避けていると、

なにあれ、

空に何か飛んでる、

暁「気をつけてください！ヲ級の艦載機が飛んできます！」

あれが艦載機、

私は艦載機に向けて撃つ、

不規則に動く、

スナイパーライフルでは当てるのが難しいわね、

私が全て撃ち落とさないよ、

更に撃つ、

1機、

2機、

3機、

1機通した！

でも、

雷「昇龍拳！」

雷ちゃんか昇龍拳で艦載機を落とすよ、

雷「お姉様！艦載機は私達が落とします！」

暁「ですから敵艦を撃ってください！」

あの子達、

ちよくちよく技を教えてたけど、

洗礼された技、

短時間でよくそこまでできたわね、

長門とイムヤちゃんが目を丸くして驚いている、

今は前に集中してほしいわね、

私は前を見た、

ギリギリ射程に入ってきたわね、

イ級だったかしら、

覚悟しなさい、

私はハイローラーを撃つ、

水の中に入り威力が落ちるけどイ級に当たってる事はわかる、

でも相手は無数、

これじゃ追いつかないわね、

私は電撃グレネードを投げた、

水に着水して周りに電気がほとぼしる、

イ級達が大量に水面に浮かび上がってくる、

確実に倒せているけど数が尋常ではないわね、

クリスもセバスチャンもスナイパーライフルからハンドガンやアサルトライフルに

持ち替えている、

私はパルスグレネードを遠くに投げた、

敵の真ん中に着水する、

周りの敵がそれを見て急いでパルスグレネードから離れているけど私は更に何十個もパルスグレネードを投げ続ける、

パルスグレネードが爆発すると周りに大きな音と衝撃波が深海棲艦に襲いかかり動きを止めてグロッキー状態になる、

ジル「みんな！今よ！」

私は電撃グレネードを無数投げる、

セバスチャンはクロスボウを構えてボルトを撃ち出す、

クリスはハンドガンを撃ち続ける、

ヲ級と呼ばれた深海棲艦が艦載機を飛ばしてくる、

暁「竜巻旋風脚！」

暁ちゃんが回し蹴りをして艦載機を蹴り落とした、

雷「暁お姉ちゃん！いくよ！」

暁「わかったわ！雷、合わせて！」

2人が何かをするようね、

私は2人を援護するためにハイローラーを撃つ、

暁ちゃんと雷ちゃんが前へ出る、

長門「2人とも！迂闊だ！引き返せ！」

大和「ダメです！もう今から戻っても被弾します！」

私は2人の後を追う、

暁「私が先手を打つね！」

暁ちゃんが腕の機関砲をレ級と呼ばれた深海棲艦の足元に向けて撃たれる、

水飛沫が宙を舞う、

私は近づいてくる他のレ級を撃つ、

レ級が暁ちゃんに気が向いているうちに雷ちゃんがレ級の背後に廻る、

レ級が砲撃をしようとしたが暁ちゃんがレ級に近づく方が速かった、

暁「鎖骨割り！」

雷「稲妻踵割り！」

2人は前後からレ級を踵落としを行なった、

レ級が驚いた顔と共にいきなり行われた格闘技に驚いている、

雷「まだだよ！」

雷ちゃんが背後からレ級の腰を掴み身動きを取れなくした、

暁「真空竜巻旋風脚！」

前に回転しながら回し蹴りを行う真空竜巻旋風脚、

ケン・マスターズ通信空手完全版を全て熟読して技を覚えたのね、

私はパルスグレネードを数個周りを泳いでいるイ級に向けて投げた、

レ級は横に吹き飛び動かなくなった、

暁ちゃんは回し蹴りをしながら飛んでいって雷ちゃんの後ろにいたレ級に回し蹴りを行った、

まさか飛んでくると思わなかったのだろうね、

レ級は驚きながらその顔に回し蹴りをもらった、

暁「今よ！雷！」

雷「はあああ！」

雷ちゃんが前に出る、

雷「昇龍拳！昇龍拳！」

昇龍拳の連発、

クリスが私の元にやってきて周りに警戒をする、

クリス「長門がすごい顔であるの2人を見てるぞ、後で説明してやれ、」

ジル「わかってる、」

雷「神龍拳！」

雷ちゃんが炎の拳を纏い回転しながら昇龍拳を行う、

神龍拳、

昇龍拳を極めた者しか出来ない技、

流石にレ級は倒れたわね、

暁「最後！決めるわ！」

雷「暁お姉ちゃん！いくよ！」

あれは波動拳の構え、

狙いはヲ級、

私とクリスは周りを撃とうとしたけど突然爆発した、

釘？

セバスチャンのボルトの材料に釘があったわね、

釘を浴びたイ級からホ級は水面に浮かび上がる、

暁「暁型姉妹の絆！」

雷「今見せる時よ！」

「双龍波動拳!!」

2人の波動拳が重なり一つの波動拳になる、

その波動は海を割りヲ級を貫く、

暁「やったね！」

雷「うん！」

2人共、

喜ぶのは後ね、

2人が居る場所、

戦場の真ん中、

私はありつただけに電撃グレネードを投げる、

海が電撃で走り回る、

ジル「2人共！今すぐ戻って！」

私の言葉に驚いてすぐに引き返してきた、

その代わり私とクリスが前に出た、

残りを片付けるために、

クリスがハンドガンでネ級の足を撃つ、

ネ級が膝立ちになる、

私が先にネ級に近づいて蹴り上げを行う、

ネ級がよろめいている間にクリスが近づいてフックを行い更によろめく、

私が最後に近づいて車輪脚をネ級の顔にお見舞いする、

ネ級は倒れて動かなくなった、

すぐに私達は後退する、

相手は壊滅状態に入っている、

更に追い討ちをかけようと電撃グレネードを投げようとしたら、

ジル「っ!？」

倒れたはずのレ級が見当たらない、

それだけじゃない、

他の死体がない、

私は手を止めて周りを見渡す、

突然レ級の脚になにかがしがみついてレ級を海の中に沈み込ませた、

レ級だけでなくネ級も、

そして深海棲艦がいた場所に血の色に変わった、

大和「何が起きたんです？」

長門「わからない、だが嫌な予感がする、」

私とクリスは皆の所に戻った、

そこに海で魚雷を撃っていたイムヤちゃんが戻ってきた、

顔色が真っ青だった、

イムヤ「大変です！変な生き物が海底から上がってきて深海棲艦を捕まえて食べ始め

ました！」

長門「何!?! 新たな深海棲艦か!?!」

大和「それですとなぜ味方を襲うのですか!?!」

嫌な予感、

食う、

生きている者を食べる、

まさか!

ジル「クリス! 今すぐここから離れるわよ!」

クリス「やはりか、全員全力疾走で後退するぞ!」

長門「どうということだ!」

クリス「B・O・Wだ! 全員後退するんだ!」

クリスがそう叫ぶのと同時に海から顔を出した、

シークリーパー(バイオリベレーションズ)、

海の中を自由に泳ぐT-アビスのB・O・W、

それにギオツゾ(バイオリベレーションズ)、

小型の魚のB・O・W、

集団で深海棲艦の肉を食い荒らす、

ピラニアよりタチが悪い、

私は電撃グレネードをばら撒きながら後退する、

だが海深くの敵には届かない、

海底からどんどん出てくる、

皆が後退する中イムヤが遅れている、

いや、

あいつらの方が速い、

イムヤ「ダメ！置いていかないで！」

クリスが足を止めてパルスグレネードを後方に投げた、

衝撃波は海の深いところまで届いたようだ、

クリス「イムヤ！捕まれ！」

クリスはイムヤに手を伸ばした、

イムヤが手を伸ばしてクリスの手を掴む、

クリスが強引にイムヤを海から出して肩に担ぐ、

そのまま急いで後退を始めた、

私はパルスと電撃グレネードを投げ続けた、

シークリーパーやギオツゾが海面に浮かぶものの海底からどんどん出てくる、

私は電撃グレネードを投げようとして後ろを振り向いた、

かなり後方でレ級がギオツゾに食われながらもこちらに主砲を向けていた、

私はハイローラーを構えて撃とうとしたが、

先に主砲を撃たれた、

狙いは雷ちゃん！

ジル「雷ちゃん！避けて！」

私の声に反応したのか後ろに振り向く雷ちゃん、

砲撃が迫ってくる、

私はハイローラーを撃って誘爆をさせようとしたが、

雷ちゃんの前に誰かが出てきて、

砲撃がその誰かの胸に命中した、

雷「大和さん！」

大和が雷ちゃんの前に出ている、

私はハイローラーを砲撃したレ級に向けた、

レ級はギオツゾに食われて息絶えていた、

私は大和に近づいて呼吸の確認をした、

息をしていない、

嘘でしょ、

クリスがこつちに来た、

クリス「ジル！大和を運ぶぞ！」

私は頷いて大和の片脇を持つ、

クリスもう片方の脇に手を入れて運び始める、

イムヤ「大和さん！」

担がれているイムヤちゃんが泣きながら大和の名前を呼んでいる、

セバスチャンが海の中にポルトを放つ、

そしたらポルトが光り出した、

私達は後ろを向いていたから眩しくはなかったけど奴らはかなり効いたよう動きを完全に止めた、

私達は全力で鎮守府に戻った、

鎮守府

途中で合流部隊と出くわした状況が素早く説明して一緒に戻った、

鎮守府に戻ると艦娘達とステイブやロドリゴが待っていた、

ステイブは運ばれている大和を見て顔を青ざめていた、

陸に上がるとステイブは大和に近寄る、

ステイブ「大和！」

ステイブの声かけに反応を見せない大和、

ステイブ「大和……」

ステイブは泣いた、

大和にしがみついて、

雷「大和さんは私をかばって……」

雷ちゃんがその時の事を伝えるも耳に入っていないようだ、

クリスはさっさと工房の奥に向かっていった、

そうすればいいの、

大和は戦死、

艦娘的に言えば轟沈、

死んだことになる、

でも手はないわけじゃない、

私はポケットから一本の瓶を取り出す、

残り3本だけど今使わないでいつ使うのかしら、

私はステイブを押しつけて瓶の中の液体を大和にかける、

ライフボトル（P X Z）、

死んだ仲間を生き返らせる物、

シルフィーがエリクシールを買った時におまけですと言って渡してきたもの、

これで死んだ人を生き返らせたらゾンビと勘違いされそうだから使いたくなかったけど、

そんなことを言ってもらえない、

ライフボトルが大和の体に染み込み致命傷だった胸の傷が塞がっていった、

そして、

大和「ん・・・」

ステイブ「大和!？」

ステイブが大和に声をかける、

セバスチャン「奇跡だ、」

大和「ここは天国ですか？なんで元師様がこちらに？」

ステイブ「大和!」

ステイブは大和に抱きつく、

大和「雷をかばった後怖い夢を見ました、暗い海の底に沈んだ夢を、」

ステイブ「大丈夫だ！もうそんな夢を見なくていい!」

2人は抱き合った、

周りは喜びのムードだけどまだ全て解決していない、

私は海を見ると奴らが向かって来ている、

その時にクリスが戻ってきた、

手にはRPG―7と4連装ロケットランチャー、

背中にはグレネードランチャーとその弾各種、

クリス「生き返ったな、ジルなら何か持っていると思っていたからな、」

ジル「たまたまよ、それで、反撃するの？」

クリス「ああ、見せてやろうか、俺たちの砲撃戦を、」

クリスは私に4連装ロケットランチャーを渡して来た、

重いわね、

クリス「セバスチャン、どっちか使えるか？」

セバスチャン「RPGなら使ったことがある、」

クリスはセバスチャンにRPG―7を渡した、

クリスは海の方に歩いて行った、

私もセバスチャンもそっちに歩いて行く、

クリス「弾切れの心配はしなくていい、無限に撃てるからな、」

セバスチャン「これも無限なのか?、」

ジル「そうよ、原理は聞かないで、」

私達はそれぞれ武器を構える、

完全に視認できる距離にきている、

クリスがグレネードランチャーを撃つ、

海に着弾すると電撃が走る、

クリス「撃てー!」

その掛け声と共に私達は撃ち出した、

水飛沫が舞い肉片が散らばる、

クリスが冷凍弾を撃つたらしく海が凍る、

反動がきつい、

何十発も連続で撃っているから反動が一気に来る、

でも手は休めない、

そして、

奴らはいなくなり肉片と血が残った、

ジル「殲滅完了ね、」

クリス「そうだな、」

武器を下ろした私達は床に座り込んだ、

それぞれの記憶1

B・O・Wを全滅させた後、

俺たちは執務室にやってきた、

ステイブ「クリスさん、あれがB・O・Wですか？」

クリス「そうだ、俺の感覚で10年前に全滅させたはずのウイルスだが、」

ステイブ「なぜかこちらに来たということですね、」

クリス「考えたくないが、あいつらがいるのは俺らが来たからということになる、」

ステイブ「たしかに考えたくないですね、」

クリス「もしそうだったら俺らの責任だ、元凶を倒さないといけない、」

ジル「ヴェルトロ（バイオリベレーションズ）、いえ、ジャック・ノーマン（バイオリ

ベレーションズ）でも探すのかしら？」

クリス「イムヤが言ってた、海底から奴らが上がって来たと、」

セバスチャン「海の中を潜ると言うのか？俺らは潜水艦娘じゃないぞ、」

ステイブ「明石の頼めば長時間海に潜る物を作ることができます、」

ジル「ステイブ、やる気ね、」

ステイブ「あの子達が無事に安全に出撃できるようにしたいだけです、それに大和をあんな風にした責任も取ってもらいます、」

セバスチャン「この雰囲気だと俺も参加しないとイケないな、」

クリス「いいのか？はつきり言うとなセバスチャンには関係ないことだ、」

セバスチャン「こうやって異世界に来て巻き込まれたんだ、今更関係ないと言わせないぞ、」

クリス「ありがとう、」

ステイブ「俺は明石に装備を作ってもらおうように頼んで来ます、皆さんは休んでいてください、」

ステイブの言葉に俺たちは解散した、

自室、

俺はジルを部屋に呼んだ、

クリス「すまん、休みたいだろうが少しだけ付き合ってくれ、」

ジル「いいけどどうしたの？」

クリス「なぜTーアビスがこの世界に来たのか、それが気になった、」

セバスチャン「それはこの世界に俺らが来たからじゃないからか？」

クリス「あの時はそう言ったが何か腑に落ちない、だがあれはジルの世界でヴェルト口を倒した後だ、そうなるとTーアピスは無いはずだ、俺らの体に付着しているなら先にここの艦娘達に変化が見られるはず、」

ジル「たしかに、全滅させたはずなのにあるなんてさっきの説明に納得できないわね、」

クリス「憶測だがあのB・O・Wはこっちに来る前に倒したやつじゃ無いか？」

ジル「その憶測の根拠となった理由は何かしら？」

クリス「ステイプとロドリゴだ、あの2人は死んでこっちに来た、だったら奴らも俺らが殺してこっちに来たと考えたんだ、そして俺らがこっちに来た時に動き出した、」

ジル「可能性ではありえない話では無いわね、でも後半の私達が来たことよって動き出したはわからないわね、それは完全に憶測よ、」

クリス「さっきも言ったがそれは憶測だ、当てにしないでくれ、すまないな、こんなことで呼び出して、」

ジル「気にしないわ、可能性を言っただけでしょ、」

セバスチャン「だがそうなるとお前らの世界で死んだ奴がこっちに來ているならどれくらい化け物を殺したんだ？」

クリス「数えきれないほど殺したな、それにミサイルによつて街を1つ消滅させたか

らな、それも含めるなら犠牲者は億を超えるだろう、」

セバスチャン「街ごと・・・ウイルス被害はそこまでするのか？」

ジル「あの時はそうするしかなかったのよ、ネズミがウイルスに感染してそのネズミが人々を噛んだり飲み水に入る、それを人や動物が体内に入れる、そしたらゾンビの出来上がりね、そう思うと政府のミサイルによる滅菌はあながち間違いじゃ無いのよね、」

クリス「ジル、これくらいにしておこう、セバスチャンが疲れる、」

セバスチャン「そうしよう、頭が痛くなりそうだ、」

ジル「わかったわ、明日は作戦会議をするわ、持っていくものをあらかじめ準備しておくわ、」

クリス「わかった、」

ジルは部屋を出て行った、

もしさっきの仮説があっているのなら奴らも蘇っている、

その仮説が間違っていることを願いたい、

セバスチャン「すまないが俺はもう寝る、」

クリス「わかった、電気は俺が消しておく、」

セバスチャン「ありがとう、」

セバスチャンは布団に入り目を瞑った、

奴が来たらセバスチャンが危なくなる、

セバスチャンだけでなくジルも艦娘達も危険だ、

どうすればいい、

俺は考えながら布団に入る、

疲れていたらしくすぐに眠りに入った、

翌日、

俺らはステイブの所に来ていた、

ステイブ「クリスさん、ヴェルトロというやつの特徴を教えてくださいませんか？」

クリス「B・O・Wの時のか？」

ステイブ「いえ、そのヴェルトロは化け物ですか？」

ジル「違うわ、死に際に自らの体にTーアビスを打ち込んで化け物に変わったのよ、生

前の彼にはあっていないわ、」

ステイブ「わかりました、ではB・O・Wの時のヴェルトロを教えてください、」

ジル「聞くより見たほうがいいわ、いいものがあるの、」

クリス「またシルフィーから買ったものか？」

ジル「違うわ裏嶋（P X Z 2）が作った装着者の記憶を読み取り映像化、あるいは画

像化するカチューシャよ、あの時の戦いでいろんな世界が混ざったから裏嶋がこの装置を作つてこれで事前に敵の情報を得なさいと言つてたのよ、使う前に目的地に着いたら私が持つたままなのよ、返そうと森羅（PXZ）に接触を図ろうとしたけど見つからないから預かつているの、」

クリス「試していないのか？」

ジル「さつきも言つたけど使う前に目的地に着いたのよ、」

森羅の科学力はかなりの物と知っているがそんなものが出来ていたのか、

ジル「ステイブ、見るなら今すぐ私の記憶を読み取るけどどうする？」

ステイブ「待つてください、それでしたらあの子達の何人かも一緒にいいでしょうか？本当は報告書を書いてみんなに見せる予定でしたが見るのでしたら何人か一緒の方がいいと思います、」

確かにそうだ、

百聞は一見にしかず、

有栖零児がそう言つてたな、

ステイブ「場所はどこにしますか？」

クリス「間宮の所でいいだろう、それと人選は任せるが見せるものだけがものだけに精神的に来るものがある、それに耐えられる人を頼む、」

ステイブ「わかりました、駆逐艦の子達は代表を2人、長門と間宮、ロドリゴも同席していただきます、それと潜水艦娘も2人、天龍と龍田、明石にも見ていただきます、」
ジル「わかったわ、私たちは先に行っているわ、」

セバスチャン「ジル、すまないが部屋からプリンツを連れてくる、あいつも今後リリーと共にいるからあいつも巻き込まれる、だったら知識とか知っておいたほうがいいだろう、」

クリス「そうだな、プリンツはもう俺らに巻き込まれているからな、リリーは駆逐艦の子と遊ばせておいてくれ、子供には刺激が強い、」
俺たちは解散した

甘味処間宮、

ジルは装置の準備をしている、

俺は席の準備をしていた、

ロドリゴが手伝ってくれている、

間宮は軽い食事を作っているが俺らの記憶を見ると食事は吐くと思うんだが、

そう伝えるも作ると言われる、

ここが嘔吐まみれにならないこと祈ろう、

準備が出来て少ししたら皆が来た、

ステイブを筆頭に長門、天龍、龍田、暁、雷、明石、イムヤにハチ、セバスチャンにプリンツ、そして、休んでいるはずの大和もいる、

クリス「大和がなぜ？」

大和「元師様が戦う相手を私も見ておきたいからです、」

ステイブ「俺は止めたが大和に押し切られた、」

それでいいのか元師様って奴は？

ジル「こっちの準備は出来たわ、先に言っておくわね、私の記憶は目の前で人が死んでいく記憶もあるわ、頭が吹き飛んでいたり腕がなかったり、内臓が見える死体もあるわ、気分が悪くなったら直ぐに退室してほしい、いいわね、」

長門「クリスから大体の敵の話は聞いたが、」

ジル「聞くのと見るのでは違うのよ、聞くだけなら恐ろしさがあまり伝わらないわ、」

長門「そうだな、すまない、」

ジル「いいのよ、それじゃ始めるわ、」

ジルが装置を頭につける、

その瞬間周りの景色が変わった、

待て、

これは映画のように映像を見せるんじゃないのか？

まさか立体3Dなのか？

ここはアークレイ山か、

全てはここから始まったんだな、

S・T・A・R・Sの一員である俺らはブラヴオーチームとの連絡が取れなくなつたためアルファチームである俺とジル達に向かったんだつたな、

だがなぜ3人称視点？

本当に映画じゃないか、

雷「ジルお姉様の髪が短いです！」

長門「クリスもそこまで筋肉がないな、」

ほっとけ、

搜索をしているとジョセフ（バイオー）が声を上げた、

そして視界が変わりなぜかジョセフ視点、

本当に映画だな、

拳銃を持ち上げると人の腕がおまけについて来ていた、

暁「ひっ！」

ジョセフが驚きそれを落とす、
それと同時に奴が襲いかかる、

ケルベロス、

T | Virus に感染した犬だ、

ジョセフがパニックになり持っていたショットガンを連射するもケルベロスにより
嘔み殺される、

更にブラッドは俺らを置いてヘリで逃げて行った、

こうやって見ていると腹ただしい、

俺らは走りながら銃を撃ち洋館にたどり着いた、

洋館を探索するとケネス（バイオ1）がゾンビに食われていた、

そして次はフォレスト（バイオ1）がカラスに啄まれていた、

イムヤ「カラスが人を食べている、」

こいつらもT | Virus に感染したカラスだ、

更に探索しているとレベッカ（バイオ0、1）とリチャード（バイオ1）に会うが巨
大なヘビと戦う、

長門「話で聞いていたがこんなに大きいのか？」

倒すもリチャードはヘビの毒で死んでしまう、

レベツカと別れた俺らは次は庭を探索した、

巨大な蜘蛛に出会ったり緑色の人と同じ大きさの化け物、ハンターと出会ったり、

大和「蜘蛛、大きい蜘蛛が、」

大体の奴が口元を押さえている、

そして厄介なのがT―ウィルスの被験者だったりサ・トレヴァー（バイオー）、

こいつは何度も攻撃したが死ななかつた、

ただ逃げるだけだった、

エンリコ（バイオー）と出会うも誰かに撃たれて殺された、

その誰かは知っているが、

古い屋敷に来てその中で戦ったのはプラント42という植物の化け物、

人喰い植物、

俺らを殺しに来てたな、

危ないところにバリー（バイオー）が火炎放射器を持ってやってきた、

地下の研究所に向かい探索する、

天井に張り付くハエの化け物、

倒すと蛆虫が飛び出てくる、

大きさが異常だがな、

プリンツ「うっ、」

プリンツは席を外した、

プリンツ、アウト、

そしてあの場所に来た、

ウエスカー「よく来たな、」

奴だ、

ウエスカーは装置を動かした、

巨大なカプセルにはあいつ、

長門「クリスの言つてた長い爪の大男、」

タイラント、

カプセル内の液体がなくなり、

タイラントが目を覚ます、

そしてカプセルのガラスを突き破りウエスカーの腹部を貫く、

この時は奴が死んでいると思っていた、

俺らはタイラントを倒してヘリポートに向かう、

レベッカが研究所の爆破装置を起動させていた、

バリーと合流してヘリポートに向かう、

そしてヘリポートに着いた俺らに前に奴が出てきた、
タイラント、

それもさつきより速く動く、

ハンドガンやマグナムも効かない、

そんな時にブラッドがヘリからロケットランチャーを落としたり、

俺はそれを拾い構えて撃つ、

タイラントが砕け散る、

ハチ「倒したの？」

ハチよ、

これで死んでいなかったらタイラントは化け物だ、

そのあとヘリで脱出したがこれは悪夢の序章に過ぎなかった、

ここからは俺もジルやクレア、レオンの言葉でしか知らないが数ヶ月後にラクーンシ

ティにT—Virusが蔓延した、

R・P・D.の部隊がその場に來ても圧倒的なゾンビの量に負けてしまう、

一人一人喰われていき奴らの仲間入りする、

ジルはその中で逃げていて途中でカルロス（バイオ3）というU・B・C・S.（アン

ブレラ・バイオハザード対策部隊）の青年と出会い行動を共にしている、

それよりも映像に一瞬出てくるガスマスクの奴やケルベロスを追いかけている大きな豆腐らしき奴はなんだ？

新たなB・O・Wか？

ブラッドと再会するも奴が現れる、

ネメシス—T型、

長門「タイラントとは違うのだな、」

暁「怖い、」

その反応が当たり前だ、

ブラッドがジルの名前を叫びも奴に顔を掴まれて顔を奴の触手に貫かれる、

プリンツ「うっ、」

いつのまにか戻って来ていたプリンツが再び部屋から出る、

プリンツ、アウト、

そのあと、

何度もジル達の前に出てくるネメシス、

電車に乗るも走行中の電車に乗り込むほどしつこい、

U・B・C・Sのミハイルがジルとカルロスを先頭車両に追いやると共に大きな

爆発がした、

さつきまでいた車両が爆発した、

ロドリゴ「あの軍人、あいつを止めるために、」

そう、ミハイルが自らの命と引き換えに手榴弾を投げてネメシスを外に追い出す、
だが電車が暴走して時計塔に突っ込む、

時計塔を探索する2人、

明石「大きなハサミを持った人が出てきそうなところ、」

何言っているんだ？

2人がある書類を見つけた、

時計塔を鳴らせばヘリが来ること、

2人は時計塔を鳴らした、

ヘリのローター音が聞こえて中庭に出る、
だが、

奴のロケットランチャーがヘリに直撃して落ちる、

中庭に落ちたヘリ、

中庭が火の海になる、

奴が中庭に降りる、

ジルが奴の触手に刺される、

カルロスが奴のロケットランチャーを集中的に撃ちロケットランチャーを壊すも壊れる直前に撃ったロケットランチャーがカルロスの後ろにあつた壁にあたり爆風でカルロスが吹き飛び気絶した、

ジルはネメシスに向かってコルトパイソンを撃つ、

奴の拳と触手をかわしながら、

だが動きが遅い、

何発も撃つと奴がよろめいて火の海の中に入り倒れる、

それと同時にジルも倒れた、

ジルが目を覚ました時には時計塔の礼拝堂の中だった、

ジルはT— Virusに侵されていた、

暁「ジルお姉様は助かるんですか？」

セバスチャン「助からないとここにはいないだろ、」

そうだ、

結果的に助かったんだ、

カルロスはジルを助けるために病院に走る、

そこでUBCSのニコライが同じUBCSの隊員を撃つていたところに遭遇、

金のために動いていることを伝えたニコライだがUBCS隊員が何かしたらしく爆

発した、

ニコライは窓の外に放り出されてカルロスは地面に伏せた、

ワクチンを手に入れたカルロスは外に出ようとするとエントランスにC4が仕掛けられている、

カルロスは急いで外に出て病院から離れる、

物陰に飛んで隠れると同時に病院が爆発した、

エントランスのある1階を爆破すると建物の重みで一気に病院は崩れた、

カルロスが一息ついてジルの元に向かおうとすると奴が現れた、

黒い防護服は破れて触手が血管のように体内にあり片方の腕が触手を無数に生やしている、

防護服はリミッターの役割があると聞いた、

カルロスはM4A1を連射するも奴の動きが止まらない、

触手が鞭のようになりカルロスを襲う、

それでも攻撃の手を休めないカルロス、

ついにはネメシスを倒すことに成功した、

カルロスはジルにワクチンを投与、

そのまま1日が過ぎた、

翌日2人は急いで工場に向かった、

ミサイルがこの街に向かっている情報が入ったからだ、

墓地を通る途中に巨大なミミズの化け物の出会う、

2人はなんとか逃げて先に進んだ、

工場に着いて、

カードキーを探すために廃棄物処理場に向かう2人、

途中ニコライが2人を殺しにきたがネメシスにより殺される、

廃棄物処理場に入った2人、

死体の山の中に奴がいた、

ネメシス、

ここまで来るのか、

2人はネメシスに銃を撃つ、

ネメシスは平然としているが流れ弾が近くのパイプのコルクにあたり中から謎の液体が出てきてネメシスを溶かす、

2人はネメシスを上手いこと誘導してネメシスを溶かす、

ただの肉片だけになったネメシス、

これで死んだと俺は思った、

2人は急いで死体の山からカードキーを探し出して処理場を出る、
処理場が動いた、

2人は急いで処理場の奥に向かった、

ミサイルがこっちに迫っている、

途中資料を手にしていた、

巨大レールガン「パラケルススの魔剣」

軍はそんなものまで作っていたのか？

ナディア（バイオハザードヴェンデッタ）の使ったレールガンはこれの小型版か？

2人はエレベーターに乗ろうとするとなにかが現れた、

肉の塊、

いや、

ネメシス、

処理場の死体を取り込んだのか、

2人は銃撃を行うも効果が見られない、

カルロスのM4A1の弾が切れた、

ジルはなにかを指示出している、

ジルとカルロスは別れた、

ジルはグレネードランチャーを撃つ、

カルロスはバッテリーを装置の中に押ししている、
そして、

カルロス「ジル！避けろ！」

ジルはその声に反応して避ける、

パラケルススの魔剣が放たれる、

激しい閃光と轟音と共に壁が破壊される、

奴に直撃して動かなくなった、

カルロスは先にエレベーターに乗って行った、

ジルはエレベーターを待っていると、

奴がジルに向かってきた、

だがその動きは遅く、

こちらから見てももうすぐ死ぬことはわかる、

だがジルは弾切れだ、

だが、

すぐ近くにコルトパイソンが落ちている、

ジルはそれを拾い撃つ、

1 発、

2 発、

撃ちながら近づいて、

ジル「あんたみたいになけ物消えてなくなればいい、」

ネメシスにとどめを刺した、

これでネメシスは完全に死んだ、

それと同時にエレベーターがやってきてジルはそれに乗る、

外に出たらへりが着ていた、

バリーが迎えに来ていた、

2人はそれに乗り飛び立つ、

街から出ると同時にミサイルが飛んできて街が消滅した、

その後ジルと俺はBSAAを立ち上げて5年後にロシアにあるアンブレラの組織の

壊滅に向かった、

吹雪の中、

ジルと俺は無数のB・O・Wと戦い最深部に着いた、

そこには生物兵器テイロス（バイオアンブレラクロニクル）

俺とジルは奴に向かって撃つ、

奴はミサイルランチャーを装備している、

撃たれるたびにミサイルを撃って誘爆させる、

なんとかかそいつを倒すも暴走する、

脊髄らしき物が伸びて天井に張り付く、

背中から触手が動き脊髄だけでその巨体を宙に浮かせている、

俺たちは撃つ、

レーザーみたいな攻撃も拳も避けながら撃つ、

そして、

奴を倒した、

アンブレラはこうして壊滅した、

次はジルがパーカー（バイオハザードリベレーションズ）と共にクイーンゼノビアに

乗り込んだところだ、

Tーアビスにより中は化け物だらけだ、

そんな中を進んでいく2人、

俺は急いでジェシカ（バイオハザードリベレーションズ）と一緒にクイーンゼノビア

に向かっていたがクイーンセミラミスと間違えて遅れた、

パーカーは落ちてしまうが後でひよっこりと出て来て入院生活をしていた、

俺たちはヘリで脱出したが巨大B・O・Wと遭遇、

機銃やロケットランチャーを駆使して倒した、

その後俺らはクイーンデイドがテラグリジア近辺の海に沈んでいることがわかり
潜る、

そこにはノーマンが自分でTーアビスを投与して化け物と化する、

1つ目が光り幻覚を使い惑わせる、

互いにカバーをしながら倒した、

俺らは脱出してそこで映像が切れた、

ジル「どうかしら？」

クリス「俺らの映画を見ているようだな、」

ステイブ「あんな化け物を今まで相手にしていたんですね、」

天龍「深海棲艦が可愛く見えて来たぜ、」

ジル「タイラントは艦娘の砲撃も耐えると思うわ、」

そういえばプリントがあれから吐きに行つてないな、

俺はプリントを見ると真っ青になっている、

クリス「プリント、大丈夫か？」

プリント「だ、大丈夫です、それに出すだけ出したらもう出すものがなくなりました、」

精神力は強いな、

ジル「クリス、次はあなたの番よ、」

ジルが装置を渡して来た、

もう終わった筈だ、

俺の記憶を見て何になる？

クリス「どういふことだ、」

ジル「T-アビスがこつちに来ていて、もしかしたら他のウイルスも来ているかもしれないわ、クリスは私より10年以上も後の時間から来た、もしそいつらが来ても対処法を知っていれば倒せるわ、」

いいのか？

未来を見せても、

有栖零児がなにを言うか、

ジル「それにそいつらが来てステイプ達に犠牲が出たら後悔するのはクリスよ、」
クリス「わかった、だがステイプ、ロドリゴ、お前らの死ぬ瞬間が出てくる、そしてジル、未来を見るんだ、それを見せることによって未来が変わるかもしれない、」

ステイプ「大丈夫です、俺は自分の死よりこれから出てくるであろう敵に備えておきたいんです、」

ロドリゴ「俺も構わん、間宮と大和がショックを受ける可能性があるがな、」

大和「見せてください、私は大丈夫です、」

大和の返事に間宮が頷く、

ジル「私も大丈夫よ、そんなやわじやないわ、何年あなたのパートナーを務めていると思っっているの？」

クリス「そうだな、先に言っておくが俺の記憶は今以上に精神的にくるものがある、仲間の死、民間人の死、それらが来る、無理なら退室してくれ、後で見た者の聞いてくれ、」

俺がそう言うが退室する人は誰もいない、

クリス「わかった、それじゃあつけるぞ、」

俺は装置を頭につけた、

それぞれの記事2

クリスは装置を頭につけた、

いい歳した男がカチューシャをしていると笑いがこみ上げそう、

映像が現れる、

流石に私と一緒にいた時の映像は要らないわね、

私はカチューシャに触り時間を早送る、

だいたいこの辺りかしら？

映像が早送られる、

クリスが崖を登ってる、

ロドリゴ「ロックフオートの孤島の崖か、ここを登って入って来たのか、」

クリスが手を滑らせてしまいバックパックを落とした、

長門「こんな崖を登ってまで誰を探しに行っているんだ？」

ジル「妹よ、妹がここに捕まっていると通信が入ったのよ、」

ステイブ「クレアか、あの時の通信が届いていたんですね、」

クリスが崖を登りきりグログを構える、

グロツグしか残っていなかったのね、
クリスが洞窟を歩いていると、

間宮「ああ！あなた!？」

昔のロドリゴが倒れていた、

クリスが声をかけて会話をするが地鳴りが響きクリスらの足元が盛り上がる、

クリスは横に転がりその場から離れる、

土の中から巨大なミミズのような生物が出て来る、

ミミズがロドリゴを飲み込み再び砂の中に潜る、

間宮が床に座り込みロドリゴがそれを支える、

クリスはグロツグを発砲、

だが砂に阻まれて効果が見られない、

ミミズみたいな化け物が再び顔を出す、

クリスはグロツグを撃つ、

皮が硬いのか効いているように思えない、

ミミズは再び砂の中に潜る、

クリスは動かないで周りを警戒する、

再びミミズが現れる、

だがクリスはすぐに撃たない、

ミミズが口を開ける、

クリスはその口めがけてグロッグを撃つ、

弾切れになるまで撃った、

ミミズは倒れて動かなくなる、

クリスはミミズの腹をナイフで切り腹の中のロドリゴを救出する、

だが虫の息のロドリゴ、

ロドリゴ「これで家族の元に逝ける、」

最後にポケットから何かを取り出してクリスに渡した、

ロドリゴ「天使がくれた物だ、」

その一言で息を引き取った、

ロドリゴ「クリスの妹は俺が当時気まぐれで脱獄させた、それにしても自分の死ぬ瞬間を見るのは気持ちいいものではないな、」

間宮を抱きしめるロドリゴ、

それが普通の反応よ、

クリスは更に奥に行きモニタールームに来るとモニターに女性が映っていた、

ステイプ「アレクシア、」

彼女が？

アレクシア・アシユフオード？

ステイーブの目が険しくなっている、

クリスが先に進んでいくと、

「久しぶりだな、クリス、」

この声、

死んだはずの男の声、

クリスが後ろを振り返ると、

クリス「ウエスカー？」

雷「生きていたのですか!?!」

私もクリスの報告を聞いても半信半疑だったわ、

クリスが銃を構えようとしたけどウエスカーの方が速かった、

クリスの腹部に掌底を打ち込む、

天龍「なっ！なんだあの速さは!?!」

クリスは勢いよく吹き飛ぶ、

ウエスカーはクリスに近づいて片手でクリスを持ち上げる、

まさかここまで強くなっているの？

クリスはウエスカアの頬を殴る、

サンダラスが外れて奴の目が赤くなっていた、

だがモニターにアレクシアが映るとクリスを投げでどこかに消えていった、

ウエスカアが南極にクレアがいる事言っていたためクリスは隠されていた戦闘機で南極に向かった、

南極について基地が見えた、

クリスは基地内に戦闘機を格納して中を散策した、

まさか氷の中からゾンビが出て来るなんて思ってたわ、

それらを撃退していくクリス、

その中である資料を見つける、

アレクシアは15年前にペロニカウィルスを取り込むために冷凍睡眠を行いウィルスを徐々に慣れさせる方法をとったこと、

そしてついさつき目覚めた、

クリスはさらに奥に進み、

ついにクレアを見つけ出した、

繭みたいな物で壁に張り付いているクレア、

クリスはナイフで繭を切り裂いてクレアを助け出す、

龍田「大和さんと雰囲気似ていますね、」

言われてみればそうね、

髪型も一緒だし、

でも当時のクレアはバイクを乗り回している大学生だったわね

クレアは少しして目を覚ましてステイプを探すと言い出した、

その時アレクシアが現れた、

15年間ベロニカウィルスと融合していたと言った、

お友達がコロシウムにいると伝えて消えて行った、

2人はステイプを探しに散策を始めた、

途中ゾンビや謎の大きな触手が邪魔をして来た、

そして広く、中央に柱と段差がある場所に来た、

ここがコロシウムのようにだ、

そこにステイプがいた、

巨大な斧で体が固定されている、

大和「元師様！」

2人はステイプに近づくと、

ステイブはアレクシアに何かを打たれたと、
命令を聞くかどうか、

命令内容はクレアの抹殺、

大和は口に手を当てていた、

シヨックなのね、

その時、

ステイブに異変が見られた、

体が膨張していき、

皮膚が緑色になっていく、

暁「元師様!!」

イムヤ「いやあ!」

長門「そんな・・・」

みんなが目を背けて泣いた、

みんなが好きなステイブがこんな姿をしたのだから、

その巨大な斧を壁から抜いて2人に構える、

クリスはクレアに撃つように言うがクレアは首を横に振り拒絶した、

ステイブは斧で襲う、

それを避けてクリスは一度逃げるように伝える、

上の方に逃げ道がある、

2人は段差を登っていく、

ステイブは驚異的な跳躍力で2人を襲う、

クリスはそれを撃墜していく、

最後まで登りつめたところでステイブの斧で足場を崩されて下に落ちる、

その時地面から触手が現れてクレアを拘束する、

クリスは無数の触手に邪魔されて助けに行けない、

ステイブは斧を持ちクレアに斬りかかる、

『元師様!!!』

皆が叫び泣く、

その声が聞こえたかのようにクレアの首にあたる寸前で止まった、

ステイブ「ク・ク・クレア、」

たしかにそう言った、

そしてクレアを拘束している触手を切り裂いた、

クレアが拘束から解かれる、

ステイブは更に周りの触手を切り裂くが触手に腹部を貫かれて弾き飛ばされる、

触手がどこかに消える、

クレア「ステイープ！」

クレアがステイープに近づくと、

人の姿に戻るステイープ、

ステイープ「クレア・・・俺はもうダメみたいだ、ペロニカウイルスが俺の体内を蝕んでいる、」

泣いているクレア、

ステイープ「君のことが・・・好きだった、」

そう言い残し死んで逝った、

大和的には良い気がしないでしょうね、

自分とは違う女性に好きと言う言葉を言うのだから、

そんなことは御構い無しに話は進む、

機関室にC4を取り付けに向かう2人、

機関室に入るとアレクシアが待ち受ける、

この女、

ステイープや実の兄を働きアリ、

いや、

実験材料と言いつつ、

そしてアレクシアの操る触手にクリスが吹き飛ばされる、

その衝撃でC4と起爆装置を落とし触手が器用にそれを拾い上げて壊す、

そのあとアレクシアの体が燃え上がり服が焼けて体に変化する、

灰色の裸体にいたるところに植物を巻きつけたような格好、

クリスとクレアはハンドガンを撃つ、

アレクシアに当たるもその血液が床に飛び散り燃え上がる、

ベロニカウィルスは血液が燃え上がる性質を持っている、

アレクシアが自分の血を2人めがけてかける、

血が炎に変わり2人を襲う、

左右に分かれてクリスは途中で拾ったリボルバーマグナムを、

クレアはグレネードランチャーを構えて一斉に撃つ、

流石のアレクシアも高火力に膝をつく、

だが高笑いを浮かべながらもますます強くなっていくと意味のわからないことを言いはじめ、

その言葉が合図かのように触手がアレクシアの周りに来てアレクシアを守るように、そして進化させるようにアレクシアを隠す、

その時モニターに1人の男性が映し出された、

「この警告音はベロニカウイルスが破滅的局面にある事を意味する、」

アレクシア「お父様!?!」

どうやらアレクシアの父のようだ、

「1983年現在、娘はベロニカウイルスに取り憑かれるあまり自らの身体を使った実験にまで手を出し始めた、その欲望は留まることなく世界を実験場にするだろう、そして父である私も実験の対象になるだろう、」

最悪ね、

世界中の人間がただの材料って訳ね、

ステイーブ「アレクシア、あんたと言う女は、」

「この兵器は父として娘にできる最後のことだ、あなたがアンブレラの敵であっても、どうか娘を助けてやってほしい、」

父でありベロニカウイルスの研究をしていたこの男、

ベロニカウイルスに魅了されたアレクシアの暴走を止めるために作った兵器、

セバスチャン「子供を思う父親か、それならあんなウイルスを作るべきでなかったな、」

同じ子を持つセバスチャンの言葉は重々しい、

モニターの話が終えたと同時にアレクシアも変異していた、

上半身は両腕を蠅螂のような鎌に変形させて、

下半身は触手の慣れは手だろうか、

肥大化していて気持ち悪い状態になっている、

更にあの男の言っていた兵器はアレクシアの背後にある、

2人は周りを見渡してハシゴを見つける、

アレクシアに触手に邪魔されるもハシゴを登りアレクシアの背後に回る、

クリスは兵器を持ちアレクシアに向けて放つ、

エネルギー弾が放出されてアレクシアに当たる、

アレクシアは悲鳴と共に倒れて動かなくなる、

2人は今のうちに逃げようとするが背後から羽音が聞こえた、

2人が振り返るとアレクシアが飛んでいた、

もはや人間ではないわね、

艦娘達も気持ち悪そうに見える、

クリスは再び兵器を放つも弾速が遅くアレクシアが避けてしまう、

2人は高い場所に移動する、

クレアがグレネードランチャーを撃つもそれも避けるためボウガンで狙い撃つ、

火薬付きボウガンのため爆発するからアレクシアも移動する速度が落ちる、ボウガンの攻撃で動きを止めたアレクシアにクリスは兵器を放つ、

エネルギー弾がアレクシアに当たりアレクシアはその身体を爆発させて今度こそ消滅する、

2人はステイブの所に向かうもステイブはおらず代わりに1本のナイフが柱に突き刺さっていた、

よく見たらS・T・A・R・Sのナイフ、

2人は急いでクリスの乗ってきた戦闘機に乗って離陸すると窓の外の見知った顔がいた、

ウエスカー、

彼がステイブを攫ったのね、

ウエスカーを見送り2人は南極基地を脱出した、

ステイブ「俺が死んだあとあいつに連れていかれたのか、」

ロドリゴ「そうらしいな、何の目的でお前を連れ去ったかわからないがろくな事ではないな、」

ステイブの身体に残っているペロニカウイルスが目的よ、

アレクシア連れて行こうとしていたのね、

ウエスカーは、

映像の場面が変わり私とクリスが洋館の入り口にいた、

この記憶は、

ヴェルトロの事件の1年後ね、

ここからは私の知らない事、

クリスが言う事を躊躇っていた未来、

この建物、

あの時の洋館（バイオ）のようね、

2人が進んでいくとウエスカーがいた、

その近くに老人が倒れていた、

私とクリスはウエスカーに向けてハンドガンを撃つ、

ウエスカーはそれを避けて私とクリスに向かってくる、

天龍「ありえねえ、人間があんな動きをするなんて、」

そうね、

映画のワンシーンを見ているかのようにウエスカーは弾を避けていくわ、

あろうことか素手で反撃までしてきた、

その威力は映像でわかる通り鍛えられた筋肉を持つクリスですらも数メートル吹き

飛ばされる、

ナイフで応戦しようと防がれて攻撃をもらう、

クリスが殴りかかるも避けられて首を前から持たれて巨大な窓ガラスのところまで走りながら持っていかれる、

巨大な窓ガラスが割れてクリスはウエスカーに馬乗りになっている、

ウエスカーはクリスにとどめを刺そうとしている、

私は起き上がりウエスカーに体当たりを行い窓の外に落ちて行った、

外は崖、

私もウエスカーも生きていないはず、

自分で言うのもなんだけど意外と冷静にこの映像を受け止められたわね、
発狂くらいすると思ってたのに、

暁「ジルお姉様！」

雷「いやー!!」

暁ちゃんと雷ちゃんが私に抱きついてきた、

あんなものを見せられたからね、

長門「クリスが見せるのを戸惑う訳だ、それにあのウエスカーという男、どこであんな力を、さっきの映像より強くなっているぞ、」

明石「人間の限界を超えています！どんだけ違法薬物を使用してもあんな動きはできません！」

そうね、

ウエスカーはなんらかの方法であれだけ強くなった、
更に場面が変わり、

3年後、

クリスはアフリカに来ていた、

どうやらキジュジュ自治区で生物兵器の闇取引があると聞きつけたらしい、
現地に到着したクリスを出迎えたのは1人の女性、

シエバ・アローマ、

彼女が案内を申し出るもそれを断るクリス、

ステイーブ「ジルさんを失ったからですね、」

ステイーブの言う通り、

私を失った事できっと誰も失いたくないと思っっているのね、

クリスが断るも彼女はそれを無視して案内を開始する、

奥の小屋で仲間に武器をもらい闇商人を探しに向かった、

道中、現地住民が押さえつけられて口に何かをいれられているところを目撃する、

2人が駆け寄ると現地住民がクリスに襲いかかる、

クリスはハンドガンを撃つも心臓や頭を撃つても死なない、

シエバも加わりようやくやく倒せた、

ゾンビじゃないわね、

何かしら、

するとクリスがレオンレポートと口にする、

クリスがシエバに簡潔に伝えていた、

寄生虫により身体を支配する、

凶暴性が増して非寄生者を襲う、

ロドリゴ「ウイルスの次は寄生虫か、バイオテロが多いな、」

ジル「楽観視できないわ、これらもこつちに来ている場合があるわ、」

2人が更に進むと武器をくれた仲間が取り押さえられていた、

バレたようね、

それにあの太いやつは何？

あんな大きな斧を持って、

ステイブの親戚？

ステイブ「俺にあんな親戚はいませんよ、」

どうやら顔に出ていたみたい、

その大きな斧を持った太い男が仲間の首にその斧を振り落とす、
みんながその瞬間目を背ける、

人の死ぬ瞬間をじっくり見る人はいないわね、

するとリーダーらしき現地住民がクリスらを発見してメガホンで一気に叫びまくる、
クリスとシエバは応戦する、

住民達は武器を持ち連携しながら2人を追い込む、

2人のハンドガンの弾はきれてナイフと格闘戦で戦う、
だが大きな斧を持った太い男はナイフで太刀打ちできない、

逃げながら攻撃する2人、

隅に追い込まれてしまい大きな斧を持った太い男が斧を振り上げる、

その時ヘリが飛んできて機関銃を掃射する、

住民達が倒れていき斧を持った男も倒れる、

クリス、

悪運は強い方ね、

ヘリから弾丸とイサカとV z 6 1の物資が投下されてヘリは去っていった、
装備を整えた2人は奥に進んだ、

途中女性から助けを求められる2人、

急いで向かうもその女性は寄生虫に寄生された、

2人は銃撃すると女性の頭が破裂して中からムカデのように長い物体が出てきた、

暁ちゃんが吐き出した、

大和や雷ちゃんも口を押さえている、

ジル「これが寄生虫、」

私の予想よりも厄介な存在ね、

クリスは寄生虫に向かってイサカを撃つ、

寄生虫は粉々になり女性も動かなくなる、

更に進み、

先行部隊が全滅していた、

身体は黒い何かで少し濡れている、

クリスは生きている隊員を見つけて話を聞くと罨と言ってクリスにディスクを渡し

て息絶えた、

更に進む2人、

扉に入ろうとすると黒いウネウネした物体に遭遇、

それが近くの死体を取り込み動き出す、

2人は銃撃するも効果は見られない、

逃げる2人、

逃げた先は焼却場、

奴もそこに入ってくる、

クリスはガスボンベにハンドガンを撃つと爆発、

奴が苦しみだした、

それを見たクリスはシエバに装置の方を指差した、

その装置は奥にある大型焼却炉と連動している、

シエバが装置の前に移動する、

クリスはハンドガンを撃ち奴の気を引く、

焼却炉の中に入ると奴も入ってきた、

その時にシエバに合図を送るクリス、

シエバがレバーを下ろすと入口のドアがゆっくりと閉まる、

クリスは出ようとしない、

長門「なぜでないんだ！」

ジル「ギリギリまで待っているのよ、あれはクリスを追って外に出ようとするわ、そうなると作戦が台無しになるのよ、だから閉まる寸前まで中で注意を引いているのよ、」

クリスは奴の攻撃を避けて時間を稼ぐ、
半分までしまったところでクリスは入口に走り外に出る、

奴が閉じ込められて燃やされる、

奴がもがき苦しみながら動かなくなった、

2人はさっきの扉に入り車両のある場所に移動する、

そこで先ほど渡されたディスクを見ると、

私の写真が現れた、

なんで私？

しかもカプセルに入ってる、

2人は装備を整えて移動した、

ディスクにはリカルド・アーヴィングという闇商人の名前と写真が入っていた、

奥に進むと小屋があり、

中にリカルドがいた、

銃を突きつけるも窓から閃光手榴弾を投げ込まれて協力者らしき人物により捕縛失

敗する、

更に追う2人、

途中B・S・A・A隊員の乗るジープに乗り一旦仲間の元に向かう、

夜になり、

キャンプベースに向かうと荒らされたテントと死体が散乱していた、

3人は周りを警戒しながら歩く、

すると地響きが周りに響く、

すると車両がこちらに飛んできた、

慌てて避ける3人、

そこには巨人がいた、

明石「何ですか!?!あの巨体は!?!」

腰には隊員の死体、

B・S・A A隊員が奴から逃げようとしたが踏み潰される、

クリスとシエバはジープの後部座席にある機銃を使い応戦、

岩などを投げってくる巨人、

2人は頭を集中して撃つ、

すると頭を押さえてうずくまる、

背中から巨大な寄生虫が現れる、

2人はそれを集中して撃つ、

寄生虫が碎けて巨人が倒れる、

ジープから降りたクリスはシエバに帰るように言う、

ここから先は作戦でも命令でも任務でもない個人的な事で行くと言った、私を探しに行くのね、

だがシエバはついて行くと言った、

仲間の敵討ちね、

2人はエアボートで移動した、

朝日が差して、

2人は岸にボートを付けた、

油田の情報を得たからだ、

油田に向かう2人、

そこにジョツシュ（バイオ5）がいた、

油田の外にリカルドの船があるとのこと、

3人は出るとジョツシュがボートを用意するといひ別れた、

2人はリカルドの船に向かうと奴は既に船に乗っていた、

更にジョツシュから油田が爆発すると無線で言われ急いで対岸に向かう、

対岸に向かうとジョツシュはボートを出す、

少しして油田が爆発する、

3人はリカルドの船に追いついた、

クリスとシェバが船に乗り込むとリカルドが首筋に注射する、

そして湖に飛び込んだ、

すると巨大な生物に変わった、

2人は船に備え付けてあつた機銃を使い応戦、

硬い皮に覆われていて効果が見られない、

更に触手らしき太いものが出てくる、

機銃で応戦すると生物の口が開き中に変わり果てたりカルドがいた、

2人はそこに機銃を撃つ、

リカルドがこつちに来て大きな口で喰らおうとする、

クリスはその口の中に手榴弾を投げ込み避ける、

口が閉じられて中で爆発が起きて生物が活動を停止する、

その際リカルドが吐き出される、

原型をとどめていないリカルド、

そいつの口から遺跡に行けと言ひ死んでいった、

ジョツシユのボートに移った2人、

リカルドの言っていた遺跡に向かった、

遺跡の入り口に着いた3人、

ジョツシユは応援を呼びに行くといひ別れた、

遺跡の奥に行くと言ひ施設に着いた、

その資料で黒い物体がウロボロスという名前であるとわかった、

奥に行き、

無数のカプセルが並んでいるところに出る、

クリスは番号を打ち込み移動する、

私が入っているカプセルの番号ね、

そこに移動するとカプセル内は空だった、

クリスは気落ちするが行き来していることを知り再び歩きだした、

遺跡の奥まで来ると奴がいた、

ウエスカー、

それと、

リカルドの拘束を邪魔した奴、

するとウエスカーはおかしなことをいう、

ラクーンの同窓会と、

すると奴がコートを取ると、

私だった、

でも何かおかしい、

クリスに対して敵意を向けている、

それに胸に何か趣味の悪い宝石がつけられている、

そして戦いになった、

ウエスカーがクリスを掌底で吹き飛ばして私とシエバが戦うことになった、

銃撃を行いシエバが避ける、

近づいて来たところで互いに格闘戦を行なっている、

クリスは曲がり角で待機してウエスカーに不意の一撃を与えていた、

道中ロケットランチャーが立てかけてあつたためそれをウエスカーに向けて撃つ、

ウエスカーはロケットの弾を両手で抑える、

クリスはロケットの弾に向けて撃つ、

爆発してウエスカーが膝をつき、

猛スピードで逃げて行く、

クリスはウエスカーが落としたL・ホーク（バイオ5）を拾いウエスカーを追いかけるも私に邪魔される、

ウエスカーが言つてたわね、

胸の宝石もとい装置を外さないといけないみたいね、

クリスは私に呼びかける、

私は頭痛がしたのかしら、

頭を押さえて動きを止めた、

クリスが今のうちに私を背負い投げする、

シエバが私に馬乗りになり装置をはがした、

正気に戻った私はクリスにウエスカーを追つて欲しいと伝える、

私はどうやって帰るつもりかしら？

2人はウエスカーを追うと巨大な貨物船に乗り込む、

2人は進むと死体の山とエクセラ・ギオネ（バイオ5）という女が苦しみながら現れる、

そして口や目や耳から黒いもの、

ウロボロスを出して死体の山と同化する、

2人は走って船内に入る、

だがウロボロスは壁を突き破って入ってくる、

屋上に出た2人、

クリスが衛星兵器を手に取りシエバがグレネードランチャーの焼夷弾をウロボロスに向けて撃つ、

炎が弱点のウロボロス、

そしてコアらしき物を出した、

クリスは衛星兵器で狙いを定める、

コアに衛星兵器を撃つとウロボロスは消滅した、

エクセラの死体がこっちに飛んできて何か注射器らしき物が2本落とす、

ウエスカーの元に向かう2人、

途中私から通信が来てウエスカーは定期的に薬を打たないと行けないこと、

だがその薬はさつき打ったばかりなこと、

だが薬を打ちすぎでは毒になるとのこと、

エクセラの死体からとった注射器、

奥に進む2人、

ウエスカーと遂に対峙した、

外にはステルス機、

あれにはウロボロスが搭載されていてあれを使い世界中にウロボロスを撒き散らすという計画、

クリスがハンドガンを撃とうとするとウエスカーがクリスに掌底を与えてそのあと下に落とす、

シエバも投げられて落とされる、

2人は別れて互いに撃つも全て避けられる、

クリスは照明を落としてみた、

案の定その部分が暗くなる、

ウエスカーはサングラスを掛けていて周りがあまり見えなくなったみたい、

シエバはその間にロケットランチャーを持ってきてウエスカーに向けて放つ、

ウエスカーはそれを止めるもクリスがL・ホークを構えて撃つ、

爆発してウエスカーは膝をつく、

クリスが羽交い締めをしてシエバが薬をウエスカーの首筋に打つ、

ウエスカーは苦しみステルス機まで逃げ込む、

2人はステルス機に向かうも離陸態勢に入った、

クリスが先に乗リシエバに手を差し伸べる、

シエバはクリスの手を掴みステルス機に乗り込む、

ステルス機内でウエスカーと対決する、

薬のせいか動きは若干遅くなっている、

だが銃撃をことごとく交わして反撃までしてくる、

クリスは格闘技で応戦してサングラスを殴り外す、

シエバは閃光手榴弾を投げて目を隠す、

ウエスカーは怯む、

クリスはその隙にウエスカーの首筋に薬を打つ、

ウエスカーは苦しみ出す、

クリスはステルス機の後方を開けるレバーを操作した、

ハッチが開きクリスは柱に捕まる、

シエバも柱に捕まるもその足にウエスカーが捕まる、

シエバがクリスの方を見て柱から手を離れた、

クリス「やめろ！」

クリスは柱から手を離してシエバをの手を掴み柱にしがみつく、

シエバはウエスカーにハンドガン突きつけて撃つ、

ウエスカーが外に放り出されるがステルス機も落ちる、

どこかの火山に落ちたらしい、

2人は辺りを調べるとウロボロスが入った巨大な容器の上にウエスカーが登っていた、

ウエスカーはその容器に手を突っ込みウロボロスを寄生させた、

クリスを殺すためなんでもするのね、

ウエスカーはウロボロスで両腕に容器の大きな金属の破片を取り込んだ、

クリスはウエスカーを撃つも効果が見られない、

ウエスカーは腕を伸ばしてクリスを遠くに弾き飛ばした、

たまたまそこに足場があつたけど落ちたら助からないわね、

ウエスカーは腕を利用して大きく跳躍する、

クリスは逃げる、

シエバは背後から撃つ、

背後にコアがありそこに当たる、

ウエスカーは次にシエバに目をつけた、

シエバは逃げるも足場が崩れてしまいぶら下がる、

クリスは大岩を殴ったり押ししたりして転がした、

あんな岩を押すなんてクリスも何か薬でもやってるのかしら？

シエバもよじ登りクリスと合流する、

2人は広い場所に出る、

ウエスカーも2人を追う、

どこの映画かしら？

こんな火山で決戦をするなんて、

クリスとシエバは撃つもコアじゃない場所だから効果がない、

ウエスカーは腕を伸ばすも2人は避ける、

左右に分かれた2人、

クリスはL・ホークをウエスカーに撃つ、

ウエスカーは怯んだ、

シエバはその隙に後方からコアを撃つ、

ウエスカーはシエバの方向を向いた、

クリスはナイフを取り出してウエスカーに走り寄る、

後ろにしがみついてコアにナイフを突き立てる、

その時に心臓部分にコアが出現した、

シエバもナイフを取り出してコアにナイフを突き立てる、

クリスはウエスカーから離れて勢いよくコアにナイフを突き立てた、

ウエスカー2人がナイフを抜くとウエスカーはふらついて溶岩の中に落ちた、
ちょうど上空にヘリがきた、

中には私とジョツシユが乗っていた、

2人はヘリに乗り帰還しようとするのでヘリに何かが張り付いた、

見るとウエスカーが溶岩からウロボロスを伸ばしてきた、

2人はヘリの中のロケットランチャーをウエスカーに向けて構える、

そして放たれるロケット弾、

ウエスカーに直撃してウエスカーは死んだ、

溶岩に入ってまだ死なないなんてウエスカーも完全に化け物なのね、

やつとこの話に決着がついたのね、

でもあと8年分があるのね、

濃い内容と思うのは私だけかしら？

そう思っていると次の場面に移った、

それぞれの記憶3

次は3年後ね、

雪がチラホラ降っていることがわかる、

地図を見るとイドニアと書かれている、

C―ウイルスが確認されたと話してんだけどウイルスってどれくらい種類あるの？

クリスとピアーズ・ニヴァンス（バイオ6）は行動を開始した、

ジュアヴォ、

今回は寄生虫ではなくてウイルス、

それなのにゾンビのように腐敗は見られない、

進化している、

クリス達は銃撃しているがジュアヴォは腕を撃たれるとそこが変異した、

ムカデのような触手がウネウネしてそれを伸ばして攻撃してくる、

ただ頭を撃つだけではダメになったのね、

更に広場に出た、

そこで2人の男女に出会う、

合衆国エージェントのシエリー・バーキン（バイオ2、6）、

以前レオンの報告書を見させて貰ったけどラクーン事件の生き残りでウィリアム・バーキンとアネット・バーキンの娘だと、

レオンとクレアと一緒に脱出して政府に保護されていると聞いているけど見違えるほど時の流れは凄いわね、

写真で見せて貰ったけど美人になったわね、

もう1人を見るとどこかで見たことがある顔ね、

でも私の時系列だとやんちゃ坊主だと思うけど、

そんな少年と出会うことは無いはず、

出会ったとしたらカイトやクルト（P X Z）くらいね、

今頃何してるかしら、

クリス達が会話をしていると通信が入り対空砲が邪魔でヘリが下ろせないとのこと、更に巨人が現れた、

さっきの映像と酷似している、

クリスとピアーズは巨人の討伐、

シエリーと男は対空砲を処理に移った、

ピアーズはAW50を撃つ・・・あれ？

あれってクリスの持つているアンチマテリアルライフル？
まさか、

クリスがアサルトショットガンを巨人の頭に撃つ、

巨人が膝をつく、

ピアーズが巨人の背中に乗り背中に出ている物に巨人の体に刺さっている杭を突き立てる、

巨人は苦しむも死んではいなかった、

更に撃つ2人、

だが他のところからもう一体巨人が現れる、

最悪ね、

シエリー達はまだかかりそうね、

クリスは巨人にハンドガンを撃ち込むも効果が見られない、

別の巨人がクリスに向かってきた、

ピアーズはAW50をそいつに向けて撃つ、

巨人が怯み膝をつく、

その時に上空から巨人に向けて空爆がされる、

巨人は倒れて動かなくなった、

シエリーと男はB・S・A・Aのへりで移動する、
クリスは教会に向かう、

中には女性がいてクリス達を見ると逃げていった、

2人は女性を追うとその先に何かあった、

まるで虫のサナギ、

でもあれは人の形をしている、

そう思っているとそのサナギが割れて中からすごく硬そうなB・O・Wが現れる、

2人は銃を撃つ、

だが弾けてしまい効果が見られない、

B・O・Wは突進してきた、

2人はそれを躲して再び撃つ、

ピアーズのAW50がB・O・Wの甲羅らしき物を壊して筋肉組織が見えた、

クリスはそこにアサルトショットガンを撃つ、

B・O・Wは後ろに倒れ込み動かなくなる、

2人は女性を追った、

そして追いつく、

名前はエイダ・ウォン（バイオ2、4、6）、
研究者との事、

でもあの時（PXZ2）はそんなこと言っていなかった、

クリスらはエイダを保護して戻るとサナギ達からB・O・Wが出てきていた、
隊員達は混乱していて闇雲に銃を乱射していた、

エイダは隠し通路の扉を開けて入るように言ってくる、

みんなは滑り込むように隠し通路に入る、

扉が閉まり安心する隊員達、

エイダがこの先に出口があると伝えた、

先頭を歩くエイダ、

クリスはピアーズにエイダを監視するように伝えた、

そして皆が歩き出す、

しばらく歩きひらけた場所に出るとピアーズがエイダが消えたと言ってくる、

いつの間にか後方に歩いていてそこで姿を消したとの事、

急いで戻って確認しに行こうとしたら突然入り口に鉄格子が落ちてきた、

クリスも駆け寄ろうとしたがピアーズに引つ張り戻された、

その際鉄格子が落ちてきた、

そして、

向こう側にエイダが現れる、

そしてボールのようなものを投げるとそこから注射が無数に出てきて隊員に刺さる、すると隊員が苦しみ出して体が溶けていく、

クリスは鉄格子越しで手を伸ばすも隊員達はサナギに変化した、

クリスはそれを受け入れられない、

そして、

サナギからB・O・Wが出てくる、

ピアーズは撃とうとしたがそれをクリスに止められる、

その間にB・O・Wが近づいてきてピアーズを吹き飛ばした、

そしてクリスを壁に叩きつけて何度も殴る、

そして投げ飛ばされるクリス、

ピアーズは撃ちながらクリスを引きずって後退した、

クリスは少しずつ意識を失った、

一気には過ぎていき半年後、

クリスはどこかの酒場でやけ酒を飲んでた、

ピアーズが隣で食べていても反応はない、

まるで忘れていているかのように、

店員に酒の追加を依頼したが断られて出ていくように言われる、

クリスはそれを無視して酒瓶を搔っ払い席に戻ろうとしたが男が止めに入るもその男をねじ伏せて酒瓶で殴ろうとしたところピアーズに止められる、

そしてピアーズはクリスを迎えにきたと言うもクリスは素知らぬ顔、

ピアーズはデバイスである物を見せる、

あの時死んでいった隊員の顔、

クリスにそれを無理やり見せる、

クリスはそれを見るも何か思い出すのか嫌がりそれを払いのける、

ピアーズ「アンタは過去と向き合うべきだ、アンタが絶対忘れてはいけない人間だ、アンタを信じていって死んでいった人間だ、現実に関目を背けて逃げるな！彼らの死を無かったことにするつもりか！」

クリスは思いつきり手を払いのける、

ピアーズは落胆する、

その時クリスはピアーズの肩にあるB・S・A・Aのエンブレムに目が入る、

クリスは無意識にB・S・A・Aと呟く、

ピアーズはクリスを見て、

ピアーズ「そこがアンタの帰る場所だ、引きずってでも連れて帰る、」
そういう時周りの客が立ち上がる、

彼らもB・S・A・Aのようだ、

そしてクリスは再び戦場に戻った、

作戦内容はビル内の人質の救出、

クリスとピアーズはビル内に侵入、

人質を解放していく、

最後の人質を解放したが古いビルのためか天井が崩れて出口が塞がる、

しかもミサイルが飛んでくるとの事、

2人は急いで別の出口に走る、

場所は2階、

2人は走り2階から飛び降りる、

そして着地と同時にミサイルがビルを直撃する、

2人は急いで別の建物の影に隠れる、

倒壊するビル、

中には無数のサナギ、

クリスはそれをずっと見ていた、

他の隊員がサナギを火炎放射器で燃やしている中、

クリスはピアーズに聞いた、

クリス「エイダ・ウオンはどこだ？」

ピアーズは驚き記憶が戻ったのか聞くもクリスは強めにもう一度聞いた、

クリス「エイダ・ウオンはここにいるのか、」

これはだめね、

長年パートナーをしていた私はわかった、

怒りに燃えている、

こうなるとクリスは絶対に他の人の話を聞かない、

ピアーズはエイダ・ウオンがここにいること伝える、

クリスは動こうとすると透明な何かに隊員が喰われていった、

2人と他の隊員はすぐに後を追った、

みんなが追っていくも1人、

また1人と隊員は消えていく、

そして最後に残ったのはクリスとピアーズ、

そして1人だけの隊員、

透明なやつ の 正体は蛇のような B・O・W、

洋館に出てきた蛇のようね、

でもこっちは透明になれるからあの蛇が更に強くなつた感じかしら？

クリスは撃つも効果が見られない、

クリスは撃ちながら後退していきある場所に追い込まれる、

口の字型の場所、

ピアーズは何かのレバーがあることに気づく、

コードを見ていくとどうやら電源ケーブルのレバーのようでそのケーブルが途中で

切れている、

更に都合のいいことにそこに水溜りができていた、

ピアーズはタイミングを見計らいレバーを下ろすも電気は流れなかった、

すると隊員は巨大なコンセントらしきものを見つけてそれを刺すと隊員は感電して

気絶する、

クリスは逃げ回り撃つ、

ピアーズはタイミングを見計らいもう一度レバーを下ろす、

蛇は電撃を喰らい倒れて動かなくなる、

どうやら死んだようだ、

3人は更に奥に進むと突然隊員が苦しみだす、

周りを見ると窓の近くでエイダ・ウォンがいた、

隊員はサナギになり中から小さい虫が無数に出てくる、

クリスは今度は躊躇いなく撃つ、

だが敵は無数の小さな虫、

撃つても意味がない、

だがどこかのタイミングで巨大な虫が現れる、

2人はそいつを集中放火すると虫は四散した、

クリスは後を追うも今のクリスは怒りと憎しみで動いている、

引き返そうと提案するピアーズの言葉を無視して動く、

命令を聞けないなら俺1人でも行くと言う、

ピアーズは悪態をつけてクリスを追った、

追ううちにどこかの施設みたいなどころに入る、

そしてもう1人の誰かがエイダを追っているようだ、

そしてその誰かと出会う、

レオン、

それと知らない女性、

クリスとレオン、

互いに銃を突きつける、

互いに自分の主張を言い合う、

真犯人はシモンズと言う大統領補佐官、

エイダは重要参考人との事、

クリスは部隊の隊員が殺されたこと、

レオンは大統領とアメリカの街の住民達が殺された、

言い合っているエイダが閃光手榴弾を落として逃げた、

レオンはエイダを追いかけようとしたがクリスが止める、

クリス「俺らはエイダを追う、お前はシモンズを追ってくれ、」

それで納得するなんて思っていないけどなんで納得するのかしら？

レオンはエイダを追っているんでしょ？

なんで簡単にクリスに託すことができるのよ？

男の友情はわからないわ、

エイダは車で逃走、

チラッて見えたけど赤いスポーツカー、

クリスとピアーズは軍用ジープ、

絶対に追いつかないわよ、

そう思っているのとピアーズはエイダに向けて機関銃を撃つ、

なんで撃つのかしら、

死んでしまったら真相が闇の中よ、

そしてたどり着いた先が巨大な貨物船、

無理やり乗ったためジープは故障、

2人は外に放り出されて気絶する、

だがすぐに目を覚ます、

2人は急いでエイダを追う、

そして外まで追うとエイダはそこで待っていたかのようにいた、

そしてエイダの後方にいきなり小型ヘリが来てエイダを撃つ、

エイダは撃たれて甲板に落ちて死んだ、

死んだわよね、

あの時は生きていたわ、

それをクリスが確認している、

ピアーズはエイダが持っていたアタックケースの中の注射器を1本手に取りポケット

トにしまう、

2人は脱出のためにそしてエイダの言っていたCーウィルスが搭載したミサイルを持つ船を見つけるために、

2人は戦闘機を見つけた、

乗り込み離陸する、

そしてすぐに船を探しに行く、

船を見つけた2人、

だが対空砲が邪魔で近づくことができない、

クリスはミサイルを撃つ、

1つずつ対空砲を壊して行く、

全ての対空砲を壊すとクリスはピアーズに爆薬を持たせて降ろす、

クリスは再び上昇、

ピアーズの援護を行う、

ピアーズは進行に邪魔なところを爆薬で壊して行く、

そしてミサイルのところに来ると半年前のあの巨大なB・O・Wが行く手を阻む、

クリスは機関銃を撃ちピアーズを援護する、

ピアーズはミサイルの発射を阻止するために機械を操作するが遅かったらしく操作できなくなっていた、

クリスは船にギリギリまで近づける、

ピアーズは戦闘機に乗り込みミサイルを破壊することにした、

クリスはミサイルを撃とうとするもあの巨人が邪魔で撃てない、

クリスは一度巨人にミサイルを撃ち巨人を怯ませる、

巨人は怯み膝をつく、

クリスは再びミサイルにロックオンする、

そしてミサイルを放つ、

だが、

僅差でミサイルが発射されてしまい意味がなくなる、

その時レオンから通信が入った、

中国にいること伝えられる、

ミサイルの着弾地点は中国、

クリスはすぐにレオンに逃げるよう言う、

だが遅かったようだ、

ミサイルは中国上空でC―ウィルスをばら撒き出したようだ、

レオンから再び通信無事だと伝えられるが中国はパニック状態だと言われる、クリスはエイダが死んだ事を伝える、

レオンからは油田に囚われているシエリー・バーキンとシエリーと一緒に行動していた男、

ジェイク・ミラーの救出を依頼する、

どうやらジェイクの血はC－ウイルスに対抗できる血清ができるとのこと、

更に衝撃的な事を言うレオン、

ジェイクはあのウエスカアの息子だと言う、

ウエスカアって結婚してたの？

私より先に結婚してたのね、

腹がたつわ、

私より先に結婚をしているなんて、

今度会ったらあの顔を数発殴ってやりましょう、

クリスとピアーズは油田に向かった、

油田に着陸して降りる2人、

巨大エレベーターを呼び中に入る、

そして、

クリス「この事件を終わらせたら俺はB・S・A・Aをやめる、」

その言葉に私は耳を疑ったわ、

もちろん隣にいるピアーズも、

クリス「次からはお前がみんなを導いてくれ、」

ピアーズはなんとも言えないような顔をする、

エレベーターが止まり扉が開く、

2人は奥に進んでいった、

奥に進むとコンピュータールームのようなどころに出る、

画面にはシエリーとジエイクが映っている、

クリスは基盤を操作する、

拘束具を外したようだ、

そして奥に向かう2人そこでシエリー達と合流する、

クリスはおもむろに父親の面影があると言い出すシエリーは戸惑いジエイクはクリスを睨む、

そしてクリスに銃を突きつけてなぜ殺したか怒鳴る、

仕事のためか、
個人的なことか、

クリスは両方とも答えた、

そしてジエイクは撃つ、

クリスの頬を掠めて後ろの壁に当たる、

安心した、

クリスが殺されなくて、

皆は上に向かった、

上に到着するとシエリーはあるモニターを見て皆を呼ぶ、

ハオス、

海に入ったらどれくらいでウイルスが広がるか、

見上げると巨大なサナギ、

あの中にハオスがいるのね、

そう思っているとサナギが割れて中から巨大な物が下に落ちる、

そして這い上がってきた、

クリスはシエリーとジェイクに逃げるように言う、

そして二手に別れた、

クリスとピアーズは上に登って行く、

そして登りきり床が閉じていくがハオスはギリギリのところに入って来る、
体が千切れても入ってきた、

2人は撃つ、

ハオスは腕を伸ばして反撃してきた、

それを躲して更に撃つ、

ハオスはサナギになったところで2人は通路に走った、

通路を渡り広く空調機が無数にある部屋に出た、

ハオスも入ってくる、

クリスは撃つがハオスに拘束されて身動きができなくなる、

ピアーズが助けに向かうけど浮き飛ばされた、

更に金属の巨大な破片を投げてピアーズの右腕を潰した、

クリスは締め上げられる、

意識を失いかけていた、

その時どこからともなく電撃がハオスを襲いクリスを離す、

クリスは電撃が来た方向を見るとピアーズの右腕が変形していた、
エイダの持っていたCーウィルスを投与したようね、

覚悟がいいわね、

私はそんなことできないわ、

ピアーズは再びハオスに向かって電撃を放つクリスも撃つ、

ハオスは再びサナギになるがピアーズはそれを許さない、

サナギに向かって電撃を放ちハオスを無理やり出す、

クリスはその間にグレネードランチャーを撃ちまくる、

ピアーズはハオスに近づいてコアらしきところに自分の変形した右腕を突き刺して

電撃を流す、

ハオスは苦しみ動かなくなった、

クリスはピアーズの肩を担いで脱出するために動く、

脱出ポットが見つかりクリスはピアーズを近場に座らせて装置を操作する、

そしてポットが開いてクリスは再びピアーズの肩を持ちポットまで移動するもポツ

トの入り口でピアーズがクリスの手を振りほどいた、

そしてクリスの体を押す、

それと同時にポットの扉が閉まる

ピアーズは装置を操作した、

クリスはポットを叩き何度もピアーズの名前を口にする、

ピアーズはクリスの前にいきただクリスを見ている、

その時ポットが射出された、

クリス「ピアーーーーー！！！」

クリスは海に放り出される、

それと同時に油田は崩壊し始める、

クリスはただその光景を見ていることしかできない、

その時、

倒したはずのハオスがクリスに向かって来た、

ポットを掴まれる、

だが、

後方から電撃が来てハオスに直撃する、

ピアーズが最後の一撃を放ったんだ、

ハオスは沈み爆発する油田に姿を消した、

海上に出たクリス、

手にはAW50と血のついたB・S・A・Aのエンブレムが握られていた、

だからクリスはもう一度会えたら礼を言いたいと言ってたのね、
更に時間が過ぎて4年後、

クリスは今と同じ格好をしている、

どうやらこれが終わってからこつちに来たのね、

いきなりクライマックスな状態ね、

黒いウネウネした巨大な物が上の屋根を突き破って出て来ている、

しかも地上にはいかにも一般人みみたいな男がいる、

クリスは地上に何かを投げた、

クリス「そいつを使え！」

クリス、

あなたがそこから援護しなさいよ、

何一般人に戦わせているのよ、

男性は銃を撃ち黒い何かに当てる、

黒い何かは動かなくなり白くなる、

クリスはへりから降りて男性をへりに移動させる、

そこからクリスは隊員の搜索とルーカス・ベイカー（バイオ7）の捕縛を行う、入ってそうそう隊員2人を見つける、

首には何か機械がつけられている、

隊員は引き返すように伝えるもクリスは出来ないと言う、

すると倒れている隊員がクリスの腕に機械をつけた、

その男がマスクを取るとルーカスだった、

クリスと隊員を突き飛ばして立ち去るルーカス、

その時隊員の首の機械が爆発して隊員の首が吹き飛ぶ、

クリスは急いだ、

途中隊員を助けようとするもルーカスの罠で殺される、

そしてクリスの腕につけられた爆弾のタイマーが作動する、

戻る時間はない、

通信でこの洞窟内に液体窒素があると情報が入る、

クリスは急いでその場所に向かう、

途中黒い人型のモンスターと白い人型のモンスターが現れる、

黒い方はなぜかナイフと格闘と踏みつけて倒せているけど白い方はハンドガンの弾を変えて撃っている、

オペレーターが説明するには白い個体は再生能力が非常に高いため通常の弾を撃つてもすぐに再生してしまう、

そいつを倒すにはラムロッド再生阻害弾を撃たないといけないみたい、ただ弾数が全くない、

基本は無視したほうがいいみたい、

クリスは液体窒素に腕を突っ込み機械のタイマーを止める、

そして腕から外すと再びタイマーが動き出す、

クリスはそれを遠くに投げる、

そして爆発する、

クリスは急いでルーカスの後を追った、

ルーカスは個室でどこかに通信を入れている、

扉には電子ロックがかかっている、

クリスはブレイカーを探してそれを下ろす、

そして戻ってくるるとルーカスは驚いている、

クリスはさっきの爆弾で死んだと思っていたみたい、

ルーカスは逃げる、

クリスはルーカスを追いかける、

広い場所に出るとルーカスがクリスを背後から襲いかかって来た、

クリスは返り討ちにしてルーカスの頭にハンドガンを撃つ、

ルーカスは倒れたけどルーカスの周りに黒い液体が出てくる、

そして、

ルーカスも化け物になった、

クリスは撃つもどうやらあの白い個体と一緒に高い再生能力を持っている、

更に周りに何か埃のようなものが浮いている、

クリスはラムロッド再生阻害弾に取り替えて撃つ、

効果はあり続けてショットガンに持ち替えて撃つ、

ルーカスは攻撃してくるがクリスはそれを防いでまた撃つ、

クリスは手榴弾を投げる爆発してルーカスは吹き飛び動かなくなる、

クリスはルーカスに近づいて留めを刺した、

クリスはルーカスが書いたりしていた書類を手に取り出て行こうとした、

最後にそこにあつた家族写真を見てその場を去った、

映像はここで終わり、

クリスが装置を頭から外す、

クリス「ジル、見て後悔はなかったか？」

ジル「そうね、後悔はないわね、ただ勝手にB・S・A・Aをやめるなんて言っ
て欲しくないわね、相談はしてほしいわね、」

クリス「その事か、今では辞めることはできなくなったな、当分の間は前線から離
れることができないな、」

ジル「そうね、あなたが寿命で死ぬまでは戦い続けるはずよ、」

クリス「勝手に決めないでくれ、その前に引退をしている、」

なんてあんな映像を見た後とは思えないのほほんとした会話をしているけど、

雷ちゃんと暁ちゃん、

それとプリンツちゃんとイムヤちゃんにハチちゃんの口から何か魂のようなものが
出て来ている、

長門「クリス、お前はすごいな、だがどれだけすごいことをしても怒り任せに行
動してはいけない、」

エイダの事ね、

仲間を殺されたクリスが怒り狂って暴走した事、

クリス「わかっている、ピアーズに教えられた、あの時俺についてきてくれた相棒だ
からな、」

大和「それに元師様の事を知れましたが少しモヤモヤします。」

ジル「嫉妬よ、ステイブがクレアに向かって好きと言ったからよ。」

ステイブ「大和、たしかにあの時クレアの事が好きでした、ですが俺はあちらでは死にました、19年前に、そしてこっちで目を覚まして19年間ここで過ごしました、クレアの事は守れてよかった人です、こうしてクレアが無事なことを確認できて俺の中のつつかえがなくなつた、それにクレアと同じくらい魅力的な女性が俺の隣にいつもいるんだ。」

大和が真つ赤になる、

それに兄のクリスの手前言葉を選んだのね、

クレアよりもと言うとクリスが何か突つかかるかもしれないもの、

ジル「セバスチャン、あなたの記憶も見てもいいかしら？」

セバスチャン「今からか、はつきりいつてクリスの記憶が凄まじすぎて俺のなんて面白くもなんともないぞ、」

ジル「勘違いしているかもしれないけどわたし達は今までの人生を見ているんじゃないの、これから現れると思う敵を見ていたの、私達の世界の敵が出てきた以上セバスチャンの世界で出会った敵が出てこないとは言えないわ、」

セバスチャン「だったら敵だけ見てくれ、俺の記憶はSTEMから脱出することとり

リーを助け出したことぐらいだ、」

クリス「大丈夫だ、それにお前が命がけで助けた娘のことだ、全力だったんだろ、」
セバスチャン「当たり前だ、大切な娘だからだ、」

ジル「誰も笑わないわ、そしてつまらないなんて言わないわ、だから大丈夫よ、」
セバスチャン「わかった、だったら見せるぞ、」

セバスチャンはクリスから装置を受け取りセバスチャンはそれを頭につける、

セバスチャン「装置を動かすぞ、」

セバスチャンがそう言うのと映像が映った、

それぞれの記憶4

セバスチャンの記憶か、

俺らとは違う世界だから貴重なものだろう、

映ったのはパトカーだ、

どうやらビーコン精神病院で大量に死体があると通信が入った、

セバスチャンと相棒らしい刑事、

ジョセフ（サイコブレイク）は走る、

病院に着くと無数のパトカー、

セバスチャンを出迎えたのはキッドマン（サイコブレイク）と呼ばれる女性、

新米の警察のようだ、

セバスチャンは先に病院に入る、

中は医者 of 死体だらけ、

奥に進むと生きている医者がいた、

助けると気を失った、

セバスチャンはモニタールームに行きモニターを観ると警官が銃を撃っていた、

そしたら見えない何かに警官が斬られて死んだ、
フードを被った男、

次の瞬間消えてセバスチャンの背後に現れる、
セバスチャンは注射を打たれて気を失った、

次の場面が出て宙吊りになっていた、
横では大男がしたいを切っていた、

そして死体を引きずって何かしている、

セバスチャンは周りを見て近くの死体にナイフが刺さっていたためそれを抜いて足を縛っているナイフを切る、

落ちるセバスチャン、

セバスチャンはゆっくりとそこから逃げ出した、

だが古典的なワイヤートラップに引っかかり警報が鳴る、
大男がチェンソーを持って追いかけてくる、

セバスチャンは逃げる、

途中足を少し斬られる、

セバスチャンは足を引きづりながら逃げる、

ミキサーのように回る刃、

血のウォータースライダー、

ロツカーに隠れたり瓶を投げて誘導したり、

そうして脱出した、

街は崩壊していた、

セバスチャンは警官が運転する車両に乗り走り出す、

街が動いて変化していく、

トンネルに入ると運転手が突然苦しみだした、

顔がひび割れているようにポロポロになり言葉を発する事がなかった、

セバスチャンに襲いかかり運転を疎かにした、

車が崖に突っ込み落ちる、

セバスチャンの意識はまた切れた、

セバスチャンが起きる、

周りを見渡して進みランタンとリボルバーを手に入れるもその奥でさっきの警官が

いた、

死体を食べている、

こうしてみるとゾンビだな、

警官がセバスチャンに襲いかかる、

セバスチャンはリボルバーで応戦、

警官は倒れる、

セバスチャンは更に奥に行くと車の後部座席に乗っていた青年がいた、

そして罨もある、

青年は何か叫びながら奥に走っていった、

セバスチャンは罨を解除しながら先に進む、

小さな小屋でマツチを手に入れたり瓶を手に入れたりしている、

更に奥に進むと無数のゾンビもどきがあった、

セバスチャンはそこを走って通り過ぎる、

そして川に逃げ込んだ、

少し流されてセバスチャンは陸に上がる、

先に進みショットガンやクロスボウガンを入力する、

そして鏡の中に消える看護師、

タティアナ（サイコブレイク）と言うらしい、

その看護師を追うとその先に病院の受付についた、

そこでタティアナが変なことを言っていた、

更に奥に行くのと初めにあつた巨大なチェンソーを持った男が立ちふさがつた、

セバスチャンは逃げながら撃つ、

だが前からも敵が来る、

セバスチャンはクロスボウガンの矢をフラッシュボルトに変えて放つ、

敵の目が眩んだ、

セバスチャンはその隙にフラググレネードを投げた、

今時フラググレネードなんて古いものよく見つけたな、

フラググレネードが爆発して敵が吹き飛ぶ、

だがチェンソーを持った大男は死んでいない、

セバスチャンはクロスボウガンにハーブーンボルトを装填して大男の頭に撃つ、

ハーブーンが突き刺さり大男は今度こそ倒れた、

先に進み屋敷の中に入ると突然赤い水に押し流されるセバスチャン、

どこか流れ着いた先は死体と血の海だった、

セバスチャンは扉の先に進むとやはり死体があつた、

セバスチャンがそれに近づくと死体から奇声をあげながらながが出てきた、

貞子!?

ジャパニーズホラーに出てくる貞子!?

TVじゃなくて死体から!?

セバスチャンは元来た道を急いで戻る、

途中敵が扉を開けたためセバスチャンは敵を押しつけてその扉に入る、

化け物は敵を押し倒して自分の4本ある腕の2本で敵の両腕を拘束してもう2本で敵に頭を叩き潰した、

セバスチャンは逃げていき螺旋階段に着く、

螺旋階段を降りるとフードの男と出会う、

セバスチャンは再び戻るも突然螺旋階段が崩れてセバスチャンが落ちるがなぜか病院の廊下に落ちた、

セバスチャンは立ち上がり先に進むとジョセフと合流した、

ジョセフと合流した後一緒に行動した、

途中キッドマンが囚われていて助け出す、

だが床が抜けて落ちる、

地下を歩くと外に出た、

どこかの城跡なのかわからないがボロボロだな、

そこでジョセフと再び再会、

ジョセフは爆弾の解体をしている、

セバスチャンは押し寄せる敵を倒す、

爆弾を解除して先に進む、

セバスチャンはスナイパーライフルを拾い先に進む、

先に進むと教会が見えてくる、

セバスチャンとジョセフは中に入るとフードの男が再び現れる、

ジョセフは消えて再び1人になるセバスチャン、

教会の地下に行くとき金庫が無数に落ちている、

更に進むと突然金庫が宙に浮きまるで何度も瞬きをするかのような幻覚を見てしま
う、

そして肉を解体する人のような服装とハンマー、

そして頭が金庫の化け物が出てくる、

何でもありだな、

セバスチャンは金庫頭を退けるも無敵なのかなんとも出てくる、

やっとの事で別れることができても金庫頭は自ら首をへし折り自殺した、

なぜ自殺した、

そう思っているとセバスチャンの近くに金庫が動き出して金庫頭になった、金庫から金庫に移動した、

だが前の金庫はもう使えないみたいだ、

セバスチャンは逃げる、

棘のついたつり天井が落下して金庫頭が潰れた、

セバスチャンは今度こそ復活はしないだろう、

セバスチャンが奥に向かうと突然映像が流れた、

小屋に火をつける農民たち、

土地を買収された逆恨みらしい、

中には少年と少女の2人がいた、

木造の小屋だから火の周りが早い、

2人は2階の窓から逃げようとしているが少年は助かり少女は炎に包まれて死んだ、

映像が終わると場所が変わっておりセバスチャンの背後に貞子が再び現れた、

セバスチャンは逃げる、

そしてついた先は焼却炉のような場所、

貞子がセバスチャンに追いつく、

セバスチャンは貞子から逃げる、

途中レバーを下げると天井から炎が出てきて貞子を苦しめる、

セバスチャンは更にメインボルトを貞子に向けて放つ、

爆発と同時に貞子は消えた、

セバスチャンは周りを見渡して近くにあった死体に火のつけたマッチを落とす、
死体が燃え上がると同時に貞子が死体から出てくる、

しかし、

火は貞子の燃え移る、

貞子は苦しむ、

セバスチャンは最後に巨大な焼却炉の扉を開ける、

急に酸素が焼却炉の中に入りバックドラフトを起こす、

バックドラフトが貞子に直撃する、

貞子は悲鳴をあげて動かなくなった、

セバスチャンは奥に向かいエレベーターに乗る、

扉が閉まると背後から貞子がセバスチャンの首を絞める、

セバスチャンはエレベーターのボタンを押した、

貞子の腕が千切れる、

エレベーターで降りていくとその先には崩壊した街が眼に映る、

セバスチャンはエレベーターから降りて街を彷徨う、そこにジョセフとキッドマンと再会した、

3人はバスで逃走しようとしている、

バスを動かして走る、

だが、

突然バスの天井が剥がれる、

セバスチャンが振り返るとそこには巨大な蟹の化け物がいた、

バスと同じくらいの速さで走るかになんているのか？

トライセルの研究所でてきたカニよりか小さいな（バイオ5）、

キッドマンの運転するバスが曲がると蟹は曲がりきれずにビルに突っ込む、

だが追いかけてくる、

セバスチャンとジョセフは蟹に向かって撃つも速度は変わらず、

そしてキッドマンはトンネルに入ると蟹はトンネルに入れず壁にあたり動かなくなる、

走るバス、

トンネルを抜けるとフードを被った男が立っていた、

フードの男が手を出すとバスは横転して崖を落ちていく、

セバスチャンは外に放り出される、

他の2人は何処かに行った、

セバスチャンが起き上がるとまた違う場所に來ていた、

セバスチャンは奥に進むと巨大な装置があつた、

そこには少年とキッドマン、

だがすぐに場所が変わり周りが肉と血の海だつた、

セバスチャンが周りを見渡すと敵が無数に出てきた、

セバスチャンは持っている弾を撃ち切る覚悟で撃つ、

だが、

奥の方でRPGを持った大男が現れてセバスチャンに向かって撃つ、

セバスチャンはそれを避けて着弾地点にいた敵が爆死した、

セバスチャンは大男に向かってスナイパーライフルを撃つ、

大男の頭に命中して大男が倒れる、

奥へ続く扉が開いてセバスチャンはそつちに向かう、

そこで待っていたのはフードを被つた男、

奴の名はルヴィク、

そしてSTEMのことも話された、

ここがルヴィクの精神でできた世界、
ここで死ねば現実でも死ぬと、

セバスチャンはルヴィクに向けて銃を撃とうとしたが再び場面が変わる、
どこかわからない亜空間のような場所、

そして変異したルヴィク、

その大きさはすでに人間をやめている、

セバスチャンは走る、

ルヴィクの攻撃を避けながら、

だが巨大な腕に掴まれたセバスチャン、

投げられてしまいそして壁から出ているパイプに腹が刺さる、

ルヴィクがセバスチャンの方に向かってくる、

セバスチャンは周りを見ると先ほど倒した大男とすぐ近くにRPGが浮いていた、

セバスチャンはそれを取ってルヴィクに向けて狙いを定める、

チャンスは一度、

セバスチャンはロケット砲をルヴィクに向けて放つ、

ルヴィクはそれをくらい苦しむ、

そして、

セバスチャンは目を覚ました、

バスタブのような場所で、

周りには何人かの人々が横になっていて、

すでに死んでいた、

セバスチャンは外に出ると無数に警官と特殊部隊に保護された、

壮絶な光景だったな、

映像が変わる、

炎で包まれた家、

中に入るセバスチャン、

そして、

燃え上がるリリーとセバスチャン、

そこで目が覚めた、

セバスチャンは吞んだくれている、

俺も吞んだくれていたしなんとも言えない、

そこに現れたのがキッドマン、

セバスチャンはキッドマンに銃を突きつける、

だがキッドマンは顔色を変えない、

それどころかある物をセバスチャンに見せた、

セバスチャンはそれを見て驚く、

写真にはセバスチャンとリリー、

そしてセバスチャンの妻らしき人物が写っている、

そしてキッドマンは一言、

リリーは生きていると、

セバスチャン曰く数年前に火事で死んだと、

だがそれは偽装で実は生きていると、

セバスチャンは信じられないといった顔をしているとキッドマンが動いてセバス

チャンの首筋に何か注射した、

セバスチャンは気を失う、

目が覚めたら車椅子上で拘束されていた、

そしてキッドマンの組織、

メビウスの上司らしき人物と対面、

リリーはSTEMの中にいる、

子供の脳がSTEMとの同調率がいいとのこと、

だがそのSTEMが暴走してリリーがいなくなった、

そこでセバスチャンにリリーを探し出してきてほしいとのこと、

セバスチャンには選択の余地はなく探すことになった、

STEMに繋がれるとキッドマンはセバスチャンの耳元で彼女が待っていると言われる、

その意味を聞く前にセバスチャンは精神世界に入ってしまった、

セバスチャンがたどり着いた先はどこぞの美術館のホール、

セバスチャンが歩いていると遠くに人を発見する、

だがそいつは逃げていた、

セバスチャンが声をかけようとするやと突然人が出てきて逃げているやつにナイフを刺した、

そしてナイフを切り上げると同時に何か光った、

カメラのフラッシュのようだ、

そして逃げた男は血しぶきをあげながらゆっくりと倒れている、
と思つたら巻き戻されて再びゆっくりと倒れる、

それを繰り返されている、

男が消えるとセバスチャンは奥に向かった、

だが扉を開けると男が待ち伏せられていてカメラのシャッターをきらられる、
閃光と共に場所が変わる、

目の前に大きな鏡、

そこにはセバスチャンの写真、

ついさつき取られた写真があつた、

どしたら鏡に女性が映る、

セバスチャンは振り返るもいない、

再び前を見ると不気味に笑う女のような化け物、

そいつが鏡を割った、

セバスチャンはそいつの攻撃をかわして奥の扉に向かったが、

扉が開いてさっきの男が出てきた、

男はセバスチャンにナイフを投げる、

セバスチャンの肩にあたり刺さる、

セバスチャンは倒れてナイフを抜こうとすると化け物に捕まる、

セバスチャンはナイフを抜いて化け物の顔に斬りつける、

化け物はセバスチャンを落として苦しむ、

セバスチャンはその隙に扉に走りこむ、場所が変わり小屋に来る、

セバスチャンは小屋の中にある布切れで肩を止血した、

そして中を見渡した後外に出ようとすると扉の横の机に拳銃が置かれていた、

あの時お前がいてくれればと苦笑まじりにつぶやいているがあいつはそいつで倒せるほど弱くないと思う、

外に出ると壊れた車やら崩壊した道路などが目の前に出てきた、

セバスチャンはキッドマンに連絡した、

キッドマンの反応は意外だった、

元は自然豊かな別荘のような建物が連なる場所、

これが暴走したSTEMなのか、

更に襲われたことを伝えて男の特徴を伝えた、

セバスチャンは先に進む、

途中男が逃げていた、

人と変わりない化け物だ、

セバスチャンは後を追うと家に立て籠もった、

セバスチャンは背後から化け物の頭にナイフを突き立てる、

化け物が死んで、

セバスチャンは家に入ろうとすると鍵がかかっていた、

セバスチャンは体当たりで扉を開ける、

だが開けた大きな音でどこに潜んでいたのか化け物がわらわらと出てくる、

セバスチャンは急いで中に入り扉横にあつた本棚を倒した、

セバスチャンが家の地下に行く、

その扉を開けると銃を突きつけられる、

セバスチャンは手を挙げて様子を見る、

セバスチャンが敵ではないと伝えるも聞いていない様子だ、

あいつ安全装置を外していない、

新兵か？

その答えは彼自身が口にした、

技術者、

だから銃の使い方が疎かなのか、

ただ突きつけただけなら威嚇になるがセバスチャンは元刑事だ、

セバスチャンは手を挙げながら彼に近づいて銃を奪う、

彼の銃のトリガーに指をかけたままだと銃を奪う時に指が変な方向に向くから素人

はすぐに奪われる、

だがセバスチャンは返した、

味方だからだ、

彼は銃を奪うようにとって自分の名前を言った、

リアム・オニール、

メビウスの技術者、

彼からいろいろな情報を聞いたが今の現状の情報しかなかった、

安定化装置を起動すればいいと言われるがセバスチャンはリリーを、

コアを探すと言う、

オニールは通信機から変な電波を傍受したと言う、

セバスチャンはオニールとの連絡先を交換して外に出た、

いろいろな歩き回り、

クロスボウやショットガン、

スナイパーライフルを手に入れてガラクタも拾っていく、

リリーの痕跡を追って工場に着く、

リリーはあのカメラ男に追われていた、

その記憶だった、

外に出ると男がいた、

だが犬の化け物に邪魔される、

その時キッドマンから連絡があった、

カメラ男の名前がわかったようだ、

ステファノ・ヴァレンティーニ、

元戦場カメラマンだったらしい、

負傷してからどうしたのか知らないがなぜメビウスはこんな奴をこんな中に入れたのか？

セバスチャンはオニールに連絡して別のエリアに移動する手段を聞いた、

どうやらパソコンからパソコンに移動するらしい、

自分がパソコン同士を歩き来するメールみたいなものだな、

だがめんどくさいな、

特定のパソコンからしか行けないみたいだ、

セバスチャンは移動してパソコンを操作した、

パソコン内は脊椎というらしい、

その中を通るとある個室に着いた、

入ると資料を目にした、

コア喪失、

よくわからん、

だがリリーのことだとわかる、

その時背後から銃を突きつけられた、

女の声、

女はセバスチャンを押さえつけて名前を聞いてくる、

セバスチャンは名前を言うと女は驚き、

「セバスチャン・カステアノスは死んでいる、」

そう言った、

どう言うことだ、

何度も話していると女は拘束を解いた、

セバスチャンは振り返る、

ユキコ・ホフマン、

心理カウンセラーをしていると言った、

呼吸数心拍数、

おうむ返し、

俺にはわからん、

セバスチャンはなぜ死んだことになったのか聞いたらリリースに死んだことを伝えたと聞いた、

更にステファノがここに入れたのか、

それについては実験のようなことを言った、

STEMにどのような影響を与えるか調べたみたいだ、

ステファノの弱点なども聞いてみた、

奴は自分をアーティストと言っている、

だからあいつの作品を探せばいいと、

そして壊せと、

怒るだろうな、

セバスチャンは脊椎から外に出た、

外に出るとやはり街は崩壊している、

セバスチャンが慎重に歩いていると銃声が聞こえた、

セバスチャンがそっちに向かうと横転したトラックの上で銃を撃っている男がいた、

ステイブ「あの人は、」

今まで無言だったステイブが声を上げる、

セバスチャンは援護射撃をして男を助ける、

敵を倒してセバスチャンは男に駆け寄る、

男の名前はジュリアン・サイクス、

サイクスに誘われてセバスチャンは倉庫に入る、

脱出する方法を探してみると、

わかり次第教えて娘と脱出してほしいと、

セバスチャンはその場を後にした、

セバスチャンはステファノの作品を壊して劇場に入った、

中に入るとステファノが待っていた、

だがステファノは周りを別の場所に変えた、

そして襲いかかる、

セバスチャンはハンドガンで応戦、

だが瞬間移動して当たらない、

ステファノはナイフを投げる、

セバスチャンは避ける、

壁が剥がれて亜空間みたいところが現れて巨大な腕が出てくる、

腕がセバスチャンを襲う、

セバスチャンは物陰に隠れるがステファノがセバスチャンの前に移動する、

セバスチャンはハンドガンも撃つも避けられる、

ステファアノはカメラにシャッターをきろうとしたがセバスチャンにハンドガンの弾丸がやつとステファアノの腕に当たった、

ステファアノは腕を抑える、

セバスチャンはショットガンに持ち替えてステファアノに向かって撃つ、

ステファアノは仰け反る、

銃撃は止まらず何発も撃つ、

ステファアノは倒れる、

そして動かなくなる、

セバスチャンは銃を構えながら警戒する、

ステファアノが腕だけを動かしてカメラのシャッターを切ろうとしていたためセバス

チャンはカメラごとステファアノを撃ち抜く、

ステファアノは完全に動かなくなった、

場所が劇場に戻ると背後から声が聞こえた、

少女の声、

セバスチャンが振り返るとそこには少女、

リリーがいた、

だが怯えている、

セバスチャンが死んだこと、

リリーはそう言っている、

セバスチャンは近づくとリリーは逃げる、

その時白いなにかが動いた、

白い液体、

いや、

白いフードを被った女性、

そいつがセバスチャンを攻撃した、

フードがめくられるとセバスチャンが言った、

「マイラ?」

その女性の顔は写真に出てきた女性に似ている、

彼女はセバスチャンの奥さんか?

セバスチャンがそう呟くと女性はリリーを連れて消えた、

その直後に劇場が燃えてセバスチャンは別の場所に飛ばされた、

暗い場所、

周りが見えない、

すると炎が灯される、

椅子に誰かが座っている、

男、

男はセオドアと言う、

マイラを殺すように言ってくる、

だがセバスチャンはそれを拒む、

すると真つ赤な血の水が波のようにセバスチャンに襲いかかる、

セバスチャンは波に飲まれて気を失った、

次に目を覚ますと目の前にリリーが泣いていた、

セバスチャンは手を伸ばそうとするとリリーはどこかに行つて消えた、

それと同時に銃撃している女性がいた、

女性はセバスチャンが目を覚ましたことに気づいて応戦するように指示する、

セバスチャンはすぐに起き上がり銃を持って応戦に入った、

敵が無数、

セバスチャンは敵の頭を的確に狙い撃つ、

そして敵を全滅させる、

女性はエスメラルダ・トレスと自己紹介した、

2人はエスメラルダの隠れ家に向かった、

途中デコイの隠れ家が破壊されてしまい燃えている人型の敵が現れた、

セオドアの配下か？

2人は敵に気づかれないように先に進む、

そして着いた、

地面に隠されているエスメラルダの隠れ家に入る、

中に入るとすぐに目に入ったのはC4やら重火器やら、

女兵士か、

エスメラルダからマイラの計画を聞いた、

メビウスを壊滅させる、

そしてリリーを救うと、

そのためにエスメラルダ、

キッドマン、

そしてセオドア・ヴォレスが協力したと、

セバスチャンはユキコに連絡する、

だが連絡がつかない、

オニールにも連絡をするも同じく連絡が取れない、

キッドマンに連絡してエスメラルダと合流したこと伝える、
だが作戦のことは伝えない、

セバスチャンはユキコの元に向かった、

ユキコの部屋に入る前の通路はロウソクで埋め尽くされていた、

セオドアが来ていた証拠だ、

ユキコの元に向かうも誰もいない、

通信機からユキコの声が聞こえた、

そして机にこの脊髓の地図がある、

会話の内容と地図を見るとどうやら立入禁止区域に向かったようだ、

セバスチャンはそこに向かう、

立入禁止区域に向かったセバスチャン、

奥に進むとある部屋からユキコの声が聞こえた、

セバスチャンは銃を構えて入ると火炎放射器を持ったマスクの男とユキコがいた、

セバスチャンは男を撃とうとするとユキコに男がオニールだと言われる、

オニールがセオドア様と口ずさむ、

洗脳されたのか？

オニールはセバスチャンに火炎放射器を放つ、

セバスチャンは扉の外に出た、

オニールはその後を追う、

セバスチャンは銃を撃とうとするも炎が邪魔してくる、

セバスチャンは部屋の中を走り回る、

途中スプリンクラーはあることに気づいて装置を探す、

装置を見つけてスプリンクラーを作動させる、

炎が消えて煙が立ち込める、

セバスチャンは背後からオニールに忍び寄る、

オニールはセバスチャンに気づいていない、

セバスチャンはオニールの背中にナイフを刺す、

オニールは気づいたがセバスチャンはもう一度刺す、

オニールは振り向いたがセバスチャンはショットガンを至近距離から撃つ、

オニールは仰け反り怒りからなのかマスクを外す、

セバスチャンは一度逃げ、

そして遠くからオニールの背中のボンベに向けてスナイパーライフルを構える、

オニールは再びセバスチャンを見失う、
セバスチャンは撃つ、

ボンベが爆発してオニールが吹き飛ぶ、
壁際に吹き飛び倒れる、

セバスチャンはオニールに駆け寄り、

オニールはセオドアの言葉により精神を支配されたとのこと、

そして救い出してくれてありがとう、

オニールは奥にセオドアに爆発をさせられていた物があると叫び息を引取った、
セバスチャンはオニールの火炎放射器の部品を取った、

セバスチャンとユキコは奥に向かい謎の装置の前に来た、

その他別の部屋にオニールが開発していたであろうものがある、

セバスチャンはエスメラルダに連絡してここにくるように頼んだ、

しばらくしてエスメラルダが来た、

エスメラルダはC4を機械に設置する、

ユキコはオニールの開発していたであろうものを仕上げると言って出て行った、

2人はC4を起動する、

爆発と同時に2人はどこかに飛ばされた、

そこにはセオドアがいた、

そしてリリーも、

だが様子が変だ、

リリーがセバスチャンにかけよるとセバスチャンが燃え上がる、

炎の原因はリリーだ、

だがなぜ？

セオドアはセバスチャンの心の中にある恐怖と言う、

まさか家が焼けた時の、

リリーを火事から救えなかったことか、

セバスチャンは倒れてリリーはセオドアの元に戻る、

セオドアがセバスチャンに近寄る、

セバスチャンは銃を突きつけるも狙いが定まらない、

セオドアが近寄るセバスチャンは撃つ、

だが、

撃たれたのはセオドアではなくエスメラルダだった、

エスメラルダは腹部を抑える、

セバスチャンはそこで気を失った、

途中目がうつすらと開いた、

エスメラルダに担がれている、

セバスチャンに声をかけながら、

腹部に傷を負いながら、

セバスチャンは再び気を失う、

また目が開く、

次は敵に囲まれていた、

エスメラルダは撃つ、

だが敵に斬られたり殴られたりする、

だがそれでも戦う、

セバスチャンは再び目を閉じた、

そして、

セバスチャンが完全に目を開けた、

起きるとユキコがいる、

その隣のソファには体を隠された誰か、

その横にエスメラルダの使っていたアサルトライフル、

エスメラルダが死んだ、

セバスチャンをここに運んで、

ユキコは話した、

セバスチャンの家に火をつけてリリーを攫ったのはエスメラルダであると、

だが罪の意識が日に日に彼女を襲った、

そんな時にマイラからリリーを救うために声をかけられてそれに参加、

だが状況は悪くなる一方、

そんな時にセバスチャンと出会った、

自分の罪滅ぼしのためにセバスチャンを救った、

ユキコは小型安定化装置があると言った、

オニールが作っていたやつだ、

セオドアはあるところに立てこもっているが炎が邪魔で通れないとのこと、

そこで出てくるのはこの安定化装置、

これを使うと小規模だが炎を遠ざける、

セバスチャンはエスメラルダのアサルトライフルを手に取り動き出す、

途中忘れられていたサイクスから連絡があった、

どうやらSTEMから出る方法がわかったと、

セバスチャンは先にそっちに向かった、

途中セオドアに洗脳された人達を倒してボンベを手に入れる、

セバスチャンはそれで火炎放射器を作り出す、

サイクスのところに向かったセバスチャン、

サイクスはここから入れる脊髓の中の敵を倒してほしいと依頼される、

そうすれば周囲の安全が確保できる、

セバスチャンは脊髓に入った、

敵を全滅させる、

セバスチャンはサイクスに連絡を入れる、

サイクスは装置のセッティングをしている、

その時話していた、

自分はメビウスに自分から入った、

強大な組織だから歴史に名前を残せるからだ、

立証されなければ犯罪ではないと、

なんだ、

死体が出なければ殺人にはならないと言う言葉の親戚か？

サイクスが装置のセッティングを終わらせてセバスチャンに使い方を教える、

これで出られると、

サイクスは装置に入る、

装置というより浴槽だな、

そして煙に包まれてサイクスは姿を消した、

セバスチャンはそれを見届けた後、

突然音声ログが流れた、

この装置の感性が中止、

理由は実験を行った4人の内1人しか生還しなかった、

残りの3人は消えたまま戻らなくなったとのこと、

確率は4分の1、

セバスチャンはサイクスが無事戻れたことを祈った、

セバスチャンはホテルのロビーに来ていた、

ここからセオドアのいるところまで目と鼻の先だからだ、

そこにユキコを呼ぶ、

ユキコが来る間セバスチャンはワークベンチで銃弾やボルトを作る、

ユキコが安定化装置を抱えてやってくる、

少し休んで2人はセオドアのいる城に向かった、

安定化装置をユキコが起動する、
するとユキコを中心に円が広がる、

だが小さい、

約5メートル位か、

炎の中に入る2人、

炎は消えるが後ろを見ると再び炎が出てくる、

もう後には戻れない、

敵が炎の中から来る、

前から、

後ろから、

左右から、

絶え間なく襲いかかって来る、

城まであと少しのところまで後ろから敵が走り寄ってきた、

2人は走る、

もう少しで到着にところでユキコが敵に襲われる、

安定化装置を落としてしまい壊れる、

一気に炎が襲って来る、

セバスチャンはユキコを助けようとするがユキコは先に行ってリリーを救ってと言
い炎に包まれる、

セバスチャンは弾かれるかのようにセオドアの城の中に飛ばされる、

扉が閉まりセバスチャンは先に進む、

敵から隠れて時に倒して奥に進む、

そして、

再びセオドアと対面する、

セオドアは再びリリーに駆け寄せさせる、

セバスチャンは自分からリリーに近寄りリリーを抱きしめる、

次は助ける、

愛していると、

どうやらトラウマを乗り越えたいらしい、

リリーが消えてセオドアは次のトラウマを出した、

場所が変わり、

場所はどこかの通路、

いや、

あの時の精神病院の通路、

背後からあの大男がチェンソーを持ってくる、

セバスチャンは逃げる、

そして振り返ると奴がいない、

そして前からチェンソーの音、

セバスチャンは今度は逃げないと言い近くにあつたタンカーを蹴る、

タンカーが大男に飛ぶも大男はチェンソーでそれを切る、

だがセバスチャンはいない、

セバスチャンは背後から大男の首筋にナイフを刺す、

大男はチェンソーを落として動かなくなる、

セバスチャンはチェンソーを持ち大男に向かって斬りかかる、

大男は腰の鉋で受け止めるがチェンソーには負けた、

大男がチェンソーで斬られる、

そして大男が死んだ、

セバスチャンはチェンソーを投げ捨てると次の場所が変わる、

そして、

目の前にはあの金庫男、

セバスチャンは逃げながら撃つ、

金庫男は止まらない、

セバスチャンはアサルトライフルを撃ちながら後退、

金庫男はハンマーで殴ってきたり袋で殴りつけたりする、

セバスチャンは手を休めず撃つそしてついに倒れる、

また場面が変わった、

次はあの女の声、

貞子、

セバスチャンはショックボルトを放ち動きを止める、

その隙にバルブを回す、

貞子が動き出したため再びショックボルトを放つ、

動きが止まる貞子、

セバスチャンは別のバルブを回す、

そして装置を操作すると天井から炎が出てくる、

貞子は苦しむ、

セバスチャンは火炎放射器を構えて貞子に当てる、

貞子が苦しむ、

セバスチャンは火炎放射器を貞子の浴びせ続ける、
貞子が暴れるように動くとセオドアの姿が変わる、

セバスチャンが勝った、

場所が変わり廃墟が変わる、

セオドアが誰かに刺されたセオドアの背後にマイラがいた、

マイラはリリーを守ると何度も口ずさむ、

そのマイラが背後からセオドアに刺される、

セオドアは不敵に笑うがマイラに顔を刺されて灰となる、

そしてマイラは消えた、

セバスチャンは外に出る、

そこは朝日がのぞかせる崩壊した世界、

セバスチャンはマイラを追うと砂漠に出た、

マイラとキッドマン、

そしてセオドアがメビウスを壊滅させる話し合いをする残留思念が映る、

そしてセオドアの裏切り、

セバスチャンは走る、

そして、

見覚えのあるところに着く、

セバスチャンの家、

燃えた思い出の家、

そこにマイラがいた、

ここでリリーと暮らすと、

セバスチャンと一緒に帰ろうと言う、

マイラは聞いていない、

それどころかセバスチャンに襲いかかる、

セバスチャンは銃を構えて、

「こんなことをさせるな！」

そう言い発砲する、

マイラの顔から赤い目が大量に出てきて液体に変わる、

セバスチャンは吹き飛ばされて巨大な敵と対立する、

セバスチャンはスナイパーライフルを構えて撃つが効果がない、

だがセバスチャンの経験上異様に光っている場所に銃撃すると効いた、

巨大な敵は腕で叩きつけて来る、

そして地面が揺れる、

セバスチャンはよろめく、

その時巨人に掴まれる、

セバスチャンは撃つ、

異様に光る場所を、

腕が壊れてセバスチャンは再び撃つ、

体が崩壊していき巨人は地面に沈みながら消える、

セバスチャンは辺りを見渡す、

地面から手が伸びていた、

セバスチャンはその手を引っ張る、

そこからマイラが出てくる、

マイラはセバスチャンにリリーが待っていると伝える、

セバスチャンはマイラを背負って家に向かった、

セバスチャンはマイラを入り口に座らせてリリーのいるであろう2階に向かった、

2階のリリーの部屋、

セバスチャンは入る、

リリーはベットで眠っている、

セバスチャンは優しく抱き上げて1階に向かう、

マイラがセバスチャンに向かって早く行ってと言う、

セバスチャンは一緒に出ようと言うがマイラはここでリリーの代わりにコアになる
と言う、

セバスチャンは言葉を言おうとしたがマイラの口づけにより言えなくなった、

そしてマイラの愛していると言う言葉を最後にセバスチャンは走り出した、

「リリー、セバスチャン、二人とも、愛している」

その声がセバスチャンの背中から聞こえて気がした、

セバスチャンは走り光っている場所に走る、

そこはオフィス、

セバスチャンのオフィスだった、

崩壊する世界、

床が崩れていく、

セバスチャンは鏡に向かって手を伸ばして、

セバスチャンは現実に戻った、

キッドマンがそばにいた、

周りには撃たれたメビウスの職員、

何があつたのかわかる、
反乱、

キッドマンがマイラの言つていた反乱を起こした、

そしてキッドマンはセバスチャンを装置から出して機械を操作する、

中央の機械が動いて中から液体が出てくる、

そして、

中に少女がいた、

リリー、

セバスチャンはリリーを抱きしめる、

リリーは目を開ける、

まずは周りを見渡した、

おそらく母親を探しているのだろう、

だがないとわかり少し落胆する、

だがセバスチャンを見て笑顔を見せる、

3人はこの施設から出るために歩き出した、

それからキッドマンの助けを借りてセバスチャンとリリーは旅立つ準備をしていた、

そして車に積んでセバスチャンはキッドマンと別れの挨拶をする、
リリーも挨拶をして車に乗り込んだ、

セバスチャンもキッドマンに感謝と別れを伝えて車に乗り込み走り出す、
そこで記憶が終わった、

クリス「セバスチャンも俺らと変わらない戦いをしていたんだな、」

ジル「自分の子供のために危険を冒したのよ、父親の鏡よ、」

俺は周りを見るとプリンツが泣いている、

プリンツ「リリーさんのお母さんが、お母さんが・・・」

セバスチャン「なぜ泣いているんだ？」

プリンツ「セバスチャンさんは悲しくないんですか？」

セバスチャン「悲しいさ、また家族3人で一緒に居られると思ったからな、だがマイ
ラが自分を犠牲にしてまであの子を俺に託した、俺はそれに応えるためにあの子を育て
るつもりだ、」

プリンツ「セバスチャンさん、」

セバスチャンの決意は固いようだ、

大切な人が死ぬのは辛いことだ、

俺も何人も失ってきた、

セバスチャン「ステイプ、もういいか、」

ステイプ「大丈夫です、ありがとうございます、今から夕食ですがみなさん食べれますか？」

ステイプ、

お前は鬼か？

あんな映像を見せられて食事が食べれるわけないだろう、

結局この場にいた全員が食事の時にお粥を食べた、

ジュリアン・サイクス1

夜、

俺はステイブのいる執務室に向かった、

クリスからステイブがサイクスを見て反応したと聞いたからだ、

俺は執務室の扉を叩いた、

ステイブ「どうぞ、」

セバスチャン「入るぞ、」

俺は中に入った、

セバスチャン「ステイブ、聞きたいことがある、」

ステイブ「サイクスさんの事ですね、俺もセバスチャンさんの記憶を見て驚きました、」

セバスチャン「聞かせてくれ、なぜお前がサイクスを知っているのか？」

ステイブ「サイクスさんは前元師です、」

ステイブは本棚の所に移動する、

本をどかして奥に手を伸ばす、

そこから酒の入ったボトルと一冊のノート、
ステイブ「サイクスさんが誰かに残していたボトルです、その誰かはセバスチャン
さんでしたか、」

確かに、

脊髄から戻るとメモがあり元の世界に戻ったら一杯奢らせてくれと書かれていたな、
セバスチャン「そのノートを読ませてもらってもいいか？」

ステイブは俺にノートを渡してくれた、

内容は、

あの装置で元の世界に戻ろうとしたがこの世界に来てしまったと、

そこで日本軍に拘束された、

当時戦時中でアメリカと戦っていた、

サイクスは拷問されていた、

何度も何でこうなったか自問自答していた、

サイクスはある日拘束を解かれた、

理由はアメリカの情報を手に入れるために英語を話せる奴が必要だったからだ、

無線を傍受して身振り手振りで教えるサイクス、

サイクスは開き直って生きるためにやれることをやろうとしていた、

それが数年続いて、

状況が一変した、

深海棲艦、

そいつらが現れて日本軍もアメリカ軍、

それだけではなく各国が深海棲艦により軍が壊滅、

サイクスのいた場所も大打撃を食らった、

日本軍からは兵器が効かないと報告を受けた、

その事で国同士が争っている場合ではないとわかった、

そんな時にサイクスは戦艦を作る工房で見かけない装置を見かけた、

その装置は他の軍人も知らないと言葉は通じなくても身振り手振りで教えてくれる、

サイクスはその装置を調べてSTEM内で使っていた物も使い何かがわかった、

なにかを作る機械だった、

そしたらマスコットののような小人が出てきて説明してくれた、

この中に資材を入れて時間を置くと艦娘が出てくると、

日本語で話しているはずなのにどうすればいいかわかったと書かれている、

サイクスは小人の言う通り資材を入れた、

そして機械に数字が出てきてカウントダウンが始まった、

5 時間、

サイクスは長いと思つていたと書かれている、

小人は更になにかを入れた、

高速建築材と言うものを入れたらカウンターが一気に0になった、

そして蓋が開くと中に美少女がいた、

その子が突然金剛型一番艦金剛と意味にわからない事を言った、

嬉しいことは彼女は英語と日本語の両方話せることだと書かれている、

サイクスの姿を見るや否やすぐに抱きついてきたためサイクスはすぐに引き剥がして金剛と名乗る女性に誰なのか聞いた、

英語で帰ってくる返事に泣きそうになったとサイクスが書いている、

他の人の口から母国の言葉が出て感動したんだろう、

金剛は高速戦艦であること、

そしてサイクスが提督であること、

小人が妖精さんであること、

その時再びこの場所に深海棲艦が現れた、

金剛は一人で立ち向かう、

サイクスは止めたが金剛は止まらずに海に浮いた、

その時の光景が信じられなかったと書かれている、

まあ海に人が浮いている時点でSTEMか何かと連想してしまったんだろう、

その上砲撃を行い深海棲艦を退けた、

それを他の軍人に見られた、

日本軍人は説明を要求された、

しかし日本語を話せないサイクスにとって説明ができない、

だが金剛が通訳した、

初めは金剛を警戒していたが深海棲艦に対抗できると聞いてやる気が出てきた、

だが金剛は妖精さんが見えないといけなと言われる、

サイクスの頭に妖精さんに乗せて見るも誰も見えていない、

サイクスは日本初の提督になった、

海で戦うため艦娘達と共に生活する基地を鎮守府と呼ぶようにした、

それから、

金剛を秘書艦にして建造していく、

長門に暁、

大和を建造する、

戦いをして戦果を挙げる、

喜び宴を開いた時もあり、

艦娘の一人が轟沈して泣いた日もあると、

ある時妖精さんから指輪を貰った、

そして結婚しなさいと言われ混乱したと、

初代妖精さんはそんなこと言ったのか？

サイクスは金剛に指輪を渡したらしい、

そして子供を作り艦隊を指示しながら生活していた、

そこで問題が出た、

少なからず妖精さんが見える人が出る、

その人が提督になるがその提督をまとめる人物が必要だった、

サイクスはそこで自分が元師になると決めた、

そうしてよく他の鎮守府に赴き悪事などを暴いていった、

そんなある日、

日付が19年前、

ステイブとロドリゴを拾ったと、

こここの世界の人ではないとのこと拾った、

それと同じアメリカ人だからだろう、

ステイーブはまだ精神的に子供でどうもチャラチャラしていると、

ロドリゴは納得して清掃やら料理やらしていると、

だがステイーブは力が強く艦娘でも持てない重量のある物資を持って行けるため明石に頼み脚のみの艦装を作ってもらう、

ステイーブは嫌々他の艦娘と一緒に資源を取りに行ってもらう、

大和をステイーブの世話係にしよう、

なぜか彼は大和の言葉を素直に聞く、

ロドリゴは間宮とよく話す、

寡黙な彼は間宮とならよく話している、

料理をお互いにするからか、

そして数年の時が経ち、

ロドリゴが間宮に指輪を渡した、

意外だった、

俺はもう歳だ、

ステイーブはよく他の艦娘と一緒に出撃している、

艦娘の評判はここにきた時より上々、

更にサイクスの仕事も見ているから次の元師に任命した、

ステイブは初めては無理と言ったが説得した、
そしてサイクスは金剛と一緒に退職した、

最後のページにこう書かれていた、

俺を助けてくれた彼の約束を果たせなかった、もし来るようであるならその時の約束
を果たそう、その時は俺は飲めないだろうが貰ってくれ、

それがあのボトルか、

俺はノートを閉じた、

セバスチャン「サイクスは今どこにいるんだ？」

ステイブ「会いに行くのですか？」

セバスチャン「ああ、娘と一緒にな、」

あいつにも世話になったからな、

ステイブ「わかりました、場所は紙に書いておきます、みなさんが今回の件を終わ
らせて向こうの鎮守府に着いてから向かってください、」

そうだったな、

俺らはあの化け物を倒しに行つてその後鎮守府に行くんだったな、

セバスチャン「わかった、ありがとう、」

俺はボトルを持って部屋を出た、

この酒はあいつと再会してからの
お楽しみだな、
俺は自室に戻った、

海底の女王

朝起きて俺はすぐに工房に向かった、

明石が机に突っ伏して寝ている、

その横には酸素ボンベが数本、

それとウエットスーツ、

4着、

あの映像を見た後作ったのか、

さすがだな、

明石は目の下に隈を作っている、

徹夜したんだな、

俺は近くにあつた毛布を明石に掛けた、

寝かしておこう、

俺は食堂に向かった、

間宮がロドリゴと食事の準備をしていた、

ロドリゴ「クリス、いよいよだな、」

クリス「ああ、食事の後準備を始める、」

間宮「私は何もできませんが美味しいお料理をお出ししてお見送りをします、」

俺は魚定食を食べた、

今から海底に潜るのに魚料理とは、

それにしても箸を出すのは癖か？

まあ害はないがな、

食後明石用の食事を持っていき工房のアイテムボックスに向かい準備を始めた、

パルスグレネードを絶対に持っていかないといけない、

水の中では銃撃はできない、

他のグレネードも火薬が濡れると起爆しないことがある、

まあ無限だから起爆しなくても痛くも痒くもない、

ペイルライダーとハイドラ、

ロケランは重いから要らない、

ガトリングもだ、

海に沈む、

俺の勘だが船があるんじゃないか？

沈没船、

クイーンデイド、

そう考えると深海からくるのが説明がつく、

サムライエツジも持って行くか、

準備をしていくとセバスチャンがやってきた、

セバスチャン「クリス、早いんだな、」

クリス「ああ、今から決戦に行くんだ、一度戦った相手だが同じ戦法を取れるかわからない、しっかりと準備をしないといけない、」

セバスチャン「そうだな、俺も準備しておくか、」

クリス「本当に行くんだな、」

セバスチャン「なんども言わせるなクリス、乗りかかった船だ、それにあんな危険な奴がいるとリリーが海で遊べなくなる、」

父親しているな、

ヴェルト口も子供のために倒されるなんて思わないだろう、

セバスチャンはワークベンチに向かい明石が置いておいたであろう材料で何かを作り出した、

クリス「セバスチャン、昨日ステイプに会ったのか？」

セバスチャン「あつたぞ、そして欲しい答えが返ってきた、クリス「そうか、」

俺はそれ以上聞かなかった、

俺の準備が終わった頃ジルが来た、

ジル「早いわね、」

クリス「セバスチャンと同じ事を言ってるぞ、」

ジル「あら、デジャヴって奴ね、」

この空気と会話は本当に戦いに行く雰囲気なのか？

俺の準備が終わるとジルが準備を始めた、

ジルは村正とハイローラー、

電撃グレネードとグレネードランチャーに炸裂弾、

それと救急スプレーとエリクシール、

クリス「意外と持つて行くな、」

ジル「相手は何かわからないわ、ノーマンかも知れない、でもそうじゃないかも知れない、イレギュラーが来ても対処しないとイケないのよ、」

一理ある、

だが浮上出来るのか？

クリス「グレネードランチャーは俺が持つておく、海底に着いたら渡す、」
ジル「あら優しいのね、」

ジル、

俺はそんな気遣いできない男に見えていたのか？

ジルの準備が終えるとステイブと大和が来た、

ステイブ「どうやら俺が最後のようですね、セバスチャンさん、リリーさんはどちらに？」

セバスチャン「リリーはプリンツに任せて来た、リリーには明日戦いに行つてくると伝えた、泣かれたが一緒に寝てあげて満足しているようだった、」

そうだな、

セバスチャンはリリーを救つた後にこれに巻き込まれた、

本当は今頃新しい家で親子水入らずだったはず、

ステイブ「そうですね、」

クリス「ステイブ、俺らが行つた後もしかしたらこつちにあいつらが攻めてくるかもしれない、お前は残つてもいいんだ、」

ステイブ「大丈夫です、昨日ロドリゴと大和にここの指揮をお任せしました、ロドリゴは元軍人です、それに俺の妻も付いています、一気に千という数に敵が来ない限り

大丈夫です、」

用意周到だな、

ジル「大和、ステイブは無事帰還させるわ、」

大和「はい、元師様を、夫をお願いします、」

セバスチャン「準備ができた、ステイブ、お前は大丈夫か？」

ステイブ「問題ありません、俺はこいつだけで十分です、」

あの巨大で重たい斧、

沈むって、

ステイブ「沈みません、昔一度これを持ちながら沈みましたが浮上はできました、そ

の後あの子達に怒られました、」

クリス「そうか、」

ベロニカウィルスの力か？

わからんが問題はないようだな、

そうこう話しているとジルがウエットスーツに着替えていた、

いつの間に？

ジル「クリス、私の着替えを見たかったかしら？」

クリス「ジル、茶化すな、だがいつの間に着替えた、」

ジル「女には秘密があるのよ、」
教えてくれないわけだ、

俺とセバスチャンとステイブは個室に向かい着替えに向かった、
着替えてを終えて戻ってくる、

動きに障害はない、

明石は本当にいい腕をしている、
うちの技術班に欲しいくらいだ、

ステイブ「案内はイムヤに頼みます、」

クリス「いや、その後どうする、イムヤ一人だけ返すのは危険すぎる、」

女にはグロテスクなB・O・W、

イムヤに襲いかかって来たらうまく逃げ切れるか、

ジル「そのまま連れていきましよう、クリスの言う通り相手は泳ぐことに特化した相手よ、ボスは泳げないけど、」

ステイブ「ですが足手まといになるのでは？」

セバスチャン「俺らで守ればいいだろう、できないわけじゃない、クリス達の時は2人だけだったが今は4人だ、十分出来る、」

セバスチャン、

いいこと言う、

あの時は俺とジルだけだった、

だが今回はステイブとセバスチャンもいる、

クリス「わかった、イムヤには悪いがそうしよう、」

ステイブ「イムヤを説得して見ます、」

ジル「無理やりはダメよ、嫌がる子連れて行けないわ、」

ステイブ「分かっています、」

ステイブはイムヤの元に向かった、

しばらくして、

イムヤが来た、

その表情は暗い、

クリス「イムヤ、いいのか？無理はいけない、」

イムヤ「本当は嫌です、怖いですが元師様が出撃します、本当は私たち艦娘の仕事なのです、元師様だけでなくクリスさんやジルさん、セバスチャンさんも出ます、ですから私も行きます、あんな奴らに怯えて入られません！」

戦士の目だな、

クリス「わかった、イムヤ、俺たちから離れるなよ、」

イムヤ「はい！」

ステイブ「大和、頼みました、」

大和「無事に帰還して来てください、」

ステイブは海に降りた、

俺やジル、

セバスチャンも降りる、

イムヤが最後に降りて俺達は目標地点に向かった、

妨害もなく到着した、

深海棲艦の群れと戦った場所でありTーアビスを見つけた場所、

ステイブ「イムヤ、案内頼みます、」

イムヤ「わかりました、それと皆さん、水中は私は喋れますが皆様は喋ることはできません、筆談かジェスチャーで対応をお願いします、」

クリス「わかった、筆談は無理だが敵が来たらパルスグレネードを投げて知らせる、」

イムヤ「では行きます、」

イムヤが海に潜る、

俺達は酸素マスクを装着してイムヤについて行く、

ゴースト越しの海の中は美しいと言える、

この前の戦いが嘘のように、

血も薬莖もない海、

名前まではわからないが魚も泳いでいる、

イムヤを先頭に俺達はゆっくりと海底に潜って行く、

真つ暗だがイムヤには見えているのか？

そう思いながらも俺達は海底に潜って行く、

どれくらい潜ったのか、

時間の感覚がわからない、

太陽の光も届かずウェットスーツに付いているライトが先を見るために必要な光だ、

その時、

イムヤ「皆さん！この先に大きな船が沈んでいます！」

イムヤの声が聞こえた、

今まで無言だったが水の中でも声が響く、

俺らはイムヤの元に来た、

そしてその先にライトを当てる、
うっすらだが船が見える、

あの輪郭、

間違いない、

クイーンデイドだ、

俺は手を動かして向こうに行くとか合図をする、

皆が頷きクイーンデイドに向かう、

何も邪魔がない、

不自然だ、

ここまできると妨害があってもいいはず、

俺達がクイーンデイドにたどり着く、

全員で周りを泳ぎ入り口を見つける、

俺がハンドルを回して他の皆が警戒をする、

扉がゆっくりと開くと中からB・O・Wが出てくる、

このタイミングで！

俺はパルスを投げる、

パルスは少しして爆発して周りに衝撃波を飛ばす、

その衝撃波で敵は怯み動きを止める、

だがイムヤにも聞いたらしく耳を押さえている、

海上ではそんなことなかったのに、

海だと響きやすいのか？

俺はイムヤを横抱きにしてクイーンデイドに入る、

俺の後を皆が続いて入る、

ステイプに至っては斧で敵を斬って入ってきた、

水の中でもあれだけ勢いよく斬れるのか、

俺は念のためにパルスを入れて来たところに投げて先に向かう、

パルスが爆発してイムヤが耳を塞ぎながら涙目になっていた、

水中を進む俺ら、

その間に敵は来たがセバスチャンのマインボルトが射出されてゆっくりと敵に向か

う、

マインボルトがマリモみたいに浮いていて敵がその近くにくると爆発して釘を勢

いよく周りに撒き散らす、

機雷か、

だが俺らにも当たる、

ウエットスーツが破れたら戻れない、

セバスチャンには使用を控えてもらおう、

先に進むとハシゴがあり水上に出てる場所に辿り着いた、

俺が先に上がり周りを確認する、

あの時と一緒だ、

構造も全く一緒だ、

俺はイムヤを抱えながら上がる、

ジル、

ステイプ、

セバスチャンの順に上がってくる、

俺らは酸素ボンベをこの場に置き銃を構える、

ジル「全く構造が同じね、」

クリス「こいつもこつちに飛ばされて来たのか、」

セバスチャン「だが構造が一緒なら迷うことないだろう、道案内頼んだぞ、」

たしかに、

その方がこちらとしては都合がいい、

俺を先頭に先に進むことになった、

誰もいない、

あの時と同じか、

大きなテール、

ロウソク、

そして映写機、

まだ回せるのか？

俺は回してみた、

案の定回った、

だが内容が違った、

「これを見る奴がいるとは思わない、だが記録として残しておこう、わしの名はジャック・ノーマン、かつてヴェルトロと呼ばれた男だ、」

やはりノーマンか、

「わし自身何を言っているのかわからないがわしは死んだ、モルガン（バイオハザードリベレーションズ）に送られてきた奴らによって、」

俺らのことか、

未だにモルガン・ランズデイルの仲間と思っているのか？

「だがわしは死んでいなかった、この船とともに、」

ジル「その会話の様子だとノーマン自身こっちにきた理由がわからないようね、」

「わしはここで再びアビスを入ってきた生物や白い肌の人型に投与してみた、案の定感染して化け物になった、わし自身アビスに感染して空腹も疲労も感じない、なぜここにいるのかわしにはどうでもいい、わしがやることはただ一つ、モルガンに復讐すること、わしを殺して映像を奪ったあの男に、」

セバスチャン「空腹も来ないからここに引きこもってしまったわけだ、だからこの世界の事情も知らないで深海棲艦の事も白い肌の人型と言ったわけだ、」

「さて、もうフィルムはないようだな、どうせわしはここを動けん、これを見る奴もいない、もしこれを見る奴がいるならそれはモルガンを殺した後だ、」

ノーマンはそういうと電源をきった、

ジル「モルガンのせいで異世界の住民がとばちりを食らうわけね、みんな、ノーマンを止めるわよ、」

クリス「言われなくてもそのつもりだ、」

イムヤ「絶対に倒しましょう！」

セバスチャン「流石に引きこもりのジジイに殺されるのはごめんだ、」

ステイブ「そうですね、倒しましょう、帰りを待っている人達のために、」

俺達は奥に向かう、

そこには広い祭壇と奥に椅子があり、

あの時と同じようにノーマンが座っている、

ノーマン「来たか、モルガンの犬よ、」

クリス「残念ながら俺はモルガンの部下じゃない、」

無駄だと思いが話して見る、

ノーマン「殺したと思っていた相手が生きていて驚いているだろう、わしはお前を殺すために長い間準備した、」

やはり聞いていない、

ノーマン「既にお前の所に我が子達を向かわせた、以前その近くで我が子達がやられた、だが生き残りが帰ってきて場所を教えてくれた、今更戻っても遅い、既に到着しているだろう、」

挑発しているのか？

悪いが俺らにはそれを知らせても意味がない、

鎮守府にはあいつらがいる、

鎮守府

長門「前方にB・O・W確認、全員一斉砲撃をせよ！」

ハチ「潜水艦娘は魚雷をありったけ放ってください、魚型が来ましたら陸に上がってください、陸に上がれば襲いかかって来ません、そこから小型主砲で砲撃してください、」

暁「水中から出てくる敵に気をつけなさい！引き摺り込まれたらもう戻ってこれないわ！昇龍拳で避けるなり竜巻旋風脚で飛び上がるなり逃げて！」

雷「暁お姉ちゃん！波動拳なら水中にいる敵に届くよ！」

明石「怪我したり中破した子は戻ってきて私に見せてください！急いで応急処置をします！」

ロドリゴ「全員奴らをこの鎮守府に入れるな！」

天龍「俺の名は天龍！悪を断つ剣なり！」

龍田「これならどうですか、」

島風「みんな島風より遅い、三爪炎痕！」

大和「絶対に守ります！元師様の、みんなの帰る場所を！」

クイーンデイド、

ノーマン「さあ、ここまで来たんだ、わしもお前らを歓迎しよう、」
ノーマンは立ち上がり豹変する、

あの時の姿になるノーマン、

肥大化して鋭くなった腕、

魚のヒレのような物が付いた背中、

そして、

幻惑を見せる一つ目、

ノーマン「さあ踊るがいい、女王の墓の中で！」

俺達は銃を構えた、

VS ジャック・ノーマン

ノーマンがいきなり目を光らせる、

クリス「気をつけろ！幻惑が来るぞ！惑わされるな！」

俺が叫ぶ、

光が収まり俺の目の前にノーマンが来ていて腕を上げていた、

俺は避けようとしたがイムヤが遅れていた、

陸上ではあまり機敏に動けないのか、

俺はイムヤを抱きかかえて横に飛んだ、

ノーマンの腕が振り下ろされる、

すごい衝撃だ、

イムヤ「クリスさん、ありがとうございます、」

ジルはハイローラーをノーマンの背中に撃つ、

ステイプはノーマンに斬りかかる、

ノーマンは腕で防ぐ、

あれを防ぐか、

俺はペイルライダーを構えるも奴の目が光った、
また幻惑か！

次はセバスチャンの後ろ、

クリス「セバスチャン！後ろだ！」

セバスチャンは慌てて避ける、

ノーマンの腕が再び地面に叩かれる、

セバスチャン「全く！幻惑は厄介だ！見るのと体験するのとは全然違う！」

セバスチャンはノーマンに向けてショットガンを放つ、

俺はハイドラを撃つ、

ノーマンが再び光を発して、

俺とステイブの前に出てくる、

ステイブは斬りかかるが空ぶる、

俺のところが本体か！

俺はノーマンの胸にハイドラを撃ち込む、

イムヤも俺に抱きかかえられながら小型主砲をノーマンに向けて放つ、

ノーマンがよろめき攻撃が中断される、

ステイブはその隙に斬りかかる、

ノーマンの足を斬り膝をつかせる、

ジルはその隙に近づいて蹴りを行う、

ノーマンは後ずさる、

ステイブがノーマンに殴りかかる、

あの豪腕で殴られたらたまったもんじやないだろう、

ジルが最後に車輪脚をノーマンに与える、

流石だなジル、

ノーマンは壁際まで後ずさるが光を発して消える、

どこだ！

セバスチャン「みんな！上だ！」

セバスチャンの声に俺らは上を見る、

ノーマンが落ちてくる、

それ以前にどうやって上に飛んだ、

ノーマンは腕を叩きつけて船を揺らす、

大きく揺れる船で俺達はバランスを崩す、

ノーマンはその隙にステイブに近づいてステイブを殴り飛ばす、

ステイブ「がはっ！」

ステイプは壁際まで飛ばされて壁に背中を当てて地面に落ちる、

クリス「ステイプ！」

俺はハイドラを構えた、

だが奴は光を発すると同時に消えて俺の前に出てきた、

セバスチャン「こいつを喰らえ！」

セバスチャンはノーマンの足元にマインボルトを射出するが爆発しない、

まさか、

俺は後ろを見た、

ノーマンがいた、

くそっ！

偽物のせいで皆が俺の後ろにいた奴に気がつかなかったのか！

俺はイムヤを抱えたまま横に飛んだ、

ノーマンの叩きつけが俺のいた場所に目掛けて行われる、

だがセバスチャンのマインボルトが起動して爆発する、

ノーマンの体に釘が刺さる、

ジルはグレネードランチャー炸裂弾でノーマンに攻撃するがノーマンは光を発して

消えて炸裂弾は壁に当たる、

奴が出て来たのはセバスチャンの前、

セバスチャンはシヨックボルトに切り替えて放つも刺さらないせ床に落ちる、
幻惑、

偽物が消えて再びセバスチャンの前に出て来て振りかぶる、

だがそれも幻惑、

下手に撃つたらセバスチャンに当たる、

ステイプも空ぶつたらセバスチャンに当たる可能性があるため攻撃できない、
そして再び光を発してノーマンがセバスチャンの前に出た時に、

シヨックボルトが起動した、

高圧電流がノーマンを襲う、

ノーマンの動きが止まった、

ステイプはノーマンに向かっていき斧で背中を斬る、

背中に深々と刺さる斧、

俺はイムヤを下ろしてペイルライダーでノーマンの背中を撃つ、

ジルもハイローラーで撃つ、

セバスチャンは今のうちと言わんばかりにシヨックボルトを地面にばら撒く、

ボルトはノーマンの幻惑に引つかからない、

だから本体に当たる、

便利だな、

しかもなぜか俺らには発動しない、

本当に便利だな、

ノーマンは立ち上がり吼える、

どうやらキレたみたいだ、

だがどうするつもりだ、

シヨックボルトが地面にばら撒かれているぞ、

俺は攻撃の手を休める、

ノーマンは再び光を発して消える、

俺らは周りを見渡した、

そして、

奥の座っていた椅子のところに来ていてノーマンは椅子を砕いて投げて来た、

椅子のかけらは俺たちでなく別の所に投げられた、

まさか、

椅子の破片の先にはシヨックボルト、

椅子が当たりシヨックボルトは誘爆した、

セバスチャンが落ち込んだ、
ボルトは無限じゃないからな、

だがまずい、

ボルトの対策がとられた、

更にシヨックボルトがないようだ、

知性が少しでもあると厄介だな、

ノーマンは降りて来て再び光を発した、

俺の前、

イムヤが魚雷を投げた、

それ以前に投げたのか!?

俺はイムヤを抱きしめてノーマンに背を見せる、

それと同時に爆発して衝撃が俺を襲う、

俺はノーマンを見るとよろめいている、

俺はノーマンに近づいてアッパーをお見舞いする、

ノーマンがよろめく、

イムヤが再び魚雷を投げた、

イムヤ「陸上でも魚雷は使えるもん！」

そのセリフは1発目に言うもんだろ、

魚雷は爆発してノーマンがよろめく、

俺は正面から、

ジルは背後から、

ステイブが側面から近づいて俺はフィニッシュブロー、

ジルが円転脚、

ステイブが斧を軸にドロップキックを行う、

ノーマンがよろめく、

まだ倒せんのか、

ノーマンが突然消える！

何!?

光を発せずに消えた！

奴は学習しているのか！

俺がそう思っているとジルの背後に来ていた、

ステイブはジルを引き寄せる、

ノーマンは腕を勢いよく振り上げる、

だが消える、

次はどこだ！

イムヤ「キャツ！」

イムヤの前に出て来た！

しまった！

離れすぎた！

魚雷はあの距離じゃ投げられない！

ステイーブ「イムヤから離れろ！」

ステイーブが斧を投げる、

それがノーマンの背中に突き刺さる、

ノーマンはよろめく、

そして斧を払い落とす、

セバスチャンがボルトを射出、

どうするつもりだ、

そして爆発して周りに煙が立ち込めた、

煙幕ボルトか！

俺は口元を押さえながらイムヤの元に向かい抱えてその場から離れる、

相手も見えないが俺らも見えない、

突然ノーマンの雄叫びが聞こえた、

俺はジルとステイブの元に戻りイムヤを背中に隠して警戒する、

煙が消えて視界が良好になった、

ノーマンを探すとすぐに見つかった、

セバスチャンがノーマンの背中にしがみついてナイフを背中に突き刺している、

どうやって煙に中を動けたんだ、

ノーマンは目を光らせる、

セバスチャンは手を離して目を覆ったがそのせいで背中から降りた、

ノーマンは消えた、

セバスチャンの後ろに、

刺されたことがそんなに屈辱なのか、

俺はペイルライダーをノーマンに向けて放つ、

悪いが怒りは冷静さを失う、

フェイントも幻も使わずにただ背後に現れるだけなら狙われている本人以外の周り

にはバレバレだ、

ジルはグレネードランチャーを連射、

イムヤも魚雷を投げる、

ノーマンは火力に押されて後退する、
その背後に、

ステイブ「これで終わりだ！」

ステイブが斧を振り上げていた、

その斧がノーマンの頭に直撃して頭を潰す、

ノーマンは動かなくなる、

ステイブは斧を引き抜きノーマンを蹴る、

ノーマンは倒れて起き上がることはなかった、

クリス「終わったな、」

ステイブ「そうですね、これで海に平和が訪れます、」

ジル「2人とも、それはフラグと言うらしいわよ、最後まで気を引き締めて、」

フラグってなんだ？

そう思っているとノーマンに動きがあった、

体が膨れ上がりなにか出てくる、

セバスチャン「なにかやばいぞ！急いで外に出るんだ！」

セバスチャンが叫ぶように言い走る、

俺はイムヤを抱えて走る、

そして酸素ボンベの置いてあるところまで走った時に異変が起きた、船が揺れている、

俺は近くの部屋を蹴破って入り外の様子を確認する、

船が浮上している、

ステイプ「なにが起きていますか!?!」

ジル「わからないわ! ノーマンはなにか隠し球を持っていたのね!」

そうらしいな!

船はだんだん浮き上がりそして海面に出る、

クリス「イムヤ! この壁に魚雷を投げろ! 外に出るぞ!」

俺の言葉にイムヤはすぐに魚雷を投げる、

壁に穴が空き外を見る、

黒い何かが船を持ち上げている、

セバスチャン「飛び降りるぞ! このままここにいたら降りることができなくなる!」

セバスチャンの言葉に俺らは頷き空いた穴から飛び降りる、

酸素ボンベは勿体無いが仕方ない、

だが命は大事だ!

かなりの高さだが俺らは海面に降りた、

そして見上げる、

こいつはクイーンゼノビアから出るときに出て来た巨大B・O・W!

確かあいつはフナムシにT―アビスが感染したものだったな、

こいつがノーマンの死体から出てきた!?

あいつ体にフナムシを飼っていたのか!?

イムヤ「あんな物まで!」

ステイブ「一度撤退しましょう!今の装備で叶う相手ではありません!」

ジル「それは出来ないわ、私達がこのまま下がるとこいつも一緒に付いてくるわ、あの鎮守府にこの化け物を連れて行けない、」

クリス「そう言うことだ、イムヤとステイブは逃げろ、俺とジルとセバスチャンでなんとかする!」

俺はペイルライダーを構える、

セバスチャン「違和感なく俺に名前を出したなクリス!」

セバスチャンはスナイパーライフルを構える、

ジル「まあ私たちはアレらを倒す事を専門にしているからね、」

ジルはグレネードランチャーを構える、

ステイブ「皆さん、私は残ります、それでも身体能力はあります、」

ステイブが斧を構える、

イムヤ「私だって！私だって戦います！ここで逃げたくないです！」

クリス「呆れた、結局全員残ることになった、」

笑えるな、

クリス「さて、化け物退治に入ろうか、」

俺がそう言って奴に弱点である顔に狙いを定めた、

その時、

奴の顔に目掛けて何かが当たり爆発した、

砲撃!?

どこから、

俺は砲撃している方向を見る、

そこには、

暁「元師様！ジルお姉様！」

暁と雷と島風がいた、

どうやら向こうは危機が去ったようだ、

その背中にはRPGー7と4連装ロケットランチャーが背負われている、

更にその奥、

なにも見えないがそこから砲撃が来ている、

あの方向は鎮守府、

ステイープ「大和と長門が超長距離砲撃をしています、ロドリゴがスポッターをして、
て、」

あんな事も出来るのか、

ジルは暁から4連装ロケットランチャーを受け取る、

俺は雷からRPG-7を受け取り、

クリス「今度こそ、終わりにするぞ、」

それを奴に構えた、

そして、

放つ、

ロケット弾が全て顔に当たり、

主砲も当たり、

奴は粉々になり海に沈んでいった、

俺たちの戦いが1つ終わった、

模擬戦が激戦再び

奴を完全に倒しきった後、

俺たちは鎮守府に帰還した、

帰還した後は皆は宴のムードだった、

そうだな、

あんな化け物を倒した後だ、

多少は羽目を外しても大丈夫だろう、

俺はAW50を整備しつつ海を眺めていた、

時折セバスチャンやジル、

ステイプやロドリゴが来て食べ物を置いていく、

口に入れるたびにその美味しさが口の中に広がる、

流石間宮と伊良子だな、

その2人は現在フル稼働で働いている、

円香は料理の配膳で走っている、

そうして今日という日が終わった、

翌日、

俺は演習場に来ていた、

昨日の戦いでわかつた事、

老いには勝てないことだ、

格闘の威力が落ちていた、

俺も今は44だ、

奴との戦いは10年以上前だ、

全盛期はとうに過ぎた、

三島平八（PXZ）のように若返りの薬でもない限り全盛期には戻れない、

タバコも余程のことがない限り吸わない、

酒もあまり飲まない、

それでも今から体力が落ちていく、

そんな俺が以前倒した敵にも遅れを取りかける、

いかな、

俺は銃を地面に下ろしてまずは走り出す、

最低限の事はやらないといけない、

出来る限り維持できるように、

次はシャドウボクシングといこうか、

以前長門に目を瞑るなと言われたな、

俺は目の前にノーマンがいると仮定して格闘を行う、

攻撃を避ける、

それに合わせて殴りアッパーを行う、

だが俺のイメージだ、

俺の都合のいいように動く、

これでは訓練にならないな、

そう思っていると、

「またここで訓練をしているのか、」

長門の声だ、

俺は振り返ると、

クリス「・・・長門だよな、」

長門「そうだがどうした？」

クリス「服が変わっている、」

長門「ああこれか、改二という改修されたんだ、」

クリス「改二？」

聞いたことのない言葉だ、

長門「簡単に言うとは進化だな、先日の戦いで熟練度が上がり遂に近代化改修できたわけだ、能力も前の私と違い格段に強くなっている筈だ、」

クリス「そうなのか、だがそれでなぜ服装が変わる？」

長門「それは分からん、それに他にも髪色が少し変わったたり肌の色が変わる奴もいる、服装くらいで驚いていたらきりが無いぞ、」

艦娘に関して新しい事がわかった、

長門「クリスは訓練か？」

クリス「そうだ、昨日の戦いで自分が全盛期よりも弱くなっている事がわかったからだ、」

長門「老いだな、我々艦娘にはあまり縁のない事だが、」

クリス「らしいな、ノーマンは10年前に倒した相手だ、だが遅れをとった、力も弱くなったとわかった、改めて歳を取ったとわかったんだ、」

長門「辛いな、一度倒した敵に苦戦することは、」

クリス「だがそんな事は言ってられない、今後B・O・Wは手強くなっていく、老いを理由に戦えなくなつてはいけない、」

長門「偉いな、私は老いが来ない身だ、クリスの悩みは分からない、だがお前はそれでも戦おうとしている、私は偉いと思う、」

俺は思わず笑う、

クリス「悪くないな、こうやって励まされるのは、」

こうやって励まされるのはいつぶりだ？

今までは俺が励ます側だった、

新鮮だな、

クリス「長門、すまないが俺と格闘戦のみの模擬戦をしてくれないか？」

長門「いいだろう、この前はうやむやになっていたがこれで決着をつけよう、進化したビッグ7の力をその身に叩き込んでやる、」

なんだビッグ7って、

長門「艦装を取ってくる、クリスも取ってくるんだ、」

長門がそう言っ出て行った、

俺も明石の所から艦装を取りに行った、

遅れた、

明石が長門と戦うと知って興味を持ち出した、

幸い今回は純粹な格闘戦、

銃砲撃戦はない事伝えるも見ておきたいと言われる、

その為遅れた、

艦装を履き海に立つ俺、

長門はすでに腕を組みながら立っていた、

腰には砲撃用の砲台が付いている、

長門「弾は抜いてある、それに艦装は私の体の一部分のようなものだ、気にせず来るんだ、」

クリス「後で動きにくいと言うなよ、」

明石「2人とも、準備はいいかな？」

明石の言葉に俺は定位置に着いた、

明石「合図は私がするね、レディー、」

互いに睨み合う俺と長門、

明石「フアイトツ！」

明石の言葉に俺が動き出す、

長門に駆け寄る、

長門は腕を組んだまま動かない、

カウンター狙いか？

俺は長門に向かってストレートを放つ、

長門はその時動いた、

体を少し横にずらしてストレートを避けて俺の腹部に蹴りをする、

もろに喰らった俺はよろめく、

力が強くなっている、

これが近代化改修か、

だが負けられない、

俺は長門に近寄りアツパーを行う、

長門はそれをやすやすと受け止める、

だが俺は長門に蹴りを行う、

それも止められる、

長門は腕を思いつきり上に上げて俺を放り投げる、

俺はバランスを整えて着水する、

長門が動き出した、

俺に向かつて殴りかかって来る、

その鋭さは目より鋭い、

俺はそれを避けて長門の腹部に殴りかかる、

長門は俺の拳を受けても平然としている、

装甲というやつも強化されたのか？

長門の膝が俺に向かつて来る、

俺はそれを避けて殴りかかる、

長門は蹴りを俺に向ける、

俺の拳が蹴りにより阻まれる、

更に長門は俺に向けて回し蹴りを行う、

俺は脇腹に当たり吹き飛ぶ、

俺の格闘技とジルやシエバの格闘技を加えたような攻撃、

強い力と柔軟性を合わせた技、

俺は再び駆け寄る、

長門の蹴りが俺の顔に来る、

俺はそれを受け止めて強く掴む、

そして俺自身を軸に長門を回して投げる、

長門はバランスを整えて着水する、

俺は近寄る、

長門の顔にジャブをする、

長門はそれを顔に受けるも平然としている、

俺は次にアッパーを顎に向ける、

長門はそれを食らうも平然としている、

俺は長門の顔に何度もストレートを食らわす、

長門は平然としている、

長門が俺のストレートを掴み逆に顔に殴られ返される、

俺は後方に文字通り吹き飛ぶ、

何度も海の上で跳ねて転がる、

まさかここまで力の差があるのか、

俺は立ち上がる、

どうしたものか、

全く効かないとなるときついな、

ウエスカーとは違うもそれと同等の強さだ、

俺は長門に駆け寄り殴る、

長門はそれを受け止める、

だが俺は長門の手を掴み長門も俺の手を掴む、

そして長門が腰の艦装で俺を殴ってきた、

まさかそこでこいつが来るのか、

俺はバランスを崩してしまい手を離す、

長門は手をしっかりと握り自分を軸に俺を回し始める、

そして手が離されて俺は吹き飛ぶ、

俺が行なった時より遠くに飛ばされる、

俺は海の上を転がり立ち上がる、

俺は再び長門に向かう、

長門は俺に向かって来る、

速い、

あの時より速い、

長門が殴りにかかる、

俺はそれを避けて長門の腹部にストレートを放つ、

初めて長門の苦痛の顔を見た、

威力が高いと流石に痛みが来るか、

長門は蹴りをしてくる、

その蹴りは俺の腹部に直撃する、

かなりくるな、

俺は腹部を抑えてしまう、

長門は回し蹴りをしてくる、

俺が身を低くして避けた後長門に向けてアッパーを行う、

長門の腹部にアッパーが当たり長門はよろめく、

カウンター狙いだと気づかれてしまう、

俺は長門に向かい蹴りを行う、

だが場所は足に、

長門はバランスを崩す、

俺はバランスを崩した長門に向けてストレートを放つ、

長門の顔に当たるもやはり平気な顔をされる、

長門は俺に向けてジャブをする、

俺はそれを受け止めるも反動が強く腕を痛める、

長門は更に蹴りをしてくる、

俺はそれを後退して避ける、

だが長門はすぐに俺との間合いを詰めて俺の顔にストレートを放つ、

俺はそれをくらい倒れる、

俺は起き上がろうとするのだが力が入らない、

長門「すごいな、力が増した私の拳を喰らっても立ち上がろうとしている、だが勝負は見えているはずだ、まさかカウンターの威力がこれほどとは思わなかったがそれ以外は以前のようにはいかないだろう、」

長門の言うことはわかる、

向こうは力が数段上がっている、

それに比べて俺は何も変わっていない、

だが、

俺はふらつきながら立ち上がる、

クリス「それでも俺は諦めない、俺は死ぬかこの世からウイルスや寄生虫やらカビが消えるまで何度でも立ち上がる、そう決めた、」

B・S・A・Aを立ち上げたのは何のためだ、

生物兵器でテロを起こす奴らと戦うため、

長門「そう来ないとな、行くぞクリス！」

長門が来る、

俺は足をしっかりと海につけて長門を見る、

長門が殴って来る、

俺はそれを避けて長門の顔にストレットをする、

長門はそれをくらい後方によるめく、

俺は更に攻める、

長門も体制と整えて殴りかかって来る、

長門は俺の拳を食らうも俺に攻撃して来る、

顔や胸、

腹を殴り殴られる、

何度も何度も、

何度か意識を失いかけるも気合いで意識を取り戻す、

鼻から出る血が海に落ちて溶ける、

そして、

俺は倒れた、

長門に向かつて、

長門が俺を受け止めた、

長門「勝負は決まったな、」

上から長門に声が聞こえる、

クリス「ああ、俺の完敗だ、」

紛れもなく俺の負けだ、

もう立つことも出来ない、

長門「こんな風になるまでよく戦った、進化した私に喰らい付いた、私に苦痛を与えた、お前が最初で最期だ、誇りを持って、お前は今後厄介なB・O・Wと戦って行く、ここでの敗北を糧にして前に進むがいい、だが私以外で負けることは許さん、クリス、今後お前は私以外に負けるな、必ず勝ち続ける、」

長門は俺の肩に手を回して俺の手を肩に回した、

長門「明石、医務室の準備だ、念にために精密検査もしてくれ、」

明石「わかったわ、」

明石の声を最後に俺は意識を失った、

目を覚ますと真っ白な天井が目に入る、

「目が覚めたようだな、」

声が出た、

俺は声のした方向を見ると長門がいた、

長門「大した回復力だな、さすが隊長と呼ばれている男だ、」

クリス「ここは医務室か？」

長門「そうだ、気絶したのは覚えているな、」

クリス「ああ、どれくらい時間が経った？」

長門「もうそろそろ夕食の時間だ、それと明石からだだが骨や臓器に異常は無いが打撲

痕が目立つから今日一日絶対安静だと言っていた、」

あれで骨に異常はないのか、

俺の体も化け物じみてきたな、

長門「ジルやセバスチャンが見舞いに来ていた、後で礼を言っておくんだ、」

クリス「わかった、今日はありがとうな、」

長門「私もいい経験をした、人と艦娘、力の差があろうともあれだけいい戦いが出来

た、それに砲撃を放つだけが戦いではない、その事がよくわかった、」

長門が扉の前に移動して、

長門「私はもう行こう、明石も呼んでくる、それまで安静にしておくんだ、それに皆に起きたこと伝えて来る、」

そう言つて長門は出て行つた、

この後みんなから心配したの聲が上がるだろう、

だがそれも悪くない、

そう思っていると入り口が騒がしくなつた、

やれやれ、

俺は笑つてしまった、

出発、

長門に敗れてから3日経った、

明日が俺たちが務める鎮守府に向かう、

俺は執務室でステイブにそこにいる艦娘について聞いた、

そこには空母は加賀、飛龍、龍驤

重巡洋艦は高雄と愛宕、青葉と衣笠、

戦艦は霧島と長門、

軽巡洋艦は大淀、川内、神通、那珂、

駆逐艦は吹雪、白雪、響、電、朝潮、霞、

潜水艦は伊19のみ、

その他間宮と明石、

クリス「話し合いが出来そうな子はいいるのか？」

ステイブ「まずは空母の子達は貴方達と言うより提督という存在を否定すると思いません、今まで虐げられて来ました、性的虐待、暴力、更に食事や寝床もそうです、更に大破した状態での進撃、艦娘は大破したら力も今までより弱くなります、俺も新米提督

していた時は轟沈させてしまい何度も泣きました、」

クリス「過重労働だな、しかも死ぬまで、」

ステイブ「そうですね、次に戦艦の子ですが長門はここでの長門を思い出していただければわかりますが霧島は眼鏡をかけていかにも頭脳派ですと言ったような子ですが実は格闘戦が出来る艦娘です、」

クリス「意外に俺と気が合いそうだな、」

ステイブ「ひと段落したら格闘技を教えて見てはどうですか？重巡洋艦はおそらく何もしいないと思います、高雄と愛宕は姉妹艦で4姉妹の長女と次女、青葉と衣笠も姉妹艦です、ですが前の提督には高雄と愛宕は嫌な目に遭いました、」

クリス「どんなことされたんだ？」

ステイブ「お二人はイクと長門同等かそれ以上に胸がでかいです、」

クリス「わかった、それ以上言うな、」

性的暴行がこの2人に重点的に向かっていたのか、

ステイブ「幸い最後まで行く前に俺がそいつを辞めさせましたが男性恐怖症になつたかと、」

クリス「そこはジルとリリーとプリンツに任せよう、」

ステイブ「そうですね、青葉はカメラマンです、あなた方の写真を撮りにくると思

います、」

フランク・ウエスト（PXZ）を思い出すな、

ジルが最新のレフカメラでも持っていたら青葉に渡してくれるように頼むか、

ステイブ「軽巡洋艦は大淀は話を通りそうです、今現在の向こうの鎮守府はあの子
が今はまとめています、川内、神通、那珂は姉妹艦ですが神通は武闘派です、」

クリス「わかった、拳で語り合う、」

ステイブ「表現が古いです、それと川内は夜戦、夜による出撃が得意ですがもしか
したら夜についた場合はその子が出てくる筈です、」

なるほど、

夜型の艦娘もいるのか、

ステイブ「駆逐艦の子は他の子達に庇われて守られるポジションですね、暴力は主
にあの子達に言っていたようです、連続出撃は当たり前、更に高戦績を出さないと殴ら
れていました、」

クリス「その提督はどうなった？」

ステイブ「辞めた後はどうなったかわかりませんが、と言うのが表向きです、解職さ
せた後しばらく俺はそこで寝泊まりしたら案の定侵入して来て高雄に襲いかかって来
ましたので首を飛ばしました、」

クリス「過激だな、だがそれで一応は安心できるな、」

ステイブ「一時的にです、この提督服を着る事と妖精さんを見える人は全員提督になれます、いつのまにか侵入してあの服を着られると誰も抵抗できません、どういうわけかあの服は艦娘に命令できる事と艦娘による暴力を振るわれなくなる機能みたいなものが付いています、俺はあんな服はいらないので大和に預けてあります、着る時は大事な会議か提督達の集まりの際に着ます、」

俺もあんな真つ白な服は着たくないな、

クリス「リリーの分だけ作れないか？」

ステイブ「その心配は大丈夫です、前の提督が駆逐艦に暴行をしていたことはあそこの子達にバレバレです、それを自分達が駆逐艦と同じ子に暴力を振るったら前の提督と同じことをすると言うことです、そんなことはあの子達はしません、」

そうだな、

嫌いな奴の真似なんて誰もしたくないだろう、

そんな時に扉がノックされた、

ステイブ「どうぞ、」

「失礼します、」

入って来たのはヴェールヌイ、

ヴェールヌイ「元師様、クリスさん、お話中失礼します、」

ステイブ「どうしましたか？」

ヴェールヌイ「クリスさんにお伝えしたいことがあります、」

クリス「俺にか？」

珍しい、

いつもは暁や雷や電と一緒にいる子で俺と話したことはなかった筈、

ヴェールヌイ「向こうの鎮守府に行ったら私と響を間違えないでください、」

クリス「どう言う意味だ？」

ヴェールヌイ「響は私の前の名前、近代化改修してからヴェールヌイに変わった、だ

から名前が変わっても容姿は変わらない、」

クリス「近代化改修は名前も変わるのか？」

ステイブ「一部の子達がそうです、その子達以外は名前の終わりに改二と付きます、

ですが今まで通りに名前で呼んでください、」

クリス「わかった、ヴェールヌイ、わざわざ伝えてくれてありがとう、」

俺はヴェールヌイの頭を撫でる、

ヴェールヌイは一步下がって頭を下げて執務室を出た、

ステイブ「クリスさん、明日がいよいよ出発です、今日のうちにやり残した事は無

いですか？」

クリス「無いな、仕事はステイブとロドリゴが教えてくれた、大体の艦娘達に明日出て行くことを伝えてある、ここの空母艦娘に会うことができないのは少し残念だが、」
ステイブ「赤城と翔鶴ですね、あの子達は明日の朝に帰ってくる予定です、入れ違いいになるかならないかです、」

クリス「明日か、その鎮守府は着くまでにどれくらいかかる？」

ステイブ「車で半日ですね、ほぼ海沿いですので道には迷わない筈です、」

クリス「だったら少し遅れてもいいか、挨拶くらいしておきたい、」

ステイブ「ありがとうございます、あの子らも喜ぶ筈です、」

ステイブは笑った、

この笑いも見納めか、

俺はそう思った、

翌日、

朝、

俺とセバスチャンは車に荷物を乗せた、

ジルとリリーは駆逐艦娘達と別れの挨拶をしている

泣いている艦娘もいる、

リリーも泣いている、

別れは辛いからな、

ステイブと大和、

長門がこつちに来た、

ステイブ「クリスさん、セバスチャンさん、今までありがとうございます、」

クリス「礼を言うのはこつちだ、住む場所と仕事を与えてくれた、更にほぼ無償でこの数日住まわせてもらった、少しトラブルがあつたがそれ以外はそちらが損するだろう、」

ステイブ「いえ、俺たちだけではB・O・Wに対処できなかつたです、もしあの時皆様がいなかつたら大和だけでなくみんなが今頃いなかつたと思います、」

大和「そうです、今頃私はここにはいません、」

長門「私もだ、あの戦いで死んでいる、ありがとう、」

そう言われると照れるな、

ステイブ「セバスチャンさん、こちらが例の住所が書いてある場所です、」

セバスチャン「そうか、ありがとう、」

セバスチャンはステイブから紙を受け取りそれをポケットにしまう、その時、

「元師様！ただ今帰りました！」

ステイブ「赤城、翔鶴、ご苦勞様、クリスさん、セバスチャンさん、出発前に紹介します、赤城と翔鶴です、」

赤城「はじめまして、赤城です、」

翔鶴「翔鶴です、元師様、出発前とは今からこの方々はどこかに？」

ステイブ「例の鎮守府に就任することになった新しい提督達だ、」
クリス「ステイブ、何か言い方が変だぞ、」

赤城「元師様を呼び捨てに、深い仲なのですね、」

ステイブ「この鎮守府全員の命の恩人だ、2人がいない間に色々なことがあつたな、」

翔鶴「そんな忙しい時にいなくて申し訳ありません、」

ステイブ「気にするな、俺の命令で動いているんだ、その時遠征に出した俺のミスだ、2人は気にする事はない、」

たしかに、

どこまで行っていたのかわからないが呼び戻すのは忍びない、

クリス「ステイブ、向こうに着いたらまず工房にアイテムボックスがあるか確認する、そのあと中に手紙を書いて入れてみる、俺らがついて1日か2日ほど時間をおいて確認してくれ、」

ステイブ「例の共有ですね、わかりました、俺と明石で確認します、」
もしそうだったら連絡が楽だ、

ジル「クリス、セバスチャン、準備はいい?」

ジルとリリーとプリンツが戻ってきた、

クリス「ああ、元々持つて行くものが少ないからな、艦装にセバスチャン用のガラクタ、他は服を数着だ、それと向こうに着くまでの食料、」

ジル「それなら行けるわね、ところでそちらの人は暁ちゃんが言っていた空母艦娘?」
セバスチャン「そうだ、赤城と翔鶴だ、」

ジル「そうなの、今から出発だから仲良くなれないわね、」
なぜだ、

ジルの仲良くなる≡魔改造が脳裏に浮かぶ、

赤城「皆様のことは他の子達に聞きます、それにまた会えます、」

ジル「そうね、また会えるわね、またここに来ると思うわ、その時はよろしくね、それともし興味があつたら暁ちゃんに渡した本を読んでおいて、役に立つ筈だから、」

何を渡した？

俺は後方にいる暁を見る、

あれは、

ケン・マスターズ通信空手完全版、

あれを置いていくのか？

次来る時にどれだけの子が波動拳をさせているのか、

セバスチャン「そろそろ行くか、あまり長居をすると別れができなくなる、」

セバスチャンが言う、

リリーは泣くことをこらえている、

駆逐艦娘達と遊んでいたからな、

転校する小学生のような感じか、

プリンツも泣いている、

お前はリリーと一緒に遊んでいたから駆逐艦の子達と一緒に遊ぶことが多かったんだらう、

クリス「そうだな、ステイブ、世話になった、何かあつたら連絡をくれ、俺かジルを向かわせる、」

ステイブ「わかりました、」

ステイープがそう言うのと艦娘達が集まる、
そして、

『行つてらっしゃい!』

見送るか、

だつたら俺らも応えないとな、

「「「行つてくる(行つてきます)「「「」

俺たちは車に乗り出発した、

ステイープが出発前に一言、

ステイープ「皆さん日本語話せましたっけ？」

●復活のP

本編より4年前、

俺は隊長が脱出したところを見送った、
意識が薄れている、

どうやら俺もここまでのようだ、
それにこの油田も崩れる、

ん？

あいつ、

まだ生きていたのか、

しかも隊長を狙っている、

仕方ない、

俺は変異した右腕に力を込める、

電気が蓄積していくのがわかる、

貸し一つだ隊長、

あんたが死んだらあの世で返してもらおう、

俺は脱出口から電撃を放つ、

スナイパーの俺が放つんだ、

絶対に当たる、

遠くで奴の叫び声が聞こえる、

命中だ、

これで心残りはない、

心置きなく死んで逝ける、

天井が爆発した、

俺は目を瞑った、

そして、

俺は鉄骨に押しつぶされて死んだ、

どれくらい経ったのか、

意識がある、

乗っ取られていない、

俺は目を開けた、

青空、

俺は倒れていた、

地面は砂か？

そして聞こえてくる波の音、

俺はどこかの砂浜に打ち上げられたのか？

運がいいな、

あのまま死なせてくれればいいものを、

生きていたとしても俺は化け物だ、

実験動物にされるのがオチだ、

そう考えていると視界に何かが映った、

俺は体を起こすとそこにいた、

白い肌で白い服を来た幼女、

この島の住民か？

「この島の住民か？」

そう聞くと少女は首をかしげる、
英語がわからないらしい、

まあ世界には無数の言語がある、

その民族特有の言語もあるだろう、

だがどうする、

せつかくの人だ、

何か情報が欲しい、

「アナタ・・・ニンゲン？」

突然話しかけられた、

英語ではない、

だがわかる、

なぜだ？

それに人間かどうかか、

俺は人間ではないな、

化け物だ、

「残念ながら少し前に人ではなくなつた、化け物だ、」

「バケモノ？」

「そうだ、」

「でも人間、」

だんだんと聞こえやすくなった、

まるでこの子の言葉を習得したかのように、

「大丈夫だ、お前に危害は加えない、だがここはどこか聞かせて欲しい、」

幼女は首を再びかしげる、

もしかしてわからないのか、

まあ島の外に出たことのないような子供だからな、

俺は起き上がる、

そして気づいた、

俺の右腕が普通の手に戻っている、

何があつた、

そう思っていると、

「私、北方棲姫、みんなからほっぽって呼ばれてる、」

変な名前だなホッポウセイキ、

だがほっぽか、

可愛らしい名前じゃないか、

「ほっぼ、俺と同じ人がいるところはどこだ？」

ほっぼ 「ここに人はいないよ！いるのは深海棲艦だよ！それと私のお姉ちゃん！」
なんだ？

その深海棲艦って、

だがこの子の他に話せる人がいるのは朗報だ、

「姉がいるのか、すまないが連れて行ってくれるか？」

ほっぼ 「いいよ！こっち！」

ほっぼは走り出す、

俺は付いていく、

少し走って海沿いの洞窟に着いた、

ほっぼ 「この中！この中にお姉ちゃんいる！」

家ではなく洞窟、

しかも海沿い、

肌がベタつくぞ、

ほっぼ 「お姉ちゃ〜ん！」

ほっぼは入って行った、

俺も後に続く、

中は暗い、

そして奥に行くと、

女性がいた、

ほっぽと同じ肌で同じ白い服、

ほっぽもその女性に抱きついている、

だが、

その後ろによくわからない生物、

なんだ、

あの黒いのは、

口がある、

生物か？

「アナタはどちら様ですか？ 艦娘でも無さそうですが、」

艦娘？

俺の知らない言葉がここでも出てくる、

「だからって提督でも無さそうですね、」

「すまないが俺は情報が欲しい、それさえ聞ければここを去る、」

「わかりました、私は港湾棲姫です、」

コウワンセイキ、

へんな名前だな、

「まずはここはどこだ？」

港湾 「ここはリランカ島です、」

リランカ島、

聞いたことないな、

まあこの世には無数の島々がある、

その中の一つだろう、

「次に深海棲艦とはなんだ？」

港湾 「深海棲艦を知らないのですか？ そういえば人間なのに怖がるそぶりが見られませんか、」

「なぜ怖がる必要がある、俺から見たら肌が白いだけの人間だ、腐っているわけじゃない、寄生虫を植え付けられていない、そいつらよりか怖くもなんともない、逆に男の前でそんな格好でいいのか？」

港湾の格好はオタクの隊員が言っていたが縦セーター、

服の上からでも胸の大きさがわかるくらい大きい、

更に横から見えそうだから目を背けるのがやつとだ、

港灣 「これは私の基本的な服装です、それに人類の敵に性的な目で見ない方がいいです、」

「悪かった、だが目のやり場が困る、」

港灣 「我慢してください、」

言い切られた、

しょうがない、

「それで深海棲艦ってなんだ？」

港灣 「深海棲艦、それは私やほっぽちゃんのような白い肌が目印です、沈んだ戦艦の魂が具現化したという訳です、そして貴方達人間の敵です、」

さつきも言っていたがなぜ人間の敵だ？

「なぜ人と争っている？」

港灣 「海の取り合いですね、今まで人々が海を支配していました、ですがその海を取り返すべく私達深海棲艦が生まれました、全ては私達の平和な海のために、」

「話し合いで分かり合えないのか？少なくともこうやって話せている、」

港灣 「難しいですね、そもそも争いの発端が私達からの攻撃でした、ですが向こうが人同士で争っていたためこちらも攻撃すればいいと勘違いしたからです、それが10年以上前の話です、」

戦争していたのか、

異文化だからな、

そう勘違いしても不思議ではないな、

港湾 「貴方はこの話を聞いて私達に攻撃しますか？」

「いや、こうして情報をくれる、そんな相手に攻撃はできない、それに俺は自分を攻撃してくる奴に攻撃するだけだ、」

港湾 「そうですね、私は争いが嫌いです、この島でひっそりと暮らしていきたいだけです、貴方がそう言ってくれて嬉しいです、」

「だがお前の仲間が攻撃してきたら俺も攻撃する、お前には悪いが自分の命が大事なな、」

一度死んでいるはずだがな、

港湾 「わかりました、それなら問題ありません、」

「次に艦娘について聞きたい、」

港湾 「艦娘、人間が私達に唯一対抗できる人、いえ、兵器、戦艦が女の子になって友達と戦う事です、私たちは人間の武器は効きません、ですが艦娘の砲撃や艦載機、魚雷は私たちに傷をつけて沈めることができます、」

だから人か兵器かわからないような言い方をしたのか、

港湾「ですが艦娘もかわいそうです、人々から兵器として扱われて物のように捨てられることがあるからです、そしてまた造られる」

「人なのだな、」

港湾「あなたから見たら可愛い女の子です、ほっぽちゃんのような小さい子から私のような女性までいます、」

「敵なのにくらべて肩を持つな、」

港湾「私がここに居るのは戦いから逃げてきただけです、そして客観的に見てそう判断したからです、ここに轟沈、人間で言う戦死した艦娘が流れ着くことがしばしばあります、艦娘は造られる、そのため兵器として扱われやすいです、艦娘と結婚する人もいますが奴隷のように扱う人もいます、その証拠に砲撃でできた傷のほか痣や無理やり髪の毛を抜いた跡がありました、」

「クソ野郎だな、」

港湾「それに艦娘はみんな女性、男の提督、提督は艦娘に指示や命令を出す人です、男や女、少年少女が提督になれます、」

「幅広いな、軍は人手不足か？」

港湾「そこまで情報通ではありません、話を戻しますが男の提督は艦娘に無理やり性的な事をします、艦娘は抵抗できないのでなすがままです、」

「殺しに行つていいか？元人間だが聞いていて吐き気がする。」

港湾 「止めはしません、ですが今では提督を殺すと重罪です、」

「それはお前らに対抗できる艦娘の司令官だからか？」

港湾 「わかりません、」

だいたい情報は入ってきたな、

以前隊長が体験して話してくれた現象に似ている、

港湾 「艦娘を見ておきますか？この洞窟の奥で横にしています、ですが傷が酷くこの

ままでは死んでしまいます、」

「処置はできないのか？」

港湾 「人間と同じ方法では艦娘の傷は治せません、」

俺は奥に行った、

そこには一枚のシートで体を隠した女性の姿があった、

だが女性は眠ったまま起きない、

顔は痣や火傷でわからない状態だ、

試してみるか、

俺はポケットからあれを取り出した、

救急スプレー、

傷がたちまち治る謎のスプレー、

港湾「何をなさるつもりですか？」

港湾棲姫が俺の後ろにいた、

腕にはほっぴが収まっている、

「試しに俺の世界の医療品を試す、もし治せなかったらこいつの墓を作るだけだ、」

俺はスプレーをかけた、

まずは顔、

かけた瞬間顔から痣や火傷が消えた、

こうやって見るとこいつの効果はすごいな、

後ろの2人も驚いている、

俺はシーツをめくった、

やはりか、

裸だ、

だが興奮している暇はない、

傷は火傷、

痣、

更になんだこれは、

ナイフか何かで斬られた傷だ、

これで出撃していたのか、

こいつは鞭で叩かれた痣、

それに指が切断してある、

拷問されたのか、

流石にこのスプレーでも指は生えんな、

傷が塞がるくらいか、

港湾「すごい、傷が治っていく、」

これで終わりだ、

俺はすべての傷を治して再びシートをかける、

これで失血死は免れる、

「これで一安心だがもうこれはない、」

俺はスプレーの缶をそこらへんに置いた、

港湾「すごいわねそれ、でも少し残酷なことをさせたと思うわ、」

「だろうな、この子が戻ってもまた虐待をさせられる、それならここで死んだ方が良かったかもしれない、」

港湾「それをわかっていてやったの？」

「そうだ、これは俺の部隊の方針だ、助けられる人は助けると、」

俺は寝ている艦娘を見る、

綺麗な奴だな、

こんな奴が虐げられる、

間違っているな、

その時、

外から叫び声が聞こえる、

人の声ではない、

そして聞き覚えのある叫び声、

そして俺がとどめを刺したはずの奴、

俺は外に出た、

そこにいたのは、

ハオス、

そいつが海にいる、

俺はMP | AFを構える、

そして撃つ、

だが奴に効果が見られない、

ただの火器ではダメか、

どうすればいい、

港湾「何ですかあれは!？」

後ろで港湾棲姫が出てきてハオスを見て驚く、

ほっぽも涙目でハオスを見ている、

すると俺の右腕に電気が発せられる、

まさか、

俺は右腕に力を入れると変形した、

まさか変形するとは、

港湾棲姫とほっぽが目を丸くした、

だがそんなことはどうでもいい、

俺は右腕に力を込めて電気を蓄積させる、

そして、

「はああああっ!」

電撃を放つ、

ハオスに直撃して奴は海底に逃げていく、

逃したか、

俺はそう思うと腕が元に戻った、

一度撃つと戻るのか？

それに意識が乗っ取られない、

要検討だな、

俺はそう思っていると、

港湾 「貴方は一体何者ですか？」

港湾棲姫がそう言ってきた、

そういえば名乗っていないな、

「俺はピアーズ・ニヴァンス、B・S・A所属のスナイパーだ、」

こうして俺はこの世界に降りてきた、

用語 1

P X Z

プロジェクトクロスゾーンの略、

カプコン、ナムコ、セガの三者が共同で開発した3DS用のゲーム、

P X Z 2

プロジェクトクロスゾーン2ブレイブニューワールドの略、

プロジェクトクロスゾーンの正式な続編、

カプコン、ナムコ、セガの他、任天堂からもキャラクターを出している、

レオン

バイオハザード2、4、6の主人公、

警官からエージェントに変わった男、

なぜか2倍数の作品に出てくるためもし続編が出るなら8にエイダ共々出るのでは
と
思っている、

女運が悪い、
泣けるぜ、

ケン・マスターズ通信空手

ストリートファイターのキャラクターケン・マスターズが販売している通信空手の本、

波動拳や昇龍拳などの技のやり方が書かれている、

本作の完全版は滅・波動拳や神龍拳など使つてはいけない技などを掲載した本、

ケン・マスターズ

ストリートファイターの操作キャラ、

ストリートファイターの操作キャラのリユウの親友およびライバル、

赤い胴着と金髪が特徴、

春麗

インターポールの女警察、

警官服でなくチャイナ服を着ている、

ワルキューレ、

ワルキューレの冒険及びワルキューレの伝説の主人公、

分身したり巨大化できる神の子、

お尻や胸（胸当て）に押しつぶされたい人はワルキューレの元に、

K O S — M O S

ゼノサーガシリーズに出てくる女性型アンドロイド、

バグが多いにや、

フィオルン、

ゼノブレイドのヒロイン、

半分以上機械です、

有栖零児

ナムコV Sカプコンの主人公、

特務機関森羅のエージェント、

後々無限フロンティア、

プロジェクトクロスゾーン、

プロジェクトクロスゾーン2に出てくる、

五行抜刀を使う、

パートナーは小牟、

プロジェクトクロスゾーン2の最後に小牟と結婚するm、

小牟

ナムコVSCapコンの主人公有栖零児のパートナー、

オタクでプロレス好き、

実は仙狐という妖怪で永遠の765歳

よく駄狐と言われている、

プロジェクトクロスゾーン2の終わりでは有栖零児と結婚する、

裏嶋

プロジェクトクロスゾーン2で初登場した森羅の技術者、

本名裏嶋千鶴

癖が強い女、

作中に登場した装着者の過去を見る装置は彼女が制作、
だが使わなくなったためジルに渡された、

ダンテ

デビルメイクライシリーズの主人公、

剣技と多彩な銃を扱うデビルハンター、

悪魔と人のハーフ、

バージル

デビルメイクライ3のもう1人の主人公、

ダンテの兄、

銃は使わない、

エリクシール

テイルズシリーズのアイテム、

死亡以外の異常状態回復ほかHPとTPを全快させる薬、

非売品だが一部の作品では作ることが可能、

ライフボトル

テイルズシリーズに出てくる死者蘇生のアイテム、
300ガルドで売られている、

ユーリ、

テイルズオブヴェイスペリアの主人公、

本名ユーリ・ローウエル、

下町育ちの青年、

言葉に反してお人好し発揮、

フレン・シーフォと親友、

シリーズで珍しいダークヒーロー位置、

エステル

テイルズオブヴェイスペリアのヒロイン、

本名エステリーゼ・シデス・ヒュラツセイ

読書好きお節介焼きのお姫様、

最近はコスプレに目覚めたのか？

セクシータイフーン！

斬艦刀

スーパーロボット大戦OGに出てくるゼンガー・ゾンボルトの愛機、

ダイゼンガーの装備品、

巨大な剣、

本作はプロジェクトクロスゾーンに出てきたゼンガーより少し大きい程度の靈式・斬

艦刀と同じ大きさで登場、

また靈力解放札は今作オリジナル道具、

楠舞神夜作の貼り付けた物に靈力があつたら真の姿、

天龍の刀の場合斬艦刀のような巨大な剣になる、

ジルはすぐさま斬艦刀と言ったが実は他に名前が出てこなかったため咄嗟に斬艦刀

と言った、

ゼンガー

スーパーロボット大戦OGシリーズに出てくる親分肌のキャラ、
本名ゼンガー・ゾンボルト、

いかつい顔だが年齢29歳、

愛機、ダイゼンガーと共に戦場を駆け巡る、

我が名はゼンガー！悪を断つ剣なり！

楠舞神夜

無限フロンティアに登場のヒロイン、

護式・斬冠刀を扱う楠舞一刀流剣士、

天然ボケが目立つ、

ボツ（超特大）キュツボンの体に小牟からは悶乳と言われている、

カッツインで何度も揺らしている、

シルフィー

ロストワールドに出てくるキャラ、

神出鬼没の商人、

お客様は神様がモットー、

自分の服を高値で売るほどの商売人（値段は96万円ほどだった、）

カイト

・hackのキャラクター、

オンラインゲームのキャラクターの体、

現実では中2の男子中学生、

三爪炎痕！

フランク

デッドライジングの主人公、

最新作4の主人公でもある、

フリーの戦場カメラマンでプロレス技も使える、

ウイラメツテの事件の生き残り、

物を投げたり謎のミックスジュースを作ることができる、

楠舞神夜をセクシーショット連写するエロオヤジ、

リエラ

戦場のヴァルキュリア3の登場キャラクター、

本名リエラ・マルセリス

あの外見で21歳、

どこそのガスマスク男同様戦場を一人で生き残るため死神と言われている、

ヴァルキュリア人の血を引く、

同作のクルトとエンディング後に結婚している、

プロジェクトクロスゾーンでの必殺技のヴァルキュリア光線はプロジェクトクロス

ゾーンで始めて出た名前、

本作に出てきた青い液体はジルガリエラをジェネシスで調べた際に出てきた謎の液

体、

龍田の薙刀にそれをかけてヴァルキュリアの槍になった、

龍田はヴァルキュリア光線を笑顔でドキューンしています、

三島平八

鉄拳シリーズの鉄拳王の称号を持つおじさん、

プロジェクトクロスゾーンでは新薬を飲み若返った、

ハゲトンガリ頭からフサフサトンガリ頭になった、

新薬に関して一時期春麗が興味を示した、

到着からの・・・

車を運転して数時間、

右窓から見えるのは海、

海、

海、

そして助手席にはセバスチャン、

後ろにはジルとリリーとプリンツ、

初めは海を見てはしやいでいたリリーも今はプリンツの膝枕で寝ている、

ジル「長いわね、」

プリンツ「そうですね、かれこれ2時間ほど走っています、」

ジル「クリス、何か音楽かけて、」

クリス「わかった、」

そうやって俺はオーディオに手を伸ばした、

CDとカセットか、

俺はCDの再生ボタンを押した、

ラララララカチャ、

後方からジルの手が伸びて曲が止められた、

ジル「却下よ、何か嫌な予感がしたわ、」

セバスチャン「その根拠は？」

ジル「女の勘よ、」

勘で止められる音楽、

クリス「ジルは何かCD持ってないのか？」

ジル「2枚あるわよ、」

そう言つて俺に渡してくる、

俺はその内の一枚を入れる、

タララララララララララタタタータタタター、

ん？

なんだ、

この白い柔道着を着た厳ついアイツが出てきそうな曲は、

遊びの道に魂込めたひとりの男が今日も行く、

やはりか！

せがた三四郎（P X Z 2）か！

ジル「結婚式の帰り際にせがたが俺の魂のこもった一曲だつて言つて私に渡してきたのよ、」

せがた三四郎、

せがた三四郎、

なんだ、

脳裏にせがた三四郎がドアップになっていつてくるんだが、

セガサターンシロ！

俺は無言でCDを止めた、

何故だか止めたくなつた、

このまま聞いていたらせがた三四郎がいつのまにか来そうな気がした、

セバスチャン「ジル、このCD後でくれないか？」

ジル「いいわよ、職場でこれは聞けないもの、」

聞くなよ、

絶対に聞くなよ、

俺は他人のふりしているからな、

それとセバスチャン、

その曲気に入ったのか？

リリーの前で聴いたら引かれるぞ、

プリンツも若干引いている、

入れはせがた三四郎のCDを出してセバスチャンに渡して俺はもう一枚のCDを入れる、

これは激帝か、

切り裂いた闇が吠え、震える帝都に、

プリンツ「何かやる気が出る歌ですね、」

そうだな、

自衛隊のパレードでこの曲が使われる事が多々あったからな、

走れ！光速の！帝国華撃団！

唸れ！衝撃の！帝国華撃団！

これなら行けるな、

だがリリーを起こさないだろうか、

リリー「せがたーさんしろー、」

プリンツ「・・・」

バックミラー越したがプリンツが苦笑いしているぞ、

それはないだろリリー、

寝ているはずだが、

気まずい雰囲気の中俺は車を走らせた、

それから何時間も経ったのか、

激帝Ⅱ、

御旗のもとに、

激帝く最終章く、

地上の戦士、

それらを聴きながら走っていた、

セバスチャンが激帝の鼻歌を歌うまでそれを聴き続けた、

そして着いた、

クリス「ここだな、」

セバスチャン「間違いないと思うが、」

俺は窓越しで鎮守府を見る、

外装はステイプの所と同じだ、

それに、

窓から覗く視線がある、

現在だいたい15時過ぎ、

できれば戦いたくないが、

クリス「様子を見られている、馬鹿正直に入ると確実に砲撃が来る、」

ジル「それなら裏から入ろうかしら、」

クリス「裏口もきつと何か仕掛けがある可能性がある、ここは向こうの思惑通りに馬鹿正直に入ろうか、」

セバスチャン「何か作戦があるのか？」

クリス「ない、向こうが撃ってきたらこちらも撃つ、幸いステイプの所の明石がゴム弾を作ってくれた、ハンドガンで応戦するんだ、」

俺は懐からゴム弾のマガジンを6つ取り出す、

セバスチャン「乗る気はしないんだが、暴力から解放されたのにこう暴徒を鎮圧するような真似をするなんて、」

クリス「向こうが撃ってこなければ使わないで済む、話し合いの余地があればいいが、」

ジル「かわいそうだけどこのままではこの鎮守府の艦娘の評判が悪くなるわ、そしてステイプにその事が耳に入ればなんらかの処分が下される、」

クリス「そうなる前に鎮圧して話し合いの場を設ける、最低限のそうしないといけない、」

セバスチャン「わかった、やろう、」

セバスチャンはマガジンを2つ取りサプレッサー付きハンドガンに装填する、

ジル「出てくるのは戦艦の子と空母の子よね、」

クリス「おそらくだが、霧島は俺に任せてくれないか、アイツに格闘戦を挑んで倒す、」
ジル「わかったわ、大怪我だけは避けてよね、」

ジルはマガジンを2つ取りグロッグに装填する、

俺もサムライエッジに装填する、

セバスチャン「リリー、ここでプリンツと一緒にいてくれ、」

リリー「私も行く！私だけ残るのやだ！」

プリンツ「セバスチャンさん、リリーさんは前の戦いの時にずっと心配していました、
パパが怪我していないか、パパが迷子になっていないか、パパが無茶していませんか、」

迷子はないだろう、

プリンツ「今回はリリーさんを連れて行つてくれませんか？もちろん私はリリーさん
を守ります、」

セバスチャンは悩み、

そして、

セバスチャン「わかった、ただし俺らの後ろに居ること、それが条件だ、」

リリー「うん！」

セバスチャン「プリンツ、リリーを頼んだ、危ないと思つたらリリーを連れて逃げて

くれ、」

プリンツ「わかりました、」

俺たちは車を降りる、

俺が先頭に立ち後ろにジル、

セバスチャン、

プリンツ、

リリーの順に並んでいる、

クリス「扉を開ける、扉の左右に立ってくれ、砲撃がいきなり来てもいいようにした

い、」

俺の言葉に頷き左右に分かれる、

俺は扉を少し押し開ける、

その時、

ドーン

扉が爆発音とともに吹き飛ぶ、

クリス「move!」

俺が先に入り撃つ、

「がっ!?!」

誰かが倒れた、

長門ようだ、

どうやら脳天にあたり気絶したようだ、

リリー「パパ! あっち!」

リリーがセバスチャンを呼ぶ声が聞こえた、

セバスチャンはそつちを見ると艦載機が飛んでくる、

セバスチャンはそれを撃ち墜とそうとしたが、

リリー「しんくーはどーけーん!」

まさかのリリーが波動拳を出して艦載機を落とす、

セバスチャンは驚きながらも艦載機が飛んで来た方向に向けて撃つ、

「ギャア!」

誰かが倒れた、

だが後だ、

俺は長門が倒れた方向を見ると、

誰かが物陰に隠れたのを確認した、

クリス「ジル！俺は奥に行く！セバスチャン達を頼んだ！」

ジル「了解！私達はこっちを見に行くわ！制圧でき次第ここで合流！」

俺は前に進んだ、

曲がり角、

そこで出てくる女性、

至近距離のため殴りかかる女性、

俺はそれを受け止める、

力は長門ほどではないが一般女性より強い、

俺は女性の顔をチラリと確認する、

霧島の特徴は眼鏡をかけている、

頭脳派に見えるが武闘派でもある、

その女性は眼鏡をかけている、

霧島確定、

俺は霧島にフックをする、

霧島はそれを避けて再び殴りかかってくる、

俺は受け止めて殴り返す、

霧島の顔に命中してよろける、

霧島「このっ！」

霧島が艦装を構えるが、

接近戦の時に下手に銃撃戦をすると負ける、

俺は霧島に近づいてアツパーを行う、

霧島は顔が上に向く、

俺は更にリバーズナックルを行う、

霧島は吹き飛び気絶する、

制圧完了、

向こうから銃撃が聞こえない、

向こうも終わったようだ、

俺は霧島を抱えて戻る、

戻るとジルが小さい子を抱えていてセバスチャンが袴を着た女性を背負っている、

プリンツも誰かを抱えている、

ジル「終わったようね、」

クリス「ああ、後は大淀を探して事情を説明する予定だ、」

セバスチャン「できればこの状態で先頭はしたくないな、」

「戦闘の心配はありません、」

突然声がした、

俺の向かつて行つた道から女性が2人歩いて来た、

クリス「大淀か？」

大淀「はい、それと護衛として神通さんもいます、」

横にいた女性神通がお辞儀をする、

大淀「すいませんでした、」

大淀が突然頭を下げる、

大淀「今日新しい提督が来ることは聞いていました、ですがここにいるみんなにそれを伝えてもいい顔しないと思ひ黙っていました、ですが長門さんがそれを見たようにこのようなことになりました、」

クリス「頭をあげてくれ、それくらいは気にしない、事前にこうなるかもと言われていたからな、」

大淀「そう言ってくれるとありがたいです、元師様の手紙では艦娘と素手で殴り合えると書かれていましたが長門さんはそれを読まなかつたんだと思います、」

頭をあげる大淀、

ジル「話の途中で申し訳ないけどそろそろ移動してもいいかしら、この子達をどこかで休ませたいんだけど、」

大淀「でしたら執務室に行きましよう、そこでベットやソファがあります、
クリス「助かる、」

そう言えばセバスチャンがさつきから話していないな、

クリス「セバスチャン、どうした、さつきから黙っていて、」

セバスチャン「クリス、さつきから話しているのは日本語か？」

クリス「そうだ、」

セバスチャン「俺とリリーは日本語を話せないんだが、」

盲点だった、

俺とジルは日本にいたことがあるから日本語はマスターしたが2人は日本とは無縁な生活をしていたな、

クリス「プリンツ、すまないが2人が日本語を覚えるまで通訳を頼む、」

プリンツ「わかりました、」

これでひとまず安心か、

クリス「セバスチャン、リリー、日常会話できるくらいは日本語を覚えてくれ、出撃の命令とか難しい言葉は俺とジルがしておく、」

セバスチャン「な、なんとかしよう、」

リリー「頑張る！」

なぜか不安だ、

クリス「大淀、すまない、案内をしてくれ、」

大淀「わかりました、」

そうして俺らは執務室に向かった、

執務室にて、

執務室に入った俺たち、

道中廊下越しで色々見たがボロボロだ、

中を見て思わず顔をしかめる、

無駄に綺麗で金の装飾されているものが多い、

速攻で売ってやる、

俺は心でそう決めた、

ジル「悪趣味ね、こんなもの早く売りたいわ、」

どうやらジルも同意見だ、

セバスチャン「何でこんな金ピカなんだ、威圧か？」

リリー「目が痛い、」

セバスチャンらもあまりいい評価ではない、

俺は霧島をソファに横にした、

ジルは子供をソファに、

セバスチャンとプリンツは横の扉に入ってそこにあったベッドに横にした、

クリス「さて、大淀、話し合いがしたいがいいか？」

大淀「はい、元師様から話は通っています、その事ですがこのままこの鎮守府でいいのですか？」

クリス「どういう意味だ、」

大淀「そのまんまの意味です、ここでは人間が憎く追い払おうとしています、私と神通もその中に入ります、」

クリス「だろうな、ステイプから聞いている、前の元師に色々されたようだな、」

大淀「そうです、できればここをそのままそつとしておいて欲しいんです、」

クリス「それが元師の命令に背く事でもか、」

大淀「はい、このみんなは提督という存在も、人間という存在も信用できないから、町には買い物以外では行っていません、それくらいです、もしその条件を飲むのでしたら私の体を好きにしてください、」

大淀、

そんな悔しそうな顔をしながらそんなことを言うな、

クリス「悪いが俺たちはここから出ていかない、それにそんな条件俺はいらぬ反吐がでる、子供の前でそんな汚い条件を言うな、」

大淀「玄関でのやり取りでそちらのお二人が日本語を話せないことはわかりましたの

で問題ないと思いましたが、それに私達は平気です、それくらいなら問題・・・」

その時俺は大淀の頬を叩いていた、

神通が動いたがジルが取り押さえた、

クリス「ふざけたこと抜かすな、俺たちから見たらお前らは人間だ、腐ってもない、寄生虫に感染していない、ウイルスにも感染していない、息をしていて体温がある、服を着て痛みや苦痛がある、泣くこともできる、それが人間だろ、俺らを襲った艦娘も怒りの感情がある、兵器つてもものは感情もなくただ殺して破壊する命令で動く奴のことを言う、大淀、お前は俺に好きにしていと言ったな、それは誰の命令でもなく自分で考えて言ったことだろう、それを考えられるだけでお前は人間なんだ！神通もそうだろう！お前は大淀が叩かれてすぐに行動した！大淀を守るために！仲間なんだろう！兵器は仲間意識はない！お前も人間だ！」

頬を抑えた大淀が俺を見る、

クリス「お前の仲間を思う気持ちは俺はわかる、俺もある部隊の隊長をしていたからな、」

大淀「隊長？軍人でしたか、」

クリス「それに近い、俺はその時の隊員を家族のように接して共に戦った、だがその仲間は死んだ、俺を信用して死んで行った」

大淀「あなたはその程度ということですよ、」

プリンツが大淀に詰めかかろうとしたが俺が制した、

クリス「そうだ、俺はその程度だ、そのあと俺は逃げていた、酒に溺れる人生だった、だがまた立ち上がった、その仲間に諭されて、」

ピアーズ、

あいつがいなければきつと今頃ここにはいないだろう、

クリス「大淀、お前は自分一人犠牲になればいいと思っていたのか、となりに立っていた神通にも黙って、」

大淀「それは・・・」

大淀が言い淀む、

クリス「神通、お前はと思う、大淀がこんな事を切り出して、さっきの条件、お前も知らなかったんだろ、」

あの時の神通の顔の驚き具合は何もそらされていないからだ、

神通「それは、私にも相談して欲しかった、勝手に決めないで欲しかった、私に任せると言われて聞いてみればこれだった、」

大淀「神通さん、」

神通「前の提督が居なくなつて、大淀さんはいつも夜遅くまで設備のチェック、書類

のまとめ、在庫整備、全て一人でやっていた、私達に大丈夫だからと言って休む間も無くずっと、だから今回護衛を頼まれてすごく嬉しかった、でも、これはあんまりだよ、」

クリス「大淀、お前は仲間の為を思つてさっきの言葉を言つたかも知れないがそれを知つた神通にとつて裏切られたと思われてもおかしくない、信用されていなかったと、」

大淀はハツとした表情をした、

大淀「私は・・・私は・・・」

クリス「ジル、離してやれ、」

ジル「わかつたわ、」

ジルは神通を離した、

神通「大淀さん！」

神通は大淀に抱きついた、

神通「ごめんなさい！大淀さん！何もできなくてごめんなさい！」

大淀「私も！何も相談出来なくてごめんなさい！」

2人は泣き合う、

セバスタチャン「話の内容があまりわからないんだが、」

プリンツ「いい話です！」

プリンツが泣いている、

しばらくして、

大淀「申し訳ありません、そしてありがとうございます、」

神通「ありがとうございます！」

2人は礼を言う、

さつきよりかいい顔になっている、

クリス「気にするな、さて、本題に入るか、」

大淀「はい、私達からはできればそつとしておいて欲しいです、」

クリス「すまないがそれは出来ない、俺たちは無職になりたくない、」

大淀「ですがこちらに住みますとほかの艦娘から攻撃をされます、もしかしたら寝込み襲われるかもしれません、」

クリス「承知の上だが俺とジルだけにしてくれ、あそこの2人には手を出すな、」

大淀「見た感じ親子ですか？」

クリス「そうだ、前の提督は駆逐艦娘に暴力を振るっていたと聞いた、お前らはリリーに手を出さないと思うがセバスチャンに手を出すと考えられる、そうすると最も悲しむのはリリーだ、お前らは暴力で笑顔を無くさせた前の提督と同じセバスチャンを襲うとリリーという1人の子供の笑顔が無くなる、それをお前らは望んでいるのか？」

大淀「・・・望んでいません、」

クリス「そうだろう、だからあの2人に手を出すな、」

大淀「わかりました、ですがあなた方の命の保証はできません、」

クリス「こういった状態に慣れている、」

大淀「ではまずは何をしますか？」

クリス「早速だがこの部屋の物を処分および売り払いたい、こんなところで仕事なんてできない、」

ジル「そうね、売ったお金でまずは各部屋のベッドの買い替え、でもその前にこのお金はいくらほどあるかしら、」

大淀「それでしたらこの資料を、現在の資金や燃料、鉱物、などを書いていきます、」

俺は目を通した、

資金がたくさんあるな、

燃料もあるがボーキサイトと弾薬が少ない、

先ほどの少し使ったから更に少なくなつたな、

クリス「食事はどうだ？食材は何を買っていた、」

大淀「間宮さんが調達してくれていますので大丈夫です、栄養バランスは良い方です、」

食事は大丈夫にようだ、

クリス「服などは大丈夫か？いつまでもその服装は駄目だろう、」

大淀「あまりありません、最近着た切り雀が多いです、」

服はいるな、

まずはこの金ピカな置物供を全て売る、

クリス「セバスチャン、大淀、神通、早速だが買い出しに行くぞ、大淀は艦娘達の服

を買ってくれ、」

ジル「私は何をすればいいの？」

クリス「鎮守府周りを確認してくれ、畑を作る予定だ、その場所の確認をしてくれ、後日苗や種を買ってくる、」

プリンツ「クリスさん私はどうすればいいですか？」

クリス「プリンツはここでリリーと一緒に待っていてくれ、気絶したみんなを見ていてくれ、」

ジル「起きたら襲われるかもしれないけどリリーがいるから大丈夫と思うわ、」

プリンツ「不安じゃないんですけど、」

苦笑したプリンツ、

そうして俺らは行動した、

執務室の中の俺らには必要ないものを全部鎮守府に置いてあつた軽トラックに乗せた、

クリス「大淀、近くの街はどれくらいの距離だ？」

大淀「徒歩で10分位です、」

クリス「大淀は車の運転をできるか？」

大淀「出来ませ、」

クリス「俺とセバスチャンはあの軽トラを運転して行く、大淀は神通と俺たちの乗ってきた車で街に来てくれ、」

大淀「わかりました、」

2人は向こうの車に乗り込んだ、

俺とセバスチャンは軽トラに乗り込んだ、

先に向こうの車が動き出した、

俺は軽トラを動かして車の後を追う、

すぐに街に着いた、

そこで大淀にどこに質屋があるか聞き不用品を売り捌いた、意外にも金になった、

クリス「大淀、これくらいで足りるか？」

大淀「もう少しだけ貰えませんか？下着とかもありますので、」

クリス「わかった、」

俺はもう少し渡した、

大淀「これくらいで大丈夫です、」

クリス「俺らはベッドを探す、何かあったらこつちに来てくれ、」

大淀「わかりました、」

俺らは別れた、

ベッドは重い、

軽トラに全部が乗らない、

掛け布団やシーツも必要だ、

枕は大淀の方の車に乗せるか、

セバスチャン「宿舎の引越しみたいだな、」

クリス「その場合はもつと過激だ、箆筒や机、場合によっては石像も持っていけない、

と、いけない、」

セバスチャン「石像ってお前のいた世界は宿舎の個室にそんなものあったのか？」

正確には宿舎じゃない、

警察署にあった茶色い石像だ、

なぜあんなものがあつたのか分からん、

あのクソ所長の考えが分からん、

そしてベッドに全て詰め込んだ、

大淀「こちらは終わりました、」

大淀が両手にいっぱい戻つて来た、

服の量が半端ないな、

神通も両手にいっぱい持っている、

クリス「すまないが大淀、そつちの車に枕を置かせてくれないか、これ以上は二台に

積みめない、」

大淀「わかりました、」

俺は枕を大淀の乗る車に詰め込んだ、

そして俺たちは戻った、

アイテムボックスと変な奴

鎮守府に戻ってきた俺たち、

クリス「大淀は放送で艦娘を問宮の食堂に集めてくれ、いきなり男が各部屋に入るとパニックになる、」

大淀「わかりました、」

大淀と神通は鎮守府に入って行った、

セバスチャン「俺たちはこれを下ろしますか、」

クリス「流石に女子どもに手伝わせる訳にはいかない、」

俺たちはベッドを1つづつ下ろして鎮守府に入れて行った、

一度エントランスにベッドを置いた、

長門を連れて行くの忘れていたな、

エントランスで大の字に倒れたままだった、

ステイプの所とここではなぜこんなに違いがあるんだ、

育った環境が違うからか？

そして大淀が放送をかけ始めた、

俺らは外に出たから内容までは途切れ途切れでわからない、

ベッドをエントランスに全て運び終えた、

そこからは各部屋にベッドを持って行った、

階段が辛い、

セバスチャンも苦痛の表情を浮かべている、

そして、

運び終えた、

1時間以上の戦いだった、

クリス「長かった、」

セバスチャン「動きたくないな、」

執務室で俺とセバスチャンはソファに座っている、

プリンツはセバスチャンの肩を揉んでいる、

クリス「それにしてもこいつらは起きないな、」

ソファで横になっている艦娘らを見て俺は言う、

クリス「ゴム弾の威力が強すぎたか？」

セバスチャン「ありえるな、」

ジル「それでも時折寝返りを打っているわ、」

生きてはいるようだ、

ジル「クリス、セバスチャン、食堂に行けそう？」

クリス「すまないが俺はこの後工房に向かう、こっちにアイテムボックスがあるかも
しれないからな、」

ステイプの所から出る前に伝えたこと、

アイテムボックスがどうなっているのか、

俺は重い体を動かして工房に向かった、

廊下で誰にもすれ違わなかった、

全員間宮の所に向かったのか、

工房の扉の前に来て俺は扉をノックする、

・
・
・

返事がない、

明石も間宮の所に行ったのか？

俺はそつと扉を開ける、

誰もいない、

俺は中に入る、

散らかつてはいない、

だが埃が被っている、

その時、

「誰？」

物陰から声がした、

俺はその方向を見ると髪の色がボサボサの女性、

服装から見ると明石か、

明石がいた、

クリス「すまない、俺は「自己紹介なんてどうでもいい、早く出て行って」

どうやら聞く耳を持たないな、

クリス「すまないが俺は確認したいことがあってここに来た、それを確認したら出て行く、」

明石「さつさと済ませて、」

明石は俺を睨みつける、

俺は奥に向かった、

そこには、

あつた、

アイテムボックスだ、

俺は中身を確認した、

向こうで確認したままだ、

明石「なにこれ？」

明石が少し好奇心を剥き出しに聞いてくる、

クリス「これはアイテムボックスというやつだ、中に無数の物を入れることができる、」

明石「なんでこんなものがここにあるの？」

クリス「おそらく俺が来たからここに出て来たんだと思う、それにこいつは元師のところにもあつたからな、このアイテムボックスは向こうとこつちで共有化できる、」

明石「どういうこと？」

クリス「向こうとこつちで同じ物を出し入れできるんだ、今から手紙を書いて実験して見るつもりだ、」

俺は近くにペンと紙がないか確認する、

そしてあった、

俺は簡単に今の状況を書いてアイテムボックスにしまおう、

明石「こんなことで向こうに届くのですか？」

クリス「分からん、だが届いていれば通信など傍受されることなく通信できる、」

明石「それはいいですね、」

「ああ、全くだ、」

突然男の声が聞こえた、

俺は銃を抜き明石を背後に移動させてその声の方向に向いた、

「おいおい、突然声をかけた俺が悪いがそんな物騒な物はしまってくれ、」

クリス「その前にお前が誰か説明してもらおう、」

そこには黒いフード付きコートを着てリュックサックを背負った謎の男がいた、

怪しすぎる、

「俺は武器商人とでも呼んでくれ、」

そう言つてコートを広げる、

コートには弾丸と武器が仕舞われている、

ん？

どこかで武器商人の言葉を聞いた、

そうか、

レオンだ、

クリス「お前は前にヨーロッパの田舎町にいなかったか？」

武器商人「これは驚いた、お前さんはエスパーか何かか？」

クリス「俺の知り合いがお前に世話になったって言っていた、無駄にイケメンな男だ、」

武器商人「ああ、あの胸の大きい嬢ちゃんを連れだした男か、まさか10年以上前の奴の知り合いか、」

クリス「そんなところだ、」

明石「あの、一体なんの話をしているんですか？」

クリス「すまないが細かいことはまだ話せないがこいつは敵じゃない、」

明石「いつのまにか不法侵入している人が敵じゃないってそれは流石に、」

武器商人「あいにくと俺はお前さんらと敵になる気は無い、それに俺は商人だ、金を払えばなんでも売ってやる、」

クリス「あいにくと武器はあの中に詰め込まれていてな、」

俺はアイテムボックスを指差す、

武器商人「そうかい、だが金次第なら燃料や弾薬、ボーキサイトも扱っている、」

明石「どこに詰め込んでいるんですか？」

武器商人「商人には秘密が多いんだよ、お嬢ちゃん、」

ジルと同じこと言ってる気がする、

クリス「お前は死んでこっちに着たのか？」

武器商人「ああ、あれはそう、いつものように商売をしようとしたら、」

回想

古びた小屋

中に入ってくるイケメンと巨乳の大統領令嬢、

そこに武器商人が、

「ウエルカム、」コートを広げる、

「きゃー！変態！」扉を開ける時と同じ両手突き飛ばし、

武器商人壁まで吹き飛び頭を打ち付ける、

武器商人死亡、

「アシユリー・・・」

「ち、違うわ！この人が突然コートを広げたから！」

回想終了、

武器商人「人生で一番恥ずかしい殺され方だ、まだナイフでミスって当たったならわかるんだがな、」

明らかに遠い目で海を見る武器商人、

どんな死に方をしたんだ？

武器商人「さて、俺はここを拠点に商売をしようか、互いに得しようぜ、」

明石「何勝手に私の工房に泊まるのよ！」

武器商人「安心しろこのアイテムボックスの横で商売するつもりだ、嬢ちゃんは見たとこ技術者だな、必要な物を売ってやる、ただし金次第だ、」

クリス「それはいいじゃ無いか？金なら俺らが出す、」

明石「わかった、わかりました！そのかわりあなたも私の仕事を手伝ってもらおうから！」

武器商人「へへへ、お安い御用だ、」

どうやら無事に解決したようだ、

俺はその場を後にしようとしたら、

明石「そういえばあなたの名前は？」

今頃明石が聞いてきた、

クリス「クリスだ、今日からここの提督になった、建造や艦装のチェックのためにここにくるからよろしく、」

明石「私の事を知っていると思うけど明石よ、前の提督の事があるからまだ信用できないけどよろしく、」

クリス「いきなり信用しろと言わない、だからゆっくりと見極めてくれ、」

明石「そうする、」

明石はそう言って武器商人の所に向かった、

俺は今度こそ工房を出た、

頑張るリリー1

クリスさんが出て行った後、

私はお部屋の中で座っていた、

でも暇です！

リリー「パパ、お家の中見て回ってもいい？」

パパはプリンツちゃんに肩を揉まれながら、

セバスチャン「いいぞ、でもあまり遠くに行くなよ、」

ジル「リリーちゃん、これを持って行って、リリーちゃんは日本語を聞けないし話せないから、最低限の聞こえるようにして、」

ジルお姉さんが私に小さいなにかをくれた、

ジル「小型翻訳機よ、向こうの会話を翻訳してくれる機械よ、耳につけてスイッチを押せば自動的に翻訳してくれる、電池はソーラー電池だから天気の良い日に太陽に当たっていただくと使えるわ、」

よくわからないけど日本語がわかるようになるんだね、

セバスチャン「それがあるなら俺にくれよ、」

「ジル「セバスチャンは大人なんだから頑張って日本語を覚えなさい、」
パパはまるでママに怒られているみたい、

パパの許可をもらって私は部屋を出た、

廊下が長いです、

私は歩いた、

いっぱいお部屋がある、

でも人の気配がない、

あれ？

なんで私人の気配がないとわかったんだろう？

そう思っているとあるお部屋の前を通り過ぎると人の気配がした、

お部屋の表札を見るけど読めない、

カンジだから読めない、

私は中を覗いてみる、

2人の女の人があった、

2人ともお胸が大きい、

何かお話ししている、

でも日本語だからわからないや、

頑張つて日本語覚えないと、

そういうえばジルお姉さんに耳につけるタイプの翻訳機をくれたんだつた、えつと、

イヤリングが見たい、

私はそれをつけると、

「新しい提督はどんな人だろう、」

「できれば女の人がいいな、」

聞こえた！

すごいです！

ジルお姉さん！

「また胸を揉まれたくないですね、」

「気持ち悪いです、男なんて、」

前の提督さんと何かあつたみたいですが、

でもお胸おつきい、

ママより大きい、

あれ？

今ママが頭の中で涙目になっていたような・・・

気のせいだよね、

私はあつちのお胸よりママのお胸に飛び込みたいもん、

あつ、

ママが笑顔になった気がする、

そう思っていると、

「誰!？」

あ、

気づかれた、

別に隠れている訳じゃないけど悪い事をしたような気がする、

私はゆつくりと扉を開ける、

「女の子?」

「どうやってここに入ってきたのかしら?」

どうしよう、

入ったまではいいけど私日本語わからない、

でもなにか話さないと、

リリー「私のお名前はリリーです!よろしくお願いします!」

私はお辞儀をした、

「英語？えっとマイネームイズリリー、私の名前はリリーで合ってるわね？」

「ええ、それとナイストウミュー、初めましてかよろしくお願いしますという意味よね、よかったわ、昔金剛さんに英語を習っておいて、」

よかった、

通じて、

「それでリリーちゃんは どうしてここに来たの？」

金髪の女の人が私に近づいて来た、

大きい！

私も大きくなったらこれくらい大きくなりたい！

目指せ！

大和さんの身長と女の人のお胸！

「愛宕、リリーちゃんに日本語はちよつと、」

この人、

アタゴさんって言うんだ、

でも提督ですと言いたいけどどうやって伝えよう、

向こうは少し英語を話せるくらいだから、

プリンツちゃんの言っていたアドミラルを言おう！

リリー「私はアドミラルです、」

愛宕「アイ、アドミラル、えつと私はアドミラル？確かアドミラルってロシア語で提督って意味よね、」

「きつとリリーちゃんは今私達あまり英語がわからないと思つてロシア語で提督と伝えたのかもしれない、ビスマルクさん達もロシア語でアドミラルと呼んでいましたから、」

よかつた、

通じた、

愛宕「可愛い提督ね、この子なら私は頑張れるわ、」

アタゴさんが私の頭を撫でて来た、

でもお胸が私の顔に当たる、

柔らかい、

「愛宕、提督に失礼よ、」

愛宕「いいじゃない高雄、男の人よりこんな可愛い女の子ならなんでもしちゃう！」

あつちの黒い髪の方はタカオさんって言うんだ、

どうやってこんなに大きいお胸になるんだろう、

でも英語で話せないから、

よし！

ジェスチャーだ！

保育園のお遊戯会でパパとママに褒めてもらった身のこなしで私の思いを伝える！

私はアタゴさんに向かって、

まずは自分に指を指す、

そして自分の平らなお胸の上でお腕を作るように手を動かして、

そして最後に大きく手を広げて大きいって意味を伝える、

愛宕「ん？リリーちゃんがなにか私に訴えている、」

高雄「ジェスチャーですね、多分難しい事を伝えようとしているんです、まずは自分に指を指したって事は私って意味です、」

うんうん、

そうそう、

愛宕「次のあれはお腕の形だね、」

ん？

あれ？

なにか違う方向に向かっていているような気がする、

高雄「最後のあれはいっぱいって意味ですね、つまり！ご飯をいっぱい食べたい！で

すね！」

チーガーウー！

ご飯じゃないもん！

確かにお腹は空いているけどご飯じゃないもん！

私は首をすごく横に振る、

愛宕「あれ？違うみたいよ、」

高雄「おかしいですね、もう一度推理しましょう、はじめのあれは私、」

私は頷く、

愛宕「次のはお腕のよね、」

違うもん！

私はもう一度お胸の前でお腕を作る、

高雄「お腕、いえ、胸の前でお腕を作っているって事は胸って事ですか？」

私は頷く、

今思うと私の胸を直接指差せばよかった、

愛宕「最後のあれはいつぱいって事で、私は胸をいつぱいにしたい、どう言う意味か

しら？」

最後が違うもん！

私は首を振る、

愛宕「あらら、違うみたいよ、」

高雄「最後が違うみたいね、いっぱいじゃなくて大きい？」

それだよ！

私は頷く、

愛宕「あつてるみたいね、と言う事は私のお胸大きい、」

2人が私のお胸を見る、

高雄「もしかして大きくしたいって意味かしら？」

私は頷く、

その時2人が難しい顔をしました、

高雄「どうしよう、私達は作られた時からこの大きさだからどう育ったかなんてわか

らないわ！」

愛宕「そうね、でもこの子の目を見てもなさい、期待している目だわ、ここで答えな
いと！」

私、

聞いたらダメな事聞いたのかな？

高雄「初めからこの大きさを答えば、」

愛宕「それはダメよ、これから大きくなるかもしれない子供のそんな事答えたら、牛乳を毎日飲むとか、」

高雄「それは身長ですよ！胸なら・・・お肉、そうお肉を食えばいいんだ！」

愛宕「お肉だと胸の前にお腹が出てくるわ、この子が将来ぶくぶくに太ったら私達のせいよ、」

高雄「責任重大じゃない！真面目に考えるわよ！」

愛宕「さつきから真面目に考えているわよ！そうだ運動をするのよ！」

高雄「ダイエットをすると先に胸から小さくなるって言ってたわ、」

愛宕「じゃあ運動はダメね、」

高雄「胸を揉むとか？」

愛宕「それで大きくなった艦娘は居るかしら？」

高雄「いないわね、」

どうしよう、

2人が怖い顔で話し合ってるよ、

高雄「リリーちゃん！」

いきなりタカオさん私の名前を呼んだ！

驚いて悲鳴を漏らしちゃった、

高雄「あつ！ご、ごめんなさい！別に怖がらせるために呼んだんじゃないの！」

愛宕「リリーちゃん！胸を大きくする方法だけど、」

教えてくれるの!?

どんな事を言うのかな？

愛宕「いっぱい食べていっぱい遊んでいっぱい寝ることね、」

高雄「そうすれば大人になった時に胸は大きくなります！」

あれ？

大和さんも似たような事を言ってたような、

高雄「あれ？そういえばリリーちゃん、日本語話せないのに日本語理解してるわね、」

愛宕「そういえば、頷いたりジェスチャーしたり否定したりしてるわね、」

あ、

そうだ、

あれをすればいいんだ、

私は翻訳機を耳から外してアタゴさんの耳につけた、

美人さんにイヤリングをつけるともつと綺麗になっちゃった、

愛宕「あら？これはイヤリング？」

よし！

私は一息ついて、

リリー「アタゴさん、聞こえますか？」

愛宕「あれ？リリーちゃんが日本語を話してる？」

高雄「何を言っているんですか愛宕、リリーちゃんは英語を話してますよ、」

私は日本語わかりません、

ですので2人の話していることがわかりません、

リリー「アタゴさん、」

愛宕「ほら！流暢な日本語！」

リリー「アタゴさんにつけたイヤリングのおかげです、それが翻訳しているんです、」

愛宕「そうなの？このイヤリングが、すごいもの持っているわね、」

リリー「アタゴさん、そのかわり私は日本語わからなくなりました、今アタゴさんが

話していることがわかりません、」

愛宕「それは大変、これ返すね、」

アタゴさんがイヤリングを外して私に返してくれた、

私はイヤリングをつけた、

愛宕「私達が頑張って英語を覚えるか日本語を教えないといけないわね、」

高雄「愛宕、私もそれに賛成、」

愛宕「まずは平仮名の本を用意して次に絵本ね、」

高雄「次はノートと鉛筆ね、それと私達も英語を学ばないといけないから英語の書かれた本も用意しないと、」

あれ？

なにか大ごとになってる、

高雄「それにこの部屋も掃除しないと、」

愛宕「そうね、この部屋で勉強なんてできないもんね、」

高雄「でも今からだと遅いから明日からね、」

愛宕「こんな可愛い提督が来るなんて想像できなかったわ、」

あつ、

2人が笑ってる、

入る前は暗い顔してたけど今は笑顔だ、

よかった、

愛宕「そういえば加賀さんたちはどうなったんだろう？」

高雄「確かに、数時間前に砲撃音がしてからなにもありませんね、」

愛宕「まさか、リリーちゃんに向けて・・・」

高雄「愛宕！」

愛宕「わかってるわ、ちよつとお仕置きに行つてこないといけないわね、こんな可愛い提督に砲撃やら艦載機で攻撃するなんて、」

あれ？

笑顔なのに怖い、

愛宕「リリーちゃん、ちよつと待っててね、」

高雄「すぐに帰つてきますから、」

そう言つて2人はお部屋から出てどこかに歩いていった、

なんだろう今の2人、

怖かった、

私は2人に後ろ姿を見送ると、

「そのあなた！」

後ろから声をかけられた、

振り返ると、

私より少し背の高い女の子が立っていた、

ジルお姉さんのように髪を縛っているけど頭の横に縛ってる、

「愛宕さんと高雄さんになにしたの！あの2人が部屋から出て来るなんて、一体何したの！」

よく見ると壁際に食事が置いてある、

2人に食事を持ってきていたのかな？

でもどうしよう、

私話せないよ、

「だんまりね、いいわ！不法侵入者として捉える！」

女の子が私に向かって走って来る、

どうしよう、

人に向かってハドークーンは使えない、

使いたくない、

そういえば通信空手の本に書いてあった言葉がある、

もともとこの技は暗殺拳だつて、

そして全てを無に帰す拳、

何が何だかわからない、

そして最後のページに、

真の格闘家は己の限界の先にあるわけではない、

ましてや探すものではない、

周りから言われることでもない、

それでは何が真の格闘家か、

それがわかれば君は真の格闘家になれるだろう、

R y u、

わかんない、

でも、

拳は傷つけるだけじゃない、

誰かを救うことができる、

女の子にはごめんなさいだけど、

女の子が私に掴みかかろうとしたところで、

私は女の子の懐に潜って両手に波動を溜める、

そして、

リリー「ハシヨーゲキ！」

女の子のお腹にハシヨーゲキを行う、

ごめんなさい、

あとでパパ達に怒られるから、

女の子は私の技が当たって後方に吹き飛んだ、

そして廊下に落ちて気絶しちゃった、

私は女の子をアタゴさんらのお部屋に引きづって中に入った、
そしてベッドに横にして布団をかけた、

うう、

パパにすごく怒られそう、

そう思いながら私は女の子を見続けた、

艦娘たちの事情、

リリーが出て行ったあと、

俺はプリンツに肩を揉まれ続けている、

正直ここまで重労働になると思わなかった、

ジル「オヤジ臭いわよセバスチャン、」

セバスチャン「ほっとけ、俺は38歳だ、ジルから見たらおっさんだ、」

プリンツのように少しは労ってくれ、

ジル「これが愛する娘を助けた父親の格好とは思えないわね、」

うるさい、

ほっとけ、

セバスチャン「ジルはどうだ、畑はできそうか？」

ジル「土の状態は良くないけどうまく肥料を調整するわ、」

そういえば科学知識も持っていたなジルは、

セバスチャン「それにしても疲れた、」

プリンツ「セバスチャンさんさつきからそればかりです、」

セバスチャン「ベッドを各部屋に持っていくのに疲れたんだ、そういえば2つだけ後で持つて行くと言っていたな、」

ジル「前の提督に性的なことされてた子達の部屋ね、もし鉢合わせになってしまったら発狂されてしまうわ、」

ありえる、

セバスチャン「クリスは意外にも考えているんだな、」

ジル「そうよ、昔はあんなんじゃなかったけど、」

昔のクリスの映像は見たが細かいところまでは知らないな、

ジル「正義感満載の男だったわ、そして上司に意見する勇猛さと無謀さを持っている、そして上官を殴って軍から追い出された、」

軍人じゃないがそれはかなりやばいんじゃないか？

ジル「そこでS. T. A. R. S. に拾われた、クリスは本当はクリストファー・レットフィールドって名前だけどS. T. A. R. S. に来てから経歴書にもクリスと書くようになったの、」

セバスチャン「一種の決別みたいなやつか？」

ジル「そうね、軍との決別、でも自分で組織を作り部隊を率いているわ、決別しても根っからの軍人なのよ、」

あのクリスがね、

ジル「それにクリスは私の知らない経験をしてきているわ、それも濃い経験、」
セバスチャン「ジルの死ぬところもな、」

ジル「そうね、生きていたとはいえその事がクリスを成長させたのね、」
それにジルに殺されかけていた、

それも成長するために必要なのか、

その時扉が開いた、

青い服のスカート履いた巨乳の美人が2人いた、

そして俺を見て固まり青褪める、

「な、なんで男の人がいるんですか？」

何を言っているか分からないがああの子だとクリスが避けていた部屋の人らだろう、
俺は退散したほうがいいだろうか、

ジル「一応は砲撃の洗礼を受けてきたわ、私はジル、こっちはセバスチャンとプリン
ツちゃん、一応はここに配属になった提督よ、」

プリンツ「よろしくおねがいします！」

プリンツがお辞儀をする、

「提督？リリーちゃんだけじゃないの？」

ん？

今リリーと言わなかったか？

ジル「リリーちゃんにあったのね、」

「はい、先程私らのお部屋で、」

ジル「リリーちゃんも提督よ、そしてこのソファでだらけているセバスチャンの娘よ、」

おい、

日本語だから分からんが今失礼な事言っただろう、

「親子・・・」

ジル「2人はなんでこっちに來たの？」

「リリーちゃんが加賀さん達に襲われたと思つて少しお仕置きしに來たんです、でもその必要はなさそうです、」

ジル「そうね、私達がお仕置き済みよ、まだ氣絶してるわ、それに私達がいる限りリリーちゃんに傷一つ付けさせる氣はないわ、」

「そうね、あんな可愛い子に傷をつけさせる氣は無いわ、」

ジル「一番怒るのはセバスチャンよ、リリーちゃんのために身体を張つて助けに行つた男よ、」

「どういう意味ですか？」

ジル「いざれ説明するわ、でもそれくらい彼は娘を大切にしているわ、言葉がわからないとこんなにも疎外感があるんだな、

ジル「ところで名前を覚えてくれるかしら？」

「すいません、私は高雄です、」

「私は愛宕、よろしく、」

プリンツ「セバスチャンさん、高雄さんと愛宕さんです、」

ほうほう、

黒髪の巨乳は高雄、

金髪の巨乳は愛宕、

覚えた、

そして前の提督にひどいことされた2人か、

セバスチャン「プリンツ、俺は席を外すか？」

プリンツ「大丈夫です、あの様子ですと今のところは、ですが近寄らない方がいいです、」

だろうな、

俺が話しかけるだけで発狂しそうだ、

ジル「さて、自己紹介が済んだところでどうする？お仕置きは私達で終わらせたから部屋に戻るの？」

愛宕「そうですね、もうそろそろ霞ちゃんか食事を持ってくると思うから戻ろうかしら、」

ジル「それだったらその前にあなたの方にベッドを新調したのよ、持って行くからここで待ってて、プリンツちゃんを置いて行くから、セバスチャン、行くわよ、」

突然名前を言われて驚いてしまう、

セバスチャン「どこに行くんだ？」

ジル「2人の部屋にベッドを持って行くのよ、私も手伝うから動きなさい、」

冗談だろ？

さつきまで俺はそのベッドを何個も持って行ったんだ、

ジル「あなたをここで待たせる訳には行かないわ、あの2人のために頑張らなさい、」
鬼だろ、

だがこの部屋で待つと2人が安心できない、

しようがない、

クリス、

この場にはない事恨んでやる、

セバスチャン「プリンツ、すまないがここで2人の相手を頼む、」
俺とジルは執務室を出た、

俺とジルはベッド1つを2人の部屋に持って行った、

セバスチャン「ここでいいんだよな、」

部屋間違えただけは避けてほしい、

こいつを持つてくるの疲れる、

ジル「間違い無いわ、まず私が先に中に入るわ、下着とかあつたらいけないから、」

それは一大事だ、

女性の下着はマイラ以外のは見たくないし見たらマイラに殺される、

ジルが部屋に入ると、

ジル「リリーちゃん？」

まさかリリーがいたのか、

リリー「ジルお姉さん!？」

ジル「どうしたの？それにこの子は？」

まだ入れないのか？

リリー「えっと、」

ジル「怒らないから正直に答えて、」

リリー「この子に捕まりそうになったからハシヨーゲキをして気絶させました、ごめんなさい！」

捕まりそうになった!?

どういう事だ!

ジル「今回はしようがないわね、あなた日本語は話せないからね、でも起きたらちゃんとごめんなさいをしないとダメよ、」

リリー「うん、」

ジルは結婚したら子供思いの嫁さんになるな、

ジル「さて、この部屋は少し散らかっているけど下着は無いわね、セバスチャン、入って来ていいわよ、」

リリー「パパ!？」

俺は部屋に入る、

セバスチャン「リリー、今回は自分の身を守るために技を使ったんだろ、間違っではないが声から一緒に生活する仲間だ、ジルの言う通り起きたら謝るんだぞ、」

リリー「うん！」

いい子だ、

この子が笑顔ならそれでいい、

ジル「セバスチャン、まずベッドを入れるわ、そのあとその子を新しいベッドに移して古い方は処分するわよ、」

そうだった、

俺らはベッドを入れに来たんだ、

俺は重い身体を動かしてベッドの入れ替えを行うのだった、

余談だが、

もう一つある事忘れていた、

リリーを連れて執務室に戻る俺ら、

中に入るとプリンツと一緒に話している2人がいる、

女性同士、

艦娘同士話したい事あったんだろう、

そこに、

クリス「何しているんだ、」

クリスが戻ってきた、

ジル「お帰り、工房はどうだった？」

クリス「明石と変な奴に会って来た、金次第で色々売ってくれる奴だ、」

ジル「変な人ね、」

クリス「そつちはなぜ部屋の前にいるんだ？」

ジル「入ろうと思えば入れるけどクリスはまだ入らないで、」

ジルはそう言い、

ジル「入るわ、」

そう言つて中に入る、

ジル「ベッドの移動を新しくしておいたわ、」

愛宕「ありがとうございます、」

ジル「それとあなた方には辛いかもしれないけど最後にもう一人男の提督がいるわ、名前がクリス、今は姿を見せないように部屋の外にいるわ、」

高雄「まだいたのですか、」

ジル「これで最後よ、あなた方に何があつたかわかっているわ、セバスチャンもクリスも信用しろと言わない、もちろん私も、でもリリーちゃんにはさつきしたように接してあげてほしいわ、まだ日本語が話せないけど仲良くしてあげて、」

愛宕「そこは大丈夫です、あの子を嫌いになることは無いわ、一生懸命で可愛いもの、」
高雄「はい、あの子のためなら頑張れます、」

ジル「そう、よかつたわ、先に言っておくけどリリーちゃんにはお母さんがいないの、出来るだけお母さんの話は避けてあげて、」

愛宕「何か訳ありなのね、」

ジル「そうね、そこはセバスチャンと話せるようになったら聞いて、それとリリーちゃんの前でセバスチャンを悪く言うような事言わないでほしい、あなた方は男が信用できないかもしれないけどリリーちゃんにとってセバスチャンは自分を救うために命をかけた大好きなお父さんだから、」

高雄「さつきも言っていました但何か訳ありなのですか？」

ジル「さつきも言っただけどセバスチャンと話せるようになったら聞いて、」

愛宕「さつきからそればかりですね、」

ジル「私達は聞いているけど内容は私の口から勝手に言えないような内容なのよ、」

高雄「多分聞くことは無いけどその時になったら聞くわ、ベッドありがとう、」

話が長い、

時折俺とリリーの名前が出て来たからどうやら俺らの話のようだ、

そして高雄と愛宕が出て行った、

その際俺とクリスは距離を離す、

そして俺らは執務室に入った、

クリス「あの2人が愛宕と高雄か、」

ジル「そうよ、あの2人は私とリリーちゃんとプリンツちゃんと、もしかしたらセバスチャンの3人の任せてもらってもいいかしら、」

俺も？

なんで？

セバスチャン「なんで俺もだ？」

ジル「リリーちゃんの父親だからよ、」

意味がわからん、

ジル「念のためよ、リリーちゃんの父親として何回か近づく事もあるわ、あなたで男を少しづつ慣れてもらおうわ、」

なぜだろうか、

俺をウイルスのように扱われているような気がする、

男性恐怖症を治すウイルス、

それをたまにあつてじわじわと浸透させる、

考えすぎか？

クリス「ジルがそう言うなら皆に任せた、それで、こいつらは起きる気配あるか？ エントランスで未だに長門が気絶していた、」

たしかに、

まだ気絶している、

ジル「仕方ないわね、みんな各部屋に送り届けるわよ、」

はっ!?

また俺らは運ぶのか？

ジルはちっこい艦娘を担いだ、

ジル「部屋は適当でいいわね、名前がわからないもの、」

行く気満々だな、

クリス「しょうがない、もう一踏ん張りしますか、」

クリスはそう言い別室で横になっていた眼鏡をかけた艦娘を担いだ、

俺もか？

プリントも何か頭にハチマキを巻いた艦娘を担いでいる、

しょうがない、

俺は袴の艦娘を背負った、

俺たちはその後空室の部屋を探して一人ずつ部屋に艦娘たちを寝かせて回った、

セバスチャン「終わった、」

もう何も持ちたく無い、

そして腹が減った、

クリス「間宮のところに行くか、素直に料理が出ればの話だが、」

不安になることは言うなよ、

せめてリリーとプリンツの分は作って貰わないと、

俺らは間宮のところに向かった、

甘味処間宮はまだやっていた、

間宮「いらっしやいませ、」

・・・対応が普通だ、

間宮「ご注文はどうされますか？」

普通だ、

間宮「本日のオススメは和食です、」

だが何か変だ、

クリス「間宮、」

間宮「はい？」

クリス「疲れないか？仮面をつけて、」

間宮「なんのことでしょう？」

クリス「誤魔化すな、そんな機械的な会話が変だと思わない方がおかしい、嫌なら嫌と言えればいいだろ、」

間宮「・・・」

何話しているんだ？

間宮の顔が変に怖いぞ、

ジル「そうね、たしかに今のあなたの料理は食べたく無いわね、」

クリス「人が憎い、別に構わないさ、だがそんな奴の料理だけは食いたく無い、」

間宮が震えているぞ、

何話しているんだ、

ジル「嫌な相手でも美味しい料理を出すのがプロというものじゃ無いのかしら？」

間宮「好き勝手言わないでください！」

間宮がキレた！

間宮「前の提督はいつもまずいと言って床にばら撒いて帰っていった！それを毎日処

理する！床に落ちた料理を見るたびに私はなんでこんな人の料理を作らないといけないのと思う！」

クリス「それがお前の仕事だからだろ？」

間宮「こんな辛い思いをするくらいなら、」

ジル「やめるのかしら？ だったらやめればいいわ、」

間宮「えっ？」

ジル「辛いのでしょう？ 私達に料理を作りたく無いのでしょうか？ だったらやめればいいわ、明日から私たちが料理を作るわ、」

クリス「だがそのかわりお前はここの皆を裏切ることになる、くだらない理由でな、」
間宮「く、くだらない!？」

クリス「くだらないさ、俺からしたらそいつの言わせたいように言わせればいい、お前の料理をおいしいと笑顔で言ってくれる人がいるだろうに、お前は真面目にもそいつの言葉を聞いて自分で塞ぎ込んでいる、しかももういない奴なのに、そんな顔でほかの艦娘にも料理を出していたのか、ほかの艦娘に同情するよ、」

ジル「おいしい料理をまずくしているのはあなたよ、間宮、こんなじゃ料理は来ないわね、クリス、厨房に行ってくるわ、」

クリス「任せた、」

おいおい、

何を話したかわからないのにジルがどこかに行ったぞ、

リリー「私も暗い顔の間宮さんのお料理食べたく無いよ、」

リリーは耳に翻訳機をつけているからこの会話が聞こえているのか？

間宮「待つてください！」

間宮が叫んだ！

間宮「私に料理を作らせてください！」

ジル「なんで？作りたく無いのでしょうか？」

間宮「あなた方にそんなこと言われて私のプライドが傷つきました！たしかに人間に料理を作りたくありません！ですが！プロとして！私の料理で皆様に美味しいと言わせてみせます！」

ジル「いいわ、やってみなさい、」

ジルが戻ってきた、

一体なんの会話をしているんだ？

間宮が戻る、

そして、

出てきたのは和食、

そしてお馴染みの箸、

ジルとクリスは箸が使えるのかそのまま使い始める、

プリンツ、

お前も使えるのか、

俺とリリーは今更フォークとスプーンを持ってきてほしいと頼める雰囲気では無い
ため頑張つて箸を使う、

リリーが空気を読めるようになるなんて、

料理はうまいがステーキブのところの間宮が作った料理よりかはるかに下だ、

リリー「なんだろう？何か足りない、」

リリーもそう思うのか？

間宮「どうですか？美味しいですか？」

ジル「そうね、普通ね、」

クリス「ああ、普通だ、」

間宮「なっ!？」

ジル「間宮、あなたは美味しいと言わせるために作ったのよね、」

間宮「そうです！」

ジル「それじゃあ艦娘のみんなにも美味しいと言わせるために作るのかしら？」

間宮「何当たり前なことを聞いていますのですか!？」

ジル「元師のところの間宮はね、みんなが笑顔になれる料理を作るんだって頑張っているわ、」

間宮「えっ?」

ジル「ただ美味しいと言わせるのは簡単よ、私でもできるわ、でも笑顔にさせるのは無理ね、ただ作るだけでなく食べてくれる人のことを思いながら作らないといけないのよ、あなたはそれが欠けているわ、」

間宮「そんな非科学的な・・・」

ジル「だったら前の提督が来る前はどうやって料理を作っていたのかしら?」

間宮「それは・・・」

ジル「そこで言葉を詰まらせることは昔はそうやって作っていたってことよ、それ之前的の男は奪ったのよ、今から思い出せばいいわ、」

間宮「出来るのでしょうか?」

ジル「できるできないじゃないわ、やるのかやらないかよ、」

話が長いな、

だが不味いわけじゃない、

箸がうまく使えないな、

リリーなんて突き刺して食べてるぞ、

ジル「それにあそこの2人は食べているわ、不味いわけじゃないのよ、自信を持って昔を思い出しながら作りなさい、」

ジル、

いきなり俺に指を差すなよ、

間宮「はい！」

どうやら問題解決したな、

これからどうなることやら、

俺は箸を料理に刺して食いながらそう思った、

● サバイバルするP

ハオスを追い払った翌日、

俺は洞窟の奥で艦娘を見ていた、

未だに目を覚まさない艦娘、

息はしている、

昨日は大変だった港湾棲姫から質問責めにあいその後ほつぽと魚を取りに行つて、

一番の謎はなぜ俺がこの世界に来たのかだ、

あのままあの世に連れて行つてくれればいいものを、

全く、

死神に嫌われたのか？

そう思っていると、

「うん？」

声が出た、

起きたか？

俺は艦娘の方を見た、

もぞもぞ動いている、

艦娘が目を開ける、

「()はど()デス?」

なんだこの違和感のある日本語は?

ピアーズ「天国でも地獄ではないのはたしかだ、」

艦娘が俺を見る、

「あなたが助けてくれたデスか?」

ピアーズ「助けたのは俺じゃないが傷を治したのは俺だ、だが指の再生までできなかった、」

「そこまで言わないデース、助けてくれてありがとうデース、」

ピアーズ「お前はそんな話し方なのか?」

「一応は帰国子女なのデース、」

帰国子女でもそんな話し方はしない、

ピアーズ「俺はピアーズ、アメリカ人だ、」

この世界にB. S. A. Aはないから国籍だけ言えばいいだろう、

「私は金剛、よろしくデス、ピアーズ、」

金剛、

艦娘はそんな不思議な名前なのか？

ピアーズ「何があった金剛、お前の身体を見たときに火傷のほか暴行や切断のされていたんだ、一体何があったんだ？」

俺は単刀直入に聞く、

遠回しに聞くことはできない、

金剛は少し目をそらして、

金剛「私は私のいた鎮守府の提督に作戦に異を唱えたのデース、そして指を切断されてまともに燃料や弾薬を持たせずに出撃させたのデース、そして敵の猛攻ですぐに轟沈しました、そして目を覚ましたらここにいまシタ、」

ゲス野郎だな、

ピアーズ「今すぐそいつを殺しに行つていいか？」

金剛「提督の殺害は重罪デース、気持ちだけ受け取つておきマース、」

金剛は力なく笑う、

ピアーズ「こんな美人なのになんでこんな目にあうんだ、」

金剛「美人でも艦娘は結局は兵器で化物デース、」

ピアーズ「それがおかしい、こうやって話せるし笑えて悔しがることのできるんだ、それが人間じゃないなんておかしいだろ、」

港湾 「私は戦いから逃げて来た身ですので、誰を助けようと勝手では？」

金剛 「その言葉を信じろと言うのデスカ！」

ピアーズ 「信じるか信じないか金剛次第だろう、だがせめて服を着てくれ、お前は今裸なんだ、」

俺がそう言うのと金剛は自分の体を持って顔を赤くする、

金剛 「わわ私、裸で男の人と話していたのデスカ!？」

シーツはかけていただろう、

俺は港湾棲艦から服を受け取り金剛の前に持つていく、

ピアーズ 「ほら、」

金剛は服を受け取り、

金剛 「ピアーズ！、後ろを向いてくださいサーイ！」

まあ昔女の隊員が女は着替えを見られるのは恥ずかしいと言っていたからな、

俺は後ろを向いた、

港湾棲姫は普通に金剛を見ているな、

港湾 「服のサイズが合わなかったと思いきさせていただいています、」

そうか、

まあ合わなかったら下半身が隠せないやばいセーターになるな、

それだけは避けたい、

金剛「少し小さいデース、」

やばい、

金剛「でもなんとか隠せていマース、」

よかった、

もし小さかったら俺は理性と戦わないといけなかった、

金剛「ピアーズ、もういいデース、」

金剛の言葉に俺は振り返る、

縦セーターを来た金剛、

ただスカートでもズボンでもいいから着て欲しい、

今思うと下着も無いな、

今日から外で寝るか、

金剛「うう、やっぱり下着がないとスースーします、」

港灣「すいません、下着は明日作りますので今はそれで過ごしてください、」

金剛「しやがむとお股が見えてしまいマース、」

ピアーズ「シーツで隠しておけ、」

俺は外に向かう、

あまりあそこにいると俺の気が変になりそうだ、特に性的な意味で、

外に出ると青空と青い海が俺を迎えてくれる、

ほっぼが木の実を拾って来ていた、

ほっぼ「ピアーズ！ いっぱい持ってきた！」

ピアーズ「おお、ありがとうほっぼ、今から釣りに行くが一緒に行くか？」

ほっぼ「行く！」

ほっぼはそう言って洞窟に木の実を持って行った、

喧嘩してないよな、

あの2人、

そしてほっぼが戻ってきた、

釣り道具を持って、

ほっぼ「ピアーズ、釣竿忘れてる！」

ピアーズ「すまない、取ってきてくれてありがとうな、」

そう言ってほっぼの頭を撫でる、

ほっぼが嬉しそうに笑顔になる、

こんな子供まで人類の敵か、

もしこの子が撃ってきたら俺は撃てるのか？

ほっぼ「ピアーズ？どうしたの？」

頭を撫でたまま考え事をした俺が気になったんだろう、

ほっぼが声をかけてきた、

心配させたな、

ピアーズ「なんでもない、行くぞ、釣った魚とほっぼの取ってきた木の实で今日の晩飯を作るぞ、」

ほっぼ「作るぞ！」

俺とほっぼは海岸に移動した、

大量だ、

何匹も釣れる、

ほっぼの方には大物が引つかかり俺はそれの補佐をする、

だが魚だけでは飽きる、

銃があるから狩りでもするか、

解体の仕方も知っているから大丈夫だ、

流石にほっぼに解体を見せたくない、

港湾棲姫に手伝って貰うか、

バケツいっぱい魚を持って洞窟に戻る、

金剛「そんなデスよ！私のところだけでなく他の鎮守府の提督も無理やり特攻させる事が多いんデスよ！」

港湾「わかります、昔ボロボロの姿で向かってくる艦娘を見るたびになんでこの子たちはそんな姿になっても戦うのか不思議でした、」

金剛「兵器として見られているのは分かっているマスがせめて入渠はさせて欲しいデス！」

港湾「お風呂気持ちいですもんね、」

金剛「艦娘の唯一の憩いの場デス！」

めっっちゃ意気投合している、

一応は敵同士のはずだが、

まあ戦いさえなければ女同士だからな、

ほっぼ「お姉ちゃん！今日は大量だよ！」

港湾「ほっぼちゃんすごいわね、」

ピアーズ「港湾棲姫、半分は干物にするから捌いておいてくれないか？俺は外で火起

こししてくる、」

港湾「わかりました、」

ピアーズ「ほっぽは燃えやすい草を持ってきて欲しい、枯れ草で構わない、」
ほっぽ「わかった！」

皆が作業に取り掛かる、

金剛「私も何か手伝いマース、」

ピアーズ「金剛はまだ休んでおけ、明日から色々手伝ってもらおう、」

金剛が何か悔しそうな顔をしている、

病み上がりは寝かせておかないといけない、

俺は外で火起こしを行った、

焚き火を作りほっぽの持ってきた枯れ草を敷いて火をつける、

ライターがあつてよかつた、

原始的に火種を作らないといけないところだった、

港湾棲姫が捌いた魚を持ってきた、

ついでに捌くのに使つたのは俺のサバイバルナイフだ、

俺は木の枝を尖らせてそこに魚を刺す、

そして塩を少しかけて焚き火の近くで焼く、

網がないからこうしないといけない、

焼いてる間に木の実で何か作るか、

流石にこのままだと味気ない、

簡易クッキーでも作るか、

俺は木の実の殻を取り除いて中身を潰す、

それを何個も潰す、

そして水を少し入れて塩を少し加える、

そして潰して混ぜる、

水が少なくても固まらない、

多くても固まらない、

加減が難しい、

そういえば港湾棲姫らは何を食べて生活していたんだ？

パンを作る小麦とかは無いがフライパンなどの調理器具があった、

流れ着いた物を使っているのか？

塩も海水から作っているのか？

だったらあの2人は原始的なやり方で火を起こしているのか、
すごいな、

俺は素直にそう思う、

クツキーの生地ができた、

これをフライパンに乗せて焼く、

ほっぽの目が輝いている、

一番に食わせるか、

そうこうしていると魚が焼けた、

俺は草の上に盛り付ける、

クツキーもできてそれも盛り付ける、

ピアーズ「ほっぽ、先に食べればいいぞ、木の実集めや釣りも頑張ったんだ、」

ほっぽ「うん！いただきます！」

ほっぽが魚にかぶりついた、

俺は他に焼けた魚とクツキーを草に盛り付けて港湾棲姫と金剛のところを持っていく、

2人は美味しそうに食べていたな、

俺は戻り焼き魚とクツキーを食べる、

食べ終わるとほっぼは疲れて眠ってしまった、

外は少し暗くなつたな、

俺はほっぼを抱えて洞窟に入る、

港湾棲姫と金剛も寝ているのか、

俺はほっぼを2人の近くに下ろして外に出る、

一人で火の番か、

まあ近場を見させてもらったが野生動物以外の危険は無いな、

クマが出てくるわけじゃ無いが、

俺は木の枝を焚き火に入れると、

金剛「ピアーズ？」

後ろから金剛に声をかけられた、

ピアーズ「眠れないのか？」

金剛「ほっぼを連れてきたときに起きまシタ？」

起こしてしまったようだ、

金剛「お隣いいでデスか？」

ピアーズ「構わん、」

金剛が俺の隣に座る、

金剛「初めてデス、深海棲艦と話をするのは、」

ピアーズ「敵同士だったんだろ？」

金剛「はい、いっぱい港湾棲姫の仲間を殺しまシタ、でも私の仲間も殺されまシタ、でも港湾棲姫とほっぽりは戦いから逃げた、」

ピアーズ「戦いは嫌いだって言っていた、」

金剛「はい、少し羨ましいデス、私も戦いから逃げたいデス、」

金剛が俺に体を預けてきた、

金剛「ピアーズ、私は艦娘デス、いずれはまた戦いに行かないといけません、でも今だけ、ここにいる間だけただの女性でいいデスか？」

ピアーズ「今だけでなくずっと女でいればいいだろ、」

金剛「それは難しいデス、私は兵器です、」

ピアーズ「俺から見たら綺麗な女性だがな、」

金剛「言い方が卑怯デス、私、本気になりマス、」

ピアーズ「あつたばかりの男にそれを言うな、ただ傷を治したただけだ、もしいつとき
の雰囲気になされて何かをしてからでは後々後悔するのは金剛だ、」

金剛「後悔しません、それに鎮守府に戻ったらあの提督に犯されマス、それだったら初めてはピアーズがいいデース、」

やっぱり殴りに行こう、

そいつを、

金剛が俺の顔に顔を近づけてくる、

そこまで言われたら拒む気は無い、

俺は金剛の口づけを受け入れた、

女性経験はあるが生娘は無いな、

できる限り優しくしよう、

俺は金剛のセーターを・・・

終わったのは夜中だった、

焚き火の火が消えて星の光だけが辺りを照らす、

港湾「お楽しみですね、」

なぜここにいるんだ、

金剛は顔を真っ赤にさせながら俺に抱きつく、

ピアーズ「覗き見か？」

港湾「入り口近くであれだけ獣みたいに声を上げていましたら中まで響きます、知っていますか？洞窟の中は音が響きやすいのですよ、」

金剛は顔を俺の胸に埋める、

港湾「ほっぽちゃんはぐっすり眠っています、ピアーズ、体が熱いので責任を取ってください、」

ピアーズ「お前も昨日会ったばかりの男に何を言っているんだ、」

港湾「昨日性的な視線を送っていたピアーズに言われたく無い言葉です、それに私も深海棲艦の1人です、明日ここに艦娘が来て私は倒されるかもしれないのです、せめて女の喜びを知っておきたいのです、」

生存本能か？

戦争前日の兵士か？

もし子供ができたらどうするんだ、

俺は人間じゃないんだ、

だが言っても聞きそうにないな、

ピアーズ「わかった、港湾棲姫、こっちに来い、」

金剛、

何拗ねているんだ、
港湾棲姫は嬉しそうにこっちに来た、
まだ寝れそうにないな、

コートの巨人

昼間

近隣の町、

働く住民達、

そんな中、

憲兵が遠くを見ていると、

コートを着たスキンヘッドの男が歩いていた、

敵つい顔立ちで歩く男、

その男がこつちに歩いてくる、

「なんだあいつ、」

様々な人を見ていた憲兵もそのコートの男にそう眩かざる得なかった、

男が憲兵の横を通り過ぎる、

身長が2 mもある大男、

憲兵も仕事柄声をかけたくない相手でも声をかけざるおえない、

「止まれ、」

しかし大男は止まらない、

憲兵が大男のコートに手を伸ばして掴む、

「聞こえなかったのか！止まれ！」

何かやましい事をしたんだと思う憲兵、

大男は止まり憲兵の方に向き直る、

憲兵は事情を聞こうと大男を引つ張ろうとするが、

大男が憲兵の頭を掴んで持ち上げる、

憲兵は叫んで周りに助けを求めた、

詰所にいた仲間が出てきて大男に銃を構える、

「離せ！」

「撃つぞ！」

仲間が口々にそう言うが大男はやめる気配がない、

大男が憲兵を掴んでいる頭に力を入れる、

「ぎゃあああああああああああああああ！！！！」

今までこんな声を出したり聞いた奴はいるだろうか、

掴まれている憲兵がすごい声を上げる、

その声に住民も憲兵と大男を見る、

周りの憲兵が銃を撃つ、
だがコートが分厚いのか怯む様子も血を流す様子も見られない、
大男の手の力が更に強くなり、

グシヤツ

憲兵の頭が潰れた、
地面に血が落ちる、

体から力が抜けたようにだらんとなり時折痙攣する、
周りの憲兵は唾然とした、

安全な街の憲兵の仕事のはずが銃弾の効かない馬鹿力の大男に同僚が頭を素手で潰
されて死んだのだから、

悪い夢なら覚めて欲しい、
何人もの人がそう思うだろう、

大男は死んだ憲兵を近くにいた憲兵に投げた、
憲兵はすぐに動けず死体が当たり倒れる、

住民が悲鳴をあげて家に閉じこもる、

憲兵が銃を撃ち続ける、

だが大男には効果が見られない、

大男の拳が憲兵に襲いかかる、

1人、

また1人と殴られる飛ばされる、

憲兵が全員倒れた事で次は住民に目を向けられる、

大男は近くの家に向かい壁を破壊する、

中で怯えている住民が驚いて腰を抜かす、

そんな住民に躊躇なくその拳が振るわれて住民が死ぬ、

また大男が動き出して外に出ると、

「何ですか……これは……」

1人の女性がそう呟いた、

メガネをかけた女性、

大男からしたらただの人間に過ぎない、

大男は女性に近づいていき、

「霧島！ 離れろ！」

男がそう叫ぶも、

女性に拳が振り上げられる、

時は戻り、

朝、

俺は執務室のソファから起き出した、

向こう側のソファで寝ているセバスチャンはまだ寝ている、

俺は立ち上がり執務室を出た、

甘味処間宮、

甘味処間宮についた俺は間宮を見た、

クリス「朝から性が出るな、」

間宮「クリスさん、おはようございます、昨日はすいませんでした、」

クリス「気にするな、だが昨日に言葉を聞いてどうするか間宮次第だ、」

間宮「はい！」

いい返事だ、

俺は間宮のところで飯を食べた、

昨日よりマシな味だ、
早速いい傾向に行つたな、

さて、

食事が終わつたがまだここの全艦娘に挨拶していない、
一度大淀に説明して間宮の所に集合してもらうか、
俺は大淀の部屋に向かつた、

大淀の部屋に着いた俺は扉をノックした、

大淀「どちら様ですか？」

クリス「クリスだ、すまないが艦娘達を甘味処に集めてくれないか？俺たちの紹介を
したい、」

大淀「わかりましたが集まるかどうかわかりませ、」

クリス「それでいい、無理強いはしない、その場合は後で各部屋に挨拶回りをする、」
大淀「それでは私は放送室に行きます、」

クリス「頼んだ、」

俺は一度戻つた、

甘味処に戻るとジルとセバスチャン、
リリーとプリンツがいた、

既に飯を食べ終えた後のようだ、

ジル「どこか行つてたのかしら？」

クリス「大淀の所だ、放送してもらつて艦娘達をここに集合させてもらうつもりだ、」

ジル「紹介をするのね、」

クリス「いつまでも挨拶しないわけにはいかないだろう、」

セバスチャン「そうだな、すまないがプリンツかクリス、俺とリリーの紹介をしてく

れないか、」

プリンツ「わかりました、」

そう言つていると入り口が騒がしくなった、

来たようだ、

初めに入つてきたのは大淀だった、

そして次に神通、

そしてカメラを持った子とカメラを持った子と同じ髪色の子、

髪を左右に縛つた子と団子へアーの子、

この2人は神通と一緒に服だな、

カメラを持った子が青葉だな、

次に入って来たのは駆逐艦の子、

見たことがある、

ヴェールヌイ、

いや、

響、

そして電、

吹雪に白雪、

黒い髪の少女と髪を横に縛った少女、

ん？

髪を横に縛った子がリリーを睨んでいる、

何でだ？

次は高雄と愛宕、

長門と霧島、

イク、

そして青い袴の女性、

昨日出発前に帰ってきた赤城と色違いだな、

そして・・・子供？

帽子をかぶって無駄に長い靴底の子供、

背伸びしたい年頃なのか？

そして鉢巻を巻いた子、

それと明石と武器商人、

何であいつがちやつかり来ているんだ？

間宮が茶を配っている、

一応は全員揃ったな、

クリス「突然呼び出してすまない、昨日からこの提督をすることになったクリス・

レッドフィールドだ、」

ジル「私はジル・バレンタイン、提督および医療、カウンセリングを担当するわ、」

プリンツ「プリンツ・オイゲンです、そしてこちらのお二人はセバスチャン・カステ

アノスさんとリリー・カステアノスさんです、こちらのお二人も提督としてこちらで働

くとのことですよ、」

セバスチャンとリリーは頭を下げる、

電「提督が4人も・・・」

「最悪だわ、」

歓迎はされていないな、

愛宕「よろしくねリリーちゃん、」

前言撤回、

愛宕と高雄はリリーを歓迎している、

大淀「よろしくお願いします、」

大淀と神通は少なからず俺を歓迎しているようだ、

クリス「今すぐ俺らを信用しろと言わない、それは俺らの仕事ぶりを見て判断してくれ、」

「それで信用できなかつたら出て行ってくれるんですか？」

鉢巻を巻いた女性がそう言う、

クリス「残念ながら俺らも職に困っているんでな、そう簡単に出て行かない、」

大淀「今から出撃をなさいますか？」

クリス「いや、出撃は当分の間は無しだ、まずは鎮守府の中を改装する、全員が住みやすいように部屋の改築や壊れた壁の修理などする、」

「その間私達は何をすれば良いの？」

クリス「好きに過ごしてくれ、あとは日用品で足りないものがあつたら言ってくれ、資金は前の提督が無駄に残してやがった、だから多少の贅沢は大丈夫だ、」

大淀「わかりました、それで私達の紹介は必要ですか？」

クリス「答えてくれるのであれば、俺らと話したくない者もいるだろう、後で写真付きのプロフィールを渡してくれるだけでも良い、」

大淀「ですがそれですと提督に失礼では？」

クリス「提督として思われていないんだ、それにステイブ、いや元師にこの事は聞いている、提督を信用していないことはわかる、今は名前さえわかれば良い、」

大淀「わかりました、後でお持ちします、」

クリス「ありがとうございます、それでは今日はこれで解散だ、もし質問があったら解散後に聞こう、」

武器商人「おいおい、俺の紹介はないのか？」

いたな、

忘れていた、

クリス「すまん、忘れていた、」

武器商人「気をつけてくれよ、俺は武器商人だ、だが武器以外にも売っている、そこは金次第だ、興味があつたら工房にいるから来てくれ、」

明石「私も昨日利用させてもらったけど日用品から改造計画書まで売ってたから一度見るのもいいわ、」

まさかの明石がフォローに回った、

昨日のうちに打ち解けたようだ、

「あんたのような提督は認めないわ！」

うん？

リリーを睨んでいた子がリリーを指差してそう言う、

だが、

愛宕「霞ちゃん、昨日も言ったよね？リリーちゃんをいじめたらダメだつて、」

高雄「そうそう、あんな可愛い子をいじめたら許さないって言いましたよね？」

霞つて言うのか、

だが愛宕と高雄が怖いんだが、

霞「愛宕さん！高雄さん！何であんな奴の肩を持つんですか!？」

愛宕「それは可愛いからよ、」

高雄「それ以外の理由があると思いますか？」

横暴だ、

愛宕「さーて、ちよつとお部屋でお・は・な・し

・しましょうか？」

霞の腕を愛宕と高雄が片腕ずつ持ち、

霞「えっ!? そ、それは・・・ちよつとあんた助けなさいよ!」

霞がリリーに助けを求めるが、

リリー「ええつと・・・ば、バイバイ!」

リリーが悩んで手を振る、

それに答える愛宕と高雄、

霞「ちくしよーーーーー!」

霞はそのまま連れて行かれた、

コントか、

そう思っていると、

足音をたてながら誰かが来る、

俺はそつちを見ると、

霧島「はっ!」

殴りかかってきた、

俺は殴りかかる手を掴み受け止める、

更に蹴りが来たのでそれも受け止める、

クリス「まだ甘いな、それなら元師のところの長門の方がいい拳をしていた、

霧島「私はあなた方を提督として認めません! 認めることなんて絶対にありません

！」

霧島が空いている手で殴りかかる、俺は掴んでいる手を押す、

拳が俺の所に届くことはなかった、

大淀「霧島さん！やめてください！」

大淀の声も聞こえていないようだ、

仕方ない、

クリス「少し相手をしてやる、」

ジル「クリス、その子は任せたわ、私達は工房に一度行くわ、」

クリス「だったらアイテムボックスの中を確認してくれないか、昨日ステイプの所に簡単な手紙を書いたからその返事が来ていないか確認してくれ、」

ジル「わかったわ、」

霧島「はっ！」

まあ話している間攻撃してこないなんて律儀なのか？

ジルはセバスチャンとリリーとプリンツを連れて工房に向かった、

クリス「会話中は相手が無防備な場合がある、その隙に殴ればいい、」

俺は霧島の拳を受け止める、

霧島「あなたの言葉なんて聞きません！」

返事している時点で聞いているんだが、

クリス「それと何だその腰の入っていない拳は、霧島、お前は手数で勝負するタイプじゃない、一撃で相手を倒す感じだ、そんなんじや倒せないぞ、」

霧島「うるさい！うるさい！うるさい！」

全然腰が入っていない、

長門の方が接近戦を熟知している、

鍛えがいはあるな、

電「すごい、あの霧島さんに生身で勝っています、」

響「ハラショー、」

さて、

俺も反撃をするか、

霧島が殴りかかると同時に俺は懐に潜り込んで霧島の腹部を殴る、

霧島「かは!?!」

霧島が体をくの字に曲げて苦しむ、

クリス「攻撃するあまり防御がおろそかだ、今のようにカウンターを貰うぞ、」

俺はそう言う、

聞いているかわからないが、

霧島「う……る……さい……」

霧島が俺を睨む、

クリス「話を聞かないのは結構、だがそんなことでは守りたいものが守れないぞ、その言葉を聞いた瞬間霧島の顔が一気に歪み、

霧島「あなたに私の何が分かると言うのですか！」

俺は何か地雷を踏んだらしい、

クリス「わからないな、少なくとも霧島が話してくれないと、」

霧島が俺に殴りかかる、

霧島「あなたに大切なお姉様を守れなかった私の何が分かるって言うのですか!？」

お姉様？

霧島は確か金剛型の末っ子だったな、

俺は周りを見る、

皆が気まずそうに視線を逸らしている、

おいおい、

元師であるステイブにすら言っていないのか、

クリス「少なくとも俺は大切な仲間を俺のミスで失った、少なからずお前の気持ちは

わかる、」

霧島「うるさい！」

全く、

うるさいは都合が悪い時に言う言葉じゃないんだがな、

俺は再びカウンターを行い霧島を床に倒す、

クリス「何があったか知らないが八つ当たりをしていることはわかるな、そんなんで俺を倒せると思うな、」

霧島「くそ！」

霧島は起き上がり再びくる、

俺は防いでカウンターをする、

倒れては何度も立ち上がる、

諦めない心はあるようだな、

そして、

霧島が倒されて、

床に大の字になる、

クリス「気が済んだか？」

霧島は答えない、

神通「あの霧島さんが手も足も出ないなんて、」

「本当に人間かしら?」

失礼だな、

クリス「鎮守府の改装が終わったら霧島次第で稽古をつけてもいい、」

霧島「誰が・・・」

クリス「別に嫌ならいい、だがお前の守りたいものはその姉だけなのか?この鎮守府の艦娘達も守りたいものじゃないのか?」

霧島は答えない、

クリス「答えないか、」

霧島「あなたに答えたくありません、」

クリス「そうか、」

お姉さんか、

ここにいないと言うことは轟沈したのか、

前の提督のせいで、

霧島「こんなところいたくない、」

クリス「そう言われてもお前はどこに行くんだ?」

霧島「あなたのいないところです、」

霧島は起き上がりスタスタと出ていった、
嫌われているな、

クリス「大淀、悪いが霧島を追う、皆は適当にくつろいでくれ、」

大淀「わかりました、霧島さんをお願いします、」

俺は霧島を追いかけた、

意外と足速いな、

いつのまにか街に向かう道の半ばにいるぞ、

時間は昼前、

俺は霧島を追いかけた、

霧島が街に着いた、

だが、

街は住民の悲鳴と銃声で響いている、

そして、

あのコートを着た巨人、

レオンから聞いたことがある、

タイラント（バイオハザード2、アウトブレイク2、
俺とジルが洋館で作られていたタイラントの量産型、
ダークサイドクロニクルズ）、

そいつがなぜここにいる、

俺は走る、

クリス「霧島！ 離れろ！」

タイラントが霧島に近づいてその拳を振り上げた、

VSタイラント

俺は持っていたペイルライダーを構えてタイラントに向けて撃つ、
タイラントに命中して仰け反る、

その隙に霧島に近づいて腕を掴み引つ張る、

ペイルライダーがあつてよかった、

サムライエッジだと火力不足だった、

俺と霧島は物陰に隠れる、

だがあのコートは厄介だ、

防弾防爆防災、

簡易的な戦車の装甲だな、

霧島「なんで私を！」

クリス「お前を助けるのに理由はないだろう！それよりもあいつを倒さないといけ
ない！」

霧島「どうやってですか！明らかに銃弾を防ぎました！」

そうだ、

あいつのコートが邪魔だ、

それに霧島は艦装を持っていない、

霧島を連れて逃げる事が出来るか？

そう考えているとタイラントが壁をぶち破ってきた、

俺は霧島の手を掴み走る、

だがタイラントの走りが速い、

タイラントが俺らに向かって拳を振り上げる、

俺は霧島を抱き寄せて横に飛び避ける、

タイラントの拳を避けたが威力が半端ないな、

前にあつた家屋の壁が壊れたぞ、

そんなこと言っていられない、

俺は霧島の手を掴んで走る、

距離を取れたところで俺はペイルライダーを構えて撃つ、

だがタイラントは俺の方に来る、

マグナム弾すらも通さないのか？

俺は霧島を連れて走る、

このままではこの街の家屋が無くなってしまふ、

霧島「爆弾とかないのですか!？」

クリス「あのコートは耐爆も備えている、持ってくるならロケット砲を持ってこないといけない!」

霧島「でしたらお得意の体術でなんとかしてください!」

クリス「お前はあいつ相手に殴り合えと!？」

走りながらなんてバカな会話をしているのか、

それにリュウ(PXZ)やケン、

アキラ(PXZ)と仁(PXZ)なら拳で倒せるだろうが俺には無理だ、

俺は振り向きペイルライダーを撃つ、

くそっ!

弾は無限だが反動がキツイ!

タイラントが俺に殴りかかる、

俺は腕でそれを防ぐも吹き飛ばされる、

ゴキッ

くそっ!

うちどころが悪かったか！

左手が折れたかズレたかわからないが激痛が走る、
だがここで止まらない！

タイラントが霧島に向かって歩く、

俺は片手でペイルライダーを構えて撃つ、

反動が一気に右手にくる、

だがやつとのことでタイラントは倒れた、

流石に何度もマグナム弾を貰うと倒れるか、

俺はペイルライダーを構えながら霧島の所に向かう、

クリス「無事か？」

霧島「なんとか・・・ってあなたその腕!？」

霧島が驚いている、

俺の左腕か？

クリス「折れたかズレただけだ、」

霧島「だけって重症じゃないですか！」

クリス「俺からしたら日常茶飯事だ、」

俺は通信機を取ってジルに連絡する、

クリス「ジル、緊急事態だ、」

ジル「どうしたの？」

クリス「タイラントの量産型が街に現れた、」

ジル「何ですって!？」

クリス「だが倒した、住民は見た感じ数名死んでいる、負傷者がいるから何人か連れて医療道具も持ってきてきてほしい、」

ジル「わかったわ、」

「ねえプリンツ、ジルは誰と話しているの？」

プリンツ「ビスマルクお姉様、提督のクリスさんです」

ジルの後ろからプリンツと見知らぬ女の声が聞こえた、

もしかしてあの後工房に向かったのか？

その時、

タイラントが立ち上がった、

霧島「嘘！死んでないの!？」

霧島が驚き声を荒げる、

クリス「ジル！緊急事態だ！さっきの話は無しだ！俺は霧島を連れて戻る！ジルはセバスチャンと一緒に外で待機してくれ！」

ジル「了解！」

俺は通信をきり霧島に近づいて右腕で俵持ちをする、

霧島「きやつ!？」

霧島の顔が背中の方に向いている、

クリス「我慢しろ！走って逃げるぞ！」

俺は走る、

タイラントが俺らの方に向かってきているのがわかる、

あいつあの巨体で足が速い、

このままでは追いつかれる、

仕方ない、

クリス「霧島！俺の腰のホルスターに銃がある！そいつで応戦してくれ！」

霧島「無理です！私は拳銃を持ったことなんてないんです！」

それはそうだな、

クリス「ここで俺とお前があいつに殺されて鎮守府のみんなが殺されるか！ここで銃を撃って少しでも生き残れる可能性を見出すか！お前が決める！」

霧島が息を飲む音が聞こえる、

そして、

霧島「わかりました！」

霧島はホルスターのサムライエッジを抜きタイラントに構えた、

そして、

サムライエッジが火を噴いた、

クリス「弾切れの心配はするな！当たらなくてもいい！撃ち続けろ！」

霧島「うあああああああああああああ！！！！」

霧島の叫ぶ声と発砲音が響く！

こんなんで倒れるタイラントではないが時間稼ぎにはなる、

鎮守府に向かう道で、

俺の心臓が馬鹿みたいにうるさい、

耳の感覚が霧島の声と発砲音で変になる、

そして、

後ろから走る音が聞こえなくなる、

俺は止まり息を整えながら後ろを見る、

タイラントが止まった、

やったか？

「クリス、それはフラグよー

なぜ今ジルの声が聞こえたんだ？

その時、

タイラントがいきなり苦しみ出して口から血のような液体を出して、

そして腕が肥大化して体の色が灰色になり背中が岩のようになる、

こいつのリミッターが解除されて暴走状態になったのか！

洋館のヘリポートであつた奴のように！

霧島「クリス！変身しましたよ！」

クリス「暴走状態だ！霧島はそのまま撃ち続ける！」

俺は再び走る、

霧島が撃つ、

奴の重い足音が聞こえる、

くそ！

あれだけ重量あるのに足音の感じだとかかなり速い！

鎮守府が目視出来るようになる、

霧島「クリス！あいつの皮膚が弾を弾きます！」

だろうな！

サムライエツジではダメか！

う、
だがペイルライダーだと霧島は確実に反動で銃を吹き飛ばしてどこかにやってしま

う、
考える！

あの時もタイラントは馬鹿みたいに力とスピードが上がった、

そして・・・そういえばこいつにもあれがあるのか？

クリス「霧島！あいつの心臓を狙え！」

霧島「心臓?!」

クリス「過去にあいつと似たやつを倒したがその時のあいつの弱点が心臓だった！」

霧島「そこを狙えばいいんですね!」

霧島はそう言っただけで、

そして、

霧島「右側に心臓を見つけました！」

クリス「そこを撃て！」

霧島が撃つ、

何度も撃つ、

霧島「揺らさないように走ってください！」

クリス「無茶を言うな！霧島も出撃した時に少なからず波で揺れるだろうが！」

霧島「ここまで揺れません！それに先程からクリスの手が私のお尻に当たりそうです

！」

クリス「そんなこと気にしないで撃て！それに霧島の尻なんて気にしていない！」

霧島「私が気にします！」

何でこんな馬鹿な会話を走りながらしているんだ？

霧島の発砲音が未だに耳にくる、

そして、

霧島「心臓に当てると苦しみます！」

クリス「よくやった！そのまま撃ち続けろ！」

鎮守府の門が見えてきた、

その時、

鎮守府方面から銃声が聞こえた、

俺は視線を巡らせる、

屋上に誰かいる、

ジルとセバスチャンか、

セバスチャンがスナイパーライフルを構えている、
そして、

プリンツと誰か知らない女性、

そして、

その女性の主砲が火を噴いた、

その砲撃がタイラントに命中する、

更にセバスチャンも撃つ、

霧島も撃ち続ける、

そして遂にタイラントが倒れる、

俺は鎮守府の門をくぐり霧島を下ろした、

クリス「助かった、」

霧島「死ぬかと思いましたが、」

やばい、

左腕が痛み出した、

ジルにエリクシルでも貰うか、

そう思っているとジル達が降りてきた、

それにしても誰だあの女性、

ジル「無事のようなね、」

クリス「悪いが俺の左腕が折れたかズレたかで動かせないんだ、後でエリクシールを貰えないか？」

ジル「わかったわ、」

セバスチャン「まさか陸にもB・O・Wが出てくるなんてな、」

「提督達はあんな化け物と戦っているのか？」

だから誰だこの女性、

プリンツ「クリスさん！紹介します！ビスマルクお姉様です！」

ビスマルク「ビスマルク級1番艦のビスマルクよ、よろしく、」

プリンツ「リリーさんが建造しちゃいました！」

だろうな、

何となくだがまた光り輝いて出来たんだろう、

クリス「そうか、ビスマルク、助かった、」

ビスマルク「いいわよ、それにしても海で戦う前に陸で戦うことになるなんて思っ
ていなかったわ、」

戦艦が陸で戦うなんて貴重な体験だろう、

大淀「どうされました！今砲撃音や銃声が聞こえてきました！」

大淀達も出てきた、

神通「何でビスマルクさんが居るんですか？」

ビスマルク「なんか建造されたんだ、」

響「ビスマルクさんって建造で出来たっけ？」

明石「できません！」

やっぱり建造出来ない艦娘だったか、

明石「さあ白状しなさい！どうやってですかビスマルクさんを建造したのですか!？」

ジル「何ってただ各資源を1000ずつ投入しただけよ、」

一応はリリーの事は伏せておこう、

俺はジルとアイコンタクトをすると足音が聞こえてきた、

まさか！

俺はその方向を見るとあいつが走ってきている、

狙いは・・・霧島か！

俺は霧島の元に走り霧島を突き飛ばす、

霧島「きやつ!？」

霧島は尻餅をついたが、

タイラントの右手の爪が俺の腹部を貫いた、

クリス「ぐおおおおおおおおお！」

痛みが腹部から全神経を通して身体中に巡る、

ビスマルク「まだ生きていたのか！」

電「何ですか！あの巨人は！」

大淀「人間ですか!?!」

ジル「クリス！今助けるわ！」

ジルがハイローラーを構えるがタイラントが俺を振り回していて狙いをつけられないんだらう、

セバスチャン「くそ！狙いがつけられない！」

「爆撃しますー！」

「だが提督が巻き込まれるでー！」

「仕方ありません！それにあの傷ではどのみち死にます！」

青い袴の女性がタイラントに向けて弓を構える、

その時、

霧島「加賀さん！ダメです！」

霧島が間に入った、

加賀「どいてください！霧島さん！」

霧島「どきません！クリスは骨を折れても私を助けてくれました！恩人を見殺しにできません！」

まさか霧島が俺の味方になるなんて思っていないんだろうな、
そして、

クリス「お前の弱点が目の前にあるんだ、」

俺は右手でペイルライダーを抜き構える、

ほぼ至近距離、

確実に狙える！

俺はペイルライダーを撃った、

反動がキツイが確実に奴の心臓に命中する、

タイラントが仰け反る、

俺は更に撃つ、

タイラントが俺を爪から投げ飛ばす、

俺は地面に叩きつけられる、

ジル「今よ！」

ジルの声に全員が一斉に撃つ、

銃声に爆撃音、

砲撃音が辺りに響いてタイラントを後方に追いやる、

俺は薄れていく意識の中、

奴にペイルライダーを構えて、

撃った、

弾が奴の心臓にあたり、

奴は後方に倒れる、

そしてその後ろが海だったため、

タイラントは海に落ちた、

俺は意識を失った、

「ふむ、長い年月をかけて作ったタイラントがこうもあっさり倒されるのか？ コートも従来のタイラントモデルよりも分厚くしているはずだがやはりマグナム弾には効果は薄いか、」

遠くの方で双眼鏡を構えながら独り言を言う黒づくめの男がいた、

「だがリミッターが外された状態は興味深い、セルゲイ（アンブレラクロニクルズ）の作ったあの2体にはなかったものだ、皮膚組織の硬化、凶暴性も出ている、だが一体に

集中するのはよくない、」

男は双眼鏡をしまうと立ち上がりサングラスをかける、

「それに思わぬ収穫があつた、今回は良しとしよう、それに面白い奴にも出会つたからな、まさかこつちに来ていたと思わなかつた、クリス、」

男はそう言い一瞬のうちに消えた、

海の底に沈むタイラント、

目を覚まして上がろうとしている、

目標は自分を苦しめた奴の抹殺、

だがそれは叶わなかつた、

海底から伸びる触手に引つ張られてタイラントは海底に沈みのであつた、

VSタイラントの裏では、

クリスがタイラントと戦う前、

私はセバスチャン達を連れて工房に向かった、

一度中を確認しておきたいから、

セバスチャンはワークベンチがないか確認したらしい、

ジル「クリスはうまくやってるかしら？」

セバスチャン「分からん、殴り合いになってるから最悪！人減るかもしれないな、」

霧島ね、

最悪そうなるわね、

クリスの粘り強さにかかっているわ、

そうこう話していると工房に着いた、

中に入ると、

武器商人「ウエルカム、」

武器商人が出迎える、

ジル「商売してるのね、」

武器商人「へへへ、ここなら燃料などが売れるからな、セバスチャン」だがどこにそんな燃料あるんだ？」

武器商人「それは商人の秘密だ、」

ジル「もしかしてどこかに遠征行くのかしら？」

武器商人「必要とあらば自分でいろんな所に行くぜ、」

ジル「遅ましいわね、」

荷物持ちとして出撃させようかしら？

武器商人「ところで何か買いに来たのか？」

ジル「今回は建造をしに来たのよ、」

武器商人「なるほど、足りない物資があったら言ってくれ、金次第で売ってやる、」

ジル「わかったわ、」

あいにく手持ちはないけど、

私は奥に向かった、

私はアイテムボックスに、

セバスチャンはワークベンチを探しに行った、

そして直ぐに見つかるアイテムボックス、

私は中を確認する、

紙が見つかった、

内容を見るとステイプからだった、

無事成功したのね、

でもメールのように届いた時の合図がないから困るわね、

一度妖精さんでも来てもらえるようにしてもらおうかしら、

セバスチャンはワークベンチがあつてホクホク顔ね、

リリー「ジルお姉さん、建造してみてもいいですか？」

リリーちゃんが突然そんなことを聞いてくる、

ああ、

セバスチャンがワークベンチと向き合っているから退屈なのね、

ジル「いいわよ、でも一回だけね、プリンツちゃんと一緒にするのよ、」

リリー「はい！プリンツちゃん！行こ！」

プリンツ「待ってくださーい！」

こうしてみると姉妹ね、

私はアイテムボックスに入れる手紙の内容を考えていると、

建造カプセルが輝きだした、

またなのね、

私はリリーちゃんとプリンツちゃんの元に向かう、

セバスチャン「またか、」

セバスチャンも流石に気づいたのね、

ジル「またよ、」

セバスチャン「リリーに何か不思議な力でもあるのか？」

気が一般人より多いけどそれだけなのよね、

私はあえてそれを言わなかった、

2人の元に向かうとプリンツちゃんがりりーちゃんを庇うようにしている、

プリンツ「ジルさん！セバスチャンさん！カプセルから光が！光が！」

パニックになるのはしょうがないわね、

ジル「大丈夫よ、今セバスチャンが開けるから、」

セバスチャン「さらっと俺に危険な橋を渡らせるな、危険じゃないけど、」

セバスチャンが念のためにハンドガンを引き抜いて歩く、

カプセルに近づいて取手に手をかける、

そしてゆっくりと開ける、

「グーテンターク、私はドイツ艦ビスマルク型のビスマルクよ、よろしくアドミラル、」

うん、

金髪美女がいた、

プリンツ「ビスマルクお姉様!？」

プリンツの知り合いなのね、

ビスマルク「あらプリンツ、あなたが先にいたのね、よろしくね、」

プリンツ「えっ? ええっ!?! さっきの光は何ですか!?! それにビスマルクお姉様は建造で
はできないはずですよ! なのに何で!？」

ジル「プリンツちゃん、あなたもあやつて出来たのよ、」

プリンツ「ええ!？」

驚きすぎよ、

でも可愛い反応ね、

ビスマルク「プリンツ、アドミラルはどなた?」

この場合はどうしようかな?

リリーちゃんが建造したから今回もリリーちゃんでもいいわよね、

一応はセバスチャンに聞いておこうかしら、

ジル「セバスチャン、今回もリリーちゃんでもいいわね、」

セバスチャン「異論はない、ビスマルクが納得するならそれで行こう、」

問題なしね、

ジル「ビスマルク、あなたの提督はこの子よ、」

私はリリーちゃんの頭に手を置いた、

ビスマルク「この子が？わかったわ、よろしくね、可愛いアドミラル、」

リリー「私にはリリーって名前があるの！」

ビスマルク「わかったわ、リリー、よろしくね、」

どうやら大丈夫そうね、

ジル「自己紹介をするわ、ジル・バレンタインよ、」

セバスチャン「セバスチャン・カステアノスだ、リリーの父親だ、」

ビスマルク「親子揃って提督なのね、よろしく、」

自己紹介が終わったからどうしようかしら、

そう考えていると通信機から連絡が来た、

クリスからね、

私は通信機を取った、

クリス「ジル、緊急事態だ、」

突然ね、

クリスらしいわ、

ジル「どうしたの？」

クリス「タイラントの量産型が街に現れた、」

ジル「何ですって!？」

—大事じゃない!

クリス「だが倒した、住民は見た感じ数名死んでいる、負傷者がいるから何人か連れて医療道具も持ってきてほしい、」

それは良かったわ、

ジル「わかったわ、」

ビスマルク「ねえプリンツ、ジルは誰と話しているの？」

プリンツ「ビスマルクお姉様、提督のクリスさんです」

私は医務室に向かおうとしたら、

クリス「ジル!緊急事態だ!さっきの話は無しだ!俺は霧島を連れて戻る!ジルはセバスチャンと一緒に外で待機してくれ!」

何かあったのね、

ジル「了解!」

私は通信機をしまった、

ジル「セバスチャン!今すぐ武器の準備をして!クリスが危ないわ!」

セバスチャン「わかった!」

セバスチャンはワークベンチに向かう、

何でそっち？

私はドラグノフをアイテムボックスから取り出して外に向かおうとする、

セバスチャン「状況が知りたい！屋上に行つてクリスがどうなっているのか確認するぞ！」

そうね、

一体何があつたのか気になりわ、

私は頷き屋上に向かう、

屋上に向かった私達、

何でプリンツちゃんどビスマルクとリリーちゃんがいるの？

ビスマルク「突然走つて行つたら気になるわ、何があつたの？」

ジル「私達の仲間が今こっちに向かっている、でも追われているから私達はここから狙撃をして援護をする、」

ビスマルク「人間同士の争い？」

ジル「それだつたらまだ嬉しいわ、相手は人間ではないわ、」

ビスマルク「まさか深海棲艦!?陸上でも活動できるようになつたの？」

ジル「それは自分の目で見て、」

セバスチャンはスナイパーライフルを構えている、

私もドラグノフを構える、

クリスが確認できた、

どういう状況で霧島を担いで走っているのかわからないけど、

そして後ろには・・・タイラント？

どう見ても違う生命体よ！

あんな岩のようなタイラントは聞いたことがない？

セバスチャン「あれもあんなららの世界の生物兵器か!？」

ジル「少なくとも私は知らない個体よ、」

ビスマルク「なんだあれは!」

ビスマルクの驚きの声が聞こえる、

ジル「タイラントタイプなら心臓が弱点よ!セバスチャン!狙撃して!」

プリンツ「ビスマルクお姉様!私達も援護射撃をしましょう!スポッターは私がしま

す!」

ビスマルク「あとで説明を要求するわ、プリンツ、」

ビスマルクは主砲を構えた、

私はスコープを覗き込んだ、

弱点は右胸の赤いところかしら、

セバスチャン「ジル！心臓はあの赤いところか！」

ジル「おそらく！セバスチャン！先制射撃！」

セバスチャン「わかった！」

セバスチャンがスナイパーライフルを撃つ、

続いてビスマルクが砲撃する、

それぞれが直撃する、

でも効果が見られない、

ビスマルク「砲撃の効果が薄い!?!」

ジル「でも効いているわ！赤い心臓部にめがけて撃つて！」

私もドラグノフを撃つ、

心臓部に命中、

セバスチャンもビスマルクも撃つ、

タイラントに全弾命中してタイラントがやつと倒れる、

セバスチャン「よし！」

ジル「急いでクリスと合流するわよ！」

私達は下に降りた、

下に降りると既に2人はいた、

ジル「無事のようなね、」

とりあえずクリスに声をかけておく、

クリス「悪いが俺の左腕が折れたかズレたかで動かせないんだ、後でエリクシールを

貰えないか？」

よく見ると左腕がだらんと垂れ下がっている、

ジル「わかったわ、」

セバスチャン「まさか陸にもB・O・Wが出てくるなんてな、」

ビスマルク「提督達はあんな化け物と戦っているのか？」

クリスがビスマルクを不思議な目で見ている、

そういえば紹介してないわね、

私はプリンツちゃんにアイコンタクトをする、

プリンツ「クリスさん！紹介します！ビスマルクお姉様です！」

ビスマルク「ビスマルク級1番艦のビスマルクよ、よろしく、」

プリンツ「リリーさんが建造しちゃいました！」

クリス「そうか、ビスマルク、助かった、」

ビスマルク「いいわよ、それにしても海で戦う前に陸で戦うことになるなんて思っ
ていなかったわね、」

いい経験ね、

もしかしたら今後もそうやって戦っていくかもしれない、

大淀「どうされました！今砲撃音や銃声が聞こえてきましたが！」

大淀達まで来たわね、

まあ外でどんぱちしてたらそうなるわね、

神通「何でビスマルクさんが居るんですか？」

ビスマルク「なんか建造されたんだ、」

響「ビスマルクさんって建造で出来たっけ？」

明石「できません！」

プリンツちゃんの反応からしてやっぱり建造できない子なのね、

明石が私に詰め寄って来た、

明石「さあ白状しなさい！どうやってですかビスマルクさんを建造したのですか!？」

ジル「何ってただ各資源を100ずつ投入しただけよ、」

多分、

リリーちゃんの気が混じってできた子ですから、

言えるわけないわ、

私はクリスにアイコンタクトを送った、
そしたらクリスが霧島を突き飛ばした、

霧島「きやつ!？」

霧島は尻餅をついたが、

タイラントの右手の爪がクリスの腹部を突き刺した、

クリス「ぐおおおおおおおおお!」

クリスの苦痛の叫びが響く、

ビスマルク「まだ生きていたのか!」

電「何ですか!あの巨人は!」

大淀「人間ですか!？」

ジル「クリス!今助けるわ!」

私はハイローラーを構えるもタイラントがクリスを振り回すから狙いがつけられない
い、

セバスチャン「くそ!狙いがつけられない!」

「爆撃します!」

誰よ物騒なことを言うのは、

私はそつちに視線を向けると青い袴の女性がいた、

「だが提督が巻き込まれるで！」

「仕方ありません！それにあの傷ではどのみち死にます！」

青い袴の女性がタイラントに向けて弓を構える、

その時、

霧島「加賀さん！ダメです！」

霧島が間に入った、

意外ね、

クリスに真つ先に突つかかった人が、

加賀「どいてください！霧島さん！」

霧島「どきません！クリスは骨を折れても私を助けてくれました！恩人を見殺しにで

きません！」

まさか霧島がクリスの援護をするなんて思っていなかったわ、

そしたらクリスがタイラントの心臓部にペイルライダーを構えた、

そして撃った、

タイラントの心臓に命中する、

タイラントが仰け反る、

クリスがさらに撃ち込む、

タイラントがクリスを爪から投げ飛ばす、

クリスは地面に叩きつけられる、

クリスは地面に叩きつけられる、

やっとなぞるわね、

ジル「今よ！」

私の声に全員が一斉に撃つ、

銃声に爆撃音、

砲撃音が辺りに響いてタイラントを後方に追いやる、

そして、

クリスがペイルライダーを構えて撃った、

弾がタイラントの心臓にあたり、

タイラントは後方に倒れる、

ちょうど後退した場所が小さい崖だから、

タイラントは海に落ちた、

クリスが気を失った、

私は急いでエリクシールをクリスの口に入れる、

普通なら死んでいるけどクリスならおそらく大丈夫よ、傷口が塞がっていく、

でも服に大きな穴が空いているわね、

次はクリスの服でも買おうかしら、

ジル「セバスチャン！クリスを運ぶの手伝って！」

セバスチャン「わかった！」

セバスチャンと私はクリスに肩を貸して歩く、

ジル「プリンツちゃん！医務室の準備！ベッドが清潔かどうかの確認！」

プリンツ「はい！」

私達はクリスを医務室に運んだ、

信頼への道

俺が目を覚ますとおそらく医務室であろう場所だった、
ステイプのところと同じ作りならこの天井はそうだろう、
違う点を挙げるなら少し汚れているくらいか、

「目が覚めましたか、」

ジルではない女性の声、

俺は声の方を見ると、

クリス「霧島か、」

意外なことに霧島がいた、

クリス「どれくらい眠っていた、」

霧島「正確にはわかりませんが大体夜中ですね、」

意外と眠ったな、

俺はタイラントの爪で穴が空いたのであろう腹部に手を置くと穴は空いていない、
ジルがエリクシールを飲ませてくれたようだ、

霧島「クリスは何者ですか？」

霧島のそんな声かけに俺は答えるべきか少し悩み、

クリス「それは少ししてから話していいか、他の奴らと相談したい、」
俺一人の問題じゃないからな、

霧島「わかりました、」

クリス「霧島が見ていたのか？」

そうなるも夜中まで見てもらって申し訳ない、

霧島「ジルと変わりました、ジルがあなたをずっと見ていました、」

ジルが見てくれたのか、

クリス「すまないな、俺はもう大丈夫だ、」

俺はベッドから立ち上がろうとしたが少しフラついた、

血までは戻らないか、

霧島「クリス！まだ立ち上がらないで！」

霧島が俺に駆け寄って支える、

クリス「霧島、俺のこと名前で呼んでいるがなんでだ？」

霧島「べ、別に深い意味はないです！」

訳がわからん、

霧島「クリスはまだ横になっていてください！今ジルを呼んできます！」

霧島はそう言っ出て行った、
態度の変化に戸惑ってしまふ俺、
本当になんなんだ？

そのあとジルとセバスチャンが来て俺の様子を見に来た、

翌日、

俺はベッドから立ち上がった、

今度はふらつきは見られない、

ほぼ完全に回復したようだな、

それと同時にジルとセバスチャン、

リリーとプリンツ、

ビスマルクが入ってきた、

ジル「もう立ち上がっていいようね、」

クリス「おかげさまでな、それでどうした？」

ジル「ここの艦娘のみんなに私たちの事を伝えておきたいのよ、」

セバスチャン「昨日のあれを見た奴が多いからな、きつと事情の説明を求められるはずだ、」

そうだろうな、

昨日の霧島も俺に問いかけて来た、

クリス「そうだな、昼頃説明するか、場所は間宮のところでもいいか、」

ジル「問題ないは、プリンツちゃんは見たことあるからリリーちゃんと一緒に遊んでいてほしい、」

プリンツ「わかりました、正直もう一度見るのはちよつと、」

ビスマルク「プリンツは知っているの？」

プリンツ「はい、ビスマルクお姉様、気をしっかり持つて見てください、」

ビスマルク「そんなに酷いの？」

まあ、普通なら体験しない事だからな、

クリス「俺は今から大淀の所に行つて放送をかけてもらう、昼頃まで自由行動だ、」

ジル「わかつたわ、私とセバスチャンは今から間宮に頼んで甘味処の席移動とかしておくわ、」

ビスマルク「私も手伝うわ、」

クリス「ここはステイプの所より艦娘はいないから全員で見てもらおう、」

ジル「甘味処が嘔吐物で包まれそうね、」

想像したら壮絶な光景だな、

クリス「なら解散だ、昼頃にまた会おう、
そう言つて俺たちは解散した、」

俺は大淀の部屋の前に来た、

扉をノックすると、

大淀「どちら様ですか？」

クリス「クリスだ、大淀、すまないが昼頃に全員甘味処に集合してくれるように放送をかけてくれないか、」

大淀「昨日の事ですか？」

クリス「そうだ、話さないといけないからな、」

大淀「わかりました、今から放送をかけます、」

その言葉を聞いて俺はその場を離れた、

しばらくして大淀が館内放送をかけた、

俺が話した通りの内容で安心した、

俺は甘味処に戻るとジルらが大体の準備を終えていた、

ジル「こっちは終わったわ、」

ジルが俺に気づいて声をかけた、

セバスチャン「何が終わっただ、ほとんどの机の移動を俺にやらせやがって、セバスチャンが椅子に座って息を荒くしていた、

こき使われたな、

ジル「女性に重たいものを持たせるきななの？」

セバスチャン「化け物と戦っている時点でただの女性じゃないだろうが、」

そんなセバスチャンの元の間宮が茶を持ってきた、

セバスチャンはジェスチャーで礼を言つてそれを一気に飲む、

ジル「セバスチャン、それは艦娘達に絶対に言つちやダメよ、」

セバスチャン「わかつている、あの子達は戦える力がある女性なだけだからな、だが

今の言葉はジルに言つたんだ、」

ジル「失礼ね、私は少し戦えるただの女性よ、」

少しじゃないだろう、

敵の首を太ももで挟んで折つたり倒れた敵に両膝落として追い討ちをかける女性はいない、

口に出したら俺にまで飛び火が来そうだ、

間宮が俺に茶を持って来たから俺は受け取り礼を言い茶を一气飲みした、

昼頃、

ビスマルクが先に来た、

ビスマルク「プリンツに言われて何も食べずに来たが、」

それが正解だ、

次に来たのは大淀、

大淀「まだ全然来ていないんですね、」

まあなかなか集まらないだろう、

だが何度も説明するのは手間がかかる、

次に来たのは霧島、

霧島「クリス、もう動いていいのですか？」

クリス「ああ、少しふらつくが戦闘になったら戦える、」

なぜだろうか、

昨日まで敵対していた霧島がここまで変わると違和感しかない、

そのあと残りのメンバーがやってきた、

大体の艦娘が渋々やってきた感じだな、

ジル「みんな、集まったわね、」

「一体何をしようと言うのですか？」

青い袴の女性が嫌そうな顔でジルに聞いてきた、

ジル「昨日私達が戦った相手に事と私達の事を話すためよ、」

「あのデカブツの事やな、」

帽子を被った小さい少女が訪ねてくる、

ジル「まず先に私達の事を話すわね、みんな知っているかわからないけど霧の艦隊って知っているかしら？」

霧島「別の世界から来た艦隊の事ですね、それは全鎮守府の指揮官や艦娘は知っています、」

ジル「私とクリス、セバスチャンとリリーちゃんは別世界から来たのよ、」
驚く艦娘達、

ジル「元師のステイブが証人なるわ、私達の世界では艦娘も深海棲艦もいないわ、」
神通「私達も深海棲艦もいない、」

ジル「そうよ、でも私とクリスの世界には昨日戦ったあのような怪物がいるわ、」

霧島「あれはなんですか？」

ジル「B・O・W、バイオ・オーガニック・ウエポン、生物兵器の事よ、」

「生物兵器？だったら作られたってことかしら？」

ジル「そうよ、昨日戦った敵、タイラントと呼ばれていたけどそいつは一般の人にウイルスを投与した上に装置を取り付けられて命令で動くようにされたのよ、」

響「ウイルス？」

ジル「それは後で説明するわ、あれは誰かに作られた兵器なの、私とクリスはそんな奴らの基地を破壊したり生物兵器を倒したりしているわ、」

長門「あんな化け物倒せるのか？我々の砲撃も爆撃も効果があまり見られないように見れたが、」

ジル「倒さないと被害は拡大するわ、だから倒せないなんて言えないのよ、それに生物兵器はお金になるのよ、裏ルートで売れば戦争や街の壊滅にも使われる、そして生物兵器を作るバカは未だに跡が絶えないのよ、はじめにウイルスが見つかって10年以上もいろんな施設や基地を破壊しているけど終わりが見えないわ、」

俺のことが、

ジル「次にウイルスの事を説明するわ、Tーウイルス、それがこの争いの発端になったのよ、元々は癌などの病気を治すための治療薬だったけれど副作用が問題になったのよ、肉体を腐敗させて思考を著しく低下させる、そして肉を食べることしか頭に入らなくなる、」

大淀「ゾンビ・・・ですか？」

ジル「そうよ、ゾンビ、私達が初めてあったにはゾンビよ、ウイルスが漏れ出して人間がゾンビになったのよ、ゾンビだけじゃないの、犬やカラス、蛇や鮫までウイルスに感染してゾンビとなって襲いかかってきたわ、そして研究員達は人間の遺伝子にハエの遺伝子を組み込ませたり爬虫類の遺伝子を組み込ませたりして化け物を作っていたわ、」

ジルが例のカチューシャを取り出して、

ジル「これは装着者の記憶を見る装置よ、今から見せるのは昔私達が体験した事よ、」
ジルが装置を装着した、

数刻後、

俺とセバスチャンの分も見せると甘味処の中が嘔吐物の匂いで広がっている、

何人も吐いたんだな、

俺は汚物処理をしている、

ジル「わかったかしら？これが今まで戦ってきた敵達よ、」

「ワンちゃんが人を食べているです・・・」

響「あんなに大きな蛇がいるなんて、」

霞「……」グロツキー、

神通「あんなに大きな人は砲撃では倒せないよ、」

「街の人がみんなゾンビになっている、」

「うねうねが顔を貫いている……」

長門「海にあんな化け物があるなんて、」

青葉「頭からうねうねしたものが!」

高雄「リリーちゃんを助けられてよかったね!」

愛宕「父親の力ね、見直したわ、」

何に見直したんだ?

ジル「見ての通り私達はこういった敵を相手にしてきたわ、多くの仲間を失って死んでいったわ、」

そうだな、

S・T・A・R・Sのメンバーから失っていき次はBSAAのメンバー、何人俺の前で死んだんだ、

だが悲しんだら死んだ仲間申し訳ない、

大淀「クリスさん、」

大淀が申し訳なさそうに俺に声をかける、

大淀「先日あの様な言葉を言っつてしまい申し訳ありませんでした！」
そして思いつき頭を下げた、

先日？

ああ初日のあの言葉か、

クリス「大淀、あの時も行つたが俺はその程度の人間だ、その事實はどれだけ足掻こうと変えられないものだ、大淀が気にすることはない、」

大淀「ですが知らないとは言え・・・」

クリス「そうやって謝つてくれたから俺はそれでいい、もしまだ申し訳ないと思うならこの鎮守府をより良い方向に向かえるように手伝つてくれないか？」

大淀「はい！」

大淀はこれでいいだろう、

霧島「クリス、」

今度は霧島か、

霧島「クリス、なんであなたの世界の怪物がこつちに来ているのですか？」

そう思うよな、

クリス「わからない、だがステープが向こうで死んでこつちに来たんだ、もしかしたらアンブレラの科学者や残党がこつちに来たのかもしれない、もし会うようなら俺ら

がまた潰す、」

それが俺の仕事だからな、

霧島「わかりました、」

霧島は戻って行った、

俺たちは嘔吐物処理の続きをした、

●探索するP

俺が目を覚ますと見えたのは朝日だった、

横には寝ている金剛と港湾棲姫、

無論昨日はやったから俺ら3人は裸だ、

思わず頭を抱えてしまいそうだった、

流れでヤツテしまったがこれは好ましくない、

この2人と繋がりを持ってしまった、

ここを立ち去る時に彼女らがなんらかの枷になる可能性がある、

それに家庭を持つことすら考えていない、

まあ、考えたっていい結果は生まれないな、

俺は下着とズボンをはいて金剛と港湾棲姫を洞窟内に運んだ、

裸の女性をいつまでも外に出しておきたくない、

俺が2人を運び終わるとほっぼが起きた、

ほっぼ「ピアーズ、おはよう！」

ピアーズ「おはようほっぼ、あの2人がまだ寝ているからできる限り声は小さくして

おいてくれ、」

ほっぼ「うん、」

いい子だ、

俺はほっぼの頭を撫でた、

ほっぼは目にわかるくらい喜んでい、

子供はこれくらい笑顔がちょうどいい、

今日はこの島の探索をするか、

俺は支度をしてほっぼに聞く、

ピアーズ「ほっぼ、今からこの島を歩き回るがどんなものがあるんだ？」

ほっぼ「わかんない、」

ピアーズ「わかんない？」

ほっぼ「ほっぼ、お姉ちゃんに一人で遠くに行ったらダメって言われてるもん、」

正論だな、

人間の敵と言われているがほっぼはまだ子供だ、

そんな子が遠くに行くのは港湾棲姫にとって不安しかないな、

ピアーズ「そうか、俺は今から島を見て回ってくるけど来るか？」

ほっぼはきよんとしている、

ピアーズ「一人で رفتらたらダメなら俺とならいいだろう、俺がそう言うとはっぽが笑顔になり、

はっぽ「行く！」

決まりだ、

ピアーズ「今から行くがはっぽは大丈夫か？」

はっぽ「大丈夫！」

ピアーズ「なら行くか、」

俺らは森の中に入って行った、

目標は肉、

それ以外は人と会うこと、

人と会う場合ははっぽをどうにかしないといけないな、

森の中は所々木漏れ日が漏れており俺らに時々陽の光が当たる、

時々食べれるきのみがあればナイフで切り取り回収する、

はっぽにナイフを持たせるのは早いから俺のポーチを渡してその中にきのみなどを
入れてもらっている、

更に道がないからナイフで簡単に道を作って行く、

子供にはこの獣道は厳しい、

そして、

ピアーズ「ほっぼ、止まれ、」

俺の声にほっぼが止まった、

目の前に猪がいる、

ピアーズ「変に声を出すな、猪が目の前にいるが耳と嗅覚がいいから今話している声ですらも危ない、」

ほっぼ「危ないの？」

ピアーズ「ああ、だからここからあいつの頭を撃つ、」

俺はM14EBRを構える、

AW50じゃないのが不満だ、

俺はスコープを覗いてゆっくりと狙いをさだめる、

少しでもズレるとあいつは暴れるか逃げるかのどっちかだ、
せつかくの肉だ、

逃がさん、

俺は引き金を引く、

銃声と共に猪が倒れる、

ほっぼ「倒したの？」

ピアーズ「ああ、だがまだ近づくな、死んだふりをしていてる場合がある、」
死んだと思い込んで近づくと生物は命の尽きる瞬間爆発的な力を発揮して敵にいた
いしつぺ返しを行う、

それで重傷を負うこともある、

俺はM14EBRをしまいナイフを構える、

ピアーズ「ほっほ、そこで待っている、俺が近づいて様子を見る、」
ほっほ「うん、」

俺はゆっくりと近づくと、

動いている気配、

呼吸音、

特に感じない、

俺は念のために猪の首にナイフを突き立てる、

動く気配なし、

俺はナイフをしまい、

ピアーズ「ほっほ、出てきていいぞ、」

俺が言うとはっほが歩いて来る、

ピアーズ「こいつを運ぶから手伝ってくれないか？」

ほっぼ「了解！」

手伝うといつても死んでいる猪を持たせるわけではない、こいつを縄で縛り背負って歩く、

俺はほっぼの後方を歩く、

血の跡をつけないようにしないといけない、

今の銃声で近寄って来る奴がいるかもしれない、

もし人なら交友的な奴がいいが深海棲艦と一緒にいる、

確実に敵に回ってしまう、

そう考えていると、

ほっぼ「ピアーズ！」

ほっぼの叫ぶ声、

俺はほっぼの方を見ると、

熊、

子熊なら銃の発砲音で逃げるが相手は成獣の熊、

逃げるかどうかわからない、

俺はロープを外して右手に力を入れる、

そして変形する右腕、

熊がたじろいだよな気がする、

ピアーズ「おい熊、ここで逃げるなら追わないがもし来るなら・・・」
熊に通じるか分からんが思わず言ってしまう、

熊は俺に対する恐怖か何か分からないが俺に襲ってきた、

俺は熊に少し溜めた電撃で攻撃、

熊が痺れた、

その隙に俺は熊に近づいて右手を熊の顎から頭にかけて貫き、

ピアーズ「はああああああ！」

電撃を行い熊の頭を爆ぜさせる、

便利だなこの右腕、

俺が右手に力を入れると元に戻った、

ほっほ「ピアーズ！大丈夫!？」

ほっほが俺を心配してくれるようだな、

ピアーズ「大丈夫だ、この熊も持って行くか、」

往復するか、

ほっほ「ほっほも持つ！」

ほっほが熊の死体を持つも全く動かない、

ほっぼが熊の血で汚れていく、

ピアーズ「ほっぼ、俺が後で回収しに来る、無理するな、
そう言うとはっぼが諦めた、

俺らは拠点の洞穴に戻ると金剛と港湾棲姫が起きていて、

金剛「ピアーズ！どこに行ってたんでーす!?!」

金剛が抱きついてきた、

ピアーズ「狩りと探索だ、」

俺はそう言い猪を下ろす、

港湾「ピアーズが倒したのですか？」

ピアーズ「ああ、こいつの解体は後で俺がしておく、ここに置いておくと血と獣の匂いでこの洞窟が満たされてしまう、外で縛って吊るして血抜きをする、」

港湾「血抜きでしたら私がしておきます、」

意外な申し出だ、

ピアーズ「できるのか？」

港湾「はい、」

ピアーズ「だったら頼む、俺は熊も持ってくる、」

金剛「熊も持ってきたのデスか!?!」

ピアーズ「成り行きだ、」

港湾「ピアーズ、なんでほっぽちちゃんが血塗れ何ですか？」

そういえばまだ着替えてなかったな、

ピアーズ「手伝うと言つて熊を持って行こうとしていたが持てなかった上に血で汚れた、」

港湾「あらまあ、」

ピアーズ「港湾棲姫、ほっぽを怒るな、あの子はあの子なりに役に立ちたいと思つてそんなことをしたんだ、」

港湾「怒りません、それにほっぽちちゃん楽しそうですから、ピアーズのおかげです、」
港湾棲姫がそう言い笑う、

俺は道を引き返して熊の死体を持って帰ってくる、

猪は血抜き中、

俺も熊の血抜きのために吊るす、

今日中に解体ができるか？

俺はそう思いながら海で体を洗い流した、

金剛型高速艦

鎮守府は今日も改装工事に明け暮れていた、

タイラントがやってきて一週間、

外装が以前とは見違えるように綺麗になった、

内装も各部屋の傷んだところすべて補修を行い綺麗になった、

艦娘の使う日常品も補充されてここに来た当初よりかはマシになった、

また、

俺が気絶している間にジルとセバスチャンがタイラントに襲われた街に行き住民の治療を行った、

死者の弔いを行う事も忘れずに、

そして今、

クリス「これでいいだろう、」

俺は金槌を置いて一息つく、

日常品で大工の真似事なんてしたこと無いがこれはこれでいいだろう、

ジル「お疲れ、クリス、」

ジルが俺にコーヒーを渡してくる、

クリス「助かる、」

俺はそのコーヒーを一気に飲み干した、

結構苦いな、

まあ今から書類整理をしないとイケないからこれくらいの苦さでいいだろう、

ジル「クリス、明日ステイブのところからロドリゴと暁ちゃん和雷ちゃんが来るみたいよ、」

クリス「何でだ？」

ジル「タイラントに襲われた事伝えたら物資と一時的な援軍として向かわせると書いてあったわ、それにここに来てから出撃してないから練度の高い駆逐艦の2人と一緒にここの艦娘達の戦闘のブランク解消してほしいと書いてあったわ、」

たしかに、

前の提督が消えてから今日まで出撃なんてしていないだろう、

どれくらいブランクがあるか分からないがステイブの所の艦娘がメンバーにいたら心強いだろう、

クリス「わかった、書類整理は後回しにして客室を今から整理するぞ、」

ジル「クリスは書類整理をしてなさい、私とセバスチャンで整理しておくわ、」

クリス「だが、」

霧島「クリス、資材の確認してきました、」

ジル「霧島、いいところに來たわ、クリスを執務室に縛り付けてきて、」

霧島「はい？」

ジル「私はセバスチャンを探した後客室の整理を行うわ、」

霧島は首を傾げている、

クリス「明日ステイブ、元師のところから艦娘が一時的にこつちに來るんだ、この前の件で物資と出撃のサポートのためだと言っていた、」

霧島「元師様のところからですか、」

ジル「でも書類整理は大切よ、だから霧島、任せたわ、」

ジルはそう言い走っていった、

残された俺と霧島、

霧島「どうしますか？」

クリス「今ここで俺を野放しにすると後で霧島がジルに何か言われそうだな、ここはおとなしく執務室で縛られて來る、霧島、サポート頼んでいいか？」

霧島「わかりました、」

俺らは執務室に向かった、

執務室で書類整理をする俺と霧島、

前の提督の不正は出て来る出て来る、

それにこの一週間改築に回っていたから溜まっている、

初めて見たな、

机を合わせて俺より高い紙の束を、

霧島「クリス、こちらに判子をお願いします、」

霧島が俺に書類を渡して来る、

俺はそれを受け取り印を押す、

前の提督の不正で得た金は街の建物の復興の金にするか、

正直腐った金は俺は使いたくない、

俺は書類を見ながらそう思い作業し続ける、

しばらくそれが続き、

クリス「霧島、聞きたいことがある、」

前から気になっていた事を聞こうと思う、

霧島「何ですか？」

クリス「お前の姉についてだ、」

霧島の書類整理の手が止まった、

クリス「辛い事を聞くかもしれない、だが事前に渡された個々の現状を知る書類にそのことが書かれていなかったから話したくなかったものだとわかる、もし話したくないなら話さなくてもいい、」

霧島が俺を見て来る、

その目は悲しみか、

それとも憎しみなのか分からない、

そんな目をしている、

霧島「・・・わたしには3人の姉がいました、」

霧島が話し出した、

霧島「わたしは金剛型高速戦艦の4番艦、つまり末っ子です、金剛お姉様、比叡お姉様、榛名お姉様、ここの主力艦でした、」

3人も姉がいたのか、

それに主力艦、

かなり活躍していたんだな、

霧島「私達は唯一あの提督に意見を言い対立していました、もともと高雄さんや愛宕

さんのやっている事や駆逐艦の事をやめるようにあの時は何度も言っていました、」
かなりのものだな、

意見を言えるなんて、

霧島「ですが4年前、わたしは他の艦娘達と遠征に行っている間に事件が起きました、」

霧島の手が震えている、

何があつた、

霧島「鎮守府に残っていた艦娘に聞きました、前の提督がお姉様達に拷問に近いことを行なつたと、殴り蹴り、指を切つたり髪を引つ張り抜いたり、艦装もボロボロになりアザなどもできていたと、クリスは知っていますよね、あの提督服を着ると私達艦娘は抵抗も反撃もできないことも、前の提督はそれを利用して暴挙に出ました、周りも止めようとしたらしいですが意味がありませんでした、そしてそのあと強制的に出撃命令をしてそのまま帰ることがありませんでした、」

ひどいな、

まさかそんなクズ男だと思わなかった、

霧島「わたしが帰ってきたときには残っていたのは切断された指と抜けた髪と壊れた艦装の一部でした、わたしは前の提督に詰め寄りました、ですが周りのみんなに止めら

れました、その時の事を目の当たりにしていた皆さんです、わたしも同じようになるとが目に見えていたようです、」

霧島が一息ついて、

霧島「元師様が来られたときにその事を言えなかつたのはわたしがそれを言うと言うと元師様に掴みかかり無理難題を言うと思つたからです、みんなもそれを感じ取つてくれました、」

クリス「すまない、まさかそんなことになつていたなんて、」

霧島「謝らないでください、謝られてもお姉様達は帰つてきません、」

霧島が書類整理に戻る、

あんな話を聞かされたらあれをやらないといけなくなる、

俺は立ち上がりクローゼットの中に入っている物を取り出した、

霧島「クリス？」

霧島が俺の名を言うが俺はそれを取り出して霧島の腕を掴み執務室から出た、

霧島が何か言っているが気にしないで歩き外に出る、

俺らの目の前には焼却炉がある、

霧島「クリス、どうしたんですか？こんなところに連れてきて、」

何か警戒されているが俺は焼却炉の中にあるものを投げ入れた、

霧島「っ!?!クリス!それは!」

霧島が驚くのは無理はない、

俺が投げ入れたのは白い提督服とその予備だ、

霧島「クリス!なんで……」

クリス「この服は霧島の……いや、この鎮守府に住む艦娘にとつて不要なものだ、」

俺はライターを取り出して火を点火する、

クリス「こいつを燃やしたところで死んだやつらが帰ってくることはない、だがこれがある限り皆がこれに怯えるだろう、だから燃やす、」

俺は焼却炉に火を入れる、

火は燃え上がり煙が出る、

俺は焼却炉の蓋を閉める、

煙突から煙が出てくる、

霧島「クリス、」

俺と霧島は空に上がる煙を見続ける、

その煙は前の提督の犯した罪のように黒かった、

焼却炉の火が消えるのを見届け執務室に戻るとジルの説教を食らったのは言うまでもない、

来客者、暁、雷、

翌日、

ジルの言った通りロドリゴと暁、

雷がやってきた、

しかも朝早くに、

ロドリゴ「夜遅くに出た、あの2人は運転中に寝かせたから出撃はできる、」

クリス「流石に休ませないといけない、そんな強行軍のようなことしなくてもいいんだ、」

艦娘も少女だ、

疲れも感じる、

コンデイションが悪ければいい結果も出ない、

クリス「それにリリーに会えて嬉しそうだからな、」

俺は再会して喜んでる3人の前で出撃なんて言えない、

リリー「暁ちゃん！雷ちゃん！元気だった!?!」

暁「元気よ！レデイになるために体調管理もバッチリよ！」

雷「わたしも！いつ出撃できてもいいように早寝早起してる！」

ああいうのを見ると落ち着くな、

物陰で覗き見ている長門もほっこりしている、

バレバレだ長門、

リリー「それじゃあいつものあれしよう！」

暁・雷「おおー！」

ん？

なんだ？

3人が整列して、

「波導拳!!!」

クリス「……」

ロドリゴ「……」

長門「……」

「昇龍拳!!!!」

クリス「……」

ロドリゴ「……」

長門「……」

「「竜巻旋風脚」!!!」

クリス「・!!」

ロドリゴ「・!!」

長門「・!!」

「「電刃波導拳」!!!」

なんだこの武闘派少女共は、

「「これで終わり」!!!」

「「熱波旋風脚」!!!」

全ての技を自分の狂いもなく同時に行なっている、

リリー「これが！正義と！」

暁「勇気の！」

雷「3プラトーンだよ！」(PXZ)

何か違う、!!!

ロドリゴ「ステイブの所の駆逐艦娘達が戦艦すらもほぼ一撃で沈めることができるようになった、その原因が全員今のよう訓練しているからだ、」

クリス「その・・すまない、」

俺はロドリゴに頭を下げる、

リリー「よし！明日はショーリューケーン系統全集にしよう！」

暁「いいわ！修行の成果を見せてあげるんだから！」

雷「私だつて！暁お姉ちゃんに負けてないよ！」

このほのぼのの会話はいいのだがやる事は恐ろしいな、

ジル「通信空手完全版の波動拳をマスターしたのね、流石だわ、」

ジルは何感心している、

霧島「く、クリス！今のはなんですか!?!」

クリス「駆逐艦娘のみが今のところ使える技だ、」

駆逐艦娘以外使用している所を見たことがないからだ、

響「私たちも使えるようになるんですか？」

ジル「そうね、練習次第かしら？」

ジルが余計な事を言いやがった、

響「そう・・・」

素っ気ない返事だが目が3人の方を向いている、

龍驤「うちもあんな技を使えるんか!?!」

ジル「龍驤は軽空母よね、」

龍驤「そうや、」

ジル「もし使えるようになったらあなた駆逐艦娘枠に入るわよ、」

その言葉を聞いた龍驤が一瞬にして真っ白になった、

霞「あんな技を覚えても実戦で役に立たないわよ!」

ロドリゴ「いや、戦果が一気に良くなったな、戦艦クラスの深海棲艦がほぼ一撃で大破、艦載機も近づかれる前に撃墜、最近では潜水型にも効果があるとわかったからな、」

霞は唇を噛み締めている、

リリーから聞いた話だが霞相手に通信空手の技を出してしまつたらしい、

だから霞はリリー相手に敵対心を出していたのかと納得した、

ロドリゴ「クリス、案内を頼めるか、俺はあいつらの荷物を下ろさないといけないから、」

クリス「手伝おう、」

俺とロドリゴは車から荷物を降ろして客室に運んだ、

昼頃、

甘味処間宮、

甘味処に行くくとロドリゴと間宮と朝潮がいた、

ロドリゴと間宮はともかくあの中に朝潮がいることが驚きだ、
クリス「どうした？」

間宮「クリスさん、実は朝潮さんから料理を習いたいと言われまして、
唐突だな、

朝潮「間宮さんのお料理美味しいですから習いたいと思いましたが、それに今後私の妹
達が来たら私の料理を振る舞いたいから、」

なるほど、

朝潮型の妹のためか、

間宮「私はお料理を作るのは好きですが教えるとなるとちよつと、それにクリスさん
達に言われてからもつとお料理の練習をしていますので、」

ロドリゴ「それで俺に白羽の矢が立ったわけだ、向こうでは妻と娘の3人で厨房を仕
切っているからな、」

ロドリゴならジルのような魔改造はしないだろう、

クリス「すまないな、なんか余計な仕事を増やして、」

ロドリゴ「気にするな、娘に料理を教えるのと同じだ、」

朝潮「ロドリゴさん、野菜を切り終えました、」

俺は邪魔そうだな、

俺はその場を後にした、

セバスチャンと出撃、準備編、

ロドリゴらが来て翌日、

リリーは暁と雷と一緒に、

「昇龍拳！」

技の練習をしている、

俺はと言うと日本語を習得するためにあの手のこの手と手をこまねいている、

その一つが、

高雄「セバスチャン、今のはありがとうとすまんが混ざっていました、」

翻訳機越しで高雄と、

愛宕「セバスチャンさん、リリーちゃんも頑張っているんですから頑張ってください

い、」

愛宕による日本語のお勉強をしていた、

事の発端はリリーがああな化け物との戦いの後、

少なからず日本語を習得したからだ、

この2人の教育の方法がいいのかリリーが物分かりがいいのかわからないがリリー

は日本語を少し話した、

そして未だに俺は少しも話せない、

プリンツに頼りつきりである、

流石にこのままだと父親に威厳が無くなるためクリスとジルに頼んでみたのだが、

クリスは、

クリス「すまないが俺は他の人に教えられるほどのもんじやない、それに暁と雷を加えた編成とどの辺りに出撃してもらうか、その後街の復興作業や遺族に渡す物やら準備があるから時間が取れない、」

聞いた俺が馬鹿だったとよくわかった、

俺の嫌いな書類仕事をしているからな、

ジルは、

ジル「面白い物あるけど試してみる？」

その言葉で俺はジルに頼むのだけはやめた、

何を渡すつもりだったんだ？

空回りしているとたまたま愛宕と高雄に会い、

ダメ元で頼んで見たら、

高雄「文字は話せるまでダメです、漢字なんてもつてのほかです！セバスチャンは幼

稚園のやる事から始めないといけないのです、」

愛宕「リリーちゃんが頑張っているんだからお父さんも頑張ってー、」

まじめに教える高雄と面白がる愛宕、

距離感がかなりあるがこうやって話しているのは成長の証拠なのかもな、

刑事の頃は女性被害の事件に関しては女刑事が被害者女性に話をしていたからな、

キッドマンもやっていたな、

あいつは今頃どうしているのか、

こつちに来ていないよな、

高雄「セバスチャン！聞いているのですか!?!」

おっと、

キッドマンより怖いやつがいたの忘れていたな、

俺は苦笑いをして厳しい日本語教室を続けた、

翌日、

朝、

甘味処間宮、

俺はロドリゴの入れたコーヒーを啜った、
刑事時代もSTEMの中でもコーヒーメーカーで飲んでいたからな、
入れ立てがうまい、

日本語教室はまあ・・・少しだが覚えた、

「すまない」だ、

昨日高雄に何回も言ったな、

その為すぐに覚えた、

俺はコーヒーを飲みながらくつろいでいると、

クリス「セバスチャン、」

クリスがやってきた、

何か厄介事か？

セバスチャン「どうした？」

クリス「突然ですまないが明日暁と雷を加えたメンバーに入って欲しい、」

つまり出撃か、

セバスチャン「突然だな、どうしてだ？」

クリス「一番の目的はこの艦娘の熟練度がどれほどかを見て欲しい、俺はここを離れられない、ジルは手を貸してしまいそうでな、セバスチャンならそんなことは無いと

思うからな、」

セバスチャン「買いかぶりすぎだ、リリーみたいな子供が危なくなったらすぐにでも銃を構えて撃つつもりだ、」

子供が危ない目にあっているのに助けられないのは大人としてどうかと思う、

クリス「引き受けてくれるか？」

セバスチャン「メンバーは暁と雷以外誰がいるんだ？」

クリス「響と青葉、加賀と長門だ、」

クールとパラッチと無表情と火力か、

クリス「ちゃんと名前で呼んでやれ、」

顔に出ていたか、

クリス「響に関しては姉と妹があんな技を出したからその影響で先程自ら志願して来た、」

ああ・・・

あれか、

あれは衝撃的だったからな、

俺の場合は娘が人間離れしてしまったことに衝撃的だったが、

クリス「青葉は好奇心だ、」

そんな目をしている、

あいつはあのサイコ野郎みたいにはなつてほしく無いな、

クリス「加賀は空母がどのようなものか確認して欲しいから入れた、
たしかに、

ステイブの所で空母艦娘を見たのは出発する直前だったからな、

タイラントだったか、

あいつの時は加賀が爆撃していたが陸で行なっていたから、

海上ではどうなるのか見たい訳だな、

クリス「長門はステイブの所の長門と戦力の比較をして欲しい、」
比較か、

戦力的にはこつちの長門は出会った当初から火力重視な気がする、

まあ、

扉を開けた瞬間に砲撃するやつだからな、

セバスチャン「わかった、出来る限りはする、」

クリス「感謝する、」

その後クリスもロドリゴのコーヒーを飲み始めた、

昼、

俺は暁と雷の部屋の前に来た

俺は扉をノックして、

セバスチャン「暁、入るぞ、」

暁に確認を取る、

暁「セバスチャンさん？」

セバスチャン「突然すまん、雷はどこに行つた？」

暁「リリーさんと一緒に電と響と一緒に外に遊びに行つたわ、」

セバスチャン「暁は行かないのか？」

暁「荷物整理の途中です！」

ない胸を張って言う暁、

自慢するほどではないのだが、

暁「それでセバスチャンさんはどうしたんですか？」

セバスチャン「実は明日クリスが暁と雷を入れたメンバーで出撃して欲しいと言ってな、そのメンバーに俺もついていくことになった、」

暁「セバスチャンさんですか？」

セバスチャン「そうだ、この艦娘の戦力を確認して欲しいとのことだ、しばらく出

撃していないみたいだからな、」

暁「わかったわ！私と雷で護衛を行えばいいのね！」

セバスチャン「そうだな、だがあくまで戦力の確認だ、危ないと思ったらすぐに撤退を行う、」

暁「ほかに出撃する人は？」

セバスチャン「響と青葉、加賀と長門だと言っていた、」

暁「響も出るんだ、」

セバスチャン「昨日の技が響のなにかを刺激したみたいだ、」

暁「そうだったらお姉ちゃんとしてかっこいいところを見せないとね！」

変なやる気スイッチを押しってしまった、

暁「ありがとうございます！セバスチャンさん！雷が戻ってきたら伝えておきます
！」

セバスチャン「おう、頼んだ、」

俺は退室した、

俺は工房に移動した、

奥の方にあるワークベンチが目的だ、

ボルトの製作をしておかないといけない、

問題は材料だ、

一応は明石と武器商人にいらぬ鉄パイプや切れたヒューズなどを置いといて欲しいと伝えていたがどこまで集まっているのかわからない、

それとタイラントが来た時にハーブーンボルトを全部使い切った、

俺はワークベンチに来た、

材料は・・・

鉄パイプが2本、

だけ・・・

まあ仕方がない、

俺はハーブーンボルトを2本作った、

後はギアか・・・

少し強化しておくか、

ステイブの所の鎮守府で確認したが強化されてなかった、

通りで威力がないと思った、

今回はハーブーンを強化しておくか、

俺はガチャガチャとハーブーンの強化を行う、

武器商人「ほう、そうやって武器を強化するのか、」

突然背後から声が聞こえて俺は驚いてしまう、

振り返ると武器商人がいた、

セバスチャン「脅かすな、」

武器商人「それはすまない、所で足りているか？」

セバスチャン「足りないな、」

武器商人「だったらこつちを確認しておくか？」

武器商人がコートを広げる、

セバスチャン「俺の財布と相談しながらでいいか？」

武器商人「ひひひ、じっくりと相談してくれ、」

俺と武器商人の商談は夕飯の声がかけられるまで続いた、

セバスチャンと出撃、出撃編

翌日、

工房、

俺は艦装を履いて装備の最終確認を行なっている、

出撃自体久しぶりだ、

銃器の点検は毎日していたから大丈夫だが問題は艦装だ、

こいつはここに来て一度も使っていない、

俺が変に弄ると動かない気がする、

一応は海の上を浮くことができた、

だが何があるかわからない、

突然故障する場合もある、

最悪誰かの背中におぶってもらおうか、

さて、

俺はクリス達とは違い何個も武器を持てる、

更に弾薬の作成も出来る、

だが無限に撃てるため弾薬作成はここでは意味がない、

だからボルトの作成だけしかしていない、

そのボルトも材料が無いため作れない、

無限に撃てるなら必要ない？

クロスボウガンを舐めては困る、

銃とは違い銃声が無い、

ボルトはガラクタから作れる、

罠にも使える、

煙を出したり痺れさせたり凍らせたり出来る、

足止めや敵を倒したり役に立つ、

銃よりボウガンをよく使っていた、

だが頼みのボウガンの火力であるハーブーンが今は2本しか無い、

次に威力が高いのはマインボルトだがあれは周りにも被害が出る、

もし暁達に当たったら危ない、

だから使えるのは補助的な役割の煙幕とショック、フリーズボルトがメインになる、

銃も使うが今回はフォローだ、

そこを忘れてはいけない、

俺は装備の確認を終えて横に置いていたコーヒーを口に含んだ、冷めた上に酸味と苦味がある、

俺がコーヒーを飲み終えると長門が入ってきた、

俺を見るも興味なさげに自分の艦装の方に行き装着した、

長門はあまり俺らを歓迎していないな、

だいぶ時間が経つがまだ少しも心を許していない子もいる、

長門と加賀がその代表だ、

潜水艦娘の伊19もリリーにすら話しかけていない、

霧島曰くあの格好以外の服がなく大破した状態で前の提督の鑑賞対象とかしていた

らしい、

男は全面拒否、

そんなようだ、

ジルに任せるしかない、

ジルは結構話しかけているがあまりいい返事はない、

一応は服を着て間宮の所に来ているところはたまに見かけているがそれ以外は見な

い、

川内と那珂は神通のおかげなのかわからないが多少は向こうから話しかけられる、

川内は密かにクリスマスに礼を言いに行っていたな、大淀の事で、

親潮はリリーと遊んでいるところはよく見かける、プリンツとビスマルクが慌てて追いかけていたな、

霞はリリーに倒されてからなにかとリリーに突つかかっているな、

その度に高雄と愛宕により拘束されているが、吹雪と白雪はまだ馴染めていないようだ、

時間がかかるな、

次に加賀が入ってきた、

加賀も俺を見ても無関心のように自分の艦装を手を取った、

俺はやっていけないのか？

次に入ってきたのは青葉だ、

青葉は入って来るやいなや俺の所に来て、

カメラを向けられた、

セバスチャン「せめて許可くらい取ってくれないか、嫌とは言わないが驚くだろう、」
思わず英語で言ってしまった、

青葉「何言ってるかわからないけどセバスチャンさんならいいかなって、」

そう言つてカメラで俺を撮りまくる、

俺は諦めて撮られている、

そこに暁と雷と響が入ってくる、

暁「セバスチャンさん！今日はよろしくお願いします！」

セバスチャン「ああ、よろしく頼む、」

俺は暁の頭を撫でた、

長門「足手まといに何ができる、」

長門の声が聞こえた、

俺は長門を見る、

長門「深海棲艦はお前の使う武器なんか効かない、今回の出撃でお前は足手まといだ、いくら化け物と戦つて来た奴だろうがここではお前は無力な人間だ、」

言っていることはわかる、

俺たち人間はあいつらに立ち向かえない、

だが俺らは違う、

暁が長門の所に行こうとしたが俺が止める、

セバスチャン「ここで言い争つたらダメだ、実力で示すんだ、」

俺はリボルバーを暁に見せると納得したかのように頷く、

そこにクリスがやってきた、

クリス「みんないるな、」

俺と暁と雷、

そして響となぜか青葉まで敬礼してしまった、

クリス「やめてくれ、ここでは敬礼はいらさない、セバスチャン、悪ノリしないでくれ、」
セバスチャン「すまん、だが一応はお前の部下だろ、最低限はそうしたほうがいいと思っ
てな、」

クリス「お前にそれをされると寒気がする、」

失礼だな、

クリス「今回の出撃はここより少し離れたところの島の海域だ、深海棲艦の目撃情報
があつたらしい、その調査及び深海棲艦の撃退だ、危険だと思つたらすぐに引き返して
欲しい、判断を怠るな、」

事前にどこに行くか聞かせてくれよ、

クリス「ついでだ、その島は元鎮守府があつた島らしい、だが深海棲艦の襲撃でその
島を手放したらしい、ついでにその奪還もできたらして欲しいとのことだ、」

セバスチャン「誰からの指示だ？」

クリス「前の提督宛の手紙だ、2年前のハガキだ、その人に手紙を出したら家族から

連絡があつてな、その手紙の人は去年死んだらしい、前の提督が動かなかつたから自分から奪還しに行つたみたいだ、」

青葉「それで帰らぬ人に・・・」

クリス「ああ、それで遺族からその人の遺品もついでに見つけてきて欲しいと、1年経っているからな、望みは薄いと言っていた、」

雷「できれば探してみます！」

クリス「すまない、それと通信機だがセバスチャンと暁に渡しておく、どちらかが無くしても通信できるようにだ、」

セバスチャン「わかった、」

クリス「出撃は今から1時間後だ、頼んだぞ、」

クリスはそう言つて出て行つた、

加賀「言うだけ言つて出て行きましたね、」

長門「結局はあいつも前の提督と変わらないな、」

好き勝手言いつづけているな、

あの2人、

1時間後、

再びクリスが来て、

クリス「時間だが行けるか？」

青葉「大丈夫です！」

響「問題ないよ、」

暁「行けるよ！」

雷「準備OKです！」

セバスチャン「問題ない、」

加賀と長門は何も言わずにいた、

クリス「わかった、絶対に帰ってこい、いいな！」

あの2人以外頷く、

クリス「出撃！」

クリスの掛け声に俺以外の全員出撃した、

セバスチャン「無駄になりきらなくていいぞ、」

クリス「いや、こういうのは勢いが大事だと思つてな、」

ノリノリじゃないか、

セバスチャン「そういうのは嫌いじゃないな、俺も行くぞ、」
クリス「頼んだ、無事を祈る、」
俺はひらひらと手を振りながら出撃した、

セバスチャンと出撃、戦闘編

出撃してどれくらい経ったのか、

島らしいところは見えない、

飽きるな、

地図上では近くても実際に向かうとかなりの距離がある、

この子供達はいつもこういった風景を見ているんだな、

偉いな、

青葉「セバスチャンさんは海を滑ったことあるんですか？」

俺の前を滑っている青葉が振り返りながらそう聞いてきた、

翻訳機があるが話せないため暁に通訳を頼む、

セバスチャン「ああ、元師の所で海底からB・O・Wが来てな、俺とクリスとジルと

元師とイムヤでその元凶を倒しにいったんだ、その時にな、ついでに潜って来たぞ、」

青葉「潜ったのですか!？」

セバスチャン「ああ、潜ったな、もう潜りたくないな、」

ヴェルトロの化け物は嫌だな、

水中に引きずり込まれるのは勘弁だ、

響「海の中どうでした？」

セバスチャン「一応は綺麗だったな、あまり周りをまじまじと見れなかったが綺麗なところだった、」

スキューバダイビングの経験はなかったが潜れたな、

響「私達艦娘は轟沈すると暗い海の底に沈んで深海棲艦になると言われている、だから海の底はあまり良い印象はない、」

そんな事言われていたのか、

セバスチャン「海の底は暗かったな、先行していたイムヤのライトも届かないくらい暗かった、それに俺らの目標は海底に沈んだ沈没船だったからな、」

青葉「お宝ですか!？」

へんなどころで食いついて来たな、

セバスチャン「そんなロマンのあるようなものじゃない、その船から化け物が出てくるんだ、その元凶を倒すために潜ったんだ、だがそれと同時に化け物達は元師の鎮守府を目指しててな、幸い撃退できたから被害は無いがな、」

ロドリゴが優秀な指揮官だったのが幸いだっただろうな、

青葉「あの映像を見て思ったんですけどセバスチャンさんは不幸ですね、」

セバスチャン「ズバツと言ったな、」

青葉「だって刑事時代はあんなへんな機械に繋がれてその後もまた繋がれてと不幸ですよ、」

セバスチャン「青葉、たしかに災難だと思う、だが俺は不幸だと思わない、ああしてリリーを助けられた、マイラともう一度会えた、それほど不幸では無いな、」

キッドマンに少し感謝している、

マイラの計画に乗ってくれて、

そう話していると、

加賀「おしやべりはそこまです、艦載機が敵影を確認しました、」

加賀の声に俺はスナイパーライフルを構えた、

スコープを覗くと人型が確認できた、

そこまで多くないな、

あの時が異常なだけか、

加賀「先制をかけます、」

加賀が艦載機を発進させる、

改めて見ると小さいオモチャのような飛行機が飛んで行って爆撃したり機関銃を

撃っている、

長門「私も仕掛ける！」

長門が主砲を撃つ、

火力が高そうだな、

俺はもう一度スコープを覗く、

爆撃されたり主砲を撃たれたにもかかわらず奴はピンピンしている、

これはやばいな、

青葉「狙い撃ちます！」

青葉も戦いに参加する、

響「不死鳥の異名の意味、見せてあげる、」

響が突っ込む、

そんな異名があったのか、

しかも一人で突っ込んで行ったぞ、

セバスチャン「暁、雷、響の援護を頼む、」

暁「わかったわ！」

雷「了解です！」

2人は響の元に向かう、

俺はスコープを覗いて近場のいる魚型、

確かイ級だったか、
そいつを狙撃する、

多少は数を減らしても問題ないだろう、

青葉「おお！セバスチャンさんの銃撃が深海棲艦に効いた！」

セバスチャン「話せないから後で暁に通訳をさせてやる！」

戦況は平行線だな、

魚型が海底から上がってくる、

やはりあの人型を倒さないといけないか、

だが今回の目的は加賀と長門と青葉の戦力確認、

もどかしい、

駆逐艦組はヒットアンドアウェイを繰り返している、

だが、

長門の主砲が人型に命中した、

火力が高いが精度悪いな、

だが人型は多少ポロポロになっているがまだ立っている、

頑丈だな、

だがどうする、

艦載機で爆撃しようにも人型に届く前に撃たれてやむおえず引き返してる、

長門は人型を狙うも命中精度が悪く当たりにくい、

青葉は射程的に届かない、

駆逐艦達はイ級の多さに四苦八苦している、

ここらが限界か、

俺はスナイパーライフルの狙いを人型に変える、

狙いは頭、

そして撃つ、

風の影響か知らないが弾は人型の頬を掠める、

人型は驚きの顔をしているが俺からしたらラッキーチャンスだ、

角度を調整して再び撃つ、

今度は額に命中した、

人型が倒れて海に沈む、

魚型が戸惑っている、

やはり奴が司令塔だったか、

俺はリボルバーに持ち替えて魚型を撃つ、

確実に撃ち抜いて倒していく、

そして最後の1体も倒して俺はリボルバーをしまった、
セバスチャン「終わったな、」

俺は額に浮かんでいた汗を腕で拭いそう眩く、

長門と加賀と青葉は驚きの顔をしている、

暁「セバスチャンさん、お疲れ様です、」

セバスチャン「お前の方が疲れているだろ、俺は危ないと思ったから撃ち抜いただけだ、それに実力を見せつけることができた、」

俺は加賀と長門を見る、

哑然としている、

青葉「セバスチャンさん！説明をお願いします！」

まあ、

青葉が聞きにくるだろうな、

俺は暁に再び通訳を依頼した、

セバスチャン「俺たちはなぜか知らないがあいつら相手に普通に銃撃できるんだ、理由がわからないがな、」

青葉「それってすごいことですよ！」

セバスチャン「そうだな、だから一緒に出撃できるんだ、」

青葉がキラキラ輝いている、

しかも隣で聞いている響も目を輝かせている、

なぜ？

そう思っていると、

雷「セバスチャンさん！」

慌てた様子で雷が声を上げてきた、

俺は雷の方を見ると、

なんだありや、

人型が多数、

先ほどの数倍の規模だ、

さっきのは偵察隊か！

俺は通信機を使い、

セバスチャン「クリス！緊急事態だ、深海棲艦が大規模でこっちに向かってくる！俺

たちはこのまま帰投する！」

クリス「わかった！もしやばいなら捨てられた鎮守府のある島に逃げ込むんだ！」

島、

そうか、

俺は周りを見渡すと島が見えていた、

この近くにある島の海域の調査だったな、

あの量だ、

上陸すれば簡単に追ってこれないだろう、

俺は指示を出そうとすると、

加賀「何か様子がおかしいです！」

加賀がそんなことを言い出した、

俺は深海棲艦の方を見ると、

人型が混乱しているかのように水中に主砲などを撃ち込んでいる、

だが、

1人、

また1人と海に引きずり込まれている、

どういうことだ、

俺は少し様子を見ると水中から奴の一部が見えた、

鯨のヒレ、

鯨が深海棲艦を襲っている、

まじか、

セバスチャン「全員あの島に逃げ込むぞ！あれはクリス達が戦った鯨型の化け物かもしれない！」

暁が通訳してくれたようで見ながら急いで島に向かう、

あの様子だと多数いるだろう、

このまま戦うと犠牲が出る、

俺も急いで島に向かった、

時折後ろを振り返りながら進んでいると鯨が数頭こつちに向かってきた、

気づかれた、

俺はクロスボウガンにショットボルトを装填して海に向けて発射する、

海に浮いたショットボルト、

鯨がそこを通ると電撃が発生して鯨が気絶した、

だがあくまで気絶だ、

倒すことは出来ない、

魚雷は意外と速度が遅いため当たるかわからない、

だから逃げる、

幸いにもショットボルトをもう一本放った頃に島に着いた、

俺を含む全員が島の海岸について急いでその場から離れた、

TVでも見たことがあるが鮫は少し砂浜に上がっても自力で海に戻れる場合がある、海岸から少し離れた開けた場所、視線の先には森、

そこで俺は腰を下ろした、

全員が疲労困憊のようだな、

休める場所を探さないといけない、

だが、

そんな俺らを嘲笑うかのように森から聞いたことのある死者の声が聞こえた、簡単に休ませてくれないようだな、

セバスチャンと出撃、探索編

森から聞こえるゾンビのうめき声、

海には鮫に大軍、

俺は通信機でクリスに連絡を取った、

セバスチャン「クリス、すまないが更に緊急事態だ、海から鮫型のB・O・Wが襲ってきたから島に上陸したが島からもゾンビのうめき声が聞こえてきた、」

クリス「わかった！今すぐ俺とジルを含めた第2艦隊を編成して海上を制圧する！セバスチャンは鎮守府に向かってくれ！そこで落ち合おう！何かあつたら無線で連絡を頼む！」

セバスチャン「わかった、何かあつたらすぐに報告を入れる、」

俺は通信を切った、

セバスチャン「暁、通訳を頼む、」

暁「任せて！」

セバスチャン「今さっきクリスに連絡を入れた、クリスは艦隊を編成して助けに向かうと言っていた、俺たちは捨てられた鎮守府に向かって救助を待つ、」

響「そこなら食料もありそうだね、」

セバスチャン「だがこの森はゾンビはうようよしていそうな気がする、」

青葉「うめき声がちよくちよく聞こえるよね、」

セバスチャン「そこでだ、この中で銃を使える奴はいるか？」

俺の言葉に首を傾げるほぼみん、

セバスチャン「森の中では変に主砲や艦載機を飛ばせない、主砲の威力を考えたら木に当たると倒れる、それがゾンビならともかく自分達に当たるとまず助からない、艦載機は森の木々が邪魔で上手く飛べないだろう、駆逐艦の魚雷もここでは役に立たない、」
元々広い海でどんばちするための装備だからな、

こんな森での戦いは想定できていないはずだ、

長門「私達に銃を使えと？」

セバスチャン「俺一人で6人は守れない、数で来られたら俺たちは全滅だ、俺はそういうのはごめんだ、」

どれだけ強者だろうが数で攻められたら終わりだ、

一騎当千なんてできはしない、

長門「わかった、お前の指示に従おう、」

加賀「長門さん？」

長門「ここはこいつの言うことが正しい、私達の艦装は森では効果は薄い、いや、足手まといにしかならない、」

話がわかる奴だったとは、

状況の理解が早くて助かる、

俺は手持ちの銃を地面の置いていく、

ただ、

皆が素人だ、

反動の少ないハンドガンとサブレッサー付きハンドガンとレーザーサイト付きハンドガン、

後はフルバレルショットガンとソウドオフショットガン、

癖の強いダブルバレルショットガンはいらないだろう、

リボルバーは俺個人が気に入っているから渡さないでおこう、

マグナムは論外だ、

反動が強すぎる、

スナイパーライフルはこんな森だと役に立たない、

アサルトライフルは連射の反動が強い、

クロスボウガンはボルトに限りあるから俺が持つておこう、

火炎放射器は森に燃え移ると俺たちが死ぬ、

ブラストナツクルは渡さなくていいだろう、

青葉「一体どこからこんなにも出したんですか？」

暁や雷までもが頷いてきた、

セバスチャン「どこからだろうな、」

俺もわからないからな、

セバスチャン「暁と雷は波動拳で敵を倒してくれないか？」

暁「わかったわ、銃は使えないもの、」

響「私も使ってもいい？」

響がそう言いますが子供に銃を持たせるようで気がひける、

響「間違った使い方はしない、」

そこまで言うのか、

セバスチャン「わかった、だが今はこいつを持っておけ、ほかの銃は反動が強い、」

俺は響にハンドガンを渡した、

たまにTVのドラマかアニメに出てくる子供刑事のように構える響、

セバスチャン「長門、お前はショットガンでいいだろう、こいつは遠距離には向いていないが近距離だと最大の威力を発揮する、そのかわり反動が強いが腕っ節が強いだろ

うから渡しておこう、」

俺は長門にソウドオフシヨットガンを渡す、

セバスチャン「使い方はわかるか？」

長門「初めて持つんだ、わかるはずがない、」

胸を張ってドヤ顔するな、

俺は簡単に使い方を教える、

セバスチャン「加賀はハンドガンにしておこう、スナイパーライフルを渡したいところだが森の中では無意味だ、木々が邪魔で狙えない、」

加賀「そうですね、それが適切だと思います、」

俺は加賀にレーザーサイト付きハンドガンを渡す、

セバスチャン「青葉もハンドガンで頼む、後カメラ撮影を頼む、後でクリスタちがこの島を調べる時の資料になる、」

青葉「適材適所ですね！わかりました！」

青葉にサプレッサー付きハンドガンを渡す、

セバスチャン「さてゾンビの特性だがクリスから聞いたんだが奴らは目で視認するんじゃないく音で反応するようだ、」

青葉「音ですか？」

セバスチャン「そうらしい、音が鳴るとそつちに集まる習性があるようだ、それと臭いでも来るようだ、」

加賀「でしたら銃声も危ないのでは？」

セバスチャン「そうだ、だからできる限り慎重に行動する、いつどこで襲われるかわからないからな、戦闘は可能な限り避けるか背後からナイフを頭に突き刺すかだ、」

緊張する皆、

そんな戦闘経験なんてないからな、

セバスチャン「よし、俺が戦闘を歩く、皆は後ろを歩いてくれ、何か出てきたら伝える、」

皆が頷くのを確認した、

俺は歩きだす、

木々が生い茂っていて視界が悪い、

後ろからは全員付いてきている、

カルガモの親の気持ちだ、

聞こえてくるのは鳥の鳴き声と草木ををかき分けた時に出る音、

そしてゾンビのうめき声、

正直気が狂いそうだ、

俺はそう思いながら進んだ、

しばらく歩く、

何も出てこないから気が緩みそうだ、

その時、

人影が見えた、

セバスチャン「止まれ、」

俺は皆にギリギリ聞こえるような小さい声で伝える、

英語だけどわかったようだ、

止まったことを確認すると俺は人影を見た、

遠目でわかりにくい、

俺はスナイパーライフルのスコープを覗いた、

そして驚きで目を見開いた、

ゾンビなのには変わりない、

だが奴の頭に花が咲いている、

なんなんだあれは、

クリスとジルに見せてもらった中にプラント42という植物の化け物がいたがあれ

はなんだ？

植物とゾンビのハイブリットか？

花はTVで見るラフレシアを小さくしたようなものだ、

その花から蔦が伸びてゾンビの体に巻きついている、

新種か？

長門「どうした？」

長門が聞いてきたため俺は無言でスナイパーライフルを渡して覗くようにジエスチャーをする、

長門が覗いて奴を見ると驚きの顔をする、

俺はその間にクリスに無線で連絡を行う、

セバスチャン「クリス、いいか？」

クリス「どうした？今出撃するところだ、」

早いな、

だがその方がいい、

セバスチャン「新種のゾンビを見た、」

クリス「詳しく教えてくれ、」

セバスチャン「頭に植物の花を咲かせたゾンビがいた、」

クリス「花・・・初めての奴だな、それに頭か、おそらくその植物がゾンビに寄生し

て操っている可能性がある、それにどんな花かわからんがその花にも注意をしてくれ、植物系は毒を持っているからな、」

毒か、

厄介だな、

クリス「死ぬわけではないが徐々に体力が減って弱ったところ襲われる、毒を喰らわないかブルーハーブを食べるんだ、」

セバスチャン「あのアイテムボックスの中のか？」

クリス「そうだ、だが持って行ってないだろうから現地調達で頼む、」

セバスチャン「俺はそれを見分ける目はないのだが、」

全部が雑草に見える、

クリス「なら毒を喰らわないようにするんだ、」

セバスチャン「わかった、努力しよう、」

そう言つて通信機を切った、

セバスチャン「新種のゾンビらしい、植物がゾンビを乗っ取っている感じらしい、」

暁「なにそれ怖い！」

セバスチャン「毒の攻撃があるみたいだ、できる限り避けて行くぞ、」

青葉「写真を撮ります、」

青葉はカメラで新種のゾンビを撮影した、
だがシャッター音で気がつかれた、

ゾンビがこっちにくる、

セバスチャン「長門、加賀、狙い撃つてみる、実際に撃つて感覚を掴むんだ、」
俺が初めて拳銃を撃つたのは刑事になってからだ、

初めは震えたものだ、

長門はショットガンを構える、

だが構え方は違うな、

スナイパーライフルやフルバレルショットガンのように肩当てがあるならいいがソ
ウドオフショットガンはない、

セバスチャン「長門、こいつの構え方は腰あたりで構えるんだ、そうじゃないと撃つ
た反動で飛び上がり顔に当たるぞ、」

長門「そうなのか、」

長門はショットガンを腰に構えた、

ゾンビは結構近くまで来たな、

長門は撃った、

ゾンビは吹き飛んだ、

長門「やったか!？」

俺はリボルバーを構えながら様子を見る、
特に大丈夫そうだ、

セバスチャン「大丈夫だ、」

長門は小さくガッツポーズをした、

加賀「私はまだ撃っていません、」

加賀は少し不満のようだ、

セバスチャン「安心するな、銃声でゾンビがこっちに向かってくるはずだ、急いで鎮
守府に向かうぞ、」

俺がそう言うと全員が頷いた、

再び俺が先頭で歩く、

しばらく歩くと見えてきた、

建物が、

あれが鎮守府か？

俺はゆつくりと近づくと、

そしたら全貌が見えた、

セバスチャン「な!？」

俺は絶句した、

後ろの皆も驚いただろう、

鎮守府、

2年も放置されていたから風化しているのはわかるがなんだこれは、

巨大な植物が鎮守府の屋上に見える、

本当になんなんだ、

暁「本当に入って大丈夫なんですか？」

暁の心配はわかる、

青葉はカメラのシャッターを切りまくる、

セバスチャン「戻るか、」

雷「セバスチャンさん！」

雷の叫ぶような声が聞こえた、

俺はそつちの方を見ると、

ゾンビの群れが来ていた、

まじか！

銃声でこんなにも寄ってくるのか！

甘く見ていた！

セバスチャン「みんな！急いで中に入れ！」

俺の言葉に全員が鎮守府に向かって走り出す、

俺はリボルバーで数体のゾンビに撃つ、

眉間に当たり倒れるゾンビ、

だが奴らの進行は止まらない、

暁「セバスチャンさん！早く！」

暁の声が聞こえた、

俺は走る、

途中横から一体進行を邪魔して来たが避けて鎮守府の中に入る、

扉を閉めて鍵と近くにあった柵を倒す、

気休めだがな、

俺はその場に座り一息ついた、

だが一息つけたのは一瞬だった、

近くの扉が突然開いた、

俺はリボルバーを構えるとそこにいたのは……

「
・
・
・
」

斧を持った黒い頭巾を被った男だった、

●少女達を拾うP

猪と熊を解体した後、

俺たちは肉を調理した、

すっかりと熱しないと細菌や寄生虫といったものが肉の中に生き残っている場合がある、

こんな職業柄なのか無駄に警戒してしまう、

俺は焼いた肉を手で掴み食べる、

最低限塩しかかけていない、

ピアーズ「少し血生臭いが食えるだろう、」

金剛「少々野蛮な気がしマース、」

ピアーズ「俺たち人間の先祖は野蛮な原始人だ、今更気にするな、」

金剛「私の先祖は戦艦デース、」

文句を言いながら金剛は手で食べる、

久しぶりの肉だ、

無心に食らいつく、

港湾 「お肉久し振りに食べました、」

港湾 棲姫が手で上品に食べている、

ほっぼは口と手を汚しながらもガツガツ食べている、

俺は肉を平らげると今後のことについて話した、

ピアーズ 「これからのことだがこの島の開拓をしようと思う、」

港湾 「開拓ですか？」

ピアーズ 「そうだ、海に出て他の島に行けない以上この島で生活をしないとイケない、

住民もいる気配がない、そうなると自分たちの手で家など作って住むしかない、」

簡単な小屋なら作れる、

金剛 「そうデスね、港湾 棲姫やほっぼちゃんなら海に出れマスが艦装のない私やピ

アーズは出れませんね、」

港湾 「わかりました、私達はどうすればいいですか？」

ピアーズ 「まずは材料集めだ、海岸に漂流しているもので使えそうな物を見つけるん

だ、ノコギリか斧が今は一番欲しい、」

釘がなくても建築は出来る、

金剛 「結構地味なことからするんデスね、」

ピアーズ 「サバイバルナイフで木は切れないからな、」

金槌はいらないな、

フライパンで代用する、

ほっぼ「頑張る！」

ほっぼはやる気十分だな、

子供だからか、

だがその前に口と手が汚れている、

俺は濡れたタオルでほっぼの口と手を拭いた、

金剛「ピアーズはお父さんみたいデース、」

ピアーズ「だったら金剛はお母さんか？」

俺がそう言うのと金剛は目を丸くしてしばらくしてから顔を真っ赤にさせる、

意味がわかったようだな、

まだまだだな、

港湾「金剛ずるいです、私もほっぼちゃんのお母さんになりたいです、」

港湾棲姫、

お前の性格はそんなだったか？

初めよりかハツチャケていないか？

ほっぼ「お姉ちゃんはお姉ちゃんだよ！お母さんじゃないよ！」

ほっぼの言葉に落ち込む港湾棲姫、

子供の容赦ない言葉は1番効くからな、

だが戦力が2人減ったな、

かたや顔を真つ赤にしながら妄想にふけり、

かたや顔を真つ白にしながら何か呟いている、

ピアーズ「ほっぼ、行くか、」

ほっぼ「うん！」

俺とほっぼは立ち上がり海岸に向かった、

海岸に着いた俺とほっぼだが、

ピアーズ「何も無いな、」

綺麗すぎる、

いや、

綺麗な海岸はいいことなんだが今の俺にとっては一大事だ、

漂流物が欲しい、

俺らは歩いているが埋もれてもいないようだ、

たまにあるのは葉莢くらいか、
更に奥、

まだ行ったことのないところも見ておくか、
ヤバイと思つたらほつぽを抱きかかえて逃げる、

俺らは歩き続けた、

ほつぽは何かワクワクしている、

俺も昔はこんな風にワクワクしながら探検なんて称して色々と自転車を乗り回して
行つたな、

昔にはもう戻れないか、

ほつぽ「ピアーズ！」

ほつぽの叫ぶような声に俺は反応した、

ほつぽが指をさしている、

その先には誰か倒れている、

おいおい、

まだ3日目だぞ、

この島は漂流しやすいのか？

俺らは倒れているところに向かう、

なんてこった、

1人じゃない、

人数を数えたら12人、

金剛が言っていたな、

6人で1つの艦隊だと、

この場合は2つの艦隊が打ち上げられているのか、

ピアーズ「ほっほ、息をしている奴を手分けして見つけるぞ、」

ほっほ「うん！」

俺らは二手に分かれて行動した、

見るからに無残だな、

艦装と言うやつは壊れていて艦娘も四肢のどこか欠損している奴もいる、

流石にこと切れているがな、

4人目を見ると辛うじて息があった、

俺はそいつの口にハーブのタブレットを2粒飲ませる、

スプレーも効いたんだ、

こいつも効くだろう、

かすかしくない息がはつきりと聞こえるようになった、

ほっぽ「ピアーズ！こっちに生きてる艦娘いた！」

ほっぽの声に俺は急いで駆けつけた、

俺はそいつにもタブレットを2粒飲ませる、

ピアーズ「ほっぽ、残りの奴も確認するぞ、」

ほっぽは頷いて俺らは再び動く、

結果、

その後にもう1人助けて合計3人の艦娘を助けた、

俺はほっぽに金剛と港湾棲姫を呼んで来てもらうように頼んだ、

俺はその間に3人を日陰に運ぶ、

太陽の下は水分と体力が取られるからな、

艦娘の状態を確認しよう、

全員服がボロボロだ、

金剛曰く、

ダメージを受けるとそれに伴い服が破れていくと、

オタクな隊員は喜びそうだな、

1人目は髪が長い、

そして・・・羽？葉っぽ？よくわからないものが3枚ついた髪飾り、

服装はセーラー服か、

まあ、

昔の海軍は男も女もセーラー服だったからな、

その名残か、

2人目はまともや髪が長い、

髪先端あたりをうさぎの髪留めで止めている、

よく見ると前髪に三日月の髪留めもしている、

3人目、

おそらくピンク色の長い髪、

服装が問題だ、

セーラー服を改造したのか、

スカートが変にエロい、

オタクの隊員が喜ぶな、

残りはあのままだと死者が蘇るかもしれない、

悪い意味で、

俺は死んだ艦娘を一箇所に集めて艦装に使われていると言われる燃料を出した、

金剛曰く靴に多く使われていると言われている、

靴から燃料を流す、

燃やす前にドックタグみたいなのはないか？

無ければ特徴のあるものだ、

俺は髪留めなどの装飾品を取りライターで火をつけた、

虚しいな、

12人のうち助かったには3人か、

俺の職場と同じくらい過酷だな、

ほっぼ「ピアーズ！連れてきた！」

ほっぼが金剛と港湾棲姫を連れてきた、

港湾「この炎はなんですか？」

ピアーズ「死者の弔いだ、」

俺は手を合わせる、

金剛も港湾も手を合わせる、

ほっぼは俺らの見よう見まねで手を合わせる、

その後金剛に艦娘を確認してもらう、

金剛「如月と卯月と明石さんデース、」

知り合いではないが生まれた時から他の艦娘の記憶もあるらしい、

艦娘とは摩訶不思議だな、

俺らは生き残った艦娘を担いで洞窟に戻った、

ピアーズ「金剛、すまないが目を覚ますまでここにいてくれないか、港湾棲姫だと驚いてしまうかもしれない、」

金剛「OKデース、」

ピアーズ「港湾棲姫は服を作ってくれないか、」

港湾「わかりました、」

俺はほっぽと一緒に再び海岸に向かった、

結果だが、

空き瓶が数本と釘数本、

それと壊れた艦装だけだった、

綺麗すぎる海に恨みを持ちそうだ、

俺らは洞窟に戻ると、

金剛「ピアーズ、お帰りデース、」

港湾「お帰りなさい、」

ピアーズ「成果は散々だ、そっちはまだ起きないのか？」

未だに眠っている3人、

金剛「まだかかりそうデース、」

ピアーズ「無理に起こさなくてもいい、自然と目が醒めるだろう、」

港湾「何を持ってきたのですか？」

ピアーズ「空き瓶と釘と壊れた艦装だ、何かに使えると思つてな、それと、開拓のとだが早めに行わないといけないな、この洞窟だと狭くなつていく、」

港湾「たしかに、前までは私とほつぽちちゃんしかいませんでしたが今ではこんなにも増えました、」

ピアーズ「だからだ、寝れる所と風呂はいるだろう、日本は毎日風呂に入ると聞いた、」

金剛「間違つてはいませーん、」

港湾「今まで海に入つて水浴びでしたので、」

それはどうかと思うのだが、

ピアーズ「明日は森の奥に向かう、そこに何かないか見てくる、」
港湾「もしかしたら昔の鎮守府があるかもしれないね、」

ピアーズ「チンジュフ？」

金剛「私達艦娘の家みたいな所デース、」

ピアーズ「ならそこを拠点にするのもいいな、」

それに道具もありそうだ、

明日の目標ができたところで俺は夕食のための食材をとりに行った、

セバスチャンと出撃、逃走編

黒覆面の男、

俺の印象はそれだ、

だがなぜ半裸なんだ？

長門「すまない、裏口はあるか？」

長門が覆面男に声をかけた、

やばい、

俺の勘がやばいと訴えている、

俺はマグナムを構えると同時に覆面男が斧を振り上げた、

長門が驚き固まる、

俺は覆面男の腹に向かってマグナムを撃つ、

撃つ機会がなかったためか反動の大きさに腕が痺れる、

覆面男は仰け反った、

仰け反っただけだと！

セバスチャン「逃げろ！」

暁の通訳なんてないだろうが全員が逃げ出した、俺はもう1発撃つ、

覆面男は仰け反るだけで倒れない、

奴は不死身か！

だが銃弾は効いているはずだ、

俺は皆の後を追うように走る、

奴も走って来やがった！

ご丁寧に斧を振り上げながら！

通路は鳶で邪魔だ！

青葉「きやつ！」

青葉が転んだ、

俺は助け起すも、

鳶が彼女の足の巻き付いていた、

生きているのか！

クリスの言葉はあながち嘘じゃないみたいだな、

そんなこと考えている余裕はない！

俺は奴にマグナムを放つ、

倒せなくても退けることは出来るはずだ、

俺の後ろから銃声が聞こえる、

どうやら援護射撃のようだ、

奴も流石に効いたのか元来た道を戻っていった、

俺はナイフで青葉の足の巻き付いた蔦を切り青葉を立ち上がらせる、

青葉「ダメかと思いました、」

長門「どうするつもりだ、外も中も化け物だらけだ、」

長門が俺に抗議の声を上げるが、

その前に何かが壊れる音がした、

それと奴らのうめき声、

本当に気休めにしかならないな！

俺らは問答無用で走った、

無限に撃てるだろうが量が多すぎて押される！

どれくらい走ったのだろうか、

どこの部屋かわからないが個室に入り一息ついた、

加賀「窓から出られないのですか？」

加賀がそんなことを言う、

俺は試しに窓に向かった、

窓は・・・開かない、

割りたいところだが木の板で補強されている、

時間がかかるな、

俺はマグナムを撃って破壊するも窓の外にもゾンビの群れがいた、

ご丁寧に窓から入ってこようとする、

俺たちは個室を出た、

また走りたどり着いたのは俺らの鎮守府にもある執務室、

ただ所々穴が空いている、

床から天井まで、

そこから太い蔦が何本も絡み合って出て来ている、

暁「もう走れないです、」

セバスチャン「休憩だ、」

俺は一度クリスに連絡を入れるも繋がらない、

海に出たところだろう、

交戦中か？

俺は執務室の椅子に座る、

机に書類？なのか？

紙が置いてある、

俺はそれを手に取り読もうとしたが・・・読めない、

雷に翻訳してもらった、

薬剤担当医の報告書、

古びた鎮守府に見たこともない植物があると聞いてやってきた、

どこから出て来たのかわからない、

意思があるかのように成長するため通路も塞ぐ、

更に植物の皮が硬く切るにも時間がかかる、

その上どこの部屋だったか忘れたが艦娘の部屋に特殊溶剤を忘れて来てしまった、

あれは大抵の植物を枯らすことが出来る、

だが欠点としては溶剤が植物の中に入れないといけない、

そのため注射器で注入しないといけない、

だがこの蔦は皮が厚すぎるため注射器が入らない、

これでは注射器も役に立たない、

そんな時に執務室の扉を覆っていた植物を見るとコブのような所があった、

そこを押すと柔らかかったためそこに注射器を打つと見事にその周辺の植物が枯れた、

これで希望が持てたが溶剤がない、

この報告書は誰も見ないだろうが書かせていただく、

鈴木啓介

2枚目

奴が来る、

(そこから先は空白だ、)

雷の翻訳を聞いて希望が見えた、

雷「お薬を植物に注射すればいいのね、」

響「でもこの報告書では皮が硬いと書いてあった、コブを見つけないと、」

長門「手つ取り早く燃やせばいいだろう、火炎放射器あるんだろ、」
長門が俺にそう言う、

だが無理だ、

俺は暁に通訳を頼み、

セバスチャン「壁ですら植物で覆われている、燃やしたら確実に炎が一瞬に広がって俺らの逃げ道がなくなるぞ、」

それに火事はもうごめんだ、

長門は正論を言われて俺を睨みつける、

俺は無視して机の引き出しを開けた、

中には手帳と鍵があつた、

どこの鍵だ？

俺は手帳を見るもやはり読めない、

俺は雷にまた翻訳を頼もうとしたが、

扉が蹴破られた、

奴が来た、

俺はマグナムを構えて撃つ、

セバスチャン「暁！皆を連れてその蔦を登って上に行くんだ！」

暁「わかりました！」

暁は返事をした、

俺は奴の腹に鉛玉を撃ち込む、

どれだけ撃つても死なないなんて恐ろしい、

何発も撃つと奴はいきなり走り出して情けない声を上げながら穴に自ら落ちた、

撃退したのか？

そう思っていると扉からゾンビの群れが入ってきた、

銃声でバレたか、

俺も鳶を掴んで登っていった、

流石にゾンビは登ってこない、

どうやら上の階に来たようだ、

加賀「なんとか逃げられましたね、」

逃げてばっかりだがな、

俺は雷にさっきの手帳を翻訳してもらおう、

提督の日記1、

1 ページ目

この鎮守府が襲われて数年、
妻である赤城は私を逃がすために死んだ、
艦娘たちの生存はないのはわかっている、
だがせめて思い出の鎮守府を奪還して欲しかった、
あそこの提督に依頼しても無視された、

2 ページ目

私は島に来た、
自分で奪還しようと思ったからだ、

島には化け物だらけだ、
持ってきた護身用の拳銃の弾薬が尽きた、
だがそのおかげで鎮守府に帰ってこられた、
鎮守府は植物で覆われている、

なんだこれは、

深海棲艦の姿はない、
何があつたんだ、

3 ページ目

地下の食料庫に向かった、

妻はよくそこに行つてつまみ食いをしていたからな、

だがそこには食料の代わりに巨大な植物の球根があつた、

なんだこれは、

私はそこを出ようとするやと突然声がかげられた、

懐かしい声、

妻の声だ、

生きていたのか、

私は辺りを探つた、

何度も声が聞こえる、

もしかしてこの球根なのか？

私はこの球根を妻として見るようになった、

4 ページ目

5 ページ目

今日も赤城に食事を持っていかないよ、
もう離れない、

今まで戦ってきた彼女のために今度は私が戦う、

(日記の後半が破れている)

青葉「地下の食料庫に球根？」

加賀「それに注射をすれば植物は枯れるのでは？」

可能性はある、

だがまずその溶液を探さないといけない、

俺らは移動を始めた、

報告書には艦娘の部屋に置いたと書いてあったがどこかわからない、

途中何体かゾンビに出会ったが加賀達が撃って倒した、

すぐに成長したな、

響なんかゾンビの額に的確に撃ち抜いている、

恐ろしい、

暁と雷は波動拳で吹き飛ばしている、

流星に近寄りたくないからな、

それにしても妻か、

依頼人はその子供か？

通れないところを除いて部屋をしらみつぶしに探して行くところある部屋で見つけた、

漢字は読めないが暁はアマツカゼと言っていた、

俺はその部屋を見て廻る、

溶液以外には空ビンと注射器、

それと斧、

俺は注射器とビンの中に薬液を入れた、

斧は念のために持っていく、

セバスチャン「暁、通訳を頼む、」

暁は頷く、

セバスチャン「みんな聞いてくれ！」

俺の声に全員が俺を見る、

セバスチャン「いつまでも逃げていても拉致があかない、ここで反撃をしようと思
う、」

青葉「反撃？」

セバスチャン「ここにある薬液をさつき言っていたコブや球根に注入しようと思う、」

加賀「場所はわかるのですか？」

セバスチャン「加賀の艦載機で場所は探れないか？」

加賀「狭いですがやれなくはないかと、」

セバスチャン「すまないが壊れた壁の穴をぐり抜けてどんな感じか見てくれるか？」

俺の言葉に加賀は頷き艦載機を飛ばした、

セバスチャン「次は出口を探す、周りが奴らに囲まれているが必ずどこかに脱出できる場所がある、」

長門「具体的にはどこから出るつもりだ？」

セバスチャン「この鎮守府は珍しく海側ではなく森の中にある、囲まれていると言ってもおそらく俺らが入ってきた正面玄関あたりだ、裏口があるはず、」

青葉「そこから逃げるのですか？」

セバスチャン「そうだ、だが報告書に書いてあったが植物に意思がある、必ず妨害してくる、」

雷「だから植物を枯らすのですね、」

セバスチャン「それしか方法がないからな、」

加賀「わかりました、屋上にコブのようなものがありました、他には2階の艦娘の部

屋に1つ、それ以外は何もありませんでした。」

いい情報だ、

セバスチャン「まずは屋上に向かう、その後艦娘の部屋に行つて最後に地下だ、」

響「異論はないけどなんで枯らすの？」

セバスチャン「枯らせばいろいろな場所に行けるようになるからだ、邪魔なものを枯らしていく、」

響「わかった、」

セバスチャン「扉を開けると行動開始だ、今のうちに休んでおくんだ、」

俺はその間に注射器を探す、

割れている奴があるがもう1本見つけた、

合計2本、

なんとかなるのか？

不安しかないがやるしかない、

セバスチャン「全員準備はいいか？」

皆が頷く、

セバスチャン「加賀、案内を頼む、」

加賀「わかったわ、」

俺は扉に手をかけた、
さあ、

反撃だ！

俺は扉を開けた、

セバスチャンと出撃、反撃編

部屋を出た俺はすぐに周りを警戒した、

まずは屋上だな、

後ろに皆が付いてくる、

いっどこで奴らがくるかわからない、

加賀の指示に従いながら進む俺たち、

途中ゾンビが襲ってくるが響が的確に射撃をして倒して行く、

俺よりか上手くないか？

薦を登って行きたどり着いた屋上への梯子、

長門「あの異質な植物はなんだ？」

長門の見る先には確かに異質な植物があつた、

壺のような形の植物、

そこからたまに花粉を飛ばしている、

正直あの花粉をもろに食いたくない、

俺は溶液の入った瓶を植物に向かって思いつきり投げる、

瓶は植物にあたり割れて中の溶液が飛び散り植物が一気に枯れた、効果てきめんだな、

俺らは屋上に向かった、

屋上には巨大な植物があり周りには巨大な蜂が飛んでいる、

クリスとジルの記憶に出てきたワスプと言うB・O・W、

刺されると毒になると言われている、

俺はリボルバーで撃つも当たらない、

大きくてもカラスくらいだ、

簡単には当たらない、

そう思っていると加賀がいとも簡単にハンドガンで撃ち落として行く、

加賀「目はいい方なので、」

やっぱり俺より上手くないか？

俺は巨大な植物を見て回る、

資料にあったコブを見つげるために、

その時、

「そこの人！」

いきなり聞こえてくる俺の母国語、
英語、

しかも男の声、

俺らは周りを見渡す、

「コンッだー！」

俺はある一角に目を向ける、

瓦礫というか植物と瓦礫の隙間に隠れている男がいた、

俺よりか年上か、

ヒゲが少し伸びている、

「コンッに隠れていたら植物が俺を押しつぶそうとしてきた、助けてくれ！」

助けないわけがない、

俺は急いでコブを見つける、

そして見つけて注射を打つ、

すんなり入った、

資料通り柔らかかったようだ、

すると植物がすぐに枯れた、

即効性がすごすぎる、

俺は急いで男の元に向かおうとしたが暁と雷が助け出していた、

「ありがたい、携帯食料も尽きて絶望的だったんだ、」

セバスチャン「あんた誰だ？」

「俺はカーター、ジャーナリストだ、先に言っておくがここに来た目的はこの廃れた鎮守府に違法薬物を運び込んだという情報が来てやってきた、そちらはこの鎮守府の提督というわけではなさそうだね、」

セバスチャン「俺はセバスチャン、ここの提督の家族の依頼で行方不明の提督の痕跡を見つけにきた、そしたらこのごまき、」

カーター「海から来たのか？」

セバスチャン「海しかないだろ？」

何へんなこと聞いているんだ？

カーター「俺は小型ヘリで来た、かなり離れたところにヘリポートがある、海には凶暴な深海棲艦がいて危険だからな、それに違法薬物もおそらく空のルートで来たはずだ、そうじゃないと今頃海もこの鎮守府のようなことになっている、」

流石ジャーナリスト、

鋭い感を持つている、

だが、

「セバスチャン「おそろくだが海でも一度は来ている筈だ、俺らは海から来たが鯨の化け物に襲われてこつちに避難した、巨大で凶暴性の鯨だ、」

カーター「まさか！海で深海棲艦に襲われて薬物が流れ出たのか!？」

セバスチャン「俺も元刑事だからな、そう言った推理は好きだ、」

長門「セバスチャン、同じ国の奴と会えて嬉しいのはわかるが次に行かないか？」

長門の言葉に俺は苦笑いをする、

その時、

床が崩れた、

俺たちは下の階に落ちた、

落ちる最中に考えたことは実にくだらない、

あの植物が老朽化した鎮守府を支えていたのか、

落ちた俺は周りを見渡す、

下の艦娘の個室に来たようだ、

俺は艦娘達とカーターを確認、

長門「くっ！」

長門が足を押さえている、

俺は長門に近寄る、

足を骨折している、

俺は急いでそこらへんの棒を探して俺の服を破いて応急処置を行う、

セバスチャン「これでいい、」

長門「あ、ありがとう、」

珍しいものを見た、

他には響が腕を骨折、

同じく応急処置をする、

雷「セバスチャンさん、何人かどこかで待機した方が、」

雷の言う通りだ、

だがどこが安全なのかわからない、

俺は響からハンドガンを返してもらいカーターに渡す、

セバスチャン「銃の腕前は？」

カーター「射撃したことがある程度だ、」

カーターは素晴らしいハンドガンを受け取る、

俺は長門に肩を貸して歩く、

セバスチャン「援護は頼んだ、」

暁とカーターにそう言うのと頷く、

そして歩き出す、

疲労の顔も見えて来た頃に最後のコブが見えた、

それとついでに裏口もあった、

まさか艦娘の部屋に裏口なんて有ると思わない、

俺はコブに注射を打つ、

そして枯れる、

これで最後だ、

その時、

奴が現れた、

俺はマグナムを構えて撃つ、

周りも撃ちまくる、

久しぶりの登場だからって気合い入りすぎだろ！

だがすぐに退場させてやる！

マグナムを撃ちまくると奴は元来た扉から出て行った、

セバスチャン「長門と響をここに待機させる、暁と加賀も残っていてくれ、
カーター「そうですね、悪く言えば人が足手まといですから、」

カーター、

ザックリ言うな、

俺とカーター、

雷と青葉の4人、

このメンバーが地下に向かうメンバー、

俺らは向かおうとしたら、

長門「セバスチャン！」

長門が俺を呼び止める、

俺は長門の方を見る、

長門「セバスチャン、私はお前に酷いことを言った、足手まといと、だが現実には私が

足手まといだ、すまなかった、」

あの長門が謝罪した、

それだけ悔しいのだろう、

ここでは無力な自分が、

セバスチャン「気にするな、昔の俺も無力な男だった、」

STEMに囚われた挙句に火事の際は娘も助けられなかった、俺はそう言い残して地下に向かう、

地下は狭い、

ゾンビもいたが難なく倒せた、

そして、

雷「食料庫はここです、」

雷の言葉に俺は食料庫の扉に手をかけて開けようとしたが開かない、

青葉「最後の最後の鍵ですか！」

青葉の怒りは確かだ、

ここまで来て鍵が必要、

正直俺もイライラする、

フラググレネードで壊すか、

そう思ったら思い出した、

執務室で見つけた鍵、

俺は鍵を取り出して鍵穴に差し込む、

見事一致した、

セバスチャン「愛した人を守るために鍵をかけたのか？」

雷「そうかもしれないですね、」

雷と同じ意見になったところで、

セバスチャン「中にはこの親玉がいる筈だ、準備はいいな？」

カーター「大丈夫です、」

青葉「いけます、」

雷「行こう！セバスチャンさん！」

全員の意見は一致したな、

俺は扉を開けた、

VSヒュージプラント、アクスマン、

扉を開けると待ち受けていたのは無数の植物の蔦と巨大な球根のような物、

これが親玉か、

こんな小さな部屋に巨大な球根があるとはな、

青葉「これが植物の親玉、」

青葉がカメラのシャッターをきる、

だが、

天井からの植物が青葉を襲う、

青葉「ううー！」

吸盤のような植物に青葉が吊り上がる、

セバスチャン「青葉！」

俺は青葉を助けるべく蔦にリボルバーを撃つ、

蔦から液体が出て引っ込めた、

青葉「ゲホゲホッ！ありがとうございます！」

俺は溶液入りの瓶を球根に投げる、

だがあまり効果がないようだ、

カーター「セバスチャン！あの裂け目を攻撃しましょう！」

カーターの指差す方向には何やらブツブツしている物が出ている、

球根も硬い皮に覆われているのか、

だが弱点はあれだな、

俺はもう1つの瓶を投げた、

命中して鎮守府は揺れる、

効いている！

流石に1回じゃ枯れないか、

だが瓦礫が降ってくる、

セバスチャン「ぐっ！」

瓦礫が俺の当たる、

青葉「さっきのお返し！」

青葉が撃つ、

銃撃も効くようだ、

雷が波動拳を放つ、

これも効くのか！

カーターは鳶を撃ってこちらに向かないようにしている、

俺は最後の1ビンを球根に投げた、

流石にこれで倒せないのはわかってる、

俺はダブルバレルショットガンを構えて撃つ、

2連射のうえー1回撃つごとに弾を込めないといけないがここでは関係ない、

撃ちまくれる、

着実にダメージを与えている筈、

瓦礫が俺の体に当たって痛い、

よく見ると青葉と雷の衣装がボロボロになっている、

瓦礫のダメージが目に見える、

それでも撃ちまくる、

生きて帰るために、

リリーに会うために！

そして、

周りの植物と球根が一気に枯れた、

雷「やったー！」

カーター「やりました！」

青葉「なんとかかなりました、」
皆がそれぞれ気を緩める、

球根の裂け目から何か出てきた、

酷い異臭とともに、

死体、

ほぼ皮と骨だけだが、

ボロボロだが加賀のような袴をつけている、

弓と指には指輪が嵌めてある、

どこかで見たことがある、

どこだったか、

死体を見ているとその横に何かある、

手帳か？

球根がインパクト強すぎて気がつかなかった、

俺はそれを拾うと上から瓦礫が落ちてきた、

やばい！

植物が枯れたから一気に崩れてきた、

セバスチャン「みんな！急いで戻るんだ！」

俺は叫び死体が持っていたボロボロの弓を取る、

指輪は取りたくない、

恨まれそうだ、

俺たちは走った、

目指すは裏口、

そこにいるメンバーと合流のち脱出、

瓦礫が当たり痛い、

そう考えていると奴の声がした、

どうやら俺らを出さないつもりようだ、

俺は止まる、

雷「セバスチャンさん!？」

セバスチャン「雷、先に行つてろ、俺にはやることがある、」

カーター「セバスチャン・・・わかりました、」

雷「絶対に戻ってきてください!」

そう言つて皆は走っていく、

俺は斧を取り出す、

一度こういったタイマンに憧れていたな、

奴が見えた、

ここは一直線の廊下、

俺の後ろは雷達がいる、

セバスチャン「さあ来い！」

奴が走ってくる、

やはりご丁寧に斧を振り上げながら、

俺は斧を構える、

俺と奴との距離が詰まっていき、

奴が俺に斧を振り下ろした、

避けやすい！

俺は横に避けて奴の脇腹に斧を突き立てる、

肉を裂く感触が気持ち悪い、

まあSTEMで何回も奴らの頭に斧を突き立てたか、

奴が斧を水平に振る、

俺は斧の柄で奴の斧の柄を押さえて受け止める、

力の差は向こうが上か、

俺はしゃがみこみ奴の斧を躲す、

奴の斧が廊下の壁に当たる、

俺は再び腹に斧を入れる、

奴が呻き声を上げて仰け反る、

俺は更に畳み掛ける、

斧をがむしやりに振り奴の体に斧を食い込ませる、

どれだけ振ったかわからないそれでも奴は倒れない、

やつぱこういつたタイマンはクリスの方がお似合いだな、

覆面レスラーVSクリス、

クリスなら拳で相手しそうだ、

本人に言ったら怒られるな、

俺は息を整えるために一旦距離を置く、

やはり死なないか、

だが奴も息を乱している、

俺は更に畳みかけようとしたが奴は斧を投げ捨ててどこかに去っていった、

どうやら俺は勝ったようだ、

呆気ないが、

俺は急いで裏口に走った、

走り脱出するセバスチャン、

その頃地下の食料庫では、

黒い覆面を持った1人の中年男性がいた、

その男が死体を見ると、

「赤城、ここにいたのか、」

愛しい、

自分のパートナーの名前を言った、

男が死体に近づき死体の横でしゃがみこみ、

「もう離さないよ、一緒に約束を果たそう、」

死体を抱きしめた、

はい、提督、一緒にあの広い空の海を飛びましょう、

天井が崩れて男と死体は潰された、

鎮守府は老朽化と屋上の巨大な花の重みで崩れた、
砂埃が全てを隠すように舞い上がる、

森を歩くセバスチャン達、

セバスチャン「あの鎮守府は役目を終えたかのように壊れていった、今ではあの覆面が提督なのかわからない、もしかしたらそうじゃないかもしれない、今あるのはボロボ

口の弓と手帳だけだ、それだけで推理するのは元刑事でもできない、全ての証拠はあの瓦礫の中だ、」

通信機がなる、

セバスチャン「おっとクリスからだな、どうやら向こうは終わったようだ、これで帰れる、それにしてもカーターはどこに行った？雷に貸したハンドガンを返してから見えないと言ってたな、いずれまた会えるか、」

セバスチャン達は海岸に向けて歩き出した、

カーター「死んだはずの俺がなぜここで生きているかわからない、その答えを求めて19年、俺のトラウマに近いこの鎮守府、まるで巡り合わせのように出てきた、俺は真実を見つけて伝えるだけしかできない、それが俺の最大の武器だ、」

カーターは写真を見て、

カーター「トライセル、この会社が関与していることに間違いない、」

写真をしまいハリポートに歩くカーター、

カーター「セバスチャン、また会えるといいな、」

提督の日記2

6 ページ目

今日も1人島にやってきた、
そいつの頭を斧で割り殺す、
赤城が美味しそうに食べた、
その光景を見るだけで幸せだ、

7 ページ目

若いカツプルがやってきた、
どうやら駆け落ちでこの島に来たようだ、
テントを張って昼間から盛っていた、
テントの外から斧で殺す、

女性は悲鳴をあげた、

うるさいから喉に斧を突き立てた、

赤城以外の裸を見ても何とも思わない、

8 ページ目

今回は3人、

鎮守府まで来ていた、

どうやら植物が珍しいとのことだ、

斧で1人を殺すともう1人が猟銃を撃ってきた、

不思議と痛みを感じない、

それどころかピンピンしている、

どうやら化け物になったようだ、

だが好都合、

これで赤城を守れる、

猟銃を壊して2人目も殺す、

もう1人はどこかな？

9 ページ目

あれから餌が来なくなった、

赤城が悲しんでいる、

どうした赤城、

どこか痛いのかい？

お腹が空いているのかい？

私かなんとかするから悲しまないでくれ、

10ページ目
久しぶりの獲物だ、

セバスチャンと出撃の裏では、

セバスチャンから通信が入った、

サメ型のB・O・W、

洋館のあいつか、

それが複数、

水中水上では奴の方が強い、

だが迷ってはられない、

俺は急いで大淀の所に向かう、

大淀は部屋にいた、

ノックを行い事情を説明する、

理解が早くて助かる、

すぐに放送をかけて工房に艦娘を来てもらう、

ジルとリリー達も来たか、

ジル「大淀から聞いたわ、海で鮫型のB・O・Wが出たって、」

クリス「セバスチャンからの情報だ、深海棲艦はそいつらで全滅、セバスチャンは近

場の島に逃げ込んだ、俺たちは鮫型のB・O・Wを殲滅しに行く、

艦娘達が息を呑む、

クリス「事前に確認されている情報は鮫型と言うだけだ、俺の知っている奴なら脅威なのは海中からの奇襲、そして機動力、それらが1番の脅威だ、」

吹雪「機動力なら駆逐艦の私達も負けていません！」

クリス「そんな単純じゃない、奴が少数の群れならいいがセバスチャン達が逃げるほどだ、かなりの数だと考えていいだろう、機動力が良くても四方から襲われたり海の底から来られたら意味がない、」

龍驤「絶望的やな、どうすればええんや？」

クリス「空爆を行う、そのため龍驤と飛龍は申し訳ないが絶対参加だ、」

龍驤「加賀さんもないから戦力不足やな、」

飛龍「はい、少し不安です、」

クリス「俺とジルも出る、ここからは人数に関係なく出撃する、だが何人かはこの鎮守府に残ってもらう、その際の指揮はロドリゴに頼むつもりだ、」

霧島「私は行きます、」

霧島が名乗りあげる、

プリンツ「私も！セバスチャンさんを助けたいです！」

ビスマルク「私も手伝うわ、」

吹雪「私も行きます！」

吹雪からは誰も名乗り上げなかった、

俺は準備をと言おうとしたら、

リリー「クリスさん！」

リリーが声を上げた、

リリー「私に建造をさせてください！」

建造、

なぜ今なんだ？

クリス「なぜ今なんだ？」

リリー「私が行ってもパパを助けることができません、でもパパを助けたいの、だからお願いします！」

頭を下げるリリー、

子供っぽくないな、

こんな経験が成長させているのか？

それにセバスチャンに助けられているからな、

だから役に立ちたい、

そう思っているのだろう、

クリス「リリー、頭を上げてくれ、それに建造をしてくれて構わない、お前の気持ちはセバスチャンも嬉しいはずだ、プリンツ、ビスマルク、リリーの建造を手伝ってやれ、」
俺がそう言うのとリリーは嬉しそうに走って行った、

プリンツとビスマルクはリリーの後に続いた、

ジル「いい子ね、」

クリス「そうだな、俺達も準備をするぞ、」

俺らは準備に取り掛かった、

ロドリゴ「ここは任せろ、」

クリス「頼んだ、」

ロドリゴとはこれだけで会話が終わる、

信頼しているからな、

持つていくものは電撃グレネードとパルスグレネード、

それとハイドラでいいだろう、

ジルはグレネードランチャーを持つていくようだ、

弾は電撃と冷凍、

炸裂の3つらしい、

準備をしていると建造しているカプセルから何やらどよめきが聞こえる、

どうやら毎回のアレのようだ、

俺とジルはそちらに向かう、

リリーが両手で力一杯カプセルを開けているところのようだ、

中には、

「初めまして、レキシントン級2番艦のサラトガです、」

ジル「アメリカの空母ね、そして1番欲しかった爆撃要員ね、」

ジルがリリーの頭を撫でる、

俺も軍にいた時にこいつの空母の時の写真を何回か見たな、

都合よく行くものだな、

リリー「サラトガさん！パパを助けてください！」

リリーが頭を下げる、

少女に頭を下げられて戸惑うサラトガ、

プリンツ「サラトガさん！緊急事態です！手伝ってください！」

サラトガ「プリンツさんまで！」

ビスマルク「私らのアドミラルのお父様が危険なの、手伝って、」

サラトガ「わかりました、敵はどこあたりにいますか？」

クリス「凶暴な鯨が数体、深海棲艦すらも喰い散らかすほどのな、」

サラトガ「深海棲艦も食べる鯨ですか!？」

海を支配している深海棲艦が鯨に喰われて死ぬというのは衝撃なのか、
クリス「そう言うわけだ、準備を頼む、」

サラトガ「はい、」

サラトガが準備に入った、

今思うと、

リリーの建造で出てくる艦娘は全員海外艦の上胸が大きい、

母親を求めているのか？

セバスチャンに相談するか、

セバスチャンから通信が入った、

島に着いたが植物を頭に乗せたゾンビがいたとのこと、

プラント42を思い出す、

その発展系か？

それにゾンビということはT―ウイルスかC―ウイルスのようだな、

もしかしたらアークレイ山でウイルスが独自に進化した可能性もある、

俺の知らないゾンビか、

今度調査をするか、

出撃準備ができた、

クリス「霧島、龍驤、飛龍、吹雪、プリンツ、ビスマルク、サラトガ、相手は深海棲艦ではない、真正正銘の化け物だ、全弾撃ち尽くす勢いで戦いに向かうんだ、サラトガ、いきなりの実戦ですまない、」

サラトガ「大丈夫です、それにリリーさんのお父様を助けるためなので頑張れます、心強い、」

ジル「私とクリス、吹雪ちゃんと霧島とプリンツちゃんとビスマルクは前線で弾幕を張るわ、空母組はその隙に爆撃をお願い、」

プリンツ「わかりました！まともに出撃するのは初めてですけど頑張ります！」

そういえばタイラント戦とステイプの所の防衛戦しかしていなかったな、

ビスマルク「私なんていきなりあんな怪物に主砲を撃つたのよ、
ビスマルクも何やら鬱憤が溜まっているようだ、

今度から出撃をたまにするか、

サラトガ「お2人も出撃するのですか？」

クリス「これが俺らの仕事だな、」

俺は海に足を降ろす、

久しぶりに海に出たな、

俺は後ろを見ると皆が海に出ていた、

クリス「これより目的の場所に向かう、」

全員が頷いた、

俺達は移動した、

目的の場所までもう少しだ、

クリス「もう少しで目的の海域だ、各自装備の確認を行ってくれ、」

俺はハイドラに確認を行う、

無限に撃てるが過信は禁物だ、

ジル「クリス、相手は水中にいるわ、パルスと電撃をうまく使わないとこちらがやられるわ、」

クリス「わかっている、今回の俺はヒットアンドアウェイに専念する、」

ジル「私は一緒に砲撃に専念するわ、」

クリス「頼んだ、」

俺はハイドラを構えながら近く、

そして、

出てきた、

俺はハイドラを連射する、

遠いからあまり有効打ではない、

俺の発砲を合図に霧島達が主砲を撃つ、

ネプチューン、

洋館で出てきた鮫型にB・O・W、

俺はハイドラを更に連射する、

ネプチューンが一体死んだようで浮かんできた、

だがまだ無数にいる、

そんな時上空からプロペラ音が聞こえてきた、

空母組の艦載機のような、

俺は一度下がる、

爆撃により海が揺れる、

数体のネプチューンの死体が浮かぶ、

だがまだいる、

一体何体の鯨がウイルスに感染したんだ、

それとも養殖していたのか？

吹雪が前に出て魚雷を発射した、

だがその魚雷を避けるネプチューン、

学習したのか!?

霧島の主砲も簡単に避けていく、

知性を持っていると厄介だ、

俺はパルスを投げた、

ネプチューンはそれを避けようとしたが衝撃波がネプチューンを襲う、

衝撃波の影響でその場でグロッキー状態になるネプチューン達、

その隙にジルが冷凍弾を撃つ、

ネプチューンが凍る、

その瞬間に吹雪の魚雷が凍ったネプチューンにあたり砕け散る、

大体の数が減ったようだ、

流石にあの数のネプチューンは見たことがない、

その時俺の脚に激痛が走り海に引きずり込まれる、

こんなときに！

俺は噛み付いている奴を見た、

ネプチューンじゃない！

新手的B・O・Wか！

かなり大きい、

幸い噛まれていたものこのいつの歯は一部ない、

虫歯か、

助かった、

どうする、

パルスをこいつの口に放り込むか？

そう思っていると背びれに誰かいた、

霧島!?

何をやってている！

霧島がこつちにゆつくりと身体を伝ってきている、

俺は奴の目にナイフを突き立てる、

奴が暴れる、

霧島が片手を離してしまふ、

だが俺の足は口が開いたことにより抜け出せた、

霧島の手を掴んで手繰り寄せる、

だが息が続かない、

俺はパルスを奴の鱗の隙間に挟み海面に上昇する、

意外と深いな、

そう思っていると奴が上がってきた、

俺はパルスを投げる、

奴はパルスの衝撃波が届かないくらいの距離を取り近寄ってくる、

だが、

霧島が魚雷を放ち奴に当たる、

奴は怯み一旦逃げ、

その間に海面に出る、

海面に出て息を整える、

クリス「霧島、危険なことはやめろ、」

霧島「クリスが危ないと思つたから、」

クリス「気持ちはわかるがお前まで死んだらいけないだろう、
気持ちは嬉しいが、

海面に立つと周りは終わっていた、

奴は逃げて行つたのか、

俺はセバスチャンに連絡を入れた、

セバスチャン救出後、

艦娘の部屋でPCを起動している子がいた、

「これでよし、」

艦娘はPCの電源を切ると横に刺さっているUSBを抜いた、

「衣笠、あなたを助けるから、」

U
S
B
を
懐
に
仕
舞
っ
て
青
葉
は
決
意
す
る、

●説明するP

如月達を拾った翌日、

俺はまた森に入った、

ほっぽぼは俺に付いてきている、

今回は木の枝などを集める、

役に立たないものだと思うが罨を作るときなど役に立つ、

そしてもう一つ目的がある、

人工物の発見、

木を切りたいがナイフじゃ切れない、

斧かノコギリ、

最悪石器時代並みに戻って石の斧を自作するしかない、

俺は木の枝を集めたり切りながら進む、

入れ物は洞窟で金剛が気を失っている時に被せられていた布、

鳶も役に立つ、

弓が作れる、

小石は土台になったり粘土で固めると簡易的なカマドができる、しかし、

なぜグリーンハープとかレッドハープとかあるんだ？

思わず拾ってしまった、

ついでに種も見つけてしまった、

まあ回復手段だ、

傷を負ったらまた使用する、

ほっぽは一生懸命俺の手伝いをしている、

さて、

結構奥まで進んだが人工物が見つからない、

布の容量も限界になってきたな、

一度戻るか？

そう考えていると、

ほっぽ「ピアーズ！」

ほっぽの呼ぶ声が聞こえた、

ほっぽ「あそこ！」

ほっぽが指差している、

俺はその方向を見ると微かだが建物の壁が見える、人工物だな、

ピアーズ「でかした、ほっぽ、」

俺はほっぽの頭を撫でる、

嬉しそうな顔をするほっぽ、

俺らは壁の方に向かう、

結論から言うとボロボロの建物だ、

補強すれば住めるだろうが時間がかかる、

だがまずは道具を探す、

俺は荷物を置いて建物の中に入る、

ほっぽは俺の後ろについて来る、

中は所々穴が開いていて太陽の光が射し込んでいる、

ライトは要らないな、

そう思っていると、

キシャーシューシュー、

何か嫌な声が聞こえた、

虫のような鳴き声、

俺はMP―AFを構える、

ピアーズ「ほっぼ、俺から離れるな、」

ほっぼは俺の服を握りしめる、

ゆつくりと歩く俺ら、

所々から何かが速く走る音が聞こえる、

その度にほっぼが震える、

そして、

奴が姿を現した、

ハサミムシのが人間くらいの大きさになっている、

こいつが声の正体か、

俺はMP―AFを撃つ、

ハサミムシに全弾命中して倒れる、

だが、

ほっぼ「ピアーズ！後ろ！」

ほっぼの声に俺は振り返る、

そこには2体、

俺は撃つ、

1体は倒せたが1体は俺に飛びかかる、

俺は銃で防ごうとしたら、

ほっほ「ピアーズはやらせない！」

ハサミムシが吹き飛んだ、

俺はほっほを見るとほっほは丸い何かを宙に浮かせている、

なんだあれは？

ほっほは丸い何かに指示を出したのか丸い何かハサミムシに飛んで行って体当た

りしている、

ハサミムシは起き上がれない状態になっている、

その隙に俺は撃って倒す、

ピアーズ「助かった、ありがとう、ほっほ、」

ほっほ「ピアーズ！守る！」

ピアーズ「なら背中を頼んだ、」

ほっほ「うん！」

頼もしい、

子供と思っていたらダメだな、俺らは奥に進んだ、

どうやらここはこのハサミムシの住処のようだ、海まで来なかったのは何故だ？

潮が嫌いなわけではないはずだが、

そう思いながら進むと原因はわかった、

奥に奴らの巣があった、

中には卵、

潰すか、

俺はアサルトショットガンに持ち替えてリモコン爆弾を腰につける、

ピアーズ「ほっぼ、危ないから戻っている、」

ほっぼ「私も戦う！」

やる気のある目だな、

ピアーズ「わかった、俺があいつらに攻撃するからほっぼはこいつを隙を見て置いて来てほしい、」

俺はリモコン爆弾を数個ほっぼに渡す、

ピアーズ「俺が合図したら走って置いて来てくれ、場所はあの卵みたいな所だ、」

ほっぼ「うん！」

ほっぼが頷いたと同時に俺は動いた、

シヨットガンを連射しながら走る、

奴らは俺に気付いて入ってくる、

動きは単調だな、

音と視界で判別するようだな、

俺はほっぼと距離を開けて奴を引き離す、

ピアーズ「今だ！ほっぼ！」

俺がそう叫ぶとほっぼが飛び出して走り出す、

奴らがほっぼに気がつくが俺がそっちに向かわせない、

右腕を変形させた、

何回か変形させてわかったんだが身体能力が上がっている、

なぜか性欲も・・・

いらなかった、

俺は奴の1体に腕を突き刺して電撃を流す、

その間に動いて他の奴の所に向かう、

ほっぼは1個ずつ設置している、

まだだ、

俺は電撃を放ち他の奴を痺れさせる、

爆弾に漏電するなよ、

その隙にショットガンを発射、

数を減らすが無があるせいかまだ出てくる、

ほっぼ「ピアーズ！出来たよ！」

ほっぼの合図で俺は叫ぶ、

ピアーズ「ほっぼ！走って逃げるぞ！」

ほっぼ「うん！」

俺らは走った、

奴らがやってくる、

建物の外に出ると俺は爆弾のスイッチを押した、

建物の一角から爆発音が轟く、

追いかけて来た奴らは爆発音の方を見る、

その隙にショットガンを撃つ、

これで奴らは繁殖はしないだろう、

ほっぼ「やったね！」

ほっぼが喜んでゐる、

そして俺に近づいてきて手を挙げてきた、

俺は同じように手を挙げるとほっぼがハイタッチしてきた、

再び中を調べる俺ら、

目的のノコギリや工具が見つかった、

そしてよくわからない物まで、

ほっぼ曰く艦娘の艦装だそうだが壊れている、

一応は持つていくか、

ついでにこいつの死体もだ、

金剛と港湾棲姫に聞いて見るか、

俺らは入り口に置いてある荷物を持つて戻った、

洞窟に着いた俺とほつぽ、

金剛「おかえりデース、」

港湾「何か見つかりましたか？」

出迎えてくれた金剛と港湾棲姫、

俺は荷物を持ってきて、

ピアーズ「欲しい物は見つかった、開拓は出来そうだ、」

ノコギリなどの工具を見せる、

ピアーズ「あいつらはまだ目が覚めないのか？」

金剛「そうデースね、まだデース、」

ピアーズ「まあ急いでいるわけではない、ゆっくりと待つが狸寝入りはいただけいな、」

俺は如月と呼ばれた少女を見て言う、

港湾「えっ？」

全員が如月に視線を向ける、

如月「気付いていたんですね、」

金剛たちが驚く、

ピアーズ「寝ている奴とは思えない反応が何回かあったからな、狸寝入りは素人に使

うんだな、」

如月は体を起こす、

如月「助けていただいてありがとうございます、とうございませす、睦月型2番艦の如月です、」

金剛「気がついていたのデスカ!？」

如月「今朝に一度目を覚ましませす、はじめは金剛さんと港湾棲姫が会話しているの
で警戒しましたがどうやらその心配は無いと思ひませす、」

ピアーズ「少なくともここでは敵対はしてひない、変に警戒すると疲れるだけだ、」

如月「そうですね、あなたは外国人なのに日本語上手ですな、」

ピアーズ「前の職で世界各地に行つたことがあるからな、その時に日本も訪れた、」

如月「だからですか、」

そんな会話をしてひると突然腹の虫がなつた、

まあ言わずとながら如月だ、

顔を赤くした、

港湾「何か作ります、と言つても木の実とお魚とお肉しかありませせんが、」

如月「うう、お魚でお願ひします、」

港湾棲姫は笑顔で準備に入つた、

如月が焼き魚を食べ終える頃に卯月と呼ばれる艦娘と明石と呼ばれる艦娘が匂いに
つられて起きたようだ、

卯月「睦月型4番艦の卯月だぴよん、」

ぴよん？

如月「卯月の口癖みたいなものですよ、」

卯月つて漢字でうさぎに月だからか？

明石「工作艦の明石です、」

ピアーズ「工作艦、何か作れるのか？」

明石「基本は修理ですが創作も出来ますよ、」

頼もしい、

開拓に必要な人材だな、

さて、

自己紹介は終わった所だ、

本題の入るか、

ピアーズ「お前たちは何と戦って重傷を負ったんだ？お前達以外は全員死んでいた、
辛いと思うが何があった？」

そう聞くと3人は暗い顔をする、

早すぎたか？

そう思ったら、

明石「私達はある海域で深海棲艦と戦っていました、私と如月さんと卯月さん、他には天龍さんや武蔵さん、瑞鶴さんなど2艦隊いました、私達の善戦でした、しかし、」

明石はそこで言葉を止める、

明石「海から巨大な化け物が出てきました、ウネウネしていて半透明で、」

ハオスカ！

逃したのが仇となった！

明石「私達は応戦しました、はじめは新たな深海棲艦と思いましたが、さすが化け物は深海棲艦を襲い殺していました、」

あいつは動く奴全員のとして見るからな、

明石「私達の攻撃は何一つ効いていませんでした、主砲も、雷撃も、爆撃も、そして1人ずつ化け物に殺されていきました、私達も死んだと思いましたがこうやって生きていました、」

それがことの顛末か、

まさか逃したツケがここで来るとは思わなかった、

港湾「ピアーズ、もしかして、」

ピアーズ「そうだな、俺とお前があつたときに出会つたあいつだ、まさかそんな被害になつてゐるとはな、」

卯月「知つてゐるぴよん？」

ピアーズ「そうだな、俺が海底油田で共に心中した奴だ、」

港湾棲姫とほっぽ以外の全員が驚く、

ピアーズ「先に俺のことを説明しておく、俺はこの世界の人間では無い、俺は奴と共に死んだはずだ、だが数日前に俺はこの島で目が覚めた、」

金剛「ピアーズ、死んでいたのデスカ!？」

ピアーズ「そうだ、奴の名前はハオス、生物兵器だ、攻撃されて傷を負うとサナギになり傷を無くす、脱皮みたいなものだ、」

明石「虫ですね、」

ピアーズ「そしてアイツは海に解き放たれると数時間で全世界の海がアイツのウイルスで広がる、」

如月「だったら早く倒さないと！」

ピアーズ「どこにいる？この広い海をどうやって探せばいいんだ？」

如月が言葉を詰まらせる、

ピアーズ「それに海は奴にとって庭だ、今回は前と違って陸地がない、海では俺は無
力だ、」

たまたま油田だったから戦えた、

だが今回は陸地のない海、

俺が一方的に死ぬだけだ、

卯月「前ははどうやって倒したんだびよん？」

見せるか、

俺は右腕に力を入れる、

金剛「キヤツ!？」

明石「それは・・・」

如月「どういうことですか！」

卯月「おおくカツコいいびよん！」

若干1名変な反応なんだが、

ピアーズ「右腕が千切れてな、俺は隊長を助けるために自分自身にウイルスを入れて

こうなった、」

右腕に電流が流れる、

卯月「おおく！びりびりだびよん！」

卯月が俺の腕を触っている、

ピアーズ「怖くないのか？」

卯月「なんでびよん？ピアーズはピアーズだびよん！例えウイルスだろうが死んでい
るんであろうがピアーズはピアーズだびよん！」

金剛「そうデース！ピアーズがどんなになっても私達のピアーズデース！」
なんだ、

その私達のピアーズって？

港湾「ピアーズは私達のために今日まで頑張っています、そんなピアーズですから私
は好きですよ、」

ほっぼ「ほっぼもピアーズ、好き！」

それは仲間としてだよな？

金剛「港湾棲姫！なにどさくさに紛れて告白しているのデスカ！」

港湾「いったもの勝ちです！」

なんで喧嘩しているんだ、

如月「でも・・・ウイルスって感染するんですよ、」

ピアーズ「こつちに來てから金剛や港湾棲姫に変化はない、恐らくこんな変形能力だ
けそのまま俺の中にウイルスは残っていない、」

如月はホツとしている、

ピアーズ「明石、この開拓を手伝って欲しいが明石には艦装の修理を頼む、奴との決着は俺がつける、何年かかろうと、」

もし誰かが俺を呼んだのは奴との決着を着けさせるためなのだろうか、

だつたらその勤めを行うだけだ、

ピアーズ「みんな、手伝ってくれ、この開拓を、」

全員が頷いた、

俺たちはやつとスタート地点に立ったんだ、

頑張るリリー2

高雄「リリーちゃんは物覚えいいですね、」

お勉強している私は高雄さんに褒められました、

暁ちゃん達が帰ってからは響ちゃん達が私と一緒に修行しています、

そしたらみんながハドークーンを使えるようになりました、

次はシヨールキューケーンです、

でも霞ちゃんは私の事嫌いみたいです、

しよいがいいよね、

霞ちゃんにハシヨークゲキをしちやったもん、

でも諦めないもん！

絶対にお友達になるもん！

通信空手全部覚えちゃった、

どうしよう、

でも基礎訓練は大事だよね？

私は体を動かしていると、

「ふむ、どこかの流派のようだな、」

知らない人の声が聞こえた、

私はその声の方向を見ました、

おじさんでした、

誰だろう？

クリスさんのお知り合いかな？

金髪に黒いサングラス、

「これならどうだ？」

その言葉と同時におじさんは消えました！

私は咄嗟に横に避けました、

その瞬間私のいたところにおじさんがいました、

その手は私の心臓の位置にありました、

避けてなかったらきつと・・・

「すごいな、どうやら君の評価を変えないといけないようだな、」

おじさんは蹴つて来た、

私はしやがみこみハドーキーンを放つ、

おじさんは軽々と避けて更に殴り込んで来た、

それをハシヨーゲキで相殺しました、

「ほう？やるな、」

おじさんは私と距離を置いた、

「今日はこれくらいにしておこう、俺としてはここで君とやりあうために来たわけではない、」

おじさんは構えを解いた、

「クリスに伝言だ、舞鶴の鎮守府で面白いことがある、」

そう言っておじさんは飛んでどこかに消えていきました、

どうやって来たんだろう？

そう思いました、

でも強かったです、

私は手加減されていました、

次は絶対に勝ちます！

私はそう心に誓いました、

あの人がどうやって入って来たんだらう？

その事をクリスさんに伝えるとすごい顔をしていました、
ジルお姉さんは私を抱きしめてました、

そして身体を調べられました、

異常はないと言われましたが何のことでしょう？

私は高雄さんの授業の後もう一度シユギョーをしました、

あの人の動きは速すぎました！

あの手刀も人を簡単に突き刺せます、

ハシヨーゲキも相殺で終わりました、

あの人は強いです！

改善点はハドーキーンの発動の速さと弾速、

それとハドールの威力です！

早速練習です！

ハドールケーンは腕を突き出すまで出ない、

それまではハドールケーンではなくハシヨーゲキに近いのになります、

だったら予備動作なしで出せば発動の速さはすごく早くなると思う！

でも気が全然溜められないです、

威力が無いです！

課題はいっぱいです！

「あんた、負けたんだって？」

後ろから声をかけられました、

振り返ると霞ちゃんがいました、

霞「情けない顔しない！」

そう言われて背中を叩かれました、

リリー「霞ちゃん……」

霞「勘違いしないで、あなたは私のライバルなの、あの時負けたけど私は次は勝つん

だから！」

少し不器用です、

でも私を心配してくれていることがわかります、

リリー「うん！」

霞「それにしても日本語上手く話せるわね、」

リリー「高雄さんと愛宕さんのおかげです、」

霞「愛宕さんはともかく高雄さんなら間違い無いわね、」

そう言つて霞ちゃんは歩いていきました、

よし、

もつと強くなるぞ！

苦惱

リリーがウエスカーと遭遇した、

それだけで頭が痛いのに更に舞鶴で何か起きることを示唆して言った、

ジルが扉を開けた、

ジル「リリーちゃんは特に何かを打たれたといったことはないわ、」

それを聞いて安心した、

クリス「奴がこの世界に来ている、いずれは決着をつけないといけない、」

ジル「でもその前に舞鶴について調べないといけないわね、いまステイプの所にアイテムボックス経由で手紙を送ったわ、」

クリス「返事を待つしかないか、」

ジル「私はリリーちゃんがウエスカーにほぼ対等で渡り合えた事に驚いているわ、」

クリス「本人曰く手加減されたと言っていたが・・・」

ジル「恐るべし、通信空手、」

原因はお前だろ、

翌日、

見知らぬ妖精さんがいた、

ステイプの手紙を持っている、

クリス「もしかしてステイプの所の妖精さんか？」

妖精さんが頷く、

アイテムボックスの中に入ったのか・・・

前にリリーが言っていたことが現実になった、

俺は手紙を受け取り妖精さんを持ち上げて間宮の所に連れて行く、

何か甘い物を食わせるか、

俺はジルとセバスチャンと一緒に手紙を確認した、

舞鶴については少し黒い噂がある程度らしい、

提督は若い男性、

近くの街に来る艦娘も礼儀正しい、

ただ夜な夜なへんな光と不気味な悲鳴が聞こえるらしい、

周辺の地図を見せてもらったが、このことほぼ変わらない、

海のそばに鎮守府、

街に続く道、

それ以外は全部森、

この場合は森ではなく、田んぼだがな、

クリス「不気味な悲鳴……」

セバスチャン「光……クリス、俺に行かせてくれないか？」

ジル「ダメよ、昨日の今日で流石に疲れているはずだわ、今回は私とクリスで行くわ、」

俺らも出たんだが、

だがウエスカーがわざわざここに来たということ何かある、

奴にとって舞鶴は厄介なことで俺らに潰させる、

俺らが成功すれば舞鶴の方は潰れる、

失敗すれば俺らが消える、

あいつの戦闘力ははつきり言うが俺より上だ、

残った方を潰すことができる、

だがいずれは行かないといけない、

全く、

頭がいたい、

あいつの掌の上で踊らされているわけか、

ジル「クリス、明日出発するわよ、」

クリス「早くないか？」

ジル「何かあつてからじゃ遅いわよ、」

それもそうだが早すぎる、

だが俺が断ったらジルが一人で行くだろう、

クリス「わかった、今日中に準備をする、セバスチャン、俺らが離れている間ここを

任せた、」

セバスチャン「いいがおそらく出撃はしないでのんびり居させてもらう、」

そうしてくれ、

問題を起こさないなら大丈夫だ、

俺たちは話を終えた、

翌日、

俺とジルは準備したものを持って車に向かう、

俺はデザートイーグルとサムライエッジ、

ナイフと感知式地雷を持っていく、

ジルはイサカM37とVZ61、

サバイバルナイフとドラグノフ、

なぜかスタンロッドを持っていく、

使うことがあるのか？

車に向かった俺らだが、

霧島「クリス、ジル、私も行きます、」

青葉「私も行かせていただきます！」

どこでバレたか知らないが霧島と青葉がいた、

青葉「私に隠し事をしてダメです！」

フランク（P X Z）並のジャーナリストの鼻だな、

ジル「仕方ないわね、でも銃はあるのかしら？向こうに行ったら間違はなく地上で戦うことになるわ、」

霧島「大丈夫です、アイテムボックスから借りて来ました、」

それは借りたではない、

そう言つて見せて来たのはグロツグ17、

もしコルトパイソンとかだったら帰れと言つていただろう、

青葉はM3、

扱えるのか？

霧島「それとクリスから格闘技を教えてもらいました、」

そうだな、

霧島に格闘を教えたな、

いい感じに飲み込みが早いため色々と教えた、

ジル「クリス、もう連れて行くしかないわね、」

クリス「そうだな、2人とも、俺らの指示には従うんだ、」

2人が頷いて俺らは車を出した、

舞鶴、

ここから2日はかかると書いてあつたな、

遠い、

その間は俺がずっと運転をする、

道中街に泊まる、

霧島「ジルはクリスとは長い付き合いでしたね、」

ジル「改めて言われるとそうね、」

霧島「クリスは昔からあんな感じですか？」

どんな質問だ？

ジル「そうね、元は軍で働いていたけど上司を殴ってやめたのよね、」

青葉「そうなんですか!? 意外な情報です！」

ジル「時々暴走するけどまあ部下思いの男ね、」

霧島「暴走してましたね、」

やめろ！

恥ずかしい！

ジル「クリス、街までもう少しだから頑張って運転して、」

クリス「だったら俺の後ろで人の暴露話をするな、」

ジル「いいじゃない、クリストファー・レッドフィールドさん、」

クリス「フルネームで呼ぶな、」

青葉「これはスクープです！」

そんなこんなで街に着いた、

舞鶴に着いたのは更にもう一日走ってからだった、

舞鶴の鎮守府に続く街、

そこで一晩泊まる予定だ、

民宿が旅館みたいな物を探す、

意外と何も無い、

それどころか人もいない、

どうしたんだ？

ジルが建物に近づくと、

そして扉を軽く叩いて呼んでいるが何も返事がない、

霧島「何か変です、」

霧島がそう言いグロッグを取り出した、

あまり街中で持ちたくないが仕方ない、

サムライエッジを取り出して構える、

ジル「青葉、何があってもいいように銃を出しておいて、」

ジルはVZ61を取り出した、

青葉も慌ててM3を出した、

俺らは固まって動く、

すると、

近くの家の扉が開いた、

俺らはそちらを見ると男がいた、

俺は男に近づくと、

クリス「おい、ここの住人か？」

「私は・・・もうダメだ・・・」

男が何かを言うと舞鶴の鎮守府から光が来た、

灯台の光か!?

その光に目を細めてしまう俺、

男は・・・

何!?

足元から有刺鉄線が出てきて男に巻きついていく、

そして・・・

顔が割れてセバスチャンの記憶に出てきた化け物に変わった!

それを皮切りに今まで返事がなかった家から化け物が次々に出てきた、クリス「逃げるーーーーー!!!」

俺は叫びながら走る、

数が尋常じゃない！

10、20じゃない！

街の人全員が化け物だ！

霧島「くっ！青葉さん！行きますよ！」

青葉「ひやつ！引っ張らないでくださいーい！」

ジル「車はもう囲まれているわ！森に逃げるわよ！」

ジル達は先に森に入った、

俺は地雷を投げおいて森に向かう、

爆発音が聞こえたがそんなことを確認できない！

こんな深い森、

ジル達とはぐれてしまった、

くそっ！

俺は悪態をつきながら走った、

狩猟用狙撃銃を持つ親父、

私達は森の中を走る、

クリスとは逸れたけどクリスなら大丈夫なはず、

霧島「ジル！どうするつもり!?このままじゃ鎮守府を調べることが出来ないわ！」
そうね、

ウエスカーが舞鶴で何か起きると言っていたけど行く前に起きたわ、

どうやらあの灯台が原因ね、

だけどステイブが事前に調べた時にはこんなことはなかった、

灯台が回る夜のみ・・・

あれが光の正体ね、

悲鳴はあの化け物でいいかしら？

青葉「ジルさん！」

青葉が私に声をかけてきた、

振り返ると後ろから追っ手が来ている、

森の中ではドラグノフが使えない、

私はVZ61を構えて迎え撃つ、
奴らが来る、

私は的確に頭を撃つ、

だけど死なない、

ゾンビじゃないものね、

でも怯んだわ、

そのうちの一体が私に近づいてくる、

でも銃撃でそいつが転ぶ、

霧島が足を撃った、

私はそいつに両膝落としをして倒す、

青葉は戸惑いながらM3を撃っている、

シヨットガンだから近くじゃないとあまり効果がないわよ、

私は近くの奴を撃つ、

怯んだ、

その隙に霧島が奴の顔にストレートを放った、

クリスの技ね、

ちゃんと顔面を捉えて殴っているわね、

奴が吹き飛ぶ、

青葉「じ、ジルサーン！多すぎますー！」
そうね、

これは辛いわね、

霧島も息が上がっている、

青葉は混乱して当てずっぽうに撃ってる、

これじゃあ危ないわね、

その時、

どこからか銃声が聞こえた、

それで奴が一体倒れた、

かなりの腕のようね、

どこから？

「こつちだ！」

声が出た、

かなり年老いた声ね、

声のする方向を見る、

かすかにライトのようなものがチカチカと光ったり消えたりしている、

そこに迎えというのかしら、

ジル「2人とも！あそこに走るわよ！」

その声で2人は走った、

私は後ろを警戒しながら走る、

でも狙撃が的確すぎて警戒しなくてもいいみたい、

ライトの方に向かうと1人の老人がいた、

狩猟服に猟銃を持った白髪の老人、

「来い、」

老人が走る、

この森を熟知しているのか簡単に走っている、

私はいいけど2人はかなり失速している、

敵はなぜか追ってこない、

いえ、

森の中が複雑すぎたのね、

私達は老人について行っているから迷うことないのね、

そしてついた場所は小さな小屋、

老人が扉を開ける、

中は獵銃の弾と生き物の毛皮、

解体用のナイフ、

他には本とベッドと机、

解体用の机と竈がある、

老人が獵銃を置いた、

「空気が騒がしかつたから来てみたらあんたらがいた、」

空気が騒がしい？

獵師の感みたいなものかしら？

「俺は志村晃（シムラ・アキラ）だ、」

ジル「私はジル、彼女らは霧島と青葉、」

晃「お前らはなぜここに来た？」

ジル「舞鶴の鎮守府を調査しに来たのよ、」

晃「そうか、俺ら以外にもおかしいと感じた奴がいたか、」

俺ら？

ジル「誰か他にもいるの？」

晃「お前と同じ外人の男女3人だ、女しか日本語が話せなかつた、」

ジル「今はどこに？」

晃「森の中だ、どこかにいるだろう、」
あまり興味がないようね、

ジル「鎮守府の道を知って入りかしら？」

晃「聞いてどうする、」

ジル「行くのよ、」

晃「そうか、」

志村さんが猟銃を手にとつて、

晃「あんたならともかく後ろの2人は森を歩き慣れていない、俺が案内する、」

ジル「ありがとう、」

志村さんが外に出て歩き出した、

あまり休憩できなかったけど私達は外に出た、

霧島「あの人なんでこんな山の中に？」

晃「あの街が嫌なだけだ、案の定そうだった、」

勘が鋭いみたいね、

ジル「この森で暮らして長いの？」

晃「3年だ、もともと俺はあの街の住人ではない、他所から来た、」

ジル「他所から？」

晃「お前さんは聞いてばかりだな、お前さんらを撃ちはせん、」

ジル「そんな心配はしていないわ、個人的な興味よ、」

晃「ならやめるんだな、」

どうやら詮索されたくないようね、

そう考えていると建物が見えた、

晃「あれだ、」

舞鶴の鎮守府、

周りには奴らがいる、

気づかれたらアウトね、

ジル「案内ありがとう志村さん、ここからは私達で行くわ、」

晃「俺も行こう、いずれ俺の山小屋にも奴らが来る、だったら先に潰して仕舞えばいい、」

ジル「意外と過激ね、」

晃「うるさいのが嫌なだけだ、」

同行者が増えたわね、

私は近くの奴にそつと近づくと、

そして背後から奴に頭にナイフを突き立てる、

奴は倒れた、

私の後ろを3人が付いてくる、

場所的には裏口ね、

でも向こうに2人いるわね、

そう考えていると霧島がそつとしやがみながら移動した、

まさか、

私もそつと歩く、

そして、

霧島が奴の1人の首に腕を巻きつける、

もう1人の奴が気づくが私がナイフで倒す、

霧島の腕を叩いたり暴れたりするがゴキツという音と共に奴は倒れた、

首の骨が折れたようね、

ジル「無茶しないで、」

霧島「ジル、私も戦えます、」

見てわかったわ、

ジル「それでもよ、1人でいかないで、私と一緒に行くわよ、そうした方が安心でき

るでしょ、」

霧島「はい、」

素直でよろしい、

その時正面門から銃撃が聞こえた、

クリスね、

派手にやってくれる、

晃「誰だか知らないが今のうちだ、」

ジル「そうね、入るわよ、」

私達は裏口から入った、

STEMの3人、

森を走る、

ジル達と完全に逸れてしまった、

だがあいつらなら無事だろう、

ただ、

青葉が危ない、

何を抱えているかわからないがあのままだと潰れる、

俺たちと同行した時点で何かあると思っていた、

まあそんなこと今は考えていられないな、

後ろから奴らが来る、

感知式地雷を置くという手もあるが森の中でそうすると木々が倒れる、

逃げるしかない、

俺は森の中を走った、

どれほど走ったのだろうか、

ガムシヤラに走ったため道は覚えていない、

まあ、

難しく言わずに簡単に言おう、

迷子になった、

この歳で毎度なんて笑える、

奴らは追つてこない、

それが幸いだが場所がわからない、

そう考えていると遠くの方で何かが光った、

俺はそつとサムライエツジを構えて物陰に隠れて様子を見る、

懐中電灯の光か、

奴らか？

その光がこつちに向かっているのはわかる、

可能なら背後から襲い倒す、

無理なら逃げる、

幸い俺の存在には気がついていないようだ、

どんどん近づいて来る、

相手は3人、
様子を見る、

汗が額や頬を伝う、

呼吸が落ち着かない、

動機が速くなる、

何故こんなに落ち着かない、

そして、

奴らが俺の近くに来た、

まだ気がついていないようだ、

男女3人、

俺は奴らが通り過ぎた事を確認して1番後ろの女に銃を向けた、

クリス「動くな、」

女性が止まる、

俺の声が響いたのか前の2人が振り返る、

奴らではないようだ、

「誰？」

クリス「先に答えろ、お前らは誰だ？」

俺は女性の背後から前の2人を見た、
見覚えがある、

クリス「エズメラルダ？オニール？」

セバスチャンの世界で死んだはずに2人、

エズメラルダ「何で私達の名前を知っている、」

もしかしてこの女性は、

クリス「ユキコか？」

ユキコ「え、ええ、そうよ、」

俺の気鬱のようだな、

クリス「俺は銃を下ろす、だからそちらも銃を下ろしてくれ、」

オニール「その言葉を信じろと？」

エズメラルダ「オニール、お前は黙ってる、何故急にそんな事を？」
そうだよな、

普通は簡単に信じない、

クリス「セバスチャン・カステアノスから聞いた、」

ユキコ「セバスチャンが!？」

エズメラルダ「セバスチャンを知っているのか!？」

クリス「俺たちの拠点でリリーと一緒にいる、少なくとも俺はお前らの敵ではない、俺は銃を下ろした、」

ユキコはすぐさま俺から離れる、

オニール「何でセバスチャンと娘さんがそっちに？」

クリス「説明する、その前に紹介がまだだったな、クリス・レッドフィールドだ、」

エズメラルダ「私達の紹介はいらないだろう、それで？セバスチャンはどうしてここに？」

クリス「今話す、」

俺は説明をした、

ユキコ「信じられないわ、でも死んだ私達がこうして生きて見知らぬ場所で会うとなると信じざるおえないのね、」

クリス「俺は2度経験している、これで3度目だがこんな事例は初めてだ、」

エズメラルダ「クリスの世界の化け物があるんだろ、ゾンビとか映画だけだと思っていたが、」

クリス「さて、説明は終わった、3人は何故ここに？」

オニール「日本人のオヤジに木の伐採を依頼されたんだ、そのオヤジが僕達を保護してくれたからね、」

日本人のオヤジ？

誰だそいつ？

ユキコ「アキラ・シムラという老人よ、見た目は70代後半、街から離れた森の中に1人で住んでいるわ、」

世捨て人か？

まさか修行のため山籠りしているわけではあるまい、

リュウやケンじゃあるまい、

エズメラルダ「あの爺さんの感は当たるからな、あの街に近づくな、ずっと言われていたからな、それで伐採の最中に爆発音が聞こえたから戻って来たわけだ、」

すげえな、

その老人、

オニール「それで戻っている最中にクリスと出会ったわけさ、」

なるほど、

だったら街の状況は知らないわけだ、

クリス「なるほど、わかった、まずさつきに爆発音だが俺だ、襲いかかって来たからな、セバスチャンの記憶に出てきた化け物が、」

ユキコ「STEMの化け物が!？」

エズメラルダ「あの爺さんの感が当たったわけだ、」

クリス「俺は逃げて来たんだ、数が馬鹿みたいに多かった、街全員が化け物だった、」

オニール「最悪だ、」

エズメラルダ「こんなおもちゃじゃ役に立てないわね、」

エズメラルダが取り出したのはハンドガン、

それだけじゃ心許ない、

クリス「エズメラルダ、これは使えるか？」

俺はデザートイーグルをエズメラルダに見せた、

エズメラルダ「わくお、どえらいものを持っているわね、象でも殺す気だった訳？」

クリス「俺の世界には象以上の大きさの化け物が出て来たからな、用心のためだ、」

エズメラルダ「そんな世界でよく住めるわね、それで結論は扱えるよ、」

エズメラルダはデザートイーグルを受け取った、

エズメラルダ「予備の弾は？」

クリス「無限に撃てるから大丈夫だ、」

エズメラルダ「どんな原理か知らないがさいつこう！」

テンションが上がっているエズメラルダ、

ユキコ「私らは隠れたほうがいいわね、」

オニール「そうだね、武器がないから邪魔になるしね、」

クリス「いや、一緒に来てくれ、俺の仲間が来ている、それにこんな深い森、奴らと出くわしたら対抗手段がないと殺されるぞ、」

エズメラルダ「クリスの言う通りだ、出来る限り守ってやるから、」

オニール「わかったよ、ついていくよ、」

ユキコ「でもゆっくりね、」

俺たちは動き出した、

幸い3人は今どの辺りか把握できているようだ、

しばらく歩いていて、

エズメラルダ「あそこがクリスに言っていた鎮守府だ、」

そこには鎮守府の正面門、

そこには無数の敵、

ユキコ「どうするの？」

クリス「こいつをうまく使う、」

俺は感知式地雷を取り出した、
オニール「それは爆弾？」

クリス「地雷だ、これを投げてあの敵を全滅させる、」
円盤型だからフリスビーのように扱える、

エズメラルダ「よし、クリスが投げたら突撃しよう、」
エズメラルダがデザートイーグルを構えた、

俺は感知式地雷を投げる、

地雷が門の方に飛ぶ、

エズメラルダが銃撃した、

敵が一体ずつ倒れる、

俺もサムライエッジで応戦、

そして、

地雷が爆発した、

門が吹き飛び奴らも吹き飛ぶ、

クリス「入るぞ！」

ユキコとオニールが出て来て4人で建物に入った、

潜入、舞鶴1

私達が裏口から潜入して少し時間が経った、

物音を立てずに奴らを倒していくとこんなに静かなのね、

飛竜や秀真、

影丸に緋花にナツ、

いやナツは違うかな、

彼らはこう静かに暗殺していったのかしら？

晃「慣れてるな、」

ジル「こういう事には慣れたのよ、」

あの洋館事件から私は変わったわね、

霧島「ジル、こんなにも敵はいないのですか？」

ジル「正面玄関で暴れている人がいるからほとんどがそつちに行ったのね、」

クリスに感謝ね、

でも大丈夫かしら？

年甲斐にもなくはしゃいでいるけど、

腰を痛めないかしら？

霧島「クリス・・・ご愁傷様、」

ジル「自業自得よ、もし気の毒に思うなら帰ったら肩でも揉んであげなさい、」

青葉「何でみなさんはそんなほのぼのと会話しているんですか!?!」

青葉、

声がかい、

霧島「クリスたちと一緒にいると慣れます、」

青葉「慣れたくないよ!」

ないよ

ないよ

ないよ

響いた、

そしたら、

廊下の扉が無数開いて中から奴らが出てきた、

これはまづい展開ね、

ジル「青葉、帰ったら面白いお菓を飲むか面白いお菓を飲むかどれか選びなさい、」
青葉「選択肢がないんですけど!?!」

あなたに選択肢なんてないわ、

扉はドンドンと叩かれてうるさい、

霧島「どうします?」

ジル「まずはここがどんな部屋か確認したいから、」

慌てて入ったからどんな部屋かわからない、

周りを見る、

見た感じ工房ね、

晃「ここは作業場か?」

霧島「そうですね、明石さんがいないところを見るとここ数日は稼働していないよう

です、」

私は中を見て歩く、

奥の方に何かあった、

私はそれを見ると、

檻の中に鎖で繋がれた明石がいた、

青葉「明石さん!」

霧島「すぐに助けなさい！」

霧島と青葉が走り寄るけど私と志村さんが2人を止める、

ジル「落ち着きなさい、罠の可能性があるのよ、」

晃「傷ついた敵を罠に狩りをする動物がいる、この場合は傷付いた同族か、」

聞いたことがあるわ、

それは戦争でも行われる、

敵を傷つけてわかりやすい所に放置、

それを助けるためにほかの敵が来てそれを倒していく、

クリスが言ってた、

霧島「見捨てろと言うのですか！」

ジル「忘れないで、あなたの行動が私達を危険にさせるのよ、私たちはチームなの、気をつけなさい、」

青葉「そんな、」

敵しいけどこれが現実なのよ、

ジル「ここを脱出するときに助け出すわよ、それでいいわね、」

霧島「わかりました、」

青葉「待っててね、」

私達が明石を無視すると、

「ギャーーーーー!!!」

明石が大きな声を上げた、

私たちは振り返ると明石が苦しみながら悶えている、

霧島「明石さん！」

明石に体に変化が見えた、

服が破れて皮が破れて一気に巨大になっていく、

檻を壊して鎖を引き千切り私の倍はありそうな身長の化け物になった、

セバスチャンの記憶に出てきた墓場の2人の巨人の1人、

ジル「みんな！散開！応戦するわよ！」

私はVzを撃ちながら走る、

霧島もグロツグを撃つ、

青葉と志村さんは一緒に走って逃げている、

巨人は逃げている青葉と志村さんを狙っている、

狭い工房でこんな戦いをするなんて誰が思ったのかしら、

私はスタンロッドに持ち替えて巨人に向かって走る、

せめてあの2人から注意し逸らさないで、

私は巨人の背後から抱きついてスタンロッドで巨人を感電させる、

巨人は雄叫びをあげて私を掴もうと背後に手を伸ばす、

霧島はなかなか巨人に狙いをつけられない様子、

私が邪魔しているのね、

その時巨人の頭に銃撃する人がいた、

志村さん、

狩猟用狙撃銃を的確に巨人の頭に命中させている、

見事な腕ね、

私はナイフに持ち変えて巨人の背中に突き立てる、

血が私に掛かるけど気にしないで突き立てる、

だが、

巨人の長い腕が私を掴み投げる、

私は壁に激突してドラグノフとVzを落とす、

霧島と青葉が撃ち始めた、

志村「弾切れか！」

志村さんの銃が弾切れになった、

やばいわね、

私はイサカを構えて撃つ、

巨人は怯んで逃げ出す、

工房の入り口を破壊して奴らも蹴散らして行った、

暴走しているのね、

霧島が後を追う、

ジル「志村さんはここで待っていてください！」

私はそう言い残して巨人を追った、

廊下の壁や天井が破壊されている、

暴れながら走っているようね、

あれが街に出ても住民全員が化け物だから問題ないわね、

ただ遠くまで逃げられると厄介ね、

そう考えていると霧島が見えた、

しかし、

ボロボロだった、

ジル「霧島！無事!？」

霧島「ジル！気を付けて！壊された壁の中から奴らが出てくるから！」

そうね、

部屋の壁が壊されたもの、

奴らが出てきてもおかしくないもんね、

そう思っていたら穴から奴らが出てきた、

考え事は後ね！

私は奴らの全滅を行う、

潜入、舞鶴 2

俺らは正面から舞鶴の鎮守府に潜入した、

正面から入ったせいで乱戦になった、

マスケツト銃は撃たれて包丁や斧を持って襲って来る、

俺とエズメラルダは適確に銃撃していき倒す、

だが何体出てくるんだ？

村人だけでなく艦娘も化け物になっている、

その証拠に加賀の服装をした化け物もいた、

艦娘を実験台にしたのか？

ここの提督は何を考えているんだ、

エズメラルダ「クリス！キリがないんだけど!？」

クリス「諦めるな！」

俺は感知式地雷を投げる、

化け物にあたり地面に落ちて爆発する、

これで突破口が開いた、

俺らは走る、

オニール「クリス！一体どこに向かっているんだ!?!」

クリス「司令官室！執務室と言われている場所だ！この黒幕を捕まえる！」

エズメラルダ「わかりやすくもいい考えだね！捕まえたらこの屋敷壊しちゃおうよ！

こんな化け物だらけの屋敷なんて誰も住まないよ！」

それはいい考えだ、

俺は執務室に向かう、

鎮守府は全て間取りが同じで助かる、

敵が途中で来ても撃ち抜いて倒す、

エズメラルダが優秀な兵士で助かる、

デザートイーグルやすやすと使うからな、

俺らは執務室に着いた、

クリス「ここだ！」

俺は扉を蹴破った、

その時、

ごめんなさ〜い

どこからか声が聞こえた気がする、
そんな事を気にはしていない、

俺らは執務室の中に入った、

中に入る黒いコートを着た男がいた、
いや、

黒いコートではなく黒い神父服だ、

帽子は提督の帽子、

ミスマツチだ、

「これはこれは、随分礼儀知らずなお客さんですね、」

クリス「それは失礼、だが人体実験をする奴の鎮守府なんてこれでちよいどいい、」

「人体実験？何を言うのです、これはセオドア様から授かった物の力です、」

ユキコ「セオドア!?!彼がいるの!?!」

「セオドア様は我々に力を下さった、私を見下していた艦娘も周りの鎮守府の提督も街の住民も全て黙らせることが出来る、」

オニール「お前はセオドアに操られているんだ!」

オニールの体験だから説得力はある、

だがこいつには何を言っても意味がない、

「さあ、消えろ！」

どこからかマスクと火炎放射器を取り出してそれを装着する、
クリス「みんな！逃げろ！」

俺はオニールの腕を掴み走る、

提督は火炎放射器を俺らのいた所に向けて放つ、

エズメラルダとユキコも避けたようだ、

クリス「くそっ！」

俺は銃撃する、

心臓と頭に命中するも効果が見られない、

化け物か！

エズメラルダは先に部屋を出たようだ、

俺はオニールを連れて部屋を出た、

俺の前をエズメラルダとユキコ、

そしてオニールが走っている、

背後には提督が火炎放射器を放ちながらくる、

化け物は避けながら走っているが邪魔で仕方がない、

俺は地雷を数個落としながら走る、

提督がそれを踏んで爆発する、

それでも倒せないなんてもう人間ではないようだ、

改めて確認した、

エズメラルダ「クリス！このままじゃ入り口に戻っちまうよ！」

クリス「エズメラルダ！デザートイーグルで奴のタンクに風穴を開けられないか!?俺は

足止めをする！」

エズメラルダ「やってみるよ！」

俺は地雷を投げる、

そしてサムライエッジを撃つ、

提督は火炎放射器を構えるが俺の投げた地雷が地面に落ちて銃撃が地雷に当たる、

地雷が爆発して提督が怯む、

エズメラルダ「チエックメイトだ、」

エズメラルダがデザートイーグルを構えて撃つ、

銃弾が提督にあたりそして貫通する、

貫通した先にはボンベ、

ボンベが爆発、

「ぐあああああ!?!」

提督が爆発によって壁に吹き飛ばされる、

ユキコ「やったの!?!」

オニール「ユキコ!それはフラグだ!」

オニール、

どこでそんな言葉を覚えたんだ?

だがそのフラグが立ったらしい、

提督が起き上がった、

「セオドア様からもらった服が台無しだ、」

クリス「しつこい奴だな、女に嫌われるぞ、」

「艦娘に好かれたくないのでな、」

そう言つて火炎放射器を構えた、

ボンベが爆発しても撃てるのか?

それ以前に爆発に巻き込まれても生きているなんて人間やめたな、

そう考えていると提督が火炎放射器を落とした、

「がつ!? な、なぜです!? セオドア様!」

何がおきている、

急に苦しみだしたぞ、

ユキコ「セオドアが得意とする洗脳の種類ね、何かのワードを言うとなんらかの異常が起きるようにしたのよ、」

クリス「だったらなぜあんなに苦しんでいるんだ!」

ユキコ「わからないわ! 本来なら暗示が一層強くなったり逆に暗示が解けたりとあるけどあんな状態は初めてよ!」

提督の体に変化があった、

体が大きく膨張していき服が破れる、

「ゼオドアさまあああああああああああ
!!!!!!」

提督は巨人になった、

セバスチャンの記憶に出て来た双子の巨人の1人、

ユキコ「ツエーン! そんな! ここはルヴィクの精神世界じゃないのよ!」

エズメラルダ「そんな事はどうでもいいわ! 奴を倒すよ!」

エズメラルダが銃撃を始める、

巨人はすぐに反対を向いて逃げていった、

ユキコ「ツエーンは臆病な性格よ！追いかけて！」

オニール「冷静に解説しないでよ！」

オニールの言う通りだ！

俺らは走って巨人を追いかけた、

巨人は結構荒ぶっている、

壁に穴が空いている、

その穴から奴らが出てくる、

鬱陶しい！

エズメラルダ「鬱陶しい！」

俺とエズメラルダの気持ちと一緒にってしまった、

事実大量に出てきてイライラする、

そんな時どこからか銃声が聞こえた、

近い！

この先か!?

俺らはその先を走るとそこには、

クリス「ジル！霧島！青葉！」

ジル「クリスマス！」

霧島「クリスマス!？」

青葉「クリスマスさん!？」

仲間と再会した、

潜入、舞鶴 3

クリス「無事か!？」

ジル「なんとかね、そっちは？」

クリス「巨人を追いかけていたが見失った、」

ジル「こつちも同じようなものね、巨人を追いかけてきたの、」

銃声を轟かせながらも情報交換を行う俺ら、

ジル「それで、そちらの人達はセバスチャンの、」

クリス「ああ、エズメラルダとユキコとオニールだ、」

エズメラルダ「どうも、クリスの知り合いさん、」

ジル「ジルよ、セバスチャンから聞いているわ、今はこの状況を打開しましょう、」

イサカを奴らに向けて放った、

青葉「敵が多いです！」

クリス「今は耐えるんだ！」

俺は地雷を投げる、

手榴弾持って来るべきだったな、

無いものをねだっても仕方だ無い、

地雷が爆発して道ができた、

クリス「今だ！走るぞ！」

俺は走る、

足音で皆が後ろを走っていることがわかる、

向かった先は外、

あの巨人と決着をつけないといけない、

外に出たかわからないがこれだけ走っていないと外にいてであろう、

外に出た俺らの目の前には押し寄せてくる奴らと2人の巨人、

街から奴らの赤い目が無数と確認できる、

あの感じだと10分もかからずに来る、

そして鎮守府からも化け物、

ヅル「絶対絶命な状況ね、」

クリス「それでもやるしか無い、それが俺らの仕事だ、」

俺は巨人にサムライエッジを向ける、

ジル「そうね、仕事なら仕方がないわね、」

ジルはイサカを巨人に向ける、

エズメラルダ「お二人で盛り上がっていると悪いけど私も入れてもらおうわ、」

エズメラルダがデザートイーグルを構える、

霧島「クリス、無事に生きて帰りましょう!」

霧島が鎮守府から出てくる奴らに向けてグロッグを構える、

青葉「こここここここうなったらやけですー!」

青葉がM3を構えた、

映画のワンシーンみたいだが映画のように脱出できる気がしないな、

クリス「さあ、始めるぞ!」

俺がサムライエツジを放つ、

巨人に命中するもひるむ様子なく2人して俺らに向けて走ってくる、

それでも撃ち続ける、

ジルがイサカを撃つ音が聞こえる、

周りでも霧島や青葉が背後から迫ってくる奴ら相手に射撃をしている、

エズメラルダ「実際に戦うとこんなにめんどくさい相手なのかあいつらは!」

デザートイーグルを撃つエズメラルダがぼやく、

一番火力がある奴が何を言っている、

巨人の攻撃が俺を襲う、

それを回避して撃つ、

セバスチャンはジョセフと2人でこいつを倒したのか？

普段は愛宕や高雄に勉強を教わっているが修羅場をくぐり抜けているんだな、

もう片方の巨人が俺に蹴りをかまして来る、

それを避けると奴の顔に銃撃をする、

巨人は持っているおそろく先ほど提督が使っていた火炎放射器のボンベだろう、

それを振り回す、

俺は避けきれないとわかり腕でそれを防ぐ、

かなりの衝撃が俺を襲う、

オニール「クリス！」

オニールが俺に近寄る、

クリス「大丈夫だ、くそっ！」

腕が痺れている、

だが銃を構えることはできる、

ジルはフレンドリーファイアーを防ぐために攻撃をせずに様子を見ている、そのため積極的な銃撃は出来ていない、

俺はナイフを取り出して走り出す、

巨人が俺に殴りかかって来るがそれを避けて巨人に突き立てる、

正直効果はあまりないと思っているが少しでも怪我を負わせればいいと考えている、巨人は長い腕で俺を捕らえようとしているが俺はナイフを抜いてその場から逃げる、それと同時にジル達が一斉に射撃を始めた、

巨人は射撃を浴びて倒れた、

やっとか、

だがもう一体いる、

もう一体はボンベを振り回しながら走ってくる、

構える暇も近寄る暇もない、

その時、

離れたところから銃撃が聞こえた、

屋根の上？

俺はそつちを見ると誰かがそこにいた、

そいつが何発も正確に巨人の頭を撃ち抜いている、

何という狙撃能力だ、

ジル「シムラさん!？」

ユキコ「シムラ!?!あそこで撃っているのはシムラなの!？」

ジルとユキコ達は知っているようだ、

援護射撃は有難い、

巨人は動きを止めた、

狙撃は巨人から街から来る奴らに向けて撃たれる、

少しでも足止めをするようだ、

エズメラルダは銃を構えて、

エズメラルダ「これで終わりだ！」

巨人に向けて撃つ、

銃弾は巨人の頭に命中して巨人は倒れる、

エズメラルダ「やった・・・ようね、」

安堵の様子だがまだだ、

奴らがこつちに来ている、

俺はサムライエツジを構えたが、

奴らは悶え苦しみ血になり消えた、

ジル「……助かったようね、」

オニール「そうでありたいよ、」

今度こそ皆が緊張の糸を切った、

ユキコ「シムラには感謝ね、」

たしかに、

その人の援護射撃で助かった、

礼を言わないとな、

屋上にはすでに誰もおらず、

そこに残されていたにはドラグノフのみだった、

志村晃は森を歩いていて、

志村「全く、ここで過ごしていてもああいう奴らに出会ってしまう、」

自分が愛用している狩猟用の銃を持ち一人呟く、

志村「・・・どうやら俺はあの村から逃げられないようだな、」
志村だけにしか聞こえないサイレンが鳴り響き志村は森の奥に消えて行った、

これからの事

舞鶴の鎮守府での激戦から一夜が明けた、

鎮守府内は化け物の姿はなく残っていたのは血痕だけだった、

流石にこの中で休む事はしたくないため街に降りて適当に家を借りた、

住民も化け物になって消えたため誰もいない、

エズメラルダ「それで、クリス達はどうするんだ？」

クリス「一度俺達の鎮守府に戻ってステイプに報告をする、どうやらかなりこの世

界は複雑な状態なようだ、」

ウィルスにSTEM、

この調子だと寄生虫もいるだろう、

ユキコ「私達も行っていいかしら？シムラがあ的小屋からいなくなったから身寄りが

ないのよ、」

確かに、

3人だけをこの街に残すのは不安だ、

ジル「悪くないわね、でもしばらくは仕事を手伝ってもらおうわよ、」

エズメラルダ「そんなの当たり前だろ、夕飯を貰うわけにはいかないからな、」
オニール「僕は働きたくないかな、」

そんなことさせないけど、

ジル「それとーつ、私達の拠点はこことおんなじ鎮守府だけど艦娘のみんなは前の提督の暴力やセクハラで人に対して恐怖心があるのよ、特にオニールは1番警戒すると思
うわ、」

オニール「僕だけ野宿になるのかい？」

霧島「一応は距離さえ保てばいいと思います、近すぎないようにすれば、」

ナイスフオローだ霧島、

クリス「さて、帰る前に車を確保しないと、その前に青葉、お前に聞きたいことがある、」

青葉「な、何でしょうかクリスさん!？」

クリス「お前は俺らに何を隠しているんだ？」

顔にでる青葉、

ポーカーフェイスは苦手なようだ、

ジル「先に言っておくわ、私とセバスチャンも気がついてるわ、あなたを連れてきたのはここで隠し事を話させるためよ、もしかしたらあの鎮守府にスパイがいるかもし

れないもの、」

霧島「ジル！そんなことは！」

クリス「ジルの言う通りだ、俺らはそれを考えてお前を連れてきた、青葉だけじゃ怪しまれるから霧島もな、悪いと思ってるがこうでもしないと青葉の本心がわからない、」

セバスチャンとの出撃も積極的だったためもしかしたらと思った、

だがどうやら俺らの感は当たったようだな、

青葉は俯いているが、

青葉「・・・わかりました、全てお話しします、ですが！お願いします！妹を助けてください！」

妹、

衣笠の事か？

霧島「落ち着いてください、妹と言うのは衣笠さんの事ですね、でも衣笠さんは鎮守府に・・・」

青葉「確かに衣笠はいます、けれどあの子は本当の私の妹じゃないんです！」

霧島「どういう事ですか？」

青葉「一緒にいる衣笠は他の鎮守府の所の衣笠です、私と本当の衣笠は出撃中に他の

鎮守府の艦娘に捕まりました、クリスさん達が来るずっと前にです、それで衣笠を人質に提督はこう言いました、私のところの鎮守府の情報を集めて送る事、妹が人質だから私はそれに従うしかないので、今の衣笠はその鎮守府の衣笠なんです、私を監視するためのです、今回の件も衣笠に言われました、前回の出撃の時はあぁなるとは思っていませんでしたので今回は嫌だと言いました、けれど断ったら妹の命はないと言われました、だから今回も行く事にしたんです、クリスさんが来てからはまだ言ってます、ですが数日後に渡しに行きます、」

なるほど、

かなりゲスな奴のようだ、

クリス「その鎮守府の提督の名前はわかるか？」

青葉「クリスさんとおんなじ外国の名前でした、確か……シモンズと言っていました、」
シモンズだって!?

直接は会っていないがレオンが中国のバイオテロの首謀者の名前が確かシモンズだと言っていたはず、

青葉「クリスさんの記憶にシモンズの名前出てきた時は驚きました、」

クリス「同一人物の可能性が高い、ジル！急いで動ける車を探すぞ、エズメラルダ！ユキコ！オニール！強行軍になるが急いで鎮守府に戻る事になる！霧島！俺達の乗っ

てきた車を持ってきてくれ！青葉は休んでいる！鎮守府に着いたらシモンズの元に道案内をしろう！」

ジル「クリス、あなたは行くのね、」

クリス「もし同一人物なら再びバイオテロを企てる可能性がある、それを阻止したい、」

中国のような惨状はもう見たくない、

ジルは軽トラックを見つけてきて霧島は俺らの車を持ってきた、

軽トラックにはエズメラルダとユキコ、

荷台にオニールを乗せて俺らの車を先行で走らせる、

それから2日、

車は俺とジル、

向こうはエズメラルダとオニールの交互に走らせて途中街に立ち寄りガソリンの補給と食事をしたくらいだ、

それで着いた鎮守府、

クリス「すぐに衣笠の元に向かうぞ、」

俺の言葉に頷く皆、

エズメラルダ達を休ませたいが今はそんなことを言っていられない、

俺は扉を開けて走る、

大淀「クリスさん!？」

プリンツ「クリスさん? どうしたんですか!？」

途中何人か艦娘に出会ったが気にしてられない、

着いたのは青葉と衣笠の部屋、

俺は勢いよく開けて銃を構える、

衣笠「どうしたんですか? クリスさん?」

クリス「青葉から全部聞いた、」

後ろから足音が聞こえる、

大淀とプリンツのようだ、

大淀「クリスさん!?! どういうことですか!?! 衣笠さんに銃を向けて!?!」

俺は無視して衣笠に続けて言う、

クリス「青葉の本当の妹はお前達の鎮守府にいるとな、そしてシモンズの命令でそれ
をしていることもな、」

衣笠「・・・はあ、やつと姉妹ごっこが終わるのね、退屈だったわ、だって・・・」

衣笠が太股にくくりつけられていた銃を抜いた、

俺は衣笠の肩を撃つ、

衣笠は銃を落とすが何か様子がおかしい、

撃った肩の腕が蠢き出した、

まさか、

衣笠「これで人を殺せるんだからね！」

俺は銃を撃ちまくる、

だがそれよりも早く腕に変化があり全て防がれる、

ジュアヴォ、

俺のトラウマに近い敵、

腕の寄生虫が盾のようになる、

ジル「逃げるわよ！」

大淀「一体どう言う事か説明を！」

エズメラルダ「その人！そんな事言っている状況じゃないでしょ！今すぐ周りの人

達にも避難指示を出しな！」

大淀「ああもう！わかったわ！」

衣笠「あなたが提督のことやこの力の事を知っているのは予想外でしたが関係ありま

せん、あなた方を殺します、」

理性があるのは厄介だ！

今から工房に行つて他の武器を持ってくる時間はない、このままここで倒す、

エズメラルダ「クリス！援護する！」

クリス「すまない、ジル！全員避難させろ！」

ジル「みんな！こつちよ！」

衣笠「逃すとても？」

クリス「絶対に行かせん！」

俺は撃つ、

エズメラルダはデザートイーグルを撃つも衣笠は衝撃で後退するくらいだ、

エズメラルダ「嘘でしょ、像でも一撃なんだよ！」

クリス「こいつらに常識は通用しない！今はあの腕以外を撃て！」

そう言うがうまく腕で体が隠れていて当てにくい、

衣笠が走ってくる！

俺らは廊下に出て左右に転がり距離を取る、

これで前後を取った、

エズメラルダ「くらえ！」

エズメラルダが撃つ、

衣笠にあたるが、

衣笠「痛いわね、」

そう言つて頭が変化した、

クワガタのような頭、

エズメラルダ「キモいんだよ！」

そう言つて撃つエズメラルダ、

俺も撃ち続ける、

だが倒れない、

そんな時、

リリー「ハドーケーン！」

青い塊が飛んできてあたり衣笠変異体を吹き飛ばした、

リリーの波動拳、

エズメラルダ「なんだ今のは！」

クリス「説明は後だ！変異したところ以外を撃て！」

俺の言葉に倒れている衣笠変異体を撃ち続ける、

衣笠変異体は体を震わせてバタバタと手足を動かすがやがて動かなくなつた、

これでやっと一安心のようだ、

リリーに礼を言わないとな、

俺はエズメラルダに駆け寄ろうとしたら、

エズメラルダ「クリス！危ない！」

エズメラルダの言葉に俺は振り向いた、

衣笠変異体が俺に掴みかかろうとしていた、

まずい！

リリー「シヨールリユーケーン!!」

そう思った瞬間リリーが衣笠変異体の懐にいつのまにか入っていて昇龍拳をかました、

衣笠変異体は吹き飛ばされた、

リリー「シンクラーハドーケーン！」

リリーの真空波動拳により衣笠変異体はついにその動きを止めた、

リリー「クリスさん！大丈夫ですか!?!」

クリス「すまない、助かった、」

俺はリリーの頭を撫でる、

エズメラルダ「クリス、その子はまさか、」

「リリー！どこに言ったのですか！みんな避難してるですよ！」

誰だ？

この無駄にでかい胸の女は？

リリー「アイオワさん、ごめんなさい、」

アイオワ「もう、セバスチャンが心配してるです！」

クリス「リリー、また建造したのか？」

リリー「うん！」

エズメラルダ「いまセバスチャンとリリーって言ったよな！クリス！」

どうやら説明がいるようだな、

クリス「わかった、後で会議を開く、その時にセバスチャンも連れてくる、それより

アイオワ・・・だったか？」

アイオワ「そうよ、アイオワ級1番艦のアイオワよ！」

クリス「クリスだ、他にも仲間がいるがどうやら出かけている間に建造したんだな、」

アイオワ「イエース、」

アイオワは確か戦艦だった記憶がある、

また1人仲間が増えたな、

俺は執務室に向かった、

潜入、舞鶴の裏で。

セバスチャン side

クリスとジルが舞鶴に向かった。

俺はというと・・・

高雄「セバスチャン！そこは「お」じゃなくて「を」を使うの！」

高雄の勉強会をしていた。

いやこいつ本当に男が嫌いなのかと言うくらい俺に突っかかって来るんだが。

愛宕「でも凄いわね。短期間でそこまでできるなんて。前まで話せなかったのに。」

高雄「私が教えているんです。ちゃんと覚えていないともう一度初めからです！」

すごく言いたい放題だな高雄。

はあコーヒー飲みたい。

だけどこの2人は絶対に飲ませてくれない。

ビスマルク「タカオ、そう切羽詰まっているとセバスチャンも勉強に身が入らないぞ。

一旦そこで休憩しなさい。」

おおビスマルク！

ナイスタイミングだ。

ビスマルクの手にはトレイが握られておりその上にはコーヒーが3杯のっている。ビスマルク「タカオとアタゴもコーヒーでよかったかしら？」

愛宕「私は飲めないわ。気持ちだけもらっておくわね。」

まあ見た目でコーヒー飲めないような感じだからな。

高雄「いただくわ。」

お前は飲むのか？

姉妹でやはり好き嫌いはあるんだな。

俺はビスマルクからコーヒーを受け取り口に含む。

もう少し苦味が欲しいな。

高雄「・・・砂糖とつてくる。」

どうやら高雄にはこの苦味がわからないようだ。

俺はコーヒーを飲みながら休憩をする。

その時高雄と入れ違いでリリーが入って来た。

リリー「パパ、また建造してもいい？」

リリーは建造にハマったらしい。

クリス曰く物資があるのならしてもいいと言っているがそもそも物資はあるのか？

セバスチャン「いいぞ。ただプリンツかサラトガと一緒に建造することと建造したら一度俺のところに来るんだ。」

リリー「パパ！ありがとう！」

リリーは走って行った。

ビスマルク「貴方って本当にリリーに甘いわね。」

セバスチャン「父親が子供に甘くなるのはいけない事か？」

ビスマルク「いいえ、良いことよ。」

愛宕「私もいいと思うわよ。それにリリーちゃんはセバスチャンさんに甘えたいんだと思います。」

そう思うか？

確かに、マイラがないから俺がリリーを育てないといけない。

だとすると仕事はどうする？

私立探偵にでもなるか？

名探偵セバスチャン・・・似合わん。

下らないことを考えていると高雄が砂糖の瓶を持って戻ってきた。

そしてスプーンで砂糖を掬い何杯も入れる。

甘すぎだろ。

俺は入れても一杯だけだぞ。

だいたい10杯以上入れた高雄はコーヒを一気飲みした。

飲み終えたコーヒークップの底には溶けていない砂糖が沈殿していた。

ビスマルク「もう一杯いるかしら？」

高雄「いりません。」

まだまだだな。

ゆつくりとコーヒを飲んでいると扉の向こう側からバタバタと走ってくる音が聞

こえて来た。

リリーか？

そう思っているとなんか入って来た。

「ヘーイ！貴方が指揮官のダディね！私はIowa級1番艦アイオワよ！」

また個性的なのが出てきた。

どこその映画で最強のコックが乗船していたな。

そして何で胸が大きいんだ？

リリーはやっぱりマイラを求めているのか？

リリー「アイオワちゃん！勝手に行ったらダメだよ！」

アイオワ「ソーリーソーリー！」

ノリが軽いな。

サラトガ「アイオワさん、勝手に走り出したらいけませんよ。」

アイオワ「ソーリーサラトガ、だってこんな可愛い指揮官のダディを早く見たかったから。」

まあリリーが可愛いのは認めるが俺は至って普通の父親だぞ。

セバスチャン「まあなんだ、アイオワ。俺はセバスチャン・カステアノス、よろしく。」

アイオワ「イエース！」

何がイエスだ？

それから数日、

クリスが帰ってこないとこんなに暇なんだな。

リリーはアイオワや響達と遊んでいて俺は未だに勉強。

まあ最近拳銃をぶっ放していたからこんな日が続いても問題ないだろう。

そんな時、

プリンツ「セバスチャンさん、クリスマスさんが帰ってきましたよ。」

プリンツが部屋に入って来た。

帰って来たのか？

プリンツ「なんか急いでましたけど。」

セバスチャン「そうか、クリスマス達はどこに？」

そう言うといきなり銃声が響いた！

プリンツ「きやつ!？」

セバスチャン「銃声！」

俺はハンドガン片手に部屋を飛び出す！

更に銃声が鳴り響く！

クソツ！

一体なんだって言うんだ！

いつ襲われてもいいように俺はハンドガンを握り締めながら走る。

少し走るとそいつらがいた。

セバスチャン「クリスマス！」

クリスマスとジル、そして・・・あいつらは・・・

クリスマス「セバスチャン。」

「セバスチャンだつて!？」

この声、やっぱりだ。

セバスチャン「エズメラルダ・・・」

「本当にセバスチャンだ。」

セバスチャン「オニール、それに・・・ユキコ。」

ユキコ「久しぶりね、セバスチャン。」

セバスチャン「まさかこつちに来ていたなんて思わなかった。」

オニール「僕らもだよ。クリスからセバスチャンの事を聞いた。娘さんを助けられたんだね。」

エズメラルダ「私達の努力は無駄じゃなかったんだな。」

クリス「感動の再会はすまないが後でいいか？今から緊急の会議をしたい。」

確かに、

先ほどの銃声といい色々聞きたい。

セバスチャン「わかった、執務室に行こうか。」

俺らは執務室に向かった。

シモンズの居所

クリス side

俺らは会議室に向かい青葉に話を聞く。

クリス「青葉、シモンズの居場所を教えてください。」

俺は青葉に単刀直入に聞いた。

青葉は少し迷いながらも口を開く。

青葉「ここから海を経由して隣の大陸に移動します。その後陸路を走って数十km車で走った場所にある小さな町の教会で落ち合う予定です。」

教会か。

居場所ではないが有力な情報だ。

俺は早速行く準備を行おうと席を立つ。

ジル「クリス、他にも誰か連れて行きなさい。セバスチャンと霧島あたりでいいわ。」

クリス「ジル、セバスチャンはともかく霧島は、」

ジル「霧島が行きたがっているからよ。」

なんだって!?

俺は霧島を見る。

霧島がグロッグを片手に俺を見ていた。

クリス「奴は1つの大型都市をバイオテロによって消滅させた男だ。俺らの記憶を見たのならわかっているな。」

霧島「わかっているわ。だけど大切な仲間が人質にされて黙って指を啜えて見ているだけなんて出来ないわ。」

決意は堅いようだ。

ここで何を言っても強引に付いてくるだろう。

セバスチャン「サラツと俺を連れて行こうとするなジル。」

ジル「でも誰か居ないとクリスは暴走するかもしれないわ。」

勝手に暴走する男と決めつけるな。

まあエイダ・ウオンの事があつたから否定ができないな。

エズメラルダ「セバスチャン、あんたも行くのか？この戦いはあんたには関係ない事だろ？」

セバスチャン「まあ関係ない事だ。だがそれを放置するとリリーが危険な目に遭う、それを父親として見過ごせないだけだ。」

エズメラルダ「・・・そう・・・それなら私も行く！」

クリス「エズメラルダ？」

エズメラルダ「ジルが言つてただろ？働いてもらうつて。幸い私はこう言つた事には慣れてる。」

確かに彼女は潜入が慣れてるだろう。

セバスチャンの家からリリーを誘拐したという不名誉だが。

クリス「わかつた・・・だがその前に3人はセバスチャンと一度話し合え。その上で明日もう一度聞かせてくれないか？」

先ほどからセバスチャンがなんとも言えない微妙な顔をしているから今晚腹を割つて話をした方がいいだろう。

俺の言葉にエズメラルダ達3人は微妙な顔をした。

セバスチャン「俺はいいぞ。後で部屋に来てくれ。プリンツ、リリーの側に居てくれ。ビスマルク達にもそれを伝えてくれないか？」

プリンツ「わ、わかりました。」

プリンツがパタパタと走つて行つた、

ユキコ「セバスチャン、あの子のあの変な技つて何？」

波動拳の事か？

ジルが教えたつて秘密にしていた方がいいのか？

セバスチャンはなんとも言えない顔をしており、顔を背けた、

ユキコは何かを察した様でそれ以上は何も言わなかった、

クリス「セバスチャン、俺はジルと霧島、青葉と一緒にルートの確認と移動手段の確認をする。そっちは話を付けてこい。」

セバスチャン「わかった。3人とも、少し場所を移動しよう。」

オニール「わかったよ。僕達の話したい事あるからね。」

俺らはそれぞれ分かれた。

俺は地図を広げた。

クリス「青葉、ルートを確認したい。」

青葉は頷いてペンを片手にルートを書いた。

ジル「数日かかるわね。隣の大陸までに数日、そこから陸路で2日。食料を担いで昼夜構わず走って行けば最短で5日。」

霧島「明石とあの商人に数日分の燃料と食料を買うわ。」

クリス「それと武器は何があるかわからない。多めに持って行くことになる。」

霧島「戦艦を舐めないで下さいクリス。少し多くなるくらいで私は根を上げません。」

戦艦の力はどんなものか知らんが長門だと思えばいいのか？

そして俺らは話し合いを遅くまで続けた。

セバスチャン side

クリス達が作戦会議をしている間俺はオニール達と別室に来た。

セバスチャン「あー・・・久しぶりだな。」

STEMを出て数ヶ月過ぎたから久しぶりであつてるよな？

エズメラルダ「そうだな、あの子がいるって事は・・・無事に救い出せたんだな。」

セバスチャン「ああ、俺一人じゃ出来なかつた。」

オニールにユキコ、エズメラルダ、それに・・・あいつがいてくれたからリリーは救えた。

オニール「それで・・・セバスチャンは死んだのかい？」

セバスチャン「勝手に殺すな。艦隊これくしょんという写真を見たらこつちにリリーと共に来たんだ。」

荒唐無稽な事を言つたつもりだ。

エズメラルダ「なんだそりゃ？」

ほらな。

ユキコ「だけど私達が生きているからそんな摩訶不思議なことが起きてもおかしくな
いわね。それで、教えてくれないかしら？あの子のあの技。」

説明が困るんだが。

俺は説明した。

向かうは教会、現れるは美女1

翌日

俺と霧島は装備の確認を行う。

デザートイーグル、感知式地雷、トールハンマー、ドラグノフをアイテムボックスから取り出す。

霧島はグロッグ17を持たせる。

他の武器だと反動が大きくて武器を落とす可能性がある。

後から来たエズメラルダがアイテムボックスを興味深く見ていた為試しにAK-74と閃光手榴弾を渡した。

案の定驚いた顔で受け取ったが安全装置を外して海めがけて発砲した。

エズメラルダ「ひゆう。いい銃ね。」

クリス「その銃のおかげで助かった事が多々あるからな。他に何かいるか？流石に大きな物は渡せない。」

エズメラルダ「だったら私にもマグナムを貸してくれないか？」

俺はアイテムボックスの中にあるエレファントキラーを手渡す。

エズメラルダ「ひゅー、ゴツくてイカす物を持つてるね。」
弾の確認をしているがそいつの反動はかなりの物だぞ？

クリス「反動がバカみたいにでかいぞ。」

エズメラルダ「じゃじゃ馬な程手懐けたくなるんだよ。」

なんかやばい奴にやばい銃を渡した気がした。

青葉が来て迷わずM3を手にとった。

先日から使っているシヨットガンだからつい手に取ったんだろうな。

明石「皆さんもう行くんですか？」

武器商人「へへへ、足りない物は無いか？」

武器商人がマントを広げた。

エズメラルダ「セバスチャンから聞いてなかったらただの変人かと思うが……焼夷

手榴弾をくれ。」

武器商人「ひひひ、サンキュー。」

ちやつかり俺が渡した金で買っているエズメラルダ。

そしてセバスチャンがやって来て武器の確認をした。

エズメラルダ「いったい幾つ持っているんだ？」

セバスチャン「さあな。俺も幾つ持てるかわかっていないんだ。」

青いタヌキロボットのポケットか？

それともレイレイ（PXZ）の裾か？

まあアイテムボックスも謎の四次元空間の物だな。

しばらくしてセバスチャンが武器の確認を終えると同時に、

クリス「終わったか？」

セバスチャン「ああ、問題ない。」

霧島「それでは向かいますか。」

俺らは足に艀装を装着した。

エズメラルダ用の艀装は無い為俺が背中で抱えて移動を行う。

エズメラルダ「海の上を滑るなんてSTEMでも無かつたんだよな。」

そんな無駄口を叩きながら背負われるエズメラルダ。

俺たちは海を駆けた。

途中小さな小島に行つては小休憩を行い隣の大陸に移動した。

そこからの陸路だが足がない。

数十キロを徒歩で行くのは好ましくない。

クリス「青葉、車はどこにある？」

青葉「シモンズの部下が来てその車で今まで移動をしてました。」

その部下はいつ来るのか？

そう思っているのと遠くから車のエンジン音が聞こえた。

セバスチャン「どうやらお出ました。ここでドンパチすると車が故障しかねない。

クリス、青葉に通訳を頼む。青葉以外の全員が周りに隠れて青葉一人が来たと思わせる。青葉を車に乗せる寸前に俺らがそのシモンズって奴の部下をおねんねさせる、そんな計画でどうだ？」

それは俺も考えた計画だが先に言われたな。

俺は青葉にその事を伝える。

青葉「わかりました。ですが危なくなったら助けてくださいいよ！」

クリス「心配するな。絶対に助けてやる。」

俺らは青葉を除いて全員周りの茂みに隠れた。

霧島「ドキドキしますね。」

クリス「あまり声を出すな。シモンズの部下の始末は俺がする。」

霧島「殺すのですか？」

クリス「必要ならな。」

衣笠がジュアヴォオだったようにその部下もそのような奴かもしれない。なら眠らせるではなく始末した方が早い。

少しして車が来た。

1台だが俺ら全員が乗れるほどの大きさだ。

そこから2人の男が出て来た。

全身スーツとは・・・毒島（PXZ）を思い出す。

だがあいつのように気を使ったり手から炎を出したりしないよな？

俺はそつと茂みから出た。

エンジン音で茂みから出てくる際の音が消されて幸いだ。

向こうからエズメラルダが出て来た。

そつと近づいていると男の1人が青葉に銃を突きつけた！

だがそれより先の俺が男の1人の首をへし折る。

俺の存在の気がついたらしくもう1人が俺に銃を構えるがエズメラルダがナイフ

で男の首を刺す。

男を始末して俺とエズメラルダは海に男を投げ捨てる。

セバスチャン「何も殺す事は・・・と言いたいが奴は人質を取るやつだ。その部下が

善人の訳ないか。」

クリス「そういう事だ。早速向かうぞ。青葉、案内頼む。他の皆は少し休んでいるんだ。」

霧島「この状態で休むのはちよつと。」

何か言われた気がするがここで議論をする場所ではない。

車に全員乗った事を確認すると俺は車を走らせた。

日付が変わり明朝ごろに教会に着いた。

青葉の目の下に隈ができているが俺の目の下にもできているだろう。

霧島達は眠っていたのか体調はいいみたいだ。

特に教会は物々しいとか物騒な風貌ではなくあの時レオンと出会った時と同じような教会だ。

セバスチャン「本当にここに何かあるのか？」

その疑問は誰もが思う疑問だ。

クリス「青葉、ここであっているんだな？」

青葉「はい！以前来た時もこの教会でした。」

どうやら正解のようだ。

エズメラルダ「それじゃあさっさとこの子の妹を探し出すか。」
エズメラルダの言葉に俺とセバスチャンが頷いた。

そうして俺らは教会に入った。